

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27

平成22年度発掘調査報告

(第1分冊)

積善遺跡

東勝寺跡

浄妙寺旧境内遺跡

下馬周辺遺跡

佐助ヶ谷遺跡

平成23年3月

鎌倉市教育委員会



東勝寺跡 II区第2面全景(北から)



浄妙寺旧境内遺跡 2b面全景(東から)

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成16、17及び18年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として8ヶ所の調査成果を掲載しています。特に大倉幕府跡（地点⑧）では、掘立柱建物跡や石列、溝跡などの土地利用痕跡が数多く出土しました。湧水も多い場所でしたが、そのおかげで形代や漆盆等、当時用いていた木製品の数々が腐ることなく残されており、当時の生活を知る上で重要な成果を得ることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成23年3月31日
鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成 22 年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第 1 分冊及び第 2 分冊）である。
- 2 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・別図のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総目次

(第1分冊)

ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
本誌掲載の平成16・17・18年度発掘調査地点一覧	V
平成22年度調査の概観	VI
調査地点位置図	X
1 積善遺跡 (No. 440) 十二所字ニツ橋4番3地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 調査の概要	8
第3章 検出遺構と出土遺物	10
第4章 まとめ	21
2 東勝寺跡 (No. 246) 小町三丁目538番8、538番3地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	42
第2章 調査の概要	47
第3章 検出遺構と出土遺物	49
第4章 まとめ	78
3 浄妙寺旧境内遺跡 (No. 408) 浄明寺三丁目122番1外地点	
第1章 遺跡と調査地点の概要	117
第2章 調査の概要	125
第3章 調査結果	127
第4章 まとめと考察	171
4 下馬周辺遺跡 (No. 200) 大町二丁目1001番4地点	
第1章 遺跡と調査地点の概観	194
第2章 調査の概略	201
第3章 調査結果	202
第4章 まとめと考察	217

5 佐助ヶ谷遺跡 (No. 203) 佐助一丁目496番4地点

第1章 遺跡の立地と環境	232
第2章 調査の概要	234
第3章 検出された遺構と遺物	236
第4章 まとめ	238

(第2分冊)

例言	II
目次	III

6 大倉幕府跡 (No. 253) 雪ノ下三丁目704番3外地点

第1章 調査地点の位置と歴史的環境	6
第2章 調査の経過と層序	8
第3章 発見した遺構と遺物	13
第4章 まとめ	78
附編 花粉分析	100

7 北条時房・顕時邸跡 (No. 278) 雪ノ下一丁目269番1地点

第1章 調査概観	125
第2章 検出された遺構と出土遺物	129
第3章 まとめ	165

8 大倉幕府跡 (No. 253) 雪ノ下三丁目637番4地点

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	209
第2章 調査の概要	211
第3章 検出遺構と出土遺物	214
第4章 まとめ	243

本誌掲載の平成16・17・18年度発掘調査地点一覧

第1分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
①	積善遺跡 ★ (NO,440)	十二所字二ツ橋4番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	34㎡	平成16年4月23日 ～平成16年5月20日
②	東勝寺跡 ★ (NO,246)	小町三丁目538番8	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	42.84㎡	平成16年7月30日 ～平成16年9月3日
		小町三丁目538番3	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)		64.5㎡	平成16年8月18日 ～平成16年10月25日
③	淨妙寺田境内遺跡 ★ (NO,408)	淨明寺三丁目122番1外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	49.49㎡	平成16年8月18日 ～平成16年10月22日
④	下馬周辺遺跡 ★ (NO,200)	大町二丁目1001番4	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	46.5㎡	平成17年2月3日 ～平成17年2月28日
⑤	佐助ヶ谷遺跡 ◎ (NO,203)	佐助一丁目496番4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	44㎡	平成17年10月4日 ～平成17年10月27日

第2分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
⑥	大倉藤府跡 ◎ (NO,253)	雪ノ下三丁目704番3外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	官衙	56㎡	平成17年10月25日 ～平成18年1月27日
⑦	北条時房・頼時邸跡 ▲ (NO,278)	雪ノ下一丁目269番1の一部	自己用店舗併用住宅 (杭基礎構造)	都市	35㎡	平成18年4月4日 ～平成18年6月13日
⑧	大倉藤府跡 ▲ (NO,253)	雪ノ下三丁目637番4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	官衙	68㎡	平成18年11月21日 ～平成19年1月19日

★印は平成16年度実施の発掘調査

◎印は平成17年度実施の発掘調査

▲印は平成18年度実施の発掘調査

平成22年度調査の概観

平成22年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査3件を含む14件であり、調査面積は746㎡であった。これを前年度の20件、808.25㎡と比較してみると件数は6件の減少となり、調査面積も62.25㎡の減少となった。しかし調査面積は平均で1件あたり53.29㎡（前年度は40.41㎡）であり、1件あたりの面積は前年度より増加している。

調査原因は個人専用住宅の建設が11件、店舗併用住宅の建設が3件である。これらの工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が9件（64%）、地盤改良工事が5件（36%）となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因になっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。（調査面積及び調査期間等については「平成22年度調査地点一覧」を参照。）

1 安国寺跡 (No. 174)

山ノ内字東管領屋敷に位置する。主要地方道横浜鎌倉線の北側に面する場所にある。鋼管杭工事を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査地の地盤面は現況道路面から約1mほど高いが、約30cmの深さから遺構・遺物が検出できる。13世紀後半から15世紀にかけての遺構・遺物が出土した。泥岩塊積みの溝や、僧侶名の刻まれた硯などが出土した。

2 北条小町邸跡 (No. 262)

雪ノ下一丁目に位置する。若宮大路から若干東側へ離れた場所にある。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。調査の結果、遺物は12世紀末と14世紀代の製品が出土し、土坑や柱穴などの生活痕跡が検出された。

3 法泉寺跡 (No. 182)

扇が谷四丁目に位置する。海蔵寺の存する谷戸内にあり、鋼管杭工事を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。調査の結果、14世紀代の遺構として鎌倉石の切石を積んで造られた幅2mの溝が出土している。調査区南側を東西に走る現況道路にほぼ並行しており、当時の土地利用状況を復元するうえで重要な資料となった。

4 甘縄神社遺跡群 (No. 177)

長谷一丁目に位置する。界道鎌倉・葉山線の北側にあり、地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にもなって発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀から14世紀にかけての泥岩による整地層を確認し、その上面で柱穴など建物の痕跡を検出した。

5 名越ヶ谷遺跡 (No. 231)

大町六丁目に位置する。名越ヶ谷と呼ばれる大規模な谷戸の中にあり、北側は谷戸の中央を通る道路と逆川に面している。敷地は道路より2mほど高まっている。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、地表下50cmから中世の遺構・遺物が出土している。泥岩による整地層が数層にわたって存在し、礎板や礎石を用いた建物の痕跡が検出されている。13世紀における谷戸内の土地利用を知る上で重要な事例の追加となった。

6 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

小町一丁目に位置し、若宮大路から鎌倉郵便局の南側を抜けて小町大路に出る通りに面している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、小町大路と並行して南北に走る溝や、方形竪穴建物跡などを確認した。溝は杭などの護岸工事の跡が見られる。小町大路側溝の可能性もあり、貴重な発見である。

7 公方屋敷跡 (No. 268)

淨明寺四丁目に位置し、県道神奈川鎌倉線の北側丘陵裾に近接している。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世は13世紀から14世紀にかけての砂岩小塊を利用した整地層が確認でき、上面には柱穴などの痕跡が存在していた。さらに下層からは古代の土器片を含む溝が出土している。

8 川越重頼邸跡 (No. 270)

淨明寺五丁目に位置する。滑川南岸に向かって開口する谷戸の入り口にあり、北側は道路に面している。地盤の表層改良を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、砂岩小塊を用いた整地層と、柱穴などの建物跡、14世紀代のかわかけ溜などが出土した。

9 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

大町一丁目に位置する。県道鎌倉・葉山線の北側にあり、下馬交差点付近の横須賀線高架に平行する道路に近接した調査区である。地盤の柱状改良工事を内容とする店舗併用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、敷地を南北に貫く泥岩でつぎ固めた道路遺構が検出されたほか、方形竪穴建物跡が数基確認された。中世の土地区画を復元するうえで重要な発見であった。

10 建長寺旧境内遺跡 (No. 397)

山ノ内字白黒小路に位置する。主要地方道横浜鎌倉線の南側にあり、ちょうど明月谷の開口部に面している。敷地の西側にはやぐらのある岩の壁が迫り、そのさらに西側を横須賀線の線路が通る。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともなって発掘調査を実施した。

調査の結果、岩盤を削平して造った平場や柱穴、泥岩による整地層と掘立柱建物跡や、南北方

向の道路状遺構を確認した。丁寧に作られた土製の花器や火鉢、硯等が出土し、谷戸の造成と寺院境内地としての土地利用のあり方を知る上で重要な成果を得た。

11 田楽辻子周辺遺跡 (No. 33)

浄明寺一丁目の犬懸谷開口部に位置する。杉本観音向かい側の滑川が大きく南へ湾曲する箇所
の南岸に面している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建築にともな
って発掘調査を実施した。

調査の結果、14世紀の土地利用痕跡は希薄ながら、13世紀代と15世紀代の遺構・遺物を検出
した。調査区西側では、玉砂利を敷き詰めた池もしくは庭が出土した。当時の居住者の性格を知
る上で貴重な遺構である。

12 長谷小路周辺遺跡 (No. 236)

由比ガ浜三丁目に位置する。江ノ島電鉄由比ガ浜駅の北側、県道鎌倉葉山線の南に面する敷地
である。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする店舗併用住宅の建築にともない、発掘調査を
実施した。

調査の結果、方形竪穴建物跡や土坑、古代の掘立柱建物跡、火葬骨埋納遺骨などが出土した。

13 桑ヶ谷療病院跡 (No. 294)

長谷三丁目に位置する。長谷寺の北側に存在する谷戸の中ほどに立地する。宅地の地盤面は谷
戸中央を通る道路よりも1.5mほど上にあるが、遺構は道路より50cmほど上で確認される。地盤
の表層改良工事を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、泥岩による整地層が数層、土留めの痕跡等が確認でき、整地層上面では建物跡な
ど生活痕跡を確認した。

14 極楽寺旧境内遺跡 (No. 291)

極楽寺四丁目に位置する。極楽寺の北西に存在する谷戸の中ほどに立地する。鋼管杭の設置に
よる基礎工事を内容とする個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

平成22年度発掘調査地点一覧

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1	安国寺跡 ★ (No.174)	山ノ内字東管領屋敷147番9外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	46.00	平成22年2月12日 ～平成22年5月7日
2	法泉寺跡 ★ (No.182)	扇ガ谷四丁目518番8	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	38.00	平成22年3月26日 ～平成22年6月8日
3	北条小町邸跡 ★ (No.262)	雪ノ下一丁目421番1	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	城館	27.00	平成22年3月29日 ～平成22年5月21日
4	甘縄神社遺跡群 (No.177)	長谷一丁目262番14外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	36.00	平成22年4月23日 ～平成22年6月11日
5	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町六丁目1708番23外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	21.00	平成22年5月14日 平成22年6月30日
6	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目333番15	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	25.00	平成22年6月9日 平成22年7月23日
7	公方屋敷跡 (No.268)	浄明寺四丁目297番12外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	城館	48.00	平成22年6月8日 平成22年8月20日
8	川越重頼邸跡 (No.270)	浄明寺五丁目423番1外	個人専用住宅 (地盤の表層改良)	城館	45.00	平成22年7月1日 平成22年8月26日
9	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	大町一丁目1034番9	店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	66.00	平成22年8月18日 平成22年11月5日
10	鎌倉城 (No.87)	山ノ内字白黒小路1479番6	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	城館	96.00	平成22年9月15日 平成23年1月7日
11	田楽辻子周辺遺跡 (No.33)	浄明寺一丁目691番4	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	54.00	平成22年10月18日 平成22年12月24日
12	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	山比ガ浜三丁目204番5	店舗併用住宅 (鋼管杭構造)	都市	72.00	平成23年1月14日 平成23年3月31日
13	桑ヶ谷療病院跡 ◎ (No.294)	長谷三丁目630番1	店舗併用住宅 (鋼管杭構造)	病院跡 遺物散布地	107.00	平成23年1月28日 平成23年3月31日
14	極楽寺旧境内遺跡 ◎ (No.291)	極楽寺四丁目923番2の一部	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	65.00	平成23年1月31日 平成23年3月31日

★印は平成21年度からの継続調査を示す。

◎印は平成23年度への継続調査を示す。

鎌倉市全図

1 : 50,000



平成22年度の緊急免避調査地点 (1~14)
本書掲載の平成16・17・18年度免避調査地点 (①~⑨)
※遺跡名は一覧表を参照

せきぜんいせき
積善遺跡 (No.440)

十二所二ツ橋4番3

例 言

1. 本報は「積善遺跡（鎌倉市No.440）」内の一部、十二所二ッ橋4番3地点（略称J S）における個人専用住宅の建築にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間：平成16年（2004）4月23日～同年5月20日 調査面積：34㎡
現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。
調査担当者：原 廣志
調査員：須佐直子・本城 裕・岩崎卓治・須佐仁和・早坂伸市・吉田桂子・小野夏菜
調査補助員：橋本和之・原考史・銘苺春也・平山千絵
協力機関名：鎌倉考古学研究所
4. 本報の執筆は、第1～3章を原があたり第4章については調査員が協議して原が草稿を草した。本報の挿図・写真図版の作成には、須佐（直）・岩崎卓治・小野夏菜・吉田桂子が行った。本報の掲載写真は、遺構の全景・個別を原があたり、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。発掘調査における出土遺物、図面・写真などは鎌倉市教育委員会が保管している。
5. 本報の凡例は、以下の通りである。
 - ・挿図縮尺 全側図：1/80 遺構図1/50 遺物図1/3
 - ・遺物図 ー・ー・ーは軸葉の種際を示し、黒塗りは主にかつらけの墨書痕や灯明皿付着の油煤煙、漆器の朱描き文様を表現している。さらに遺物観察表において手づくねかつらけ外底径の計測値と外底指頭痕と口縁部下位との稜部の数値を表わした。
 - ・使用名称 本文中に使用した用語のうち、「土丹」は鎌倉の丘陵基盤で三浦・葉山岩層群の泥岩、「鎌倉石」は池子岩層に顕著な凝灰岩質砂岩、「伊豆石」は、相模川以西の河川・海浜に産する礫石に利用可能な水摩した扁平円礫のことを指す。
 - ・遺物観察表 単位cm、()は推定数値を示している。
6. 本遺跡の現地調査及び資料整理に際して多くの方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
伊丹まどか・菊川 泉・菊川英政・古田戸俊一・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・玉林美男・中野晴久・松尾宣方・馬瀬和雄・八重樫忠郎

目 次

本 文 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
1. 遺跡の位置と地形	
2. 遺跡の歴史的環境	
第2章 調査の概要	8
1. 調査の経過	
2. 側量軸の設定	
3. 層序と生活面	
第3章 検出遺構と出土遺物	10
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
第4章 まとめ	21

挿 図 目 次

図1 遺跡と調査地点の位置	6	図8 第1面出土遺物	15
図2 国土地標位置・グリッド配置図	9	図9 第1面下土坑12・13	17
図3 調査区西壁土層堆積図	10	図10 第2面全測図	18
図4 第1面全測図	11	図11 第2面遺構	19
図5 第1面建物1	12	図12 第1面下・第2面出土遺物	20
図6 第1面建物1出土遺物	13	図13 第2面出土遺物	21
図7 第1面遺構	14		

表 目 次

表1 周辺の調査地点と遺跡	7	表5 遺物観察表(4)	26
表2 遺物観察表(1)	23	表6 遺物分類別出土数量・比率表	27
表3 遺物観察表(2)	24		
表4 遺物観察表(3)	25		

図 版 目 次

図版1	a. 第1面全景(北から) b. 建物1(西から) c. 建物1ロー3(西から) d. 建物1ロー2(北から)	28
図版2	a. 建物1イー4(東から) b. 建物1ハー3(西から) c. 土坑6(西から) d. 土坑10白磁皿出土状況 e. 第1面下土坑13	29
図版3	a. 第2面全景(北から) b. 第2面全景(南から) c. P10・溝1東端(南から) d. 土坑13、P12・13(西から)	30
図版4	a. 溝1(西から) b. 溝1(東から) c. P14(東から) d. 調査区西壁土層 e. 調査区西壁南側土層 f. 調査区西壁北側土層	31
図版5	a. 建物1イー1～4 b. 建物1ロー1～4 c. 建物1ハー3 d. 土坑2 e. 土坑3	32
図版6	a. 土坑4 b. 土坑5 c. 土坑6 d. 土坑8 e. 土坑9 f. 土坑10 g. 土坑11 h. P5 i. P6 j. P7	33
図版7	a. 第1面遺構外 b. 土坑12 c. 土坑13 d. 土坑16 e. 溝1	34
図版8	a. 溝1 b. P10 c. P11 d. P13 e. P14 f. 第2面遺構外	35

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と地形

本調査地点は市街地北東部である十二所地区、滑川上中流域の左岸に位置し、JR 鎌倉駅からほぼ真東方へ約2kmの距離にあたる鎌倉市十二所二ツ橋4番3に所在する。鎌倉の市街地と呼称される地域は、100m前後の馬蹄形の丘陵に囲まれ、相模湾へと注ぐ滑川を中心とした扇状地に低湿地と砂丘がひろがった地形を形成している。滑川は鎌倉の北東最奥にある朝比奈切通付近を水源に発した太刀洗川に始まり、南西方向へ蛇行しながら谷戸の間を進んで南北の低い丘陵の谷間を西に流れていく。県道金沢・鎌倉線（近世の金沢往還路・中世の六浦道）と何度か交差して二階堂川や西御門川などと合流を繰り返しながら市街地の沖積低地に至り、由比ヶ浜に達する。十二所周辺は、丘陵頂部を挟んだ東側と北側は横浜市の金沢区と栄区、南側が逗子市の池子や沼間などに隣接しており、西側は積善の谷戸にあたりその奥は鎌倉・逗子ハイランドの住宅地が広がっている。遺跡が所在する積善ほかくに光触寺橋付近から西をみると、明石谷・二ツ橋・泉水・御所之内など字名を残した谷戸が滑川沿いに樹枝状に開折している。

調査地点前の六浦道は、鎌倉から朝比奈切通を抜けて六浦・金沢を結び、さらに東京湾を隔てて上総国へと通ずるルートで鎌倉開府以前より存在したとみられ、当時の主要交通路であった。昭和31年、県道金沢・鎌倉線として新しい道路が開通しても一年を通して人の絶えない重要な往還路となっている。

2. 遺跡の歴史的環境

鎌倉市街地は古代相模国鎌倉郡の中心域に属し、JR 鎌倉駅西方で市立御成小学校地点（今小路西遺跡）の発掘調査では奈良～平安時代にかけての鎌倉郡の郡衙跡が発見された。古代の鎌倉郡は鎌倉郷・荏草郷・梶原郷など七郷から成っており、この周辺は荏草郷の東端に位置したと考えられる。六浦道は朝比奈切通付近から相模国と武蔵国の境界になり、武蔵国六浦へと通じる道で相模・武蔵と房総方面とが江戸湾（東京湾）を隔てて海上經由で結ばれる重要なルートであったと想定される。六浦道沿いには、長治元(1104)創建という住柄天神社、行基開創の伝説が残る杉本寺（大倉観音堂）などの鎌倉開府以前から所在した寺社と考えられ、この道の重要性を裏付けていよう。頼朝は入府するとすぐ御所をおいた大倉の地もやはりこの道沿いにあたり、御家人達も周辺に居を構えていたようである。六浦道沿いの本遺跡周辺には御所之内の古地名がある足利公方屋敷跡をはじめ、明王院の西の谷に梶原景時邸や明石谷の大江広元邸などの御家人クラスの屋敷跡という伝承地があり、朝比奈切通の近くには上総介広常も居を構えていたといわれる。その真偽は定かではないとしても、この十二所周辺に有力御家人が居館を構えていたことは確かであろう。また本調査地点の滑川を挟んだ字名二ツ橋の地域、阿弥野山を背負った場所は第四代将軍頼朝の明王院五大堂があり、その東側一帯は建暦二年(1212)に第三代将軍の源実朝が「君恩父徳」に報謝するため大倉新御堂（『吾妻鏡』）ともいう大慈寺の跡と推定されている。調査地の北東側、宇佐小路の南の谷には岩殿山光触寺があり、明石谷一帯は明王院の坊舎になる一心院の旧跡と伝えられている。本遺跡は古代～中世を通じて重要路であった六浦道東端に位置し、鎌倉の外港六浦津から陸路での入口として経済的な場であると、同時に寺院が建立されていた宗教的な空間としての側面も持っていたことになる。調査地点前を走る県道金沢・鎌倉線は中世では六浦道と呼ばれ、鎌倉から朝比奈切通を越えて鎌倉の外港である武蔵国六浦への重要な往還路であった。六浦津を通して江戸湾（東京湾）から房総半島を臨み、江戸湾の海上交通路の基点であるとともに東日本の沿岸海上交通路の要衝に位置するとものであった。いずれにせよ今後の調査により周辺地域の様相の解明が期待される。



図 1 遺跡と調査地点の位置

表1 周辺の調査地点と遺跡

()は県遺跡台帳番号

No	遺跡名	調査地点	遺跡の特徴・文献など
1	積善遺跡 (No.440)	十二所二ツ橋 4番3	本調査地
2	積善遺跡 (No.440)	十二所積善 952番6	遺構面3面、堅穴状建物・土坑・かわらけ溜り・ピットなど 13C 後葉～14C前半 秋山・須佐・原 1998
3	積善遺跡 (No.440)	十二所積善 952番8	遺構面4面、掘立柱建物・土坑・井戸・柱穴列・ピット・かわら け溜りなど 13C後葉～14C前半 秋山・須佐・原 1999
4	公方屋敷跡 (No.268)	浄明寺三丁目 143番2	遺構面3面、掘立柱建物・土坑・井戸・道路・側溝・かわらけ溜 りなど 13C前葉～15C世紀前葉 原・橋場 1994
5	公方屋敷跡 (No.268)	浄明寺三丁目 151番1	遺構面3面、掘立柱建物・土坑・ピットなどを検出 13世紀中葉 ～15世紀前半 宮田ほか1996
6	御所内横穴 (No.162)	浄明寺四丁目 273番1	やぐら・土坑・溝・近世横穴など 14世紀代・19世紀 原・田 代 1990b、継 1991b(公方屋敷内やぐら)
7	東泉水やぐら群	浄明寺五丁目 311番	やぐら 本遺跡調査中に踏査
8	明石谷東やぐら群 (No.458)	十二所 824番	やぐら 14世紀～15世紀 松葉・鈴木 2010
9	明石谷やぐら群 (No.93)	十二所 888番	井戸・崖裾の造成遺構など 14世紀～15世紀・近世 鈴木・村 上・根本 2003
10	明王院門前遺跡	十二所明石谷 922番	やぐら 14世紀後半～15世紀 田代・宗臺 1998

【引用・参考文献】

- 秋山哲雄・原 廣志 1998「積善遺跡 十二所積善952番6地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14(第2分冊)鎌倉市教育委員会
- 秋山哲雄・原 廣志 1999「積善遺跡 十二所積善952番8地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15(第1分冊)鎌倉市教育委員会
- 鈴木庸一郎・村上吉正・根本志保 2003『明石谷やぐら群・明石谷東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告書154
- 継 実 1991b「公方屋敷内やぐら 鎌倉市浄明寺四丁目272番1」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』公方屋敷内やぐら発掘調査団
- 田代郁夫・宗臺秀明 1998「明王院門前遺跡」『中世石室遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所報告第15集
- 原 廣志・橋場君男 1994「公方屋敷跡 浄明寺三丁目143番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10(第1分冊)鎌倉市教育委員会
- 原 廣志・田代郁夫 1990b「公方屋敷内やぐら 鎌倉市浄明寺四丁目272番1」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』公方屋敷内やぐら発掘調査団
- 松葉 崇・鈴木絵美 2010『明石谷東やぐらⅡ』かながわ考古学財団調査報告書256
- 馬河和雄 1994「武士の都鎌倉-その成立と構想をめぐって-」網野善彦・石井 進編『中世の風景を読む-2』新人物往來社
- 三浦勝男 2001「鎌倉の地名考(二六) 一十二所一」『鎌倉』92 鎌倉文化研究会
- 宮田 真・森 孝子・高野昌巳・滝澤晶子 1996『公方屋敷跡発掘調査報告書』公方屋敷跡発掘調査団

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

本調査地点は個人専用住宅の建設に先立ち、建設計画が鋼管杭の設置による基礎工事を内容とするものであったため、埋蔵文化財に影響を及ぼすと判断されたので鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地下約30cmまで現代客土が確認され、その直下は中世遺物包含層をほとんど含まず2時期の遺構面（生活面）の存在が確認され、それに伴う遺構・遺物が明らかになり発掘調査を実施する運びとなった。現地調査は平成16年4月23日に機材搬入、重機により試掘データに基づいて地表下20cm程までの表土層を除去した後、以下を人力により掘り下げて遺構検出をおこなった。調査面積は34.0㎡を対象である。調査の結果、礎石建物、土坑、溝、ピットなどにより構成された遺構群が検出され、それに伴い13世紀後葉～14世紀前半にかけてのかわらけ・陶磁器類・金属製品などと2時期の生活面が検出された。同年5月20日までの間に必要な記録作業をおこない、同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

【日誌抄】

- 4月23日（金） 調査区を設定して重機により地表下20cmまで表土掘削。機材搬入とテント設置。
26日（月） 第1面の検出及び遺構確認作業。鎌倉市4級基準点を基として測量方眼の設定。
5月7日（金） 第1面全景・個別遺構の写真撮影。第1面の平面図作成を開始。
17日（月） 第2面全景・個別遺構の写真撮影。第2面の平面図作成を開始。
19日（水） 調査区西壁土層堆積の写真撮影及び土層断面図を作成。
20日（木） 現地調査終了。機材撤収。

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量軸の設定には、図2に示したように国土座標の数値を用いており、測量方眼軸は調査区の軸方向にほぼ平行して基準の南北軸を設けた。測量軸の設定には調査地東側を南北に走る道路面上に鎌倉市道路管理課が設定した市4級基準点（第IV座標系）のC002と、C003との関係から開放トラバース測量により算出して測量基準点にあたるA-3杭とF-3杭をそれぞれ設置した。さらに測量軸は2m方眼による軸線を配し、東西軸線には西から算用数字1～5、南北軸線には北からアルファベットA～Fをそれぞれ付してグリッド設定を行った。

図2に示した座標値は現地調査時で使用した日本測地系（座標 AREA9）の国土座標値であり方位標の北は真北を示しているが、市4級基準点002・003と、測量方眼軸のA-3・F-3グリッド杭については、整理作業の段階で国土地理院が公開する座標変換ソフト『web版TKY2JGD』によって世界測地系IX系の座標数値に準じて算出した数値を図中に記した。なお、調査区は世界測地系でX-75.545～75.560、Y-23.395～23.405の区域内に位置している。また海拔標高値の原点は、鎌倉ハイランド入口に近い鎌倉市1級水準点：BM. 34＝海拔標高23.3873mを基に調査地点の方眼軸A-3・F-3杭（L=19.764m・19.638m）へ仮水準点を移設した。方眼南北軸方位はN-26°46'40"-Eである。

3. 層序

調査地点における現地表の海拔標高は19.50m前後でほぼ平坦な土地となっており、調査区内の堆積土層は概ね5層に区分され2時期の遺構面が検出された(図3)。調査で確認した土層は厚さ20~30cmほどの現代客土層の表土を除去すると、中世遺物包含層を挟まずに鎌倉石の破砕粒を敷き詰めた生活面と、それに伴う礎石建物跡・土坑・ピットなどが認められ、第1面として調査を行った。この面は海拔標高約19.20mを計る。第2面は薄い間層(2・3層)を挟んで中世地山に類似した灰褐色粘質土の上面で土坑・溝・ピットなど検出しており、海拔標高19.00m程である。その下は中世基盤層にあたる締りの強い茶~灰褐色粘質土が検出されている。

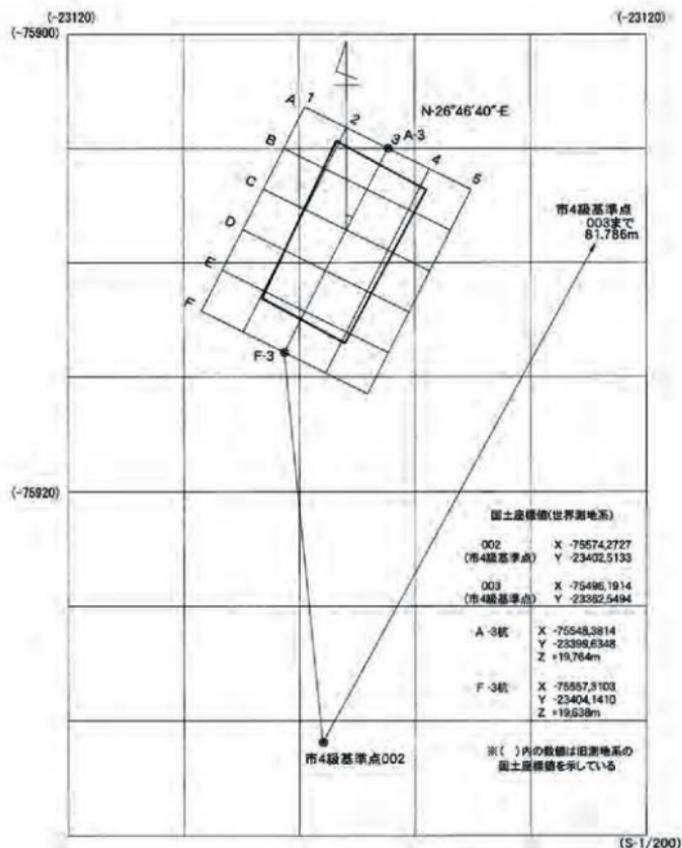


図2 国土座標位置・グリッド配置図

東西柱列は一間分の柱間を確認しただけだったので調査区外への広がりを把握するために必要最小限のトレンチを設定して礎石掘り方の検出を行った。西サブトレンチでは柱通り2mほどの位置で礎石が抜き取られた掘り方（ハ-3掘り方）を発見したが、東サブトレンチでは近世井戸の攪乱で破壊されており建物の広がりは把握できていない。

柱間寸法は南北列の芯々距離が各々205cmほどで、東西列の距離をみると東から206・196cmをそれぞれ測る。掘り方は径60~110cm、深さ20~30cmを測り、形状は楕円形を呈する。礎石の石材は粗粒凝灰岩質と粗砂粒砂岩質（所謂鎌倉石よりはともに軟質な石材）を方形板状に加工したものを併用しており、大きさは長さ30~48cm、幅28~34cm、厚さ20~30cmほどの石材を用いている。この建物の南北軸方位は、N—27°30'—Eである。

本建物跡の各礎石掘り方中から出土した遺物のうち、図6に示した。遺物の種類別内訳はかわらけ285点、船載陶磁器1点（白磁皿）、国産陶器6点（瀬戸窯1・常滑窯5）、石製品3点、金属製品5点の計300点（31.5%）で高い出土比率を示している。出土したかわらけは全てロクロ成形の回転糸切底で大皿は薄手丸深タイプと、やや厚手器壁で背高の内彎タイプが主体を占めている。

イ列-1掘り方は1・2のかわらけ大小皿であるが大皿は底部厚く開いた器壁のもの、3が瀬戸窯四耳壺である。イ列-2掘り方は4~8のかわらけ大小皿である。大皿は背高で内彎した器形のもの、9~11の鉄釘である。イ列-3からは12・13のかわらけ大皿で背高めで薄手器壁と厚手器壁がある。イ列-4掘り方は14~17のかわらけ大小皿である。ロ列-1掘り方は18~22のかわらけで小皿が口径・提携の比率が少なく低い器高ものと大皿が薄手丸深のタイプ、23が白磁口歪皿の底部片である。ロ列-2掘り方は24がかわらけ小皿で口径・底径の比率が大きめである。ロ列-3掘り方は25~28のかわらけは25・27の小皿が薄手器壁で開き気味の器形と、26の厚手の器壁で内彎したものとがみられ、大皿は背低で開き気味の器壁である。ロ列-4掘り方は29のかわらけ小皿で薄い器壁は開く立ち上がり。ハ列-3掘り方は30がかわらけ小皿で薄い器壁は開き気味の器形である。31は常滑窯片口鉢1類の口縁片である。

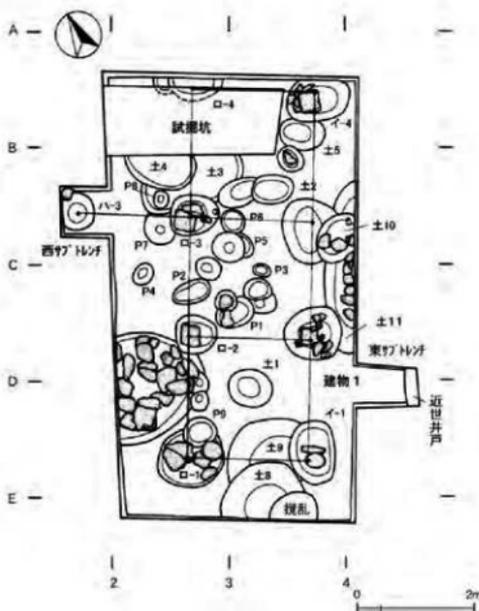
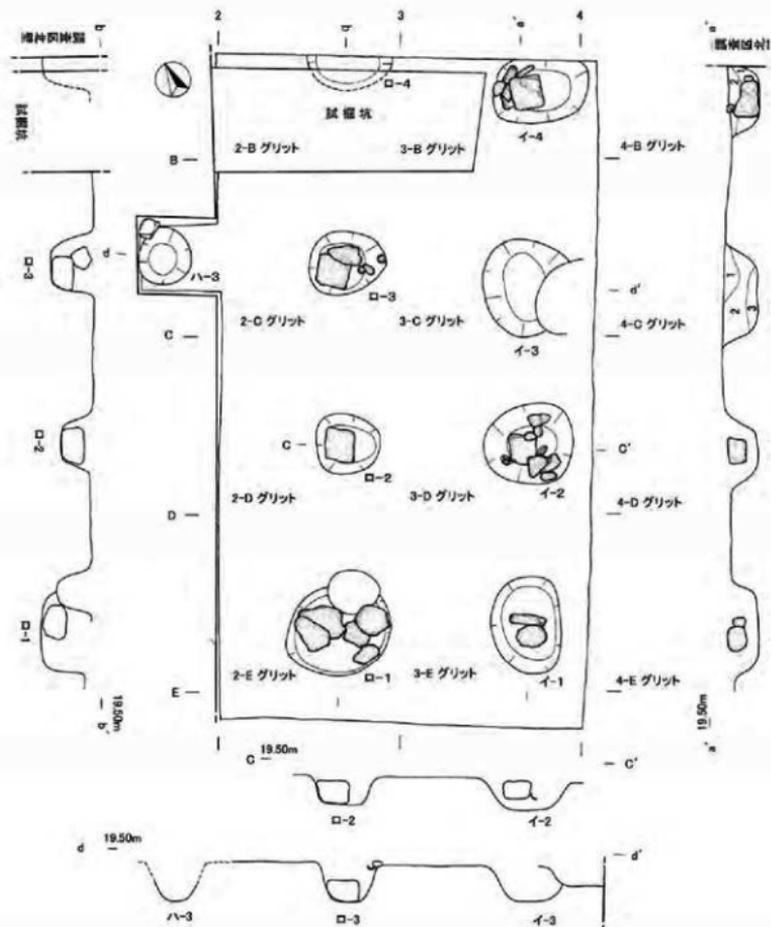


図4 第1面全側図



建物 1 イーウ土階部分

1. 外周部は砂利層上
2. 柱間部は砂利層上
3. 柱間部は砂利層上

1. 外周部は砂利層上
2. 柱間部は砂利層上
3. 柱間部は砂利層上

建物 1 イーウ土階部分

1. 外周部は砂利層上
2. 柱間部は砂利層上
3. 柱間部は砂利層上

0 2m

図5 第1面建物1

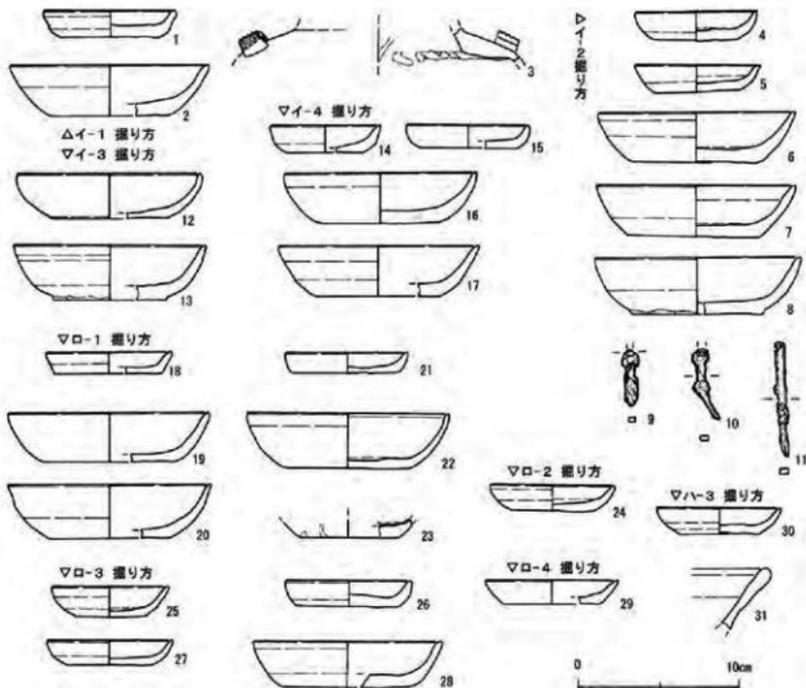


図6 第1面建物1出土遺物

土坑 (図7・8)

土坑1：D-1杭の位置で検出された楕円形を呈したところである。大きさは長径77cm、短径63cm、深さ42cmを測り、断面逆台形になる小型の土坑である。覆土は粗砂粒と炭化物を多めに含んだ灰褐色砂質土と下層の灰褐色弱砂質土の2層からなり、遺物は図8-1の鉄釘片が1点出土している。

土坑2：B-3グリットに位置する。規模は長径73cm、短径48cm、深さ25cmの浅い皿状の楕円形を呈した土坑である。覆土は粗砂粒と炭化物をやや多く含んだ灰褐色弱砂質土である。遺物は図8-2の竜泉窯系の青磁鑄蓮弁文碗の体部小片が1点出土した。

土坑3：B-3グリットに位置し、建物1ロー3掘り方・土坑4・P8に壊されており、P7よりも新しい大型の土坑である。規模は東西径185cm、南北径96cmの大きさと深さ約15cmと浅い掘り方である。覆土は炭化物をやや多く含んだ締りのない茶灰色弱粘質土である。遺物は図8-3～6のかわらけが口径7.7～8.0cmの背低器形の小皿と、口径12.8cmの厚手器壁で開き気味の器形を呈した大皿である。7は基石で円形の扁平な自然黒石を用いている。8～12の北宋銭が5枚出土した。8が祥符元宝(初铸1008年)、9が皇宋通宝(初铸1039年)、10が嘉祐通宝(初铸1056年)、11が治平元宝(初铸1064年)、12が元豊通宝(初铸1078年)である。

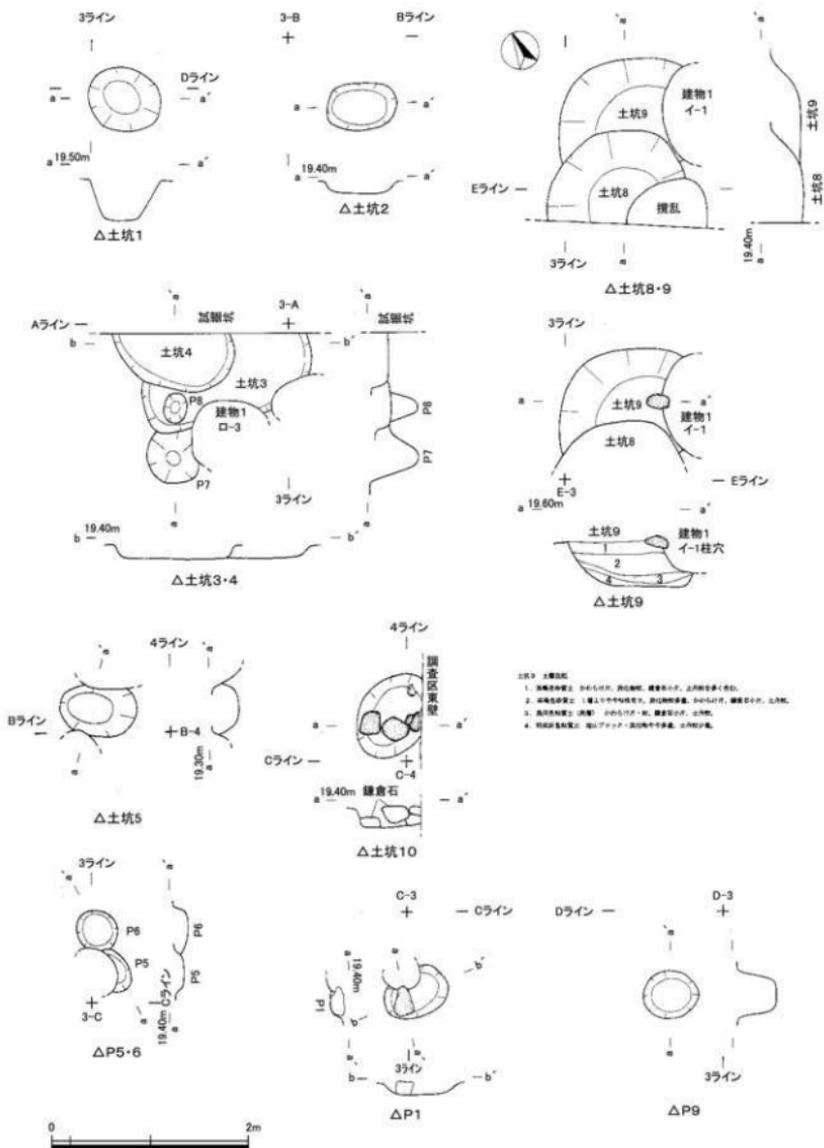


図7 遺構
 1. 築造年代不明、中土の石、漆喰の壁、掘取の穴、土坑の多くを含む。
 2. 築造年代不明、土坑の中心部の中土、漆喰の壁、中土の石、掘取の穴、土坑。
 3. 築造年代不明、土坑の中心部の中土、掘取の穴、土坑。
 4. 築造年代不明、土坑の中心部の中土、掘取の穴、土坑。

図7 第1面各遺構

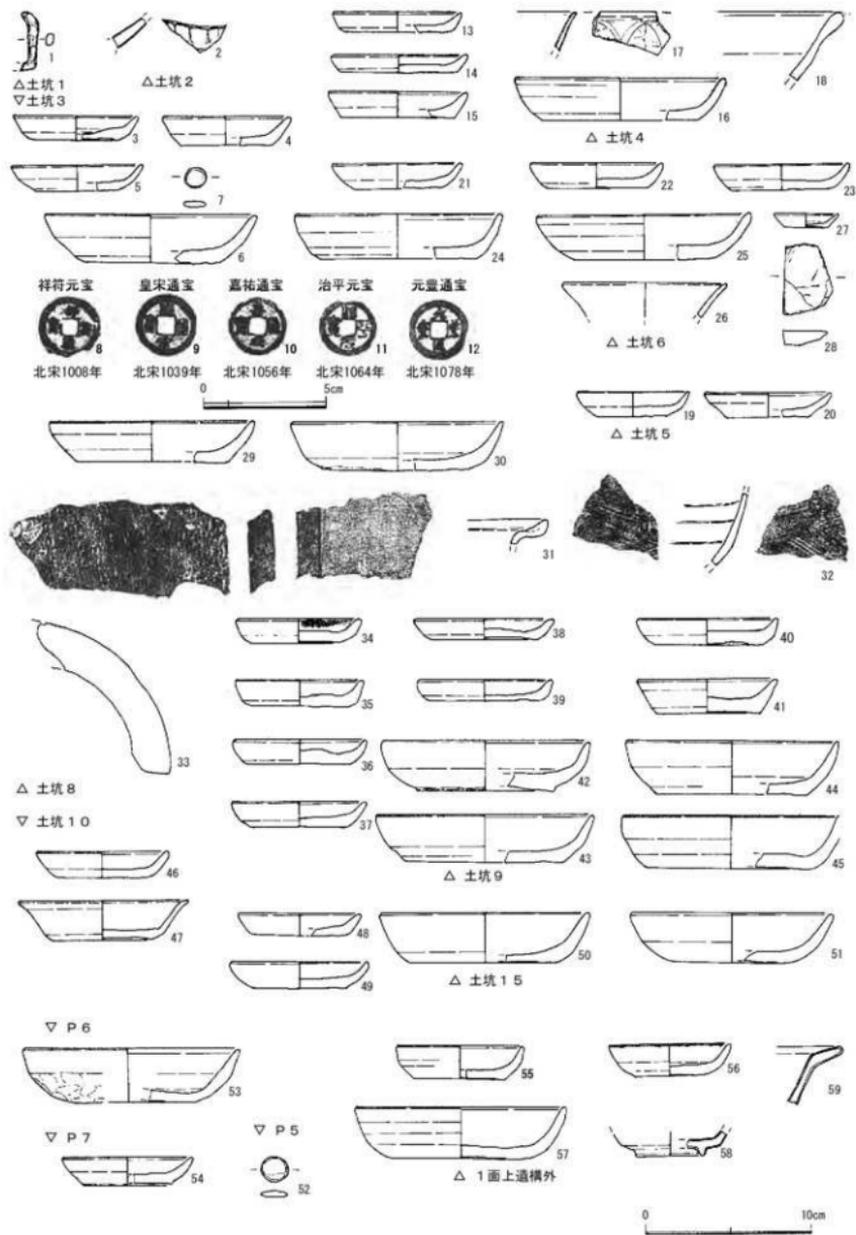


图8 第1面 出土遺物

土坑4: 本址は土坑3より新しい遺構である。平面形状は楕円形を呈し、長径130cm、短径78cm前後、深さ17cmを測り、浅い皿状の掘り方である。覆土はかわらけ粒を混入した締りのない茶褐色弱砂質土である。出土遺物は図8-13~16のかわらけで小皿が口径7.9~8.3cmの背低で直線的な開いた立ち上りの器形、大皿は口径12.8cmで底径の広い背低気味な器形のものである。17は竜泉窯系の青磁鎗蓮弁文碗の口縁部小片、18は常滑窯片口鉢1類の口縁部で内面の使用痕は確認できなかった。

土坑5: 調査区北東隅に位置し、建物1イー4掘り方に一部を壊されている。形状は楕円形を呈し、東西径78cm、南北径50cm、深さ28cmを測る。覆土は上位に薄い炭化物層がある灰褐色砂質土である。遺物は図8-19・20のかわらけ小皿とともに底部から外反気味に立ち上がり体部中位に稜をもつもの。

土坑6: C・D-2グリットに位置し、西側は調査区外に拡がっている。建物1ロー2掘り方に一部をこわされていた。平面形状は楕円形と思われ、大きさは東西径175cm以上、南北径182cm、確認面からの深さ30cmで大型の土坑である。覆土は2層からなり上層が灰褐色砂質土でかわらけ片・粗砂を少量含み、下層が明灰褐色砂質土で粗砂を多く混じえた締りのないもの、鎌倉石類似の凝灰岩質砂岩塊と大小土丹塊が多く認められた。出土遺物は図8-22~25のかわらけで小皿が口径8cm以上の背低気味の薄手器壁、大皿は背低で口径と底径の比率が小さいものと、大きめなものがある。26は白磁口禿皿で口縁部が外反気味の器形である。27は瀬戸窯入子で口径約4cmの小型品で外底にヘラ削り痕があり、内底面に紅と思いき赤色物質が付着する。28は緑味灰白色泥岩質で京都鳴滝産の仕上砥である。

土坑8: E-3杭に位置し、南側は調査区外に拡がっている。土坑9よりも新しいが近代ゴミ穴の擾乱で壊されていた。大きさは東西径146cm以上、南北径145cm以上、深さ30cmを測り、楕円形の形状と考えられる。明灰褐色砂質土の覆土中からは図8-29・30のロクロ成形のかわらけ大皿、31・32の伊勢系土鍋で同一個体の資料である。33は男瓦(丸瓦)で凸面縄目叩き後にスリ消し成形、凹面が細かな布目痕であり、永福寺II期瓦(埼玉県美郷の水殿瓦窯産瓦)と類似する。

土坑9: 土坑8と建物1のイー1掘り方よりも古い土坑である。確認された規模は東西径160cm以上、南北径約135cm、深さ46cmでかわらけや炭化物を多く交えた大型のゴミ穴土坑と考えられる。覆土は下位に堆積していた炭化物層を挟み大きく分けて2層から構成される。上層は締りの弱い茶褐色砂質土(1・2層)、下層が地山ブクを含む茶灰色粘質土であり、上層覆土に伴ってかわらけの完形品や破片が多く出土している。出土遺物は図8-34~45がロクロ成形のかわらけ大小皿である。小皿は41の直線的に大きく開く器形で器高が2cmを超えるもの以外、すべて背低(器高1.5cm前後)の器形である。34は口縁部に煤付着した灯明皿であろう。大皿の42~45は背低で口径13cm前後の内彎気味の器形である。

土坑10: C-4杭に隣接した位置で建物1のイー3掘り方を壊すように検出された。平面は楕円形状を呈し、南北径94cm、東西径73cm、深さ25cmの大きさの底面が平らな掘り方である。覆土は締りのない茶褐色砂質土で鎌倉石大小塊と粗砂を多く交えている。遺物は図8-48がロクロ成形のかわらけ小皿、49が白磁口丸皿で口縁部が外反気味である。

土坑11: 建物1のイー2・3掘り方と土坑10に壊され、東側は調査区外に拡がる大型の土坑である。確認した規模は南北長294cm、東西長50cm、深さ20cmほどの浅いものである。茶褐色砂質土の覆土中から大小の鎌倉石・土丹塊が認められた。出土遺物は図8-48~51のロクロ成形かわらけである。小皿は背低の薄手器壁のもの、大皿は背低の内彎気味の器形を呈する。

ピット(図7・8)

P1: C-3杭の南側に位置する。大きさは東西径68cm、南北径42cm、深さ15cmの楕円形を呈し

た浅い掘り方である。掘り方の南西寄り底面に長さ30cm、幅20cm、厚さ15cmほどの鎌倉石が据えられている。かわらけ小片だけで図示可能な遺物は出土していない。

P5・P6：C-3杭の北隣した位置で検出され、P6よりP5が新しい。平面形状は楕円形で長径55cm、短径35cmほどの浅い掘り方である。覆土は炭化物・かわらけ小片を多く含む茶褐色砂質土、遺物はP5から基石の黒石(52)、P6から手捏ね成形のかわらけ大皿(53)が出土している。

P7：建物1のロー3掘り方と土坑3よりも新しい遺構、平面形はほぼ円形の底面の小さな掘り方をもち、径56cm、深さ38cmほどである。図8-54のロクロ成形のかわらけ小皿が出土した。

P9：D-2グリットに位置し、建物1のロー1掘り方により一部を壊されている。掘り方は径58cm前後のほぼ円形を呈し、深さ45cmを測る。図示可能な遺物はみられない。

第1面遺構外出土遺物(図8)

55~57はロクロ成形のかわらけで55・56が小さめ口径で薄手器壁の小皿、57の大皿が薄めの器壁は内彎気味に立ち上がる器形である。58・59は竜泉窯系青磁で前者が小型の折腰皿、後者が無文の折縁皿である。

第1面下 土坑12・13(図9・12)

土坑12・13とした遺構は、第1面構築土を除去しつつ第2面へ掘り下げて調査を進めていく段階で確認された土坑であるが、調査区西壁土層の堆積観察から第2面上層からの掘り込み土坑と考えられる。

土坑12：調査区南西隅の位置で僅かに確認された土坑で土坑13を壊して掘り込まれている。確認できた規模は南北長80cm以上、東西長50cm以上、深さ40cmで調査区外に拡がっている。覆土は上層に鎌倉石片を含む茶褐色砂質土がみられ、底面上に厚さ15cm程の炭化物層が厚く堆積していた。

出土遺物は図12-1~7がロクロ成形のかわらけである。小皿は口径7.7cm前後で主に背低で開き気味の立ち上がり器形であるが3のやや背高で薄手器壁である。大皿は6の背低で器壁が開き気味の立ち上がり器形と、薄手器壁で丸深の器形もの。8は常滑窯片口鉢1類の口縁部片である。9はかわらけ質の袋物の土製品で小型の無頸壺と思われる。

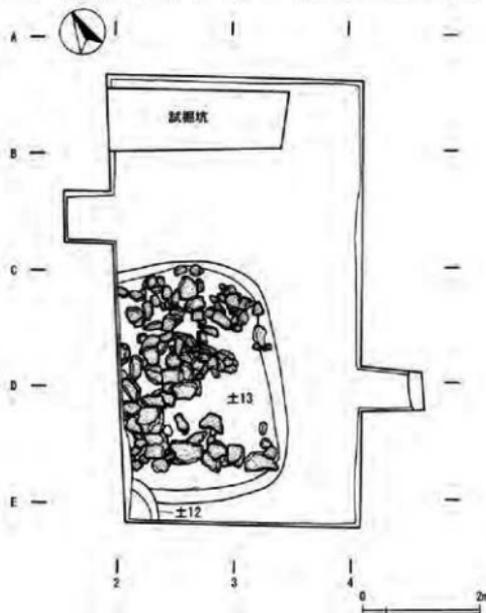


図9 第1面下 土坑12・13

土坑 13: 第1面土坑6下からの位置で多量に投げ込まれた大小土丹塊・鎌倉石塊が散乱した状況で検出された。本址は南北長 415cm、東西長 270cm 以上で隅丸方形の浅い掘り込みである。遺構覆土は(図3調査区西壁土層の8層～12層) 褐鉄分を含んだ茶褐色粘質土の上下層に挟まれて鎌倉石破砕の粗砂を多く混入した砂質土が堆積していた。遺物は図12-10・11のロクロ成形かわらけ大小皿、12・13の常滑窯縁口縁片と片口鉢1類、14・15の鉄釘などが少量出土した。

2. 第2面の遺構と遺物

第2面は灰褐色～茶褐色粘質土の中世基盤層であり、海拔標高 19.05m前後のほぼ平坦な地山面上まで掘り下げ発見した遺構は土坑6基、溝1条、ピット14口などである。遺物はロクロ成形のかわらけ、瀬戸・常滑窯製品、瓦、金属製品などが出土した。

土坑 (図11・12)

土坑 14: D-3 杭に西隣した位置で。形状は不整形を呈し、長径 126cm、短径 118cm、深さ 30cm である。覆土は粗砂を多く含む灰褐色砂質土と締りのある灰褐色粘質土との上・下層からなり、上層に長さ 25～45cm ほどの鎌倉石塊が5個確認された。遺物はロクロ成形のかわらけ小破片だけであった。

土坑 15: B-3 杭に近接した位置である。楕円形の形状を呈し、大きさは長径 113cm、短径 70cm、深さ 20cm ほどで浅い皿状の掘り方、覆土はやや締りのある茶褐色粘質土である。図示可能な遺物は出土していない。

土坑 16: D-4 杭に位置し、東トレンチと調査区外へも拡がっている。本址は新旧関係みてピットの P10・11 よりも古く、溝1より新しい。形状は楕円形を呈し、大きさが長径 145cm、短径 98cm、深さ 20cm ほどの浅い掘り方で覆土は地山粘土ブロックを含んだ茶褐色粘質土である。遺物は図12-16のロクロ成形のかわらけ大皿である。

溝 (図11・12)

溝 1: 調査区南端でグリットラインに平行した主軸方位を示し調査区外の東西へ延びる素掘りの溝である。溝は調査区内で長さ 4 m

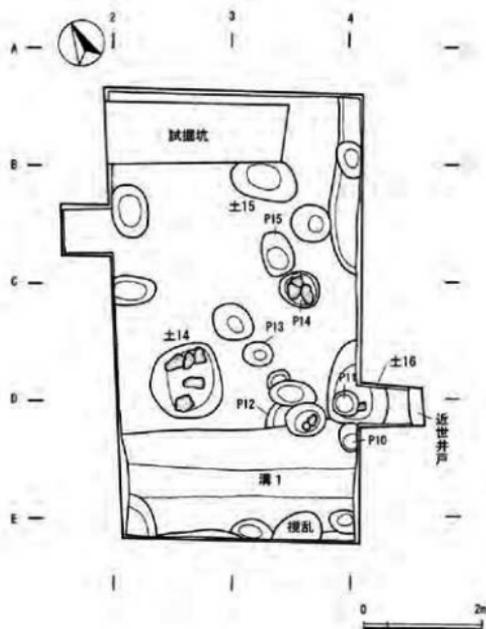


図10 第2面全側図

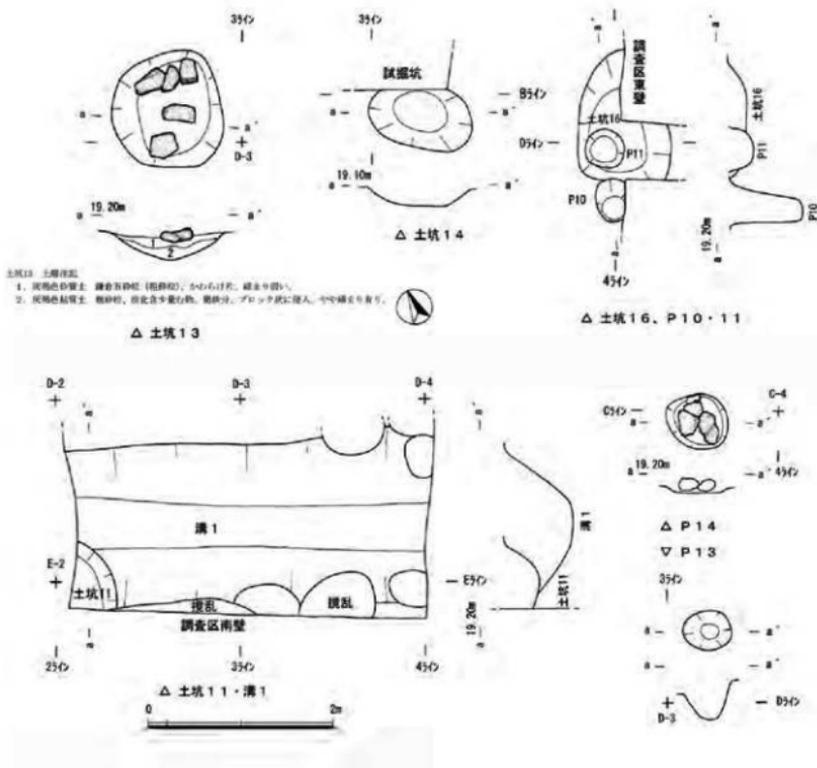


図 11 第 2 面遺構

以上、上端幅 190cm・下端幅約 50cm 前後で断面は整った「V字型」に近い逆台形を呈しており、確認面からの深さ 80cm 前後を測る。溝底面の海拔高は、東端が 18.45m ほどであり、西端際が 18.20m を測り東から西へ向かって緩やかな傾斜を有しており、六浦道側から滑川への排水を目的にした溝であろうか。掘り込み面は中世基盤層上面であるが調査区西壁・東壁の土層断面から、当初の開削後に一度の改修または浚渫が行われていたことが観察されている。溝堆積の覆土をみると、図 3 に示した 16・17 層とした上層は地山ブロック・炭化物・遺物などを多めに混入したもので、溝廃棄時に埋め戻された土層と考えられる。その下には U 字型に堆積した厚さ 10cm 前後の鎌倉石を破碎したような粗砂の様子が認められ、この 18 層は溝の改修または浚渫後の堆積土層と考えられる。さらに 19 層の締りのある茶灰色粘質土は少しのかわらけ小片と、炭化物・有機物などを含んだ溝当初の堆積土と考えられる。

図12-17~43は溝埋め戻しの整地層にあたる覆土層から一括して出土した。かわらけは全てロクロ成形の回転糸切底のものである。1は口径6.8cm、器高1.1cmの内折れタイプ、18~26の小皿は口径8cm以上、器高1.5cm前後の背低で、内彎した器形の18・22を除く資料はいずれも内底面が広く、薄手器壁が開きながら立ち上がる器形である。27~41の大皿には器高3cm前後が主体を占めているが、27・29・35・38・41の器高3.5cm前後の背高気味ものや39の器高2.6cmの背低なものが認められた。42は瀬戸窯四耳壺の口縁部片。43は北宋銭の皇宋口(通宝)(初鑄1039年)である。

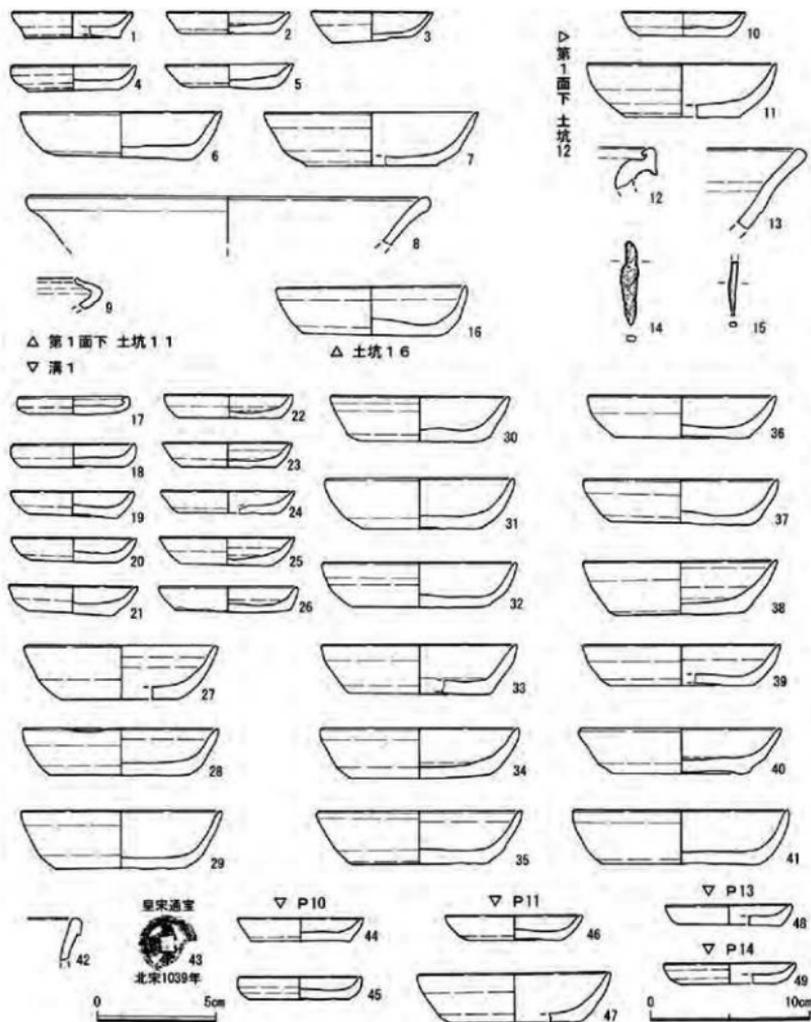


図12 第1面下・第2面出土遺物

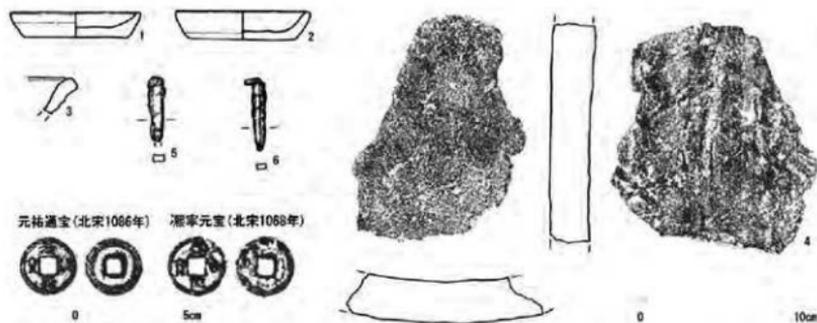


図13 第2面遺構外出土遺物

ピット (図11・12)

P10 : D-4杭に位置し、溝1と土坑16を壊して掘り込んでいる。大きさは長径47cm、短径30cm以上、深さ70cmを測る。楕円形を呈した深い掘り方であるが底面に礎板等の痕跡は認められなかった。覆土は炭化物や褐鉄分を多めに含んだ茶灰色粘質土の単層である。遺物は図12-44・45のロクロ成形かわらけ小皿が2点であり、ともに薄手器壁の背低で内底面の広い器形であるが、器壁が直線的に開くものと内彎した立ち上がりをしている。

P11 : P10の北隣に位置し、土坑16よりも新しい遺構である。円形に近い形状で径45cm前後で深さ30cmを測り、覆土はやや締りがあり炭化物やかわらけ小片を含む灰褐色粘質土である。遺物は図12-46・47糸切底のかわらけ大小皿で背低気味の薄手器壁である。

P13 : C-3グリットで確認された。形状は楕円形を呈した長径46cm、短径35cm、深さ46cmを測り、締りのある茶灰色粘質土の覆土である。図12-48のかわらけ小皿が出土した。

P14 : C-3杭の東側に位置する。形状は楕円形を呈し、大きさが長径72cm、短径60cm、深さ10cmで浅い皿状である。中には頭大～拳大のやや扁平な鎌倉石塊が置かれている。図示可能な遺物は図12-49のロクロ成形かわらけ小皿だけである。

遺構外出土遺物 (図13)

1・2はロクロ成形のかわらけ小皿で背低気味の内底面が広く器壁が開く立ち上りのもの。3は常滑窯片口鉢I類の口縁部小片で13世紀後半頃と思われる。4が永福寺II期瓦の女瓦D類と類似したものである。金属製品には5・6が鉄釘、7・8が北宋銭の「元祐通宝」(初鑄1086年)・「熙寧元宝」(初鑄1068年)である。

第4章 まとめ

今回の調査では、調査面積の狭小さや近代以降の削平を受けながらも、13世紀後葉から14世紀前葉を主体とした生活の様子を遺構・遺物を通して窺い知ることができた。本調査地点の北東側に所在する

明王院は、正式には飯盛山寛喜寺明王院五大堂する寺院、四代將軍九条頼経の開基、鶴岡八幡宮第六代別当の弁法印定豪(1152～1238 東寺系 源延俊の子)の開山、嘉禎元年(1235)に創建された鎌倉幕府の北東、鬼門の方向に位置する將軍御願寺であった。また建暦二年(1212)末朝開基の大慈寺は、明王院の東方一帯に旧蹟が所在したようで旧境内推定地からは大慈寺銘の軒先瓦が出土しており、瓦当製作技法や瓦当文様から推測して創建期瓦と推定され(註1)、また関東大震災の前には畑の中に「やしまの立石」という堂前苑池の立石があったという(註2)。

ところで調査で検出した第1面は、厚さ30cm程の現代客土を除去すると間層を挟まずに鎌倉石の破砕粒を敷き詰めた生活面(海拔標高約19.25m)が表出し、それに伴い13世紀末葉～14世紀前葉頃と推測される礎石建物・土坑・ピットなどが検出された。礎石建物跡は、東沿いを走る現在の六浦道にほぼ平行・直交するような主軸方位をもつことから、六浦道を軸方位に定められたような地割が存在していた可能性が考えられる。さらに第2面検出の東西方向の薬研堀形土掘り溝も直交した主軸を示していた。これまで公方屋敷跡(神奈川県遺跡台帳No.268)範囲における発掘調査で発見されている建物跡群や溝、道路などの遺構も六浦道とほぼ平行・直交した同一の軸方位で造られており、六浦道を軸にしたこれらの地割に準じている事が推測される。

次に出土遺物の傾向については、表8の遺物分類別出土数量・比率表に示したように第1・2面を併せ破片数にして総数953点であった。その内訳をみると、各面の遺構や遺物包含層・構築土遺構に伴う遺物は第1面の資料が567点(59.5%)、第2面の資料が386点(40.5%)であった。次に種類別遺物の出土比率についてみると、かわらけ853点(89.5%)と極めて高い出土比率で、次に瀬戸・常滑品の国産陶器48点(5%)、舶載陶磁器7点と極めて少なく1%にも満たないが、それ比べて銭9点(1%)は高い割合を示している。このほか、砥石・硯の石製品や骨・木炭が少量(約1%づつ)みられたが、地下水が低い関係から木製品の出土は溝1底面から木枝や削りかすが少量出土しただけである。2時期の生活面のうち、第1面に伴う遺物が全体の6割以上を占めており、さらに礎石建物跡や土坑などの発見から屋敷跡などの遺構密度の比較的高い生活の場を予想させるものであった。

東隣の浄明寺地区では足利公方屋敷跡などを中心に調査事例が増加しているが、十二所地区では今までのところ主に急傾斜地崩落対策の防災工事に伴う「やぐら」の発掘調査が中心であり、平面的な調査は殆ど実施されておらず、この地域の考古学的な調査での新資料を多少なりとも提供できたものと思われ、今後の周辺における調査事例の増加に期待したいところである。

註1 鎌倉国宝館で資料を筆者実見

註2 鎌倉文化研究会『鎌倉—史蹟めぐり会記録—』1972 有隣堂

【参考文献】

※第3章の文章中の引用文献も含んでいる。

川副武胤・雪 達人 1980 『鎌倉庵寺事典』 有隣堂

中野晴久 1994 「赤羽一郎・中野晴久『生産地における編年について』 シンポジウム資料『中世常滑滑をおいて』 日本福祉大学知多半島総合研究所

藤澤良祐 1995 「京・鎌倉における古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター

宗富貴子 1996 「鎌倉・今小路西遺跡(御成小学校)の瀬戸窯製品について」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯

馬淵和雄 1997 「中世食文化の諸相—食器からみた中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民族博物館研究報告』第71集

太宰府市教育委員会編 2000 「大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—」『大宰府市の文化財』第49集 大宰府市教育委員会

表2 遺物観察表 (1)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (c.m)	底径 (c.m)	器高 (c.m)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.軸突 e.焼成 f.備考
6-1	第1面 建物1 イ-1	かわらけ	(8.0)	(6.4)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗 土 c.明黄灰色 e.やや甘い
6-2	"	かわらけ	(12.3)	(7.4)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.明黄灰色 e.やや甘い
6-3	"	瀬戸 四耳壺	局部小片			a.輪積技法 耳貼付け b.黄灰色 砂粒 白色粒若干 良土 d.灰白色 やや 厚く施釉 e.良好 紋貫
6-4	第1面 建物1 イ-2	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.明黄灰色 e.やや甘い
6-5	"	かわらけ	7.8	5.4	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗 土 c.明黄灰色 e.やや甘い
6-6	"	かわらけ	12.2	7.8	3.2	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.淡黄褐色 e.良好
6-7	"	かわらけ	12.4	8.3	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹 粒 やや粗土 c.黄褐色 e.やや甘い
6-8	"	かわらけ	(12.9)	(8.0)	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
6-9	第1面 建物1 イ-3	鉄製品 釘	残存長3.5×幅0.4×厚0.25			a.鍛造 断面四角
6-10	"	鉄製品 釘	残存長4.5×幅0.5×厚0.3			a.鍛造 断面四角
6-11	第1面 建物1 イ-4	鉄製品 釘	残存長7.2×幅0.5×厚0.3			a.鍛造 断面四角
6-12	"	かわらけ	(11.5)	(7.1)	2.9	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 少なめ 粉質土 c.淡黄褐色 e.良好
6-13	"	かわらけ	(12.2)	(7.2)	3.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗質土 c.黄褐色 e.良好
6-14	"	かわらけ	(6.8)	(4.9)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄褐色 e.良好
6-15	"	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗 土 c.黄褐色 e.良好
6-16	"	かわらけ	(12.1)	(7.2)	3.2	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
6-17	"	かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.2	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
6-18	第1面 建物1 ロ-1	かわらけ	(7.8)	(6.7)	1.4	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄褐色 e.良好
6-19	"	かわらけ	(12.6)	(8.3)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 やや粉質土 c. 黄灰色 e.やや甘い
6-20	"	かわらけ	(12.8)	(7.6)	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 粉質土 c.黄褐 色 e.良好
6-21	"	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや良 土 c.黄褐色 e.良好
6-22	"	かわらけ	(12.7)	(7.5)	3.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海面骨芯 粉質土 c.淡褐 色 e.良好
6-23	"	白磁 口瓦皿	底径(6.4)			a.ロクロ b.淡灰白色 精良緊緻 d.淡灰白色不透明 口唇部施釉取り 露胎
6-24	第1面 建物1 ロ-2	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
6-25	第1面 建物1 ロ-3	かわらけ	7.2	4.4	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 粉質土 c.褐色 e.良好
6-26	"	かわらけ	7.8	6.5	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗 土 c.褐色 e.良好
6-27	"	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗 土 c.淡褐色 e.良好
6-28	"	かわらけ	(11.8)	(8.0)	3.0	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.褐色 e.良好
6-29	第1面 建物1 ロ-4	かわらけ	(8.2)	(6.0)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.黄褐色 e.良好
6-30	第1面 建物1 ハ-3	かわらけ	(7.6)	5.0	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.淡黄褐色 e.良好
6-31	"	常滑 片口鉢1類	口縁部小片			a.輪積技法 b.砂粒 白色粒 小石粒 やや多量 c.灰色
8-1	第1面 土坑1	鉄製品 釘	残存長4.1×幅0.7×厚0.5			a.鍛造 断面四角 f.下端欠失 腐食が進み鉄心なし
8-2	第1面 土坑2	龍窯系系 青磁蓮弁	体部下端片			a.ロクロ b.灰白色 継ぎ d.暗灰緑色不透明 厚手施釉 貫入多し 二次 焼成で白濁気味 e.彫蝕 f.外面施釉弁文が白濁釉で不明
8-3	第1面 土坑3	かわらけ	(7.7)	(5.1)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 砂質土 c.淡褐 色 e.良好
8-4	"	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質 土 c.黄灰色 e.不良
8-5	"	かわらけ	(8.0)	(5.2)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c.淡褐色 e.良好
8-6	"	かわらけ	(12.8)	(8.4)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質 土 c.淡褐色 e.良好
8-7	"	碁石	1.3		0.3	a.黒石 b.黒色安山岩質 f.表面滑らかで艶あり
8-8	"	銅銭	銭径2.4 銭厚0.1			祥符元宝 初铸年 1008年 北宋
8-9	第1面 土坑3	銅銭	銭径2.4 銭厚0.1			高宗通宝 初铸年 1039年 北宋

表3 遺物観察表(2)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (c.m)	底径 (c.m)	部高 (c.m)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.軸葉 e.燒成 f.備考
8-10	第1面 土坑3	銅銭		銭径2.3 銭厚0.1		嘉祐通宝 初铸年 1056年 北宋
8-11	"	銅銭		銭径2.4 銭厚0.1		治平元宝 初铸年 1064年 北宋
8-12	"	銅銭		銭径2.4 銭厚0.1		元豐通宝 初铸年 1078年 北宋
8-13	第1面 土坑4	かわらけ	(7.9)	(6.5)	1.2	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c.淡褐色 e.良好
8-14	"	かわらけ	(8.1)	(7.1)	1.2	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c.褐色 e.極めて良好
8-15	"	かわらけ	(8.3)	(7.0)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c.淡褐色 e.良好
8-16	"	かわらけ	(12.8)	(9.5)	3.1	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質土 c.褐色 e.良好
8-17	"	龍泉窯系青磁 縁取文刀		口縁部片		a.クワロ b.淡灰色 黒色微粒子 d.灰緑色半透明 いやや厚手施釉 f.外面縁取文片切取り
8-18	"	滑石 片口鉢1類		口縁部片		a.輪積技法 b.長石・石英粒を多く含む粗土 明灰色 f.口唇部へ内面に自然灰の灰積
8-19	第1面 土坑5	かわらけ	(6.8)	(4.4)	(1.6)	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c.褐色 e.良好
8-20	"	かわらけ	(7.7)	(5.1)	1.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 弱砂質土 c.淡褐色 e.良好
8-21	第1面 土坑6	かわらけ	(8.1)	(5.4)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 砂質土 c.淡褐色 e.良好
8-22	"	かわらけ	8.0	6.2	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c.淡褐色 e.良好
8-23	"	かわらけ	8.2	6.0	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c.淡褐色 e.良好
8-24	"	かわらけ	(12.6)	(9.6)	2.8	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c.褐色 e.良好
8-25	"	かわらけ	(13.0)	(8.0)	2.9	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c.淡褐色 e.やや不良
8-26	"	白磁 口瓦皿	9.8			a.クワロ 口縁部が外反気味 b.灰白色 微砂 d.灰白色の半透明、口縁部軸葉剥ぎ取り
8-27	"	瀬戸 入子	(4.0)	1.7	0.8	a.クワロ 外底へラ削り痕 b.きめ細かく精良土 c.淡灰色 e.堅緻 f.内面体部に自然降灰
8-28	"	磁石		残存長4.4×残幅3.1×厚1.0		a.上下面に磁面使用 c.緑味灰白色 f.京都鳴滝産の仕上磁
8-29	第1面 土坑8	かわらけ	(12.5)	(9.3)	2.6	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質土 c.黄灰色 e.やや不良
8-30	"	かわらけ	(12.9)	(9.2)	3.1	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c.淡灰色 e.やや不良
8-31	"	南伊勢系 土鍋		口縁部片		a.輪積 薄手器壁 口縁部外反、口端を内方へ折り返す b.砂粒 雲母が多め砂質土 c.肌色気味 e.緑質
8-32	"	南伊勢系 土鍋		胴部片		8-31と同じ個体、f.外面へラ削り 木口工具具擦痕 内面横積ナデ
8-33	"	男瓦(丸瓦)	(15.8)		2.2	a.凸面:調目叩き後に縦穴ナデ消し 凹面:細かな布目肌 b.砂粒含むがやや粉質土 c.灰色 e.良好 f.水滸寺日置瓦と同様(埼玉水鏡瓦産)
8-34	"	かわらけ	7.6	5.5	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c.褐色 e.良好 f.煤が内壁付着
8-35	"	かわらけ	7.9	6.0	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 多く含む粗土 c.褐色 e.良好
8-36	"	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 やや砂質土 c.黄灰色 e.不良
8-37	"	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 弱砂質土 c.黄灰色 e.やや不良
8-38	"	かわらけ	(8.5)	6.5	1.3	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.不良
8-39	"	かわらけ	(8.2)	6.8	1.3	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 口径と底径の比率が少なく青低い b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.黄灰色 e.やや不良
8-40	"	かわらけ	8.5	6.4	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 多めに含むや粗土 c.黄灰色 e.不良
8-41	"	かわらけ	8.7	6.5	2.1	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 外反気味 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粉質土 c.褐色 e.良好
8-42	"	かわらけ	(12.6)	(8.4)	3.1	a.クワロ 外底糸切痕(粗) 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 多く含むや粗土 c.褐色 e.良好
8-43	"	かわらけ	(13.3)	(9.8)	3.0	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.不良
8-44	"	かわらけ	(13.0)	(9.3)	3.3	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 c.淡褐色 e.やや不良
8-45	"	かわらけ	(13.1)	(10.1)	3.3	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 多めに含む粗土 c.褐色 e.良好
8-46	第1面 土坑10	かわらけ	(8.0)	(5.7)	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 土丹粒 c.淡褐色 e.やや不良
8-47	"	白磁 口瓦皿	10.2	6.0	2.5	a.口縁部は陥反状を呈す b.きめ細かく堅緻 淡灰色 d.灰白色半透明 外底粗く抜き取り軸むらつきが著しい f.口唇部軸葉剥ぎ取り遺物
8-48	"	かわらけ	7.5	5.9	1.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.明黄灰色 e.やや甘い
8-49	第1面 土坑11	かわらけ	8.4	5.6	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 やや良好 c.明黄褐色 e.やや甘い

表4 遺物観察表(3)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (c.m)	底径 (c.m)	器高 (c.m)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.軸葉 e.燒成 f.備考					
						8-50	第1面 土坑11	かわらけ	12.8	9.0	3.1
8-51	#	かわらけ	12.4	7.2	3.1	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好					
8-52	第1面 P.3	基石	1.6		6.3	石材:黒色安山岩質 f.円形内溝で表面滑らか					
8-53	第1面 P.6	かわらけ	(13.3)		腰部径 (12.5)	3.3	a.手捏外 外底指頭圧痕 b.微砂 赤色粒 海綿骨芯 弱砂質土 c.褐色 e.良好				
8-54	第1面 P.7	かわらけ	(7.9)	(5.5)	1.7	a.口クロ 外底糸切痕粘土はみ出し b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 砂質土 c.淡褐色 e.良好					
8-55	第1面 遺構外	かわらけ	7.7	5.7	2.0	a.口クロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 弱砂質土 c.褐色 e.良好					
8-56	#	かわらけ	7.4	4.4	2.0	a.口クロ 外底糸切痕粘土はみ出し b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 少なめに含む弱粉質土 c.淡褐色 e.良好 f.口部内外に煤付着 有明皿					
8-57	#	かわらけ	(12.9)	(8.3)	3.3	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 雲母 赤色粒 海綿骨芯 c.淡褐色 e.良好					
8-58	#	龍泉窯系 青磁折縁皿	底部径(4.0)				a.断面三角形の削出高台 腰が張る形状 b.黒色微粒子含む 灰白色 精良堅致 d.灰緑色不透明 高台寛付露胎 f.無文				
8-59	#	龍泉窯系 青磁折縁皿	口縁部片				a.口縁外反の折縁 b.黒色微粒子を含む灰白色 d.濃緑色不透明 厚手器 軸 貫入多い f.:外面に蓮弁文片切彫り				
12-1	第1面下 土坑12	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.7	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄褐色 e.良好					
12-2	#	かわらけ	(7.7)	(5.9)	1.4	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好					
12-3	#	かわらけ	(7.6)	(5.1)	1.9	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c.淡褐色 e.良好					
12-4	#	かわらけ	(7.8)	(5.9)	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.淡黄褐色 e.良好					
12-5	#	かわらけ	(7.9)	(5.3)	1.4	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄褐色 e.良好					
12-6	#	かわらけ	12.6	8.9	2.9	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質粗土 c.黄褐色 e.良好					
12-7	#	かわらけ	(13.5)	(8.4)	3.4	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い					
12-8	#	常滑 片口鉢1類	口縁部片 口径:(25.2)				b.灰色 砂粒 海綿骨芯 白色粒 小石粒 やや多め c.灰色				
12-9	#	土製品 磁器	小片のため復元不可				b.黄灰色 微砂多し 雲母 海綿骨芯 c.明黄灰色 f.砂粒が多く焼き通りに欠けぼそぼそした感じ				
12-10	第2面 土坑13	かわらけ	(7.7)	(5.8)	1.5	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕(不明瞭) b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.淡黄褐色 e.良好					
12-11	#	かわらけ	(11.9)	(7.3)	3.4	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.淡褐色 e.良好					
12-12	#	常滑 甕	小片のため復元不可 帯幅 1.8			縁	a.輪埴技法 b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 少量 c.暗茶褐色 d.自然降灰 f.中野編年6a型式相当か				
12-13	#	常滑 片口鉢1類	口縁部へ一部 小片のため復元不可				a.輪埴技法 b.灰色 砂粒 白色粒 小石粒 やや多い粗土 c.灰色 f.内面に使用磨減				
12-14	#	鉄製品 釘	5.3	0.5	0.3	a.鍛造 断面四角形					
12-15	#	鉄製品 釘	3.1	0.4	0.3	a.鍛造 断面四角形					
12-16	第2面 土坑16	かわらけ	12.0	8.6	3.1	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.褐色 e.良好					
12-17	第2面 溝1	内掛け かわらけ	(6.8)	(5.6)	1.1	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.再火受け 口縁部へ器表に煤け土					
12-18	#	かわらけ	(7.6)	(6.6)	1.5	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.不良					
12-19	#	かわらけ	7.8	5.7	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い					
12-20	#	かわらけ	7.9	5.7	1.5	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄褐色 e.良好					
12-21	#	かわらけ	8.0	5.5	1.8	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質土 c.黄灰色 e.やや甘い					
12-22	#	かわらけ	8.0	6.5	1.5	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c.黄灰色 e.良好					
12-23	#	かわらけ	8.1	6.1	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好					
12-24	#	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.4	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い					
12-25	#	かわらけ	8.5	6.0	1.8	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄褐色 e.良好					
12-26	#	かわらけ	8.6	7.3	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好					
12-27	#	かわらけ	(12.0)	(7.3)	3.4	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好					
12-28	#	かわらけ	12.4	9.1	3.0	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 土丹粒 粗土 c.黄褐色 e.良好 f.左右玉みあり					

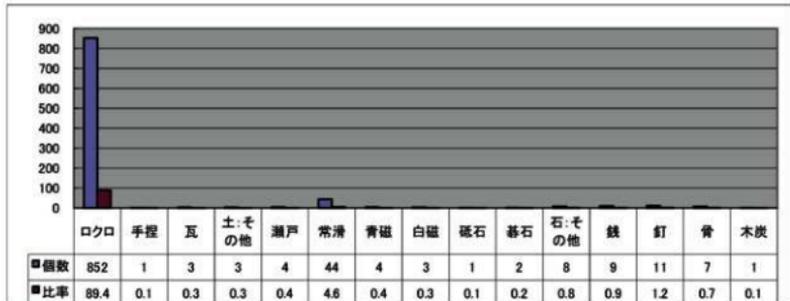
表5 遺物観察表(4)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (c.m)	底径 (c.m)	器高 (c.m)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
12-29	第2面 溝1	かわらけ	(12.5)	(8.2)	3.6	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗 土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-30	"	かわらけ	(11.4)	(7.4)	3.0	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
12-31	"	かわらけ	12.0	7.4	3.2	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.褐色 e.良好
12-32	"	かわらけ	(12.2)	(8.4)	2.9	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
12-33	"	かわらけ	(12.2)	(8.9)	3.2	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗 土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-34	"	かわらけ	12.4	9.0	3.2	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや良 土 c.黄褐色 e.良好
12-35	"	かわらけ	12.8	8.6	3.3	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.やや甘い
12-36	"	かわらけ	(11.8)	(7.4)	3.2	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
12-37	"	かわらけ	12.2	8.8	2.8	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-38	"	かわらけ	12.2	8.0	3.3	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.褐色 e.良好
12-39	"	かわらけ	(12.4)	(9.0)	2.6	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c.黄褐色 e.良好
12-40	"	かわらけ	12.6	8.6	2.9	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-41	"	かわらけ	(13.4)	(10.0)	3.4	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.褐色 e.良好
12-42	"	瀬戸 四耳壺	口縁部小片			a.輪積技法 b.黄白色 砂粒 d.灰釉 黄白色やや厚く施釉 e.良好
12-43	"	銅銭	銭径2.4 銭厚0.1			高木通定 初铸年 1039年 北宋
12-44	第2面 P10	かわらけ	(7.9)	(6.3)	1.5	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-45	"	かわらけ	7.8	6.3	1.5	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗 土 c.褐色 e.良好
12-46	第2面 P11	かわらけ	(8.6)	(6.0)	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗 土 c.黄褐色 e.やや甘い
12-47	"	かわらけ	(12.2)	(8.3)	3.2	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 砂質土 c.褐色 e.良好
12-48	第2面 P13	かわらけ	(7.9)	(6.6)	1.3	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c. 黄灰色 e.やや甘い
12-49	第2面 P14	かわらけ	(8.3)	(6.0)	1.4	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや砂 質土 c.黄褐色 e.良好
13-1	第2面 遺構外	かわらけ	(8.2)	(6.5)	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
13-2	"	かわらけ	(8.4)	(6.5)	1.8	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
13-3	"	常滑 片口鉢1類	口縁部小片			a.輪積技法 口唇部丸味もち肥厚 b.灰褐色 砂粒 長石粒 石英粒 多 量粗土 c.灰褐色 e.良好
13-4	"	女瓦(平瓦)	厚さ 2.4~2.7			a.両面: 隠れ砂多量付着 凸面: 斜格子叩き目 隠れ砂 縦位指すデ c. 灰白色 黒色微砂 石粒多い粗土 e.やや不良 f.未掘きⅡ期瓦(女瓦Ⅰ)
13-5	"	鉄製品 釘	残存長4.1×幅0.7×厚0.4			鍛造 断面四角形
13-6	"	鉄製品 釘	残存長4.6×幅0.6×厚0.4			鍛造 断面四角形
13-7	"	銅銭	銭径 2.4 銭厚 0.1			元祐通定 初铸年 1086年 北宋
13-8	"	銅銭	銭径 2.4 銭厚 0.1			熙寧元定 初铸年 1068年 北宋

表6 遺物分類別出土数量・比率表

出土地種類		1面	1面建物	2面	個数	比率(%)
かわらけ	ロク口	222	285	345	852	89.4
	手捏	1	0	0	1	0.1
瓦製品	瓦	1	0	2	3	0.3
土製品	その他	2	0	1	3	0.3
国産陶器	瀬戸	3	1	0	4	0.4
	常滑	15	5	24	44	4.6
舶来陶磁器	青磁	4	0	0	4	0.4
	白磁	2	1	0	3	0.3
石製品	砥石	1	0	0	1	0.1
	碁石	2	0	0	2	0.2
	その他	3	3	2	8	0.8
金属品	銭	5	1	3	9	0.9
	釘	3	4	4	11	1.2
自然遺物	骨	2	0	5	7	0.7
	木炭	1	0	0	1	0.1
合計		267	300	386	953	100
比率(%)		28.5	31.5	40.5		



白ベントが1の掘り方



▲ a. 第1面全景(北から)

▼ b. 建物1(西から)



手前から拡張トレンチ内で確認した
ハ-3掘り方、礎石が残るロ-3
掘り方とイ-3掘り方



▲ c. 建物1 ロ-3(西から)



▲ d. 建物1 ロ-2(北から)



▲a. 建物1 イ-4(東から)



▲b. 建物1 ハ-3(西から)



▲c. 土坑6 (西から)



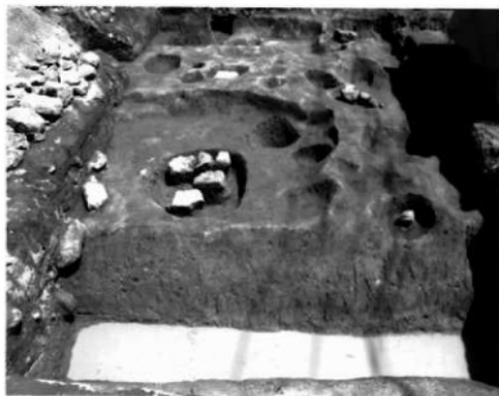
▲d. 土坑10 白磁皿出土状況

▶ e. 第1面下土坑13(西から)





▲ a. 第2面全景(北から)



▲ b. 第2面全景(南から)



▶ c. P・10・溝1東端(南から)



▶ d. 土坑13、P・12・13(面から)

▲ d. 遺物埋入口(北から)



◀ a. 溝1(西から)

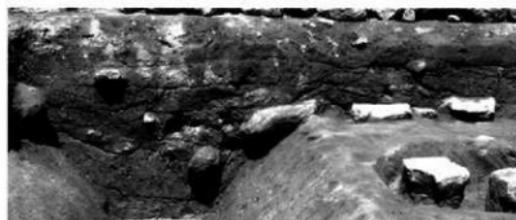


▲ b. 溝1(東から)

▼ c. P14(東から)

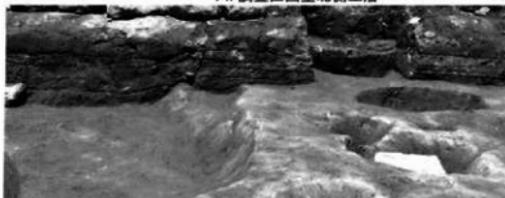


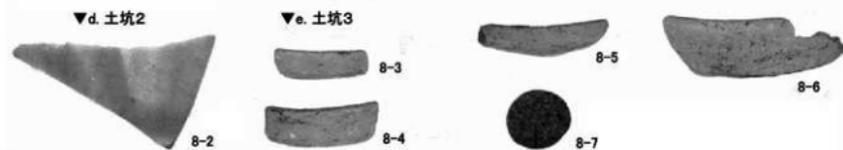
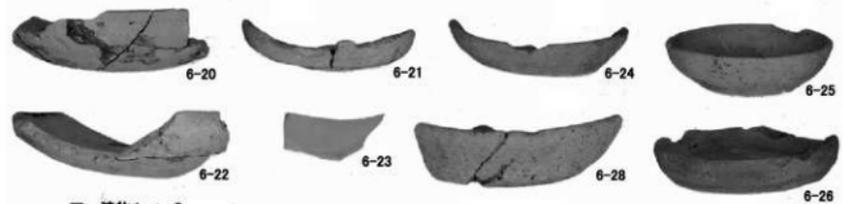
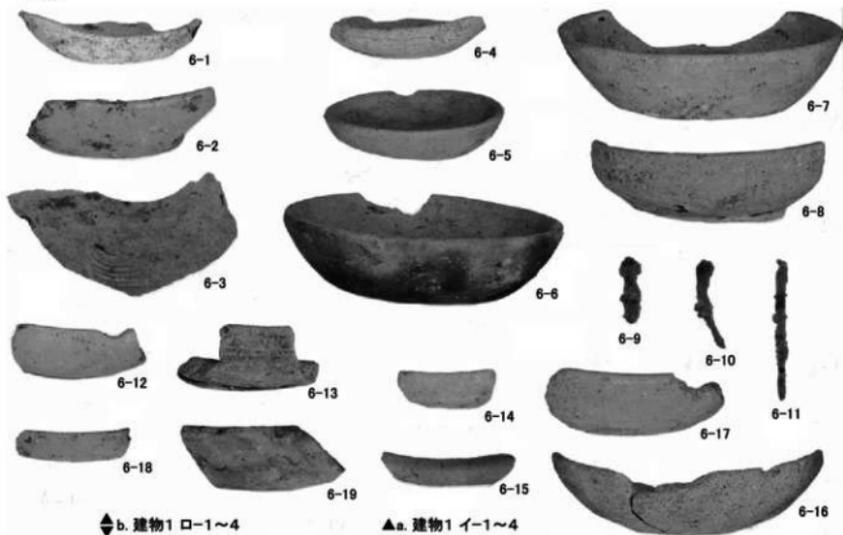
▼ d. 調査区西壁土層



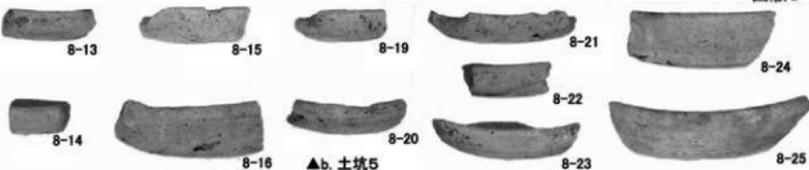
◀ e. 調査区西壁南側土層

▼ f. 調査区西壁北側土層





▶ a. 土坑4

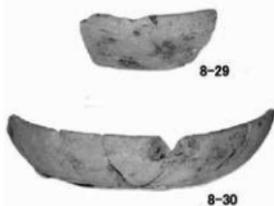


▲b. 土坑5

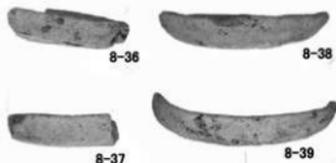
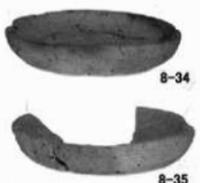


▲c. 土坑6

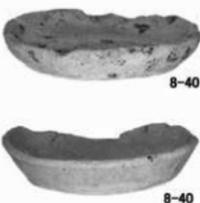
▼d. 土坑8



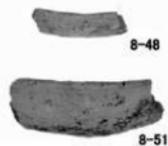
▼e. 土坑9



▼f. 土坑10



▼g. 土坑11



▼h. P-5

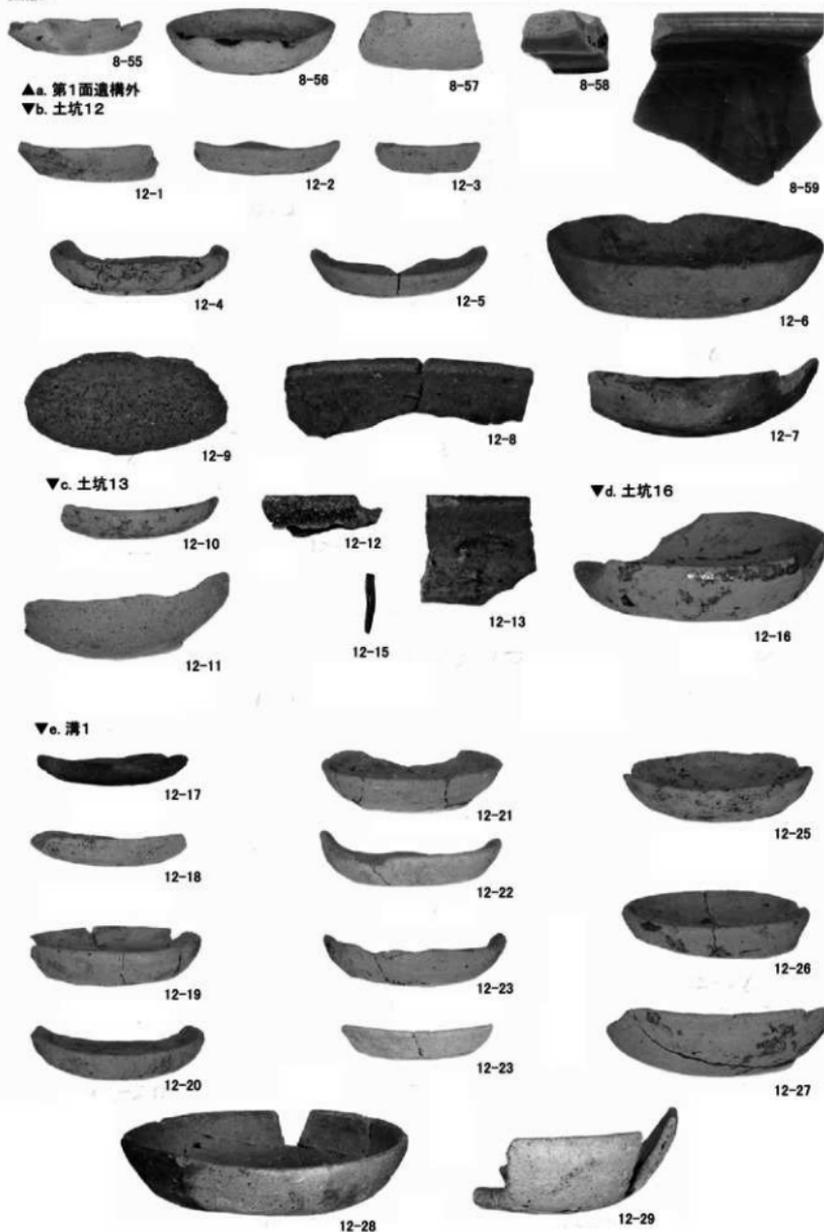


▼i. P-6



▼j. P-7







12-30



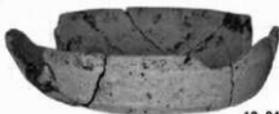
12-31



12-32



12-33



12-34



12-41



12-35



12-38



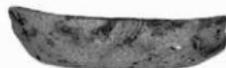
12-42



12-37



12-38



12-39



12-40



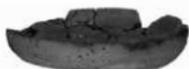
12-43

▲a. 清1

▼b. P10



12-44



12-45

▼c. P11



12-46

▼d. P13



12-48

▼d. P14



12-49

▶ f. 第2面遺構外



13-3



13-4



13-7



13-8

13-5

13-6

東勝寺跡 (No.246)

小町三丁目 538 番 8 地点(I 地点)

小町三丁目 538 番 3 地点(II 地点)

例 言

1. 本報は「東勝寺跡 (No.246)」内、鎌倉市小町三丁目 538 番 8 (略称TK) と鎌倉市小町三丁目 538 番 3 (略称TT) の 2 地点における個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査期間と調査対象面積は以下の通りである。

小町三丁目 538 番 8 (I 地点): 平成 16 年 7 月 30 日～同年 9 月 3 日 調査面積 42.84 m²

小町三丁目 538 番 3 (II 地点): 平成 16 年 8 月 18 日～同年 10 月 25 日 調査面積 64.50 m²

3. 発掘調査体制は以下の通りである。

調査担当者: 原 廣志

調 査 員: 須佐直子・根本志保・岩崎卓治・中川建二・須佐仁和・榎岡英音・宇都洋平

小野夏菜・吉田桂子

調査補助員: 井上翔太郎・木内伸輔・児玉和彦・沢口和正・高橋江奈・野崎美帆・橋本和之

早川 智・平井里永子・平山千絵・銘苅春也・山口正紀

協力 機関: 鎌倉考古学研究所

4. 整理作業分担は以下の通りである。

遺構図整理・墨入: 小野・吉田

遺物実測・墨入: 根本・岩崎・吉田

挿図・図版作成: 小野・吉田・原・平山

遺物観察表: 平山・原

写真撮影: 全景・個別遺構一須佐 (仁)・原 遺物一須佐 (仁)

空中撮影: ラジコンヘリコプター (株式会社 朝日航空)

花粉分析: 鈴木 茂 (株式会社 パレオ・ラボ)

5. 本調査に係る出土品及び挿図・写真など記録資料類については鎌倉市教育委員会が保管している。

6. 本報の凡例は以下の通りである。

挿図縮尺 遺構全側図: 1/80 個別遺構: 1/40、一部 1/60 遺物: 1/3、銭 1/2

挿図遺構 遺構の標高は海拔高度を示す。

挿図遺物 — — — は軸葉の範囲を示す。黒塗りは主に墨書または灯明皿などに付着した油煤煙などを表現している。

使用名称 本文中に使用した用語のうち、「土丹」は三浦・葉山層群の泥岩、「鎌倉石」は池子岩層に顕著な凝灰岩質砂岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産する礎石に利用可能な水摩した扁平円礫のことを指す。

遺物観察表 単位 cm、() 推定値を表している。

7. 現地調査及び資料整理において多くの方々からご助言ならびにご協力を賜った (敬称略)。

秋山哲雄・伊丹まどか・岡 陽一郎・河野眞知郎・菊川 泉・菊川英政・古田戸俊一・鈴木弘太・鈴木絵美・鈴木庸一郎・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・田畑衣理・中田 英・松尾宣方・松葉 崇・松吉大樹・馬淵和雄・宮田 真

目 次

本 文 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	42
a. 遺跡の位置と地形	
b. 遺跡の歴史的環境	
第2章 調査の概要	47
a. 調査の経過	
b. 測量軸の設定	
第3章 検出遺構と出土遺物	49
a. I地点の遺構と遺物	
b. II地点の遺構と遺物	
第4章 まとめ	78

挿 図 目 次

【I地点】

図 1 遺跡位置図	42	図 11 第2 a 面出土遺物	55
図 2 調査地点・周辺遺跡	43	図 12 第2 b 面全測図	56
図 3 国土地標位置・グリッド配置図	48	図 13 第2 b 面礎石列	57
図 4 調査区東・南壁土層堆積	49	図 14 第2 b 面土坑・ピット	58
図 5 第1面全測図	50	図 15 第2 b 面出土遺物	59
図 6 第1面建物 1	51	図 16 第3面全測図	60
図 7 第1面土坑・ピット	52	図 17 第3面土坑状遺構	60
図 8 第1面出土遺物	53	図 18 第3面、落ち込み出土遺物	61
図 9 第2 a 面全測図	54		
図 10 第2 a 面土坑・ピット	55		

【II地点】

図 1 調査区北・西壁土層図	62	図 7 第1面遺構外出土遺物	67
図 2 第1面全測図	63	図 8 第2面全測図	68
図 3 第1面土坑	64	図 9 第2面礎石建物	69
図 4 第1面ピット	65	図 10 第2面土坑・溝	71
図 5 第1面各遺構出土遺物	66	図 11 第2面ピット・玉石列遺構	72
図 6 第1面遺構外出土遺物	66	図 12 第2面各遺構出土遺物	73

図13	第2面遺構外出土遺物 (1) ……73
図14	第2面遺構外出土遺物 (2) ……74

図15	第2面下トレンチ ……76
図16	I区第2面下出土遺物 ……77

表 目 次

【I地点】

表1	東勝寺跡調査地点一覧 ……45
表2	玉砂利計測表 ……80
表3	玉砂利計測表比率表 ……81
表4	遺物観察表 (1) ……82

表5	遺物観察表 (2) ……83
表6	遺物観察表 (3) ……84
表7	遺物分類別出土数量・比率 ……85

【II地点】

表1	遺物観察表 (1) ……86
表2	遺物観察表 (2) ……87
表3	遺物観察表 (3) ……88
表4	遺物観察表 (4) ……89

表5	遺物観察表 (5) ……90
表6	遺物観察表 (6) ……91
表7	遺物分類別出土数量・比率 ……92

図 版 目 次

【I地点】

図版1	a. 遺跡遠景(西から) b. 第1面全景(東から) c. 第1面全景(南から) …… 93
図版2	a. 第2a面全景(西から) b. 礎石列・砂利面 c. 砂利面検出状況 d. 第2b面全景(西から) …… 94
図版3	a. 第2b面全景(東から) b. 礎石列(西から) c. 礎石2 d. P5 e. P6 f. P8 …… 95
図版4	a. 第3面全景(西から) b. 土坑状遺構 c. 調査区南壁土層 d. 調査区東壁土層 …… 96
図版5	a. 第1面遺構・遺構外 b. 第2a面玉砂利層 c. 第2a面遺構外 …… 97
図版6	a. 第2a面遺構外 …… 98
図版7	a. 第2a面遺構外 b. 第2b面遺構・遺構外 c. 第3面土坑状遺構 …… 99
図版8	a. 第3面遺構外 b. 第3面下落ち込み c. 第1面遺構外出土の焼け壁土 d. 第2面遺構外出土の焼け壁土 …… 100

【II地点】

図版1	a. 遺跡周辺遠景 b. 調査地点遠景 …… 101
図版2	a. 調査地点近景 b. I区第1面全景 c. II区第1面全景 …… 102
図版3	a. I区第2面全景(北から) b. II区第2a面全景(南から) c. II区第2b面(北から) …… 103
図版4	a. I区第2a面 b. I区第2a面 c. I区第2b面 d. I区礎石建物 e. 調査区南壁サブトレンチ f. 第2面土坑1 g. II区礎石建物1・溝1 h. 礎石建物1・玉石列 …… 104

図版5	a. I区第2面下全景(西から)	b. I区第2面下全景(北から)		
	c. I区調査区北壁土層	d. II区調査区西壁土層	105	
図版6	a. 第1面土坑・ピット	b. 第1面遺構外	106	
図版7	a. 第2面土坑・溝	b. 第2面かわらけ敷き	107	
図版8	a. 第2面ピット	b. 玉石列	c. 第2面遺構外1	108
図版9	a. 第2面遺構外2		109	
図版10	a. 第2面遺構外2	b. 第2面構築土中	110	
図版11	a. 第2面構築土中	b. 第2面下トレンチ	111	

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と地形

鎌倉は神奈川県南東部に位置する相模湾に面した海浜地域であり、三浦半島及び丹沢方面から連なる海拔高100m前後で馬蹄形の丘陵に囲まれた市内を北東から南西に蛇行しながら流れる滑川によって形成された小さな沖積地が武都鎌倉と呼ばれる源頼朝の入部が始まる中世都市鎌倉の地域である。鎌倉市の北東最奥にある朝比奈切通付近、太刀洗川や吉沢川に端を発する滑川は、南西に向けて川谷と流域平地を造りだしながら進み、やがて相模湾の由比ヶ浜の1km手前で流れの向きを南方へ変えて下っており、大きく南へ蛇行するこの地点から下流域へと続き、海に向けて開いた三角形の沖積地が現在最も開発が進み、繁華街となっている。今回の発掘調査を行った遺跡は滑川が南へ向きを変える屈曲地点に近い場所に位置する。治承四年(1180)秋、鎌倉に入った頼朝はまず八幡宮(元八幡)を浜の砂丘帯にあたる由比ヶ浜から現在の沖積地北端の地である小林郷北山に勧請して鶴岡八幡宮とし、また寿永元(1182)に八幡宮の参道として南にまっすぐ伸びる中世都市鎌倉の基軸ともなる若宮大路を築造してから、次第に沖積地帯の開発が始まる。鎌倉に屋敷地を与えられた御家人らの館が建築され、都市整備が進むにつれ急速に人口も増加して都市化の道を歩むことになる。

遺跡はJR鎌倉駅から北東へ約1kmの鎌倉市街地の中心部で滑川左岸、宝戒寺背後の葛西ヶ谷に位置している。若宮大路二ノ鳥居の鎌倉警察署脇の路地を東進すると小町大路と交差する。そこから八幡宮方面へ100m程進んだ先を右折して滑川に架かる東勝寺橋を渡った山裾一帯が葛西ヶ谷にあたる。谷戸名の由来は、頼朝の家臣の葛西三郎清重(秩父氏一族豊島清光の嫡子)の館跡こちなんだものという。

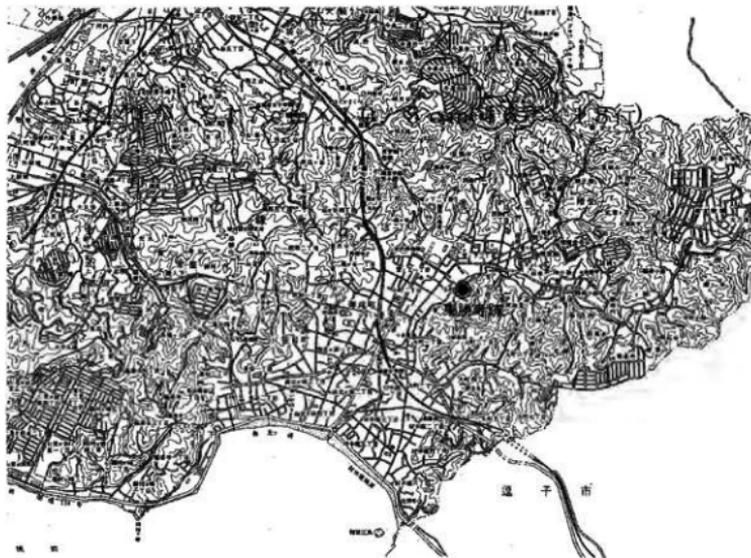


図1 遺跡位置図

谷戸の地形をみると、衣張山から西方へ伸びる尾根の北西端にあたり、樹枝状に展開する尾根は鎌倉の外郭を形成する山稜に連なっており、葛西ヶ谷を取り囲む尾根が海拔高60m前後の屏風山で、その傍らに小富士山がある。また馬の背状の狭い稜線が連なり北・西端部は急峻な崖となって滑川に落ち込んでいる。谷戸内の北東域でレデンプトリスチン修道院が建つ裏山稜を挟んだ東側は大御堂ヶ谷と呼び、勝長寿院跡と伝えるところである(貫・川副 1980)。勝長寿院は頼朝が父義朝の菩提を弔うために建立された寺院で、源氏の菩提寺の性格が濃く、大倉御所(大倉幕府)に対し正確に南面していたので、「南御堂」あるいは「南大御堂」と俗称されていた。鶴岡八幡宮・永福寺とともに頼朝の御願寺で三大寺院の一つであった。当寺跡の南側には鎌倉草創期の有力御家人比企一族の邸(比企能員)と伝えられ、現在日蓮宗の妙本寺境内となり比企ヶ谷が西向きに開口している。その東方の山王堂ヶ谷からは名越山王堂に比定された基壇礎石建物の遺跡が発見されている(斉木 1990)。滑川対岸の北側には北条高時とその一門の菩提を弔うために邸の跡地に後醍醐天皇が建立したという宝成寺がある。さらに小町大路の西側域で若宮大路に挟まれた一帯は、嘉祿元年(1225)に大倉御所から移転した四代将軍九条頼経の頃の宇津宮辻子幕府跡、その北側の八幡宮よりには北条小町邸跡(若宮大路御所)と伝えられている。

葛西ヶ谷は西向きに開く扇形の谷戸で、南西・中央・北東の三つの支谷から形成される。南西支谷は宅地開発が進んで住宅が密集した状況であるが、かつては四段程の平場が雛壇状に造成されていたという。中央支谷は最も旧地形が残された緩やかな比高差で上下二段の平場を構成しており、最奥部山裾には鎌倉幕府終焉の地、北条高時の墓と伝える「腹切りやぐら」が開口している。調査地点が存在する北東支谷は中央を南北に走る道路を挟んで東西二つの小谷にわかれ、境界となる尾根先端は修道院の建設

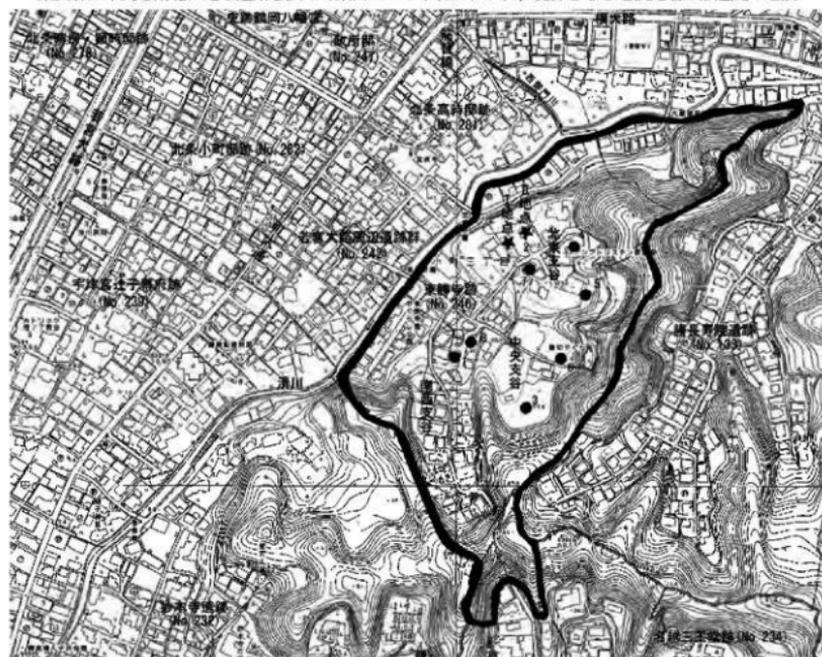


図2 調査地点と周辺遺跡

で掘削されているが、谷内には高低差を有した造成で二～三段の平場が存在する。調査地点は共にこの谷戸内の北東支谷に位置した小町三丁目 538 番 3・8 に所在している。

2. 遺跡の歴史的環境

東勝寺は山号を青竜山と号し、臨濟宗の禪密兼修の寺院であった。『本朝高僧伝』によれば、開山は退行行勇（栄西の弟子）、開基は北条泰時である。嘉禎 3 年（1227）に泰時が母の追善供養のために、その墳墓の傍に当寺を建立したといい、行勇は仁治 2 年（1241）東勝寺にて示寂している。鎌倉時代末期に著された「北条貞時十三回忌供養記」（『円覚寺文書』所収）は、元亨 3 年（1323）10 月に営まれた貞時の年忌法要を記録したものであるが、法要には北条一門ゆかりの建長寺や円覚寺を始め、禪宗諸寺院 38 ヶ寺から二千名を超える多くの僧衆が参加している。東勝寺からは 53 人が参列しており、諸寺の中で十番目に多い人数であることから大規模な寺院であったことが窺える。しかし『太平記』によれば、元弘 3 年（1333）5 月 22 日北条氏滅亡の時、高時以下この地に立て籠もり一族 283 人、殉死者はすべて 870 人余が自害して果てたという。また『梅松論』にも「・・・相模守高時禪門、元弘三年五月二十二日 葛西ヶ谷において自害しける事悲しむべくも余あり 一類も同数百人自害するこそ悲晴れなれ」とほぼ同じ内容のことが記されており、この時に自らが放った火により全山灰燼に帰したであろうことが想像されよう。

その後、間もなく伽藍が再建されて復興したようで暦応 5 年（1342）には関東十刹のうちの第五位に列せられており、至徳 3 年（1386）には第 3 位の寺格となり南北朝時代を通じて寺勢は盛んであったと伝えられている。なお、その廃年についての詳細は明らかではないが、いったん文明 18 年（1486）以前に廃絶した後、永正年間に古河公方足利政氏が妙徳を住寺に任命して当寺を再興したようである（川副 1980）。なお廃絶した時期がいつ頃か詳しくは解っていないが、元亀 4 年（1573）以降には廃絶していたようである。それは円覚寺塔頭の仏日庵文書『北条家政氏印押状』（高柳 1967）によれば、東勝寺の寺領が元亀 4 年には建長寺長老の九成僧菰に与えられていたことが知られるので、少なくともこの年以前には廃絶していたと考えられる。

東勝寺跡は、表 1 や図 2 で示したようにこれまで 5 ヵ所の地点で発掘調査が実施されている。特に昭和 50・51 年に行われた中央支谷に位置した地点 3 の第 1・2 次調査では、鎌倉石の石畳参道や石垣、小堂跡の基壇などと共に焦土・炭化物の厚い堆積から大火災を思わせる痕跡がみられ、鎌倉幕府終焉地で最後の舞台を憶測させるもので、東勝寺跡の歴史を紐解く先駆的な発掘調査となった（赤星ほか 1977）。この第 1・2 次調査の成果をもとに伽藍遺構の確認調査を目的として平成 8 年に行ったのが地点 4～6 の第 3・4 次調査で北東・中央支谷の調査地点である。調査の結果は、鎌倉時代後期から室町時代にかけての各生活面に伴う掘立建物・区画溝・井戸・石組遺構等が発見された。掘立建物は外縁に雨落溝を巡らす桁行 7 間以上×梁行 4 間の大規模な総柱式建物、床下一部に塗り籠め施設が確認されことから寝間や納戸の構造で、屋根材に桧皮葺や柿葺を用いた一字と推測される。この建物は火災痕跡や出土遺物の様相から元弘 3 年の鎌倉幕府滅亡の際に火災炎上した方丈のような建物との指摘がなされている。これらの調査成果から中央支谷を中心とした一帯は平成 11 年（1999）7 月 31 日に国史跡指定された。

南西支谷は北向きに開口した谷戸奥から離壇状に概ね 4 段の平場が造成されており、調査地点は開口部をなす最下段に位置する。平成 11 年度に調査された地点 8（宮田 2000）と、その翌年に調査を実施した地点 9（宮田・滝澤 2002）では 13 世紀後葉～15 世紀頃の遺構・遺物が発見されている。

今回の両調査地点は北東支谷の谷戸奥で宗教法人レデンプトリスチン修道院が移築・改築に伴って付近一帯を宅地造成した一角に位置している。

表1 東勝寺跡調査地点一覧

※Noは図2の調査地点と対応

No	遺跡名	調査地点	調査地点の特徴や文献など
1	北東支谷	小町三丁目 538番8	本調査地点：I地点
2	北東支谷	小町三丁目 538番3	本調査地点：II地点
3	中央支谷	第1・2次 調査	小堂跡・門跡・石畳道跡・石垣と鎌倉幕府終焉地を伺わず厚い堆積の炭化物層など寺院関連の遺構 13世紀後半～15世紀代 赤星・貫・大三輪・松尾 1977
4	北東支谷	第3・4次 調査	Tr. I～III 三時期の遺構面、土坑・溝・落ち込み遺構・ピット・岩盤削平面等 14世紀前～中葉 菊川・玉林ほか 1998
5	北東支谷	第3・4次 調査	Tr. IV～VIII Tr. IVのみ三時期の遺構面、その他は岩盤削平面上で礎石列・土坑・溝・ピット等 14世紀前～中葉と15世紀後半頃 菊川・玉林ほか 1998
6	中央支谷	第3・4次 調査	Tr. V・VI 二時期の遺構面、掘立柱建物・礎石・井戸・集石遺構・石組遺構・土坑・道路と両側溝・石礎溝・溝状遺構・岩盤削平面等 14世紀前～中葉と15世紀後葉 菊川・玉林ほか1998
7	北東支谷	小町三丁目 523番14	二時期の遺構面、礎石建物・石列・土坑・溝・ピット等 13世紀後葉～14世紀中葉頃 汐見・田畑・山上 2000
8	南西支谷	小町三丁目 468番2外	切石列（基壇地覆か）・柱穴列・井戸・溝・方形遺構・かわらけ溜り・木樋・ピット・岩盤削平面等 13世紀後葉～14世紀中葉と15世紀後葉 宮田・滝澤 2000
9	南西支谷	小町三丁目 468番10	六時期の遺構面、礎石建物・柱穴列・土坑等 13世紀後葉～15世紀 宮田 2002

【引用・参考文献】

- 赤星直忠・大三輪竜彦・貫 達人・松尾宜方 1977「東勝寺遺跡発掘調査報告書」東勝寺遺跡発掘調査田編 鎌倉市教育委員会
- 菊川英政・玉林美男・兼行光枝・小林重子 1998「東勝寺跡 - 第3・4次遺構確認調査報告書 -」鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫・田畑衣里・山上玉恵 2000「東勝寺跡 (No. 246) 小町三丁目 523番14」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』17 (第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 宮田 眞・滝澤晶子 2000「東勝寺跡発掘調査報告書 鎌倉市小町三丁目 468番2外」東勝寺跡発掘調査田編
- 宮田 眞 2002「東勝寺跡 (No. 246) 小町三丁目 468番10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』18 (第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 斉木秀雄 1990「名越・山王堂跡発掘調査報告書 - 電通鎌倉研街所改築に伴う中世寺院跡の発掘調査報告」山王堂跡発掘調査田編
- 高柳光壽・川副武胤・貫 達人 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館及び1967『鎌倉市史 史料編 第三第四』史料編三-164号文書 吉川弘文館

- 貫 達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺辞典』 有隣堂
- 大三輪龍彦編 1983『中世鎌倉の発掘』 有隣堂
- 松尾宣方・斉木秀雄 1986「鎌倉の社寺遺跡の態様と事例」『特集 鎌倉の発掘』仏教芸術 164号 毎日新聞社
- 石井 進・網野浩彦編 1989『よみがえる中世』【3】「武士の都 鎌倉」 平凡社
- 白井永二編 1991『鎌倉事典』 東京堂出版
- 河野真知郎 1995『中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』講談社選書メチエ 49
- 五味文彦・馬淵和雄編 2004『中世都市鎌倉の実像と境界』 高志書院
- 永井 晋 2009『北条高時と金沢貞時』日本史リブレット 35 山川出版
- 秋山哲雄 2010『都市鎌倉の中世史』 吉川弘文館
- 樋口州男・錦 昭江 2010『中世鎌倉年表』 かまくら春秋社

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

a. I地点

本地点は個人専用住宅の建築で、現地地表下7mに及ぶ鋼管杭の設置埋設による基礎工事を内容とするものであったため、埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。そこで鎌倉市教育委員会により遺構確認の試掘調査が実施された。試掘調査の結果、現地地表下約80cmまでの現代客土(盛土)が確認され、その直下から厚く堆積した中世遺物包含層を挟んで二時期の遺構面が明らかになり、調査面積42.84㎡を対象として発掘調査を実施する運びとなった。現地調査は平成16年7月30日から表土掘削及び機材搬入により開始され、同年9月3日までに必要な記録保存を行い無事終了した。その間の調査経過については調査日誌の抜粋を記しておく。

7月30日(金) 晴	現地調査開始、機材搬入及び現地地表下約80cmまで重機掘削。
8月2日(月) 晴	第1面遺構確認・検出作業、測量用の方眼設定。
7日(土) 晴	第1面全景写真撮影、平面図作成。
16日(月) 晴	第2a面(砂利面)全景写真撮影、礎石列の撮影。平面図作成開始。
21日(土) 晴	第2b面全景写真撮影、平面図作成。
31日(水) 晴	第3面全景写真撮影、平面図・調査区壁土層堆積図作成開始。
9月3日(土) 曇	現地調査終了、機材撤収。

b. II地点

I地点北側に隣接した位置であり、基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施した個人専用住宅の建設に伴った発掘調査である。調査期間は平成16年8月26日～同年10月25日までの間、調査面積は64.50㎡を対象に現地調査を実施した。残土置き場を確保するため、調査区を東西二区に分割して西側を「I区」、東側を「II区」の名称を与えた。表土掘削にあたっては、I地点の調査結果をもとに地表下80cmまで重機で掘削し、以下を人力による。II区最下層については崩落の危険性をもつ掘削深度に達しており、残土置き場の確保が困難であることなどから調査を断念した。以下、主な作業内容については調査日誌の抜粋を記しておく。

8月25日(水) 晴	調査開始。機材搬入及びI区現地地表下約80cmまで重機掘削。
27日(金) 曇	第1面遺構確認・検出作業、測量用の方眼設定。
9月6日(火) 曇	第1面全景写真撮影、平面図作成。
7日(水) 雨	台風18号の影響で午後から豪雨。
14日(月) 晴	第2面全景写真撮影、平面図作成。
16日(木) 晴	かわらけ敷き写真撮影。
25日(土) 曇	第2面下全景写真撮影、平面図と調査区北・東壁土層堆積図作成。
29日(水) 晴	I区埋め戻しとII区表土掘削で調査開始。
10月7日(木) 晴	第1面全景写真撮影、平面図作成。
18日(月) 曇	第2面かわらけ溜り写真撮影。

22日(金) 晴 第2面全景写真撮影、平面図作成。

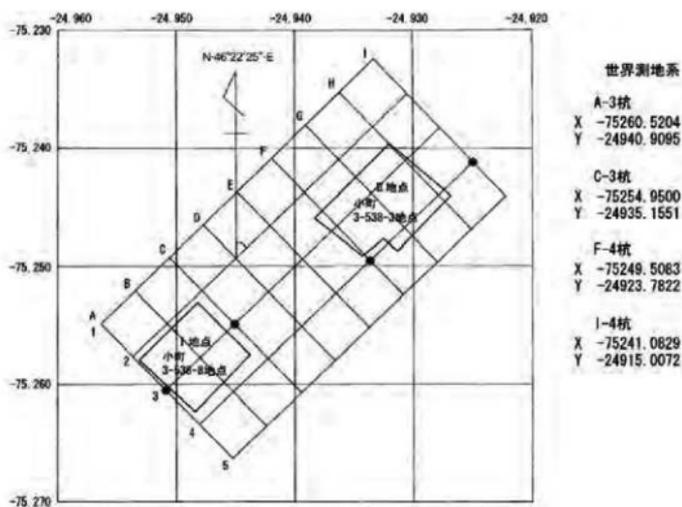
25日(月) 晴 現地調査終了、機材撤収。

2. 測量軸の設定

現地調査時の側量方眼は両地点ともに便宜上、側量の利便性を優先させる形で街区に合わせた任意の方眼を使用したので国土座標とは一致していない。図3で示したようにⅠ・Ⅱ地点の調査区を4mグリットに区画し、南北方向に西からA・B・C…のアルファベットを、東西方向に北から1・2・3…の算用数字を付した。各方眼の名称は北西角の交差軸点をグリット名にしており、南北軸線は真北よりN-46°22'25" -Eを測る。

座標値に関しては日本測地系(AREA 9)を用いたが整理作業の段階で国土地理院が公開する座標変換ソフト『web版TKY2 JGD』により世界測地系第IX系の座標数値へ変換したものを図3に記した。両調査地点の座標値はX-75.230~75.270、Y-24.920~24.960の区域内に位置している。

海拔高の原点基準については宝戒寺門前に設置されている鎌倉市都市3級基準点(No.53210; L=9.951m)を基にしてⅠ地点A-3杭上(L=21.740m)と、Ⅱ地点F-4杭上(L=22.680m)へそれぞれ仮水準点を移設した。



(5 / 200)

図3 国土座標位置・グリット配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

1. I地点の遺構と遺物

a. 層徐と生活面

図4は調査区東壁及び調査区南壁の観察から土層堆積を表したものであり、地層は概ね均等に堆積している。現地表の海拔標高は21.85m前後である。両調査地点とその周辺の現況は本寺跡の第3・4次調査後に宅地造成の削平が実施されたこともあり、旧地形が失われた状況になっていた。

地表下30～50cmはバラス等を含む1層の現代客土層が覆い、以下に近世以降の耕作土と考えられる厚さ20～40cm程の茶褐色土(2層)が堆積しており、調査ではこれらの表層を含めた堆積層を重機により削除することから開始された。その下は茶褐色弱粘質土の3層で遺構確認の試掘調査の際には、この層上面を中世遺構面(第1面)としていたので、人力で遺構確認の精査を実施したものの顕著な遺構や、それに伴う遺物など発見が疎らであった。この為、中世前期の遺物包含層の可能性が高いと判断して除去すると、海拔高20.95m前後でほぼ水平に堆積して小土丹・かわらけ片などを全体に多く内包した締りの強い茶褐色粘質土が表出した。この上面を調査開始面(第1面)とした。厚さ10cm前後の第1面構築土を削除すると、第5層の締りの弱い茶褐色弱粘質土を挟んで第8・9・11層で嵩上げされた地行硬化面と、調査区南半部を中心とした範囲でほぼ平らに堆積する砂利層から構成されるのが第2面である。

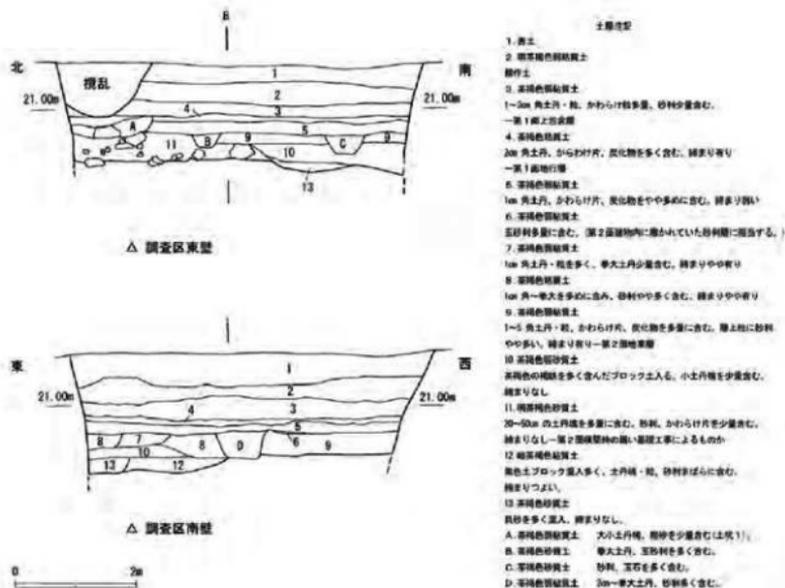


図4 調査区東壁・南壁堆積土層

第8・9層は全体に小土丹角や砂利を混交して締りある平坦な整地土と、第11層は頭・拳大土丹塊を多く混入した凹凸の隙間のある粗い整地層によっている。第2面上には礎石列から南側の範囲に砂利敷きが認められたが、これは建物内床下の湿気防止に係わるような作事を施した可能性が考えられる。この上面を第2 a 面、砂利層を除去した生活面を第2 b 面として捉え、それぞれ遺構検出を行った。砂利層面上の海拔高20.55m前後である。層厚30～40cmの第2面構築土を除去すると大小土丹塊による造成構築面を確認した第3面としたが、この面は表面の凹凸があり、地行の状況も大型土丹塊を中心とした空隙も認められるような粗なものであった。なお、海拔高は20.10m前後である。この面上では調査区中央に大小土丹塊を多量に伴う土坑状の遺構以外は検出できなかった。

b. 第1面の遺構・遺物

検出した遺構・遺物について、確認された生活面の調査順に従い上層の第1面から述べる事にしたい。前章「層序と生活面」の項でも触れたように、調査開始面にあたる第1面は現地地表下110cm(海拔高20.85m)前後で茶褐色粘質土の硬化した遺構面である。小土丹を混ぜて平坦に整地した地行面で、Bラインより北側では小土丹を叩き潰してより堅密、調査区南壁寄りでは地行がやや雑で粗くなり、上面レベルも低いものになる。主な遺構・遺物は次の通りである。

建物1(図6)：調査区中央において検出した掘立柱建物跡で四方が調査区へ広がっている可能性があり、全体規模は不明である。現状では総柱建物でその規模が南北2間=4.0m、東西1間=2.05mが確認した。柱間寸法は南北柱穴列の芯々距離が各間200cm(6尺6寸)、東西列が205cm(6尺8寸)程の

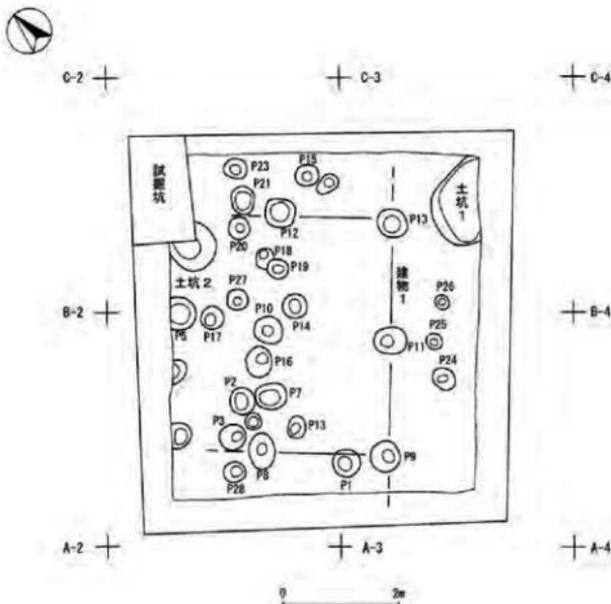


図5 第1面全測図

距離を測る。柱穴掘り方は円形または楕円形の形状を呈し、大きさは径約 40~50cm、掘り込み深さは 40~50cm 程である。P10・P13 の底面には礎版と思しき腐食した板状の痕跡が確認されている。掘り方は土丹角と炭化物を多く含む茶褐色粘質土の覆土で構成されており、覆土上部からは柱抑えの栗石を思わせる拳大の土丹塊や鎌倉石塊がみられた。建物の南北柱穴列の軸方位は、N-46° 50' -E である。

この建物に伴う図示可能な遺物の出土はない。

土坑 1 (図 7・8)：調査区北東隅で検出した土坑で東側は調査区外に拡がり、全容は不明である。

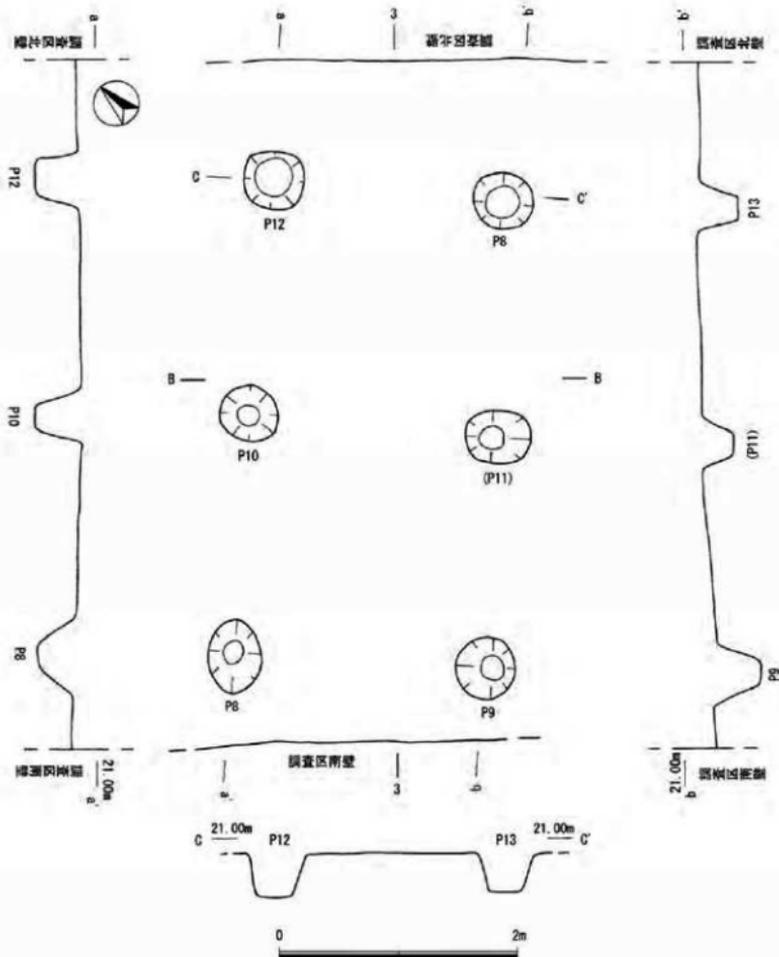


図6 建物1

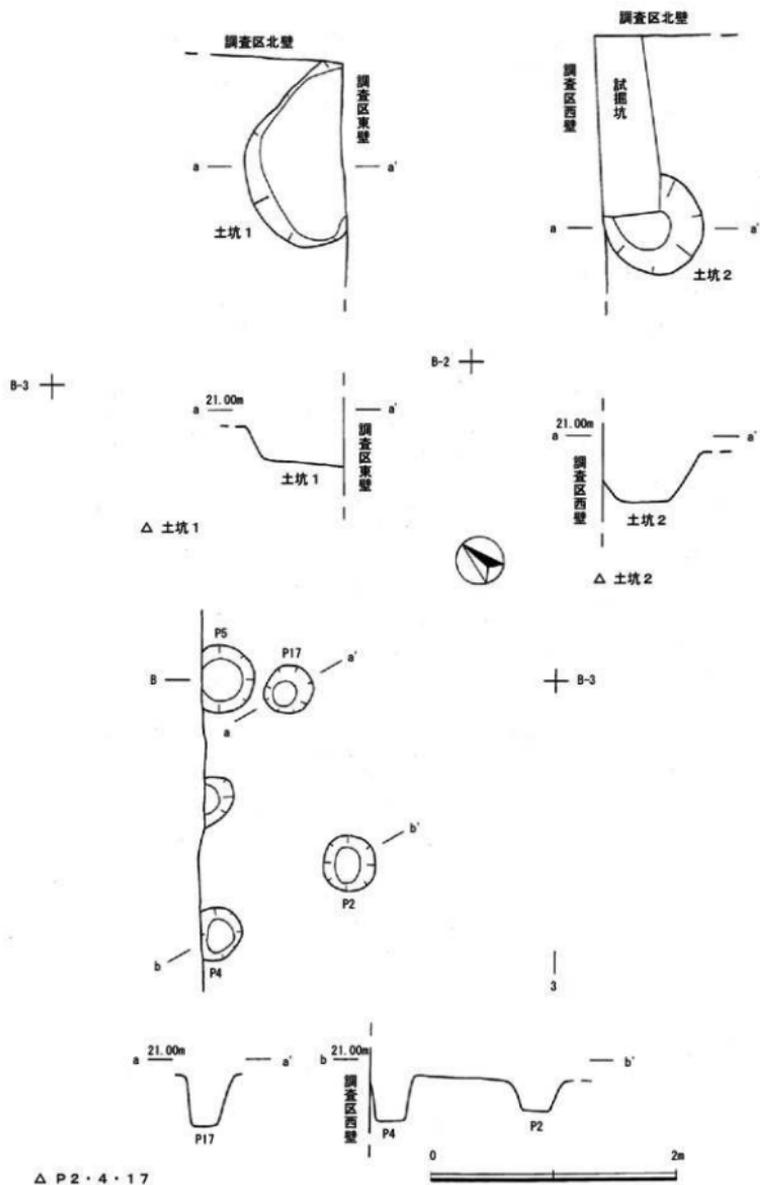


図7 土坑・ピット

東西位の不整形土坑と思われ、確認規模は東西径153cm、南北径115cm以上、確認面からの深さ35cmである。掘り方断面は浅めの逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で、海拔高20.55mを測る。覆土は2層に分かれ、上層は小土丹角・炭化物粒を交えた茶褐色弱砂質土、下層は土丹塊・粗砂粒を少量含む茶褐色の締りのない土である。遺物は図8-1が青白磁小皿で内底面に樹鬚文ある。2が瀬戸窯小皿で灰釉を口縁部のみ施釉。3は須恵器甕の胴部片で外面格子目、内面同心円文明きを施す。

土坑2 (図7・8)： 調査区北西で試掘坑に掛る形で検出され、西壁調査区外へ延びている。平面形状は楕円形と思われ、確認できた南北残存径が80cm、東西径75cm、深さ43cmの規模をもち、断面が逆台形状の掘り方で、覆土は小土丹・鎌倉石を破碎した粗砂を多めに交えた締りのない茶褐色砂質土である。底面海拔高20.45mを測る。出土遺物は図8-4の常滑窯壺の口縁部片で中野編年7形式の資料と考えられる。

ピット (図7・8)： 掘立柱建物に伴う柱穴以外に第1面からは33穴のピット及びピット状の掘り込みを検出した。このうち出土遺物を伴うものを中心に述べる。

P2： 平面隅丸方形を呈し、一辺45cm、深さ25cmと浅い掘り方をもち、覆土は小土丹・かわらけ小片を多く含む茶褐色弱粘質土である。遺物は図8-5の瀬戸窯折縁皿の口縁片が出土した。

P4： 掘り方の一部が調査区壁にかかるピットである。平面形状は楕円形と思われ、大きさは残存径45cm、確認面からの深さ40cm程であり、底面に礎板が腐食した縦・横方向の木目の痕跡が認められた。覆土は小土丹塊・かわらけ小片を多めに交えた茶褐色砂質土で遺物は図8-6の常滑窯甕の叩き目をもつ破片が出土した。

P5： 調査区壁にかかるピットで長径56cm、深さ46cmを測り、楕円形の掘り方と思われる。覆土は粗砂・かわらけ小片を多く交えた茶褐色砂質土で中から図示可能な遺物は出土していない。

P17： 径約40cm、確認面からの深さ45cmで平面円形の掘り方をもつピットである。覆土は締りのない茶褐色弱粘質土、遺物は図8-7のロクロ成形かわらけの大皿1点か出土した。

第1面遺構外出土遺物 (図8)： 9は口径5.0cmでロクロ成形の極小かわらけである。10・12は竜泉窯系青磁の無文碗と酒会壺の蓋小片とおもわれるもの、11は白磁口元皿の口縁部小片である。13～15は瀬戸窯所産の天目茶碗・灰釉瓶子・灰釉仏華瓶の小破片であり、このうち瓶子は図8-7の資料と同一個体の可能性がある。16は瓦器質の蓋物、17は鉄釘である。

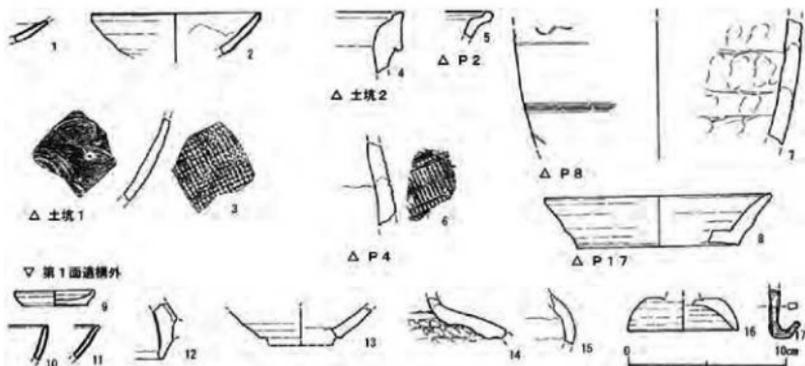


図8 第1面出土遺物

c. 第2面の遺構・遺物

第2面は海拔高 20.55m前後で主に玉砂利敷きの面上を第2 a 面、それを除去した生活面を第2 b 面としてそれぞれ遺構検出を行った。

第2 a 面

土坑 1 (図 10) : 調査区北西、玉砂利敷きの外で検出した。平面形は楕円形、断面は逆台形を呈した底面が平坦な掘り方をもち、長径 98cm、短径 63cm、深さ 27cm の大きさである。覆土は締りのない炭化物を多く含む暗茶褐色土で埋め戻されており、良好な出土遺物はない。底面海拔高は 20.35m を測る。

ピット・その他 (図 9・10) : ピット 4 穴と、玉砂利敷きから顔の覗かせていた礎石について簡単に述べる。

P 1 : 径 45cm 程の円形を呈し、確認面からの深さ 20cm の浅い掘り方のピットである。覆土は小土丹・炭化物粒を多く交えた茶褐色土で、底面の近くからはかわらけ小皿 1 点が出土した (図 11-2)。

P 2 : 調査区西壁の 3 ライン上で検出され、調査区外に広がる。確認できた大きさは東西径 70cm、深さ 38cm を測る。覆土は締りがなく玉砂利を多めに含む暗茶褐色土で、図化できる出土遺物はない。

P 3 : P 1 東隣に位置する。楕円形の平面形状で長径 55cm、短径 45cm、深さ 35cm を測り、締りのない茶褐色砂質土が覆土である。出土遺物はない。

P 4 : P 2 東隣で検出した。確認された規模は東西径 48cm、深さ 30cm、良好な出土遺物はない。

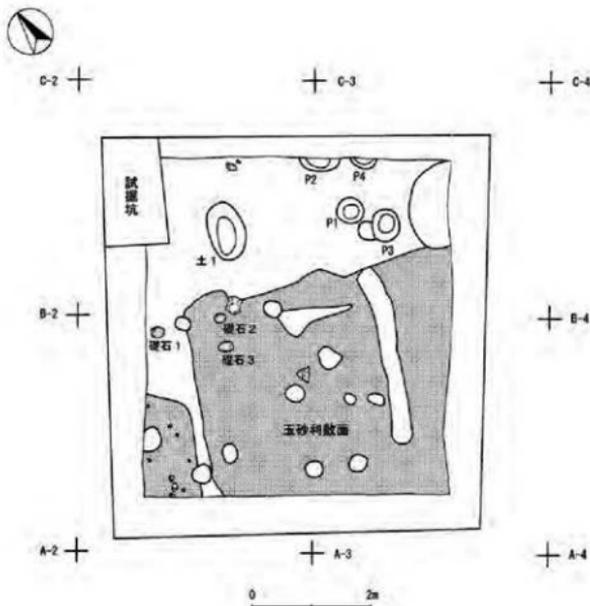


図9 第2 a 面全測図

礎石列 (図9)：玉砂利敷面の北西部で礎石3個がL字型に配列されていた。

礎石列は礎石1～礎石2東西位の芯々距離が110cm、礎石2～礎石3が52cm間隔で南北方向に配置されている。礎石に使用されていた石は楕円形を呈した厚さ15～25cm程の扁平な安山岩製の河原石である。各礎石の規模は1が長径23cm・短径18cmで、2は長径22cm・短径18cmで、礎石3は長径26cm・短径18cmで小形のものである。

第2 a 面遺構外出土遺物

図11-1・3～23の出土遺物で1は水摩した自然石に小穿孔をもつ。3～5は

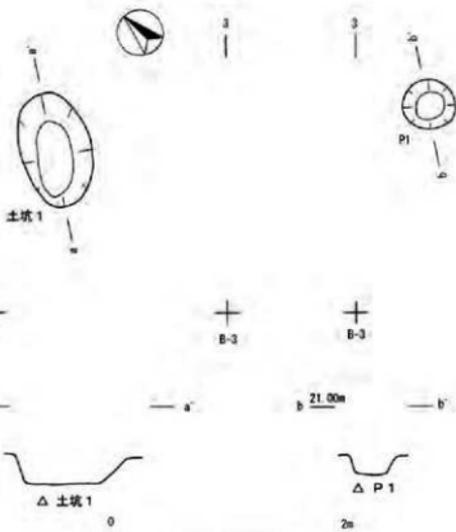


図10 第2 a 面土坑・ピット

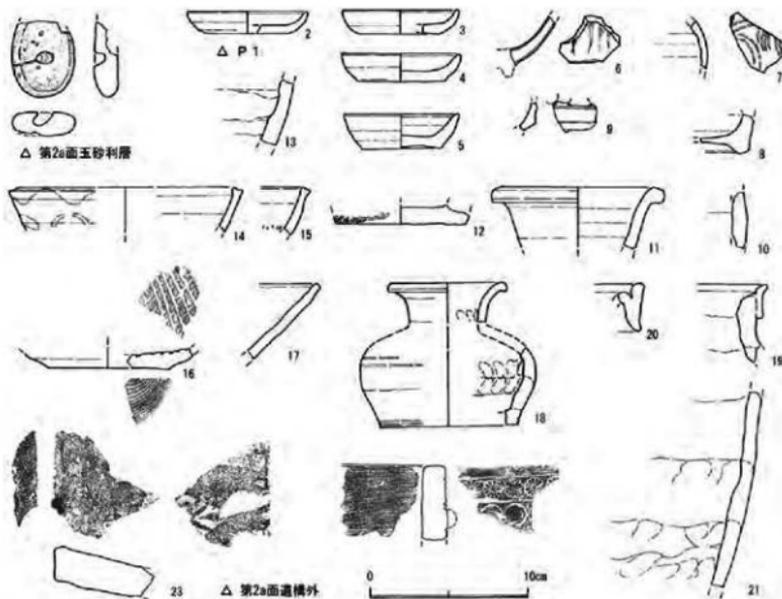


図11 第2 a 面出土遺物

ロクロ成形のかわらけ小皿である。6は竜泉窯系青磁の鎗蓮弁文碗、7・8は青白磁梅瓶の胴部と底部片、9は透かし風に仕上げた香炉、10は褐釉壺の胴部片である。11～17は瀬戸窯製品で11が四耳壺、12・13が灰軸瓶子、14～16が御皿、17が直縁大皿と思われる。常滑窯所産には18の玉縁状口縁の鶯口壺、19～21の甕がある。22は外面に菊花文スタンプと貼付け連珠文を施す瓦質火鉢、23は平瓦で凸面に花菱文叩き目をもつ13世紀後半のものである。

第2 b面

礎石列 (図12・13) : 第2 a面 で検出した礎石3個 (Pア・イ・オ) と、玉砂利敷きを剥がして確認された礎石 (Pカ) と、礎石が抜き取られたと思われる掘り方 (Pウ・エ・キ) である。またP5・7・13も柱通りに位置する浅い掘り方を持っており、礎石が抜き取られた掘り方と考えられる。柱間寸法をみると、東西列はPア～Pイの距離105cm (3.5尺)、Pオ～Pカの距離210cm (7尺)、Pカ～Pキの距離180cm (6尺) であり、南北列はPイ～Pオの距離52cm (1.7尺)、Pオ～P13及びPカ～P5の距離210cm (7尺) を測り、西側に半間分で縁または庇が取り付け礎石建物の可能性が考えられる。

なお、東西列の掘り方を構成するPキの確認は調査区東壁にサブレンチを入れて検出した。各掘り方からの良好な遺物の出土はない。

土坑5 (図14・15) : 調査区南側中央で検出された。平面形状は不整形円形を呈し、大きさは南北径100cm、東西径90cm、底面は北から南へ傾斜した掘り方で深さ20～60cm程になる。覆土は上層が玉砂利を多量

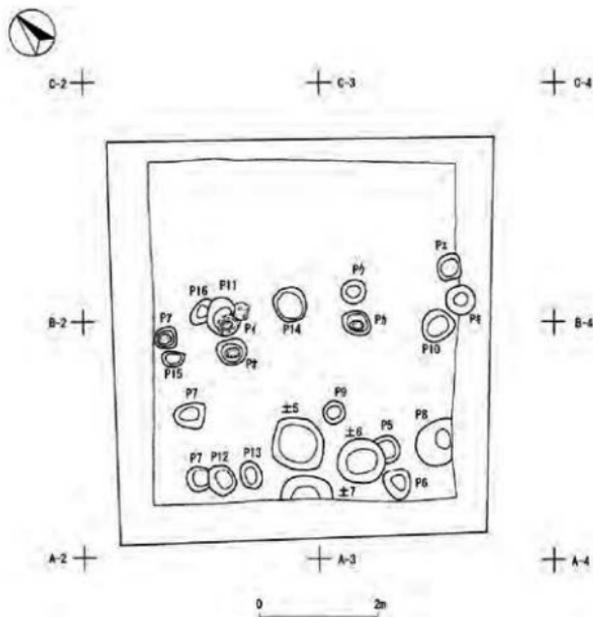


図12 第2 b面全測図

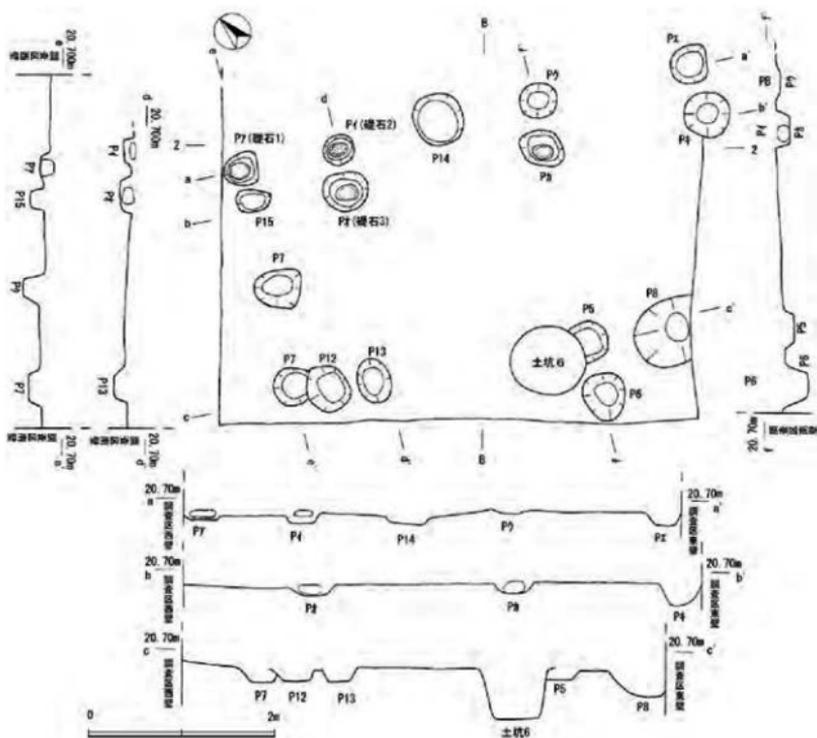


図13 第2b面礎石列

に含み、下層が小土丹塊を多めに交えた締りのない茶褐色査質土である。底面毎抜高は19.95mを測る。出土遺物は図15-5の常滑窯の胴部片だけである。

土坑6 (図14・15) : 土坑5東隣の位置でピットのP5を壊して掘り込んだ土坑である。平面形状はほぼ円形を呈し、径80cm前後、深さ58cmの規模をもち、断面が逆台形状の平坦な底面の掘り方である。覆土は上下二層からなり、上層(2層)が玉砂利を多く交えた茶褐色砂質土、下層(3層)が小土丹塊をやや多めに含む締りのない茶褐色弱粘質土である。底面毎抜高19.95mを測る。出土遺物は図15-6~8がロクロ成形のかわらけ小皿で、9が白磁皿で口禿印花文皿の底部小片と思われる。

土坑7 (図12) : 調査区南壁に架かる位置で検出され、調査区外へ広がる。確認された大きさは東西径90cm、南北径40cm以上、底面はやや中窪みの掘り方で深さ45cm程である。覆土は玉砂利・小土丹角を多めに交えた締りのない茶褐色砂質土である。出土遺物はかわらけ小片だけである。

ピット (図12・14・15) : この面では礎石列掘り方以外に12穴のピットが確認されている。

P6 : 不整形を呈し、南北径52cm、東西径45cm、深さ50cmを測り、締りのない茶褐色土が覆土

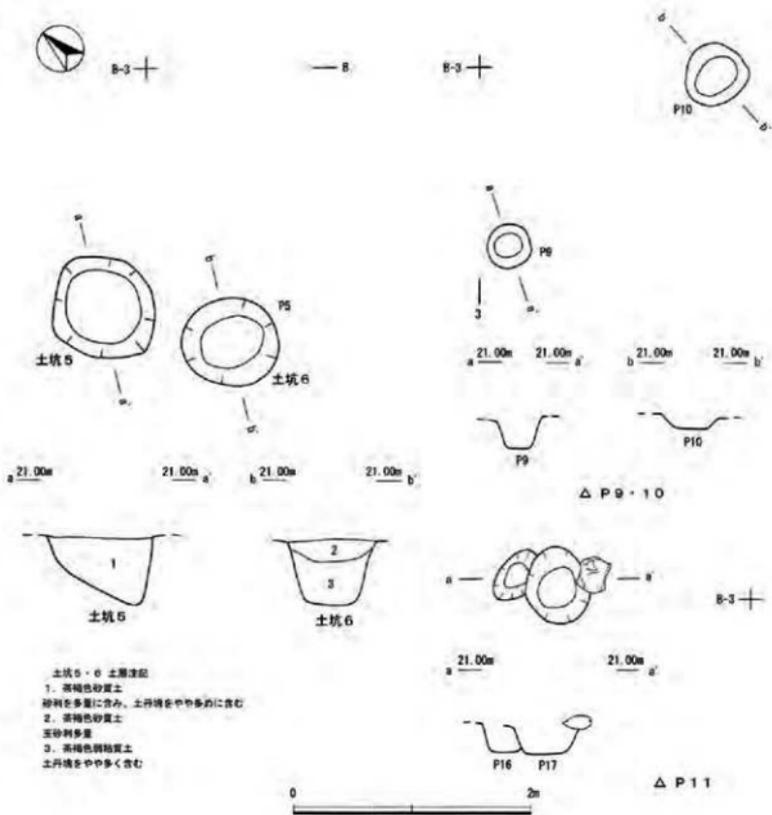


図14 第2 b面土坑・ピット

である。遺物は図15-10の常滑窯胴部片である。

P8：調査区南東隅に位置し、東壁外に拉がる。大きさは南北径70cm、東西径80cm以上、深さ30cm、底面径30cm 前後を測り、掘り方は小径の底面もつものである。玉砂利混じりの茶褐色砂質土の覆土から11のロクロ成形のかわらけ小皿が出土した。

P9：土坑5東隣に位置する。平面形は円形を呈し、大きさは径30cm、深さ38cmである。平らな底面に腐食した礎板木目の痕跡が認められた。覆土は玉砂利を多く含む茶褐色砂質土で、12のロクロ成形のかわらけ小皿が出土した。

P10：調査区東壁際の中央で検出した。不整形円の形状で長径60cm、短径50cm、深さ30cmの浅い掘り方である。覆土は炭化物粒が多い暗茶褐色土、遺物は13の瓦質火鉢の口縁部小片が出土した。

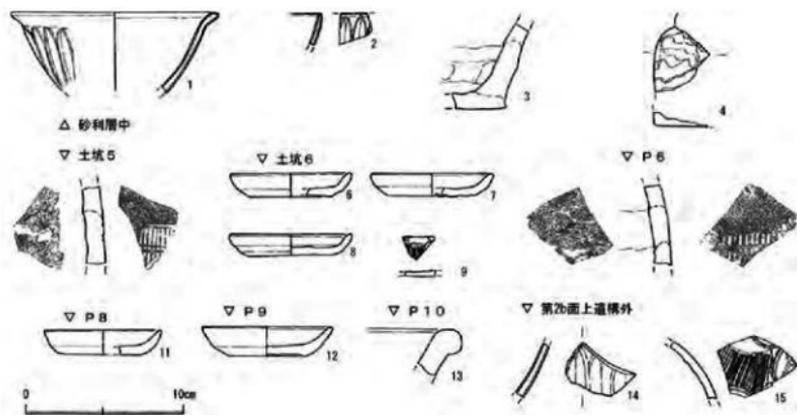


図 15 第 2 b 面出土遺物

第 2 b 面上玉砂利層中出土遺物 (図 15) : 1・2 は竜泉窯系青磁の鍋蓮弁文碗である。ともに外面に短弁蓮華文を片切彫りし、口縁部は 1 が外反、2 が直行する。3 は常滑窯甕の底部片で外邸砂目底になる。4 は石硯で周縁整形の様子から四葉硯になる可能性がある。

第 2 b 面遺構外出土遺物 (図 15) : 14 は竜泉窯系青磁の鍋蓮弁文碗で外面に複弁文を施文する。15 は景德鎮窯系青白磁の梅瓶で外面に牡丹唐草文である。

d. 第 3 面の遺構・遺物

第 3 面は海拔高 20.0m 前後で人頭大～拳大土丹塊を多量に交えた粗い凹凸をもった地行面である。この面では良好な遺構は検出されず、土丹塊の詰まった土坑状遺構 1 基だけを確認した。また土坑を完掘したところ土坑東側へ落ち込んだ様子がみられたので一部トレンチで確認を行っている。

土坑状遺構 (図 17・18) : 調査区 I 区中央に位置した集石を伴うもので、第 3 面確認中の掘り下げて検出した大型土坑である。平面形状は長円形の小判型を呈し、大きさは長径 3.45m、短径 2.1m の範囲、確認面からの深さ 50cm 程であり、海拔高をみると集石頂部は 20.15m、底面は 19.65m を測る。集石部は 70cm 近い大型の土丹塊から拳大の小土丹までの様々な大きさで構成されており、中央部がマウンド状に盛り上がるように密に据えられた状態であった。集石間の堆積土は、上層 (1 層) が暗黄褐色土で土丹粒多く、かわらけ片・炭化物少ないもの。下層 (2 層) は黄褐色粘質土で土丹粒が多めの暗黄褐色粘質土ブロックが混ざる覆土である。図 17 の遺構完掘状況で示したように底面からは浅い貧弱なビット 4 穴が確認されており、また常滑窯甕片が底面に貼り付くような状態で出土している。

出土遺物は図 18-1 の常滑窯甕の口縁～頸部片である。中野編年 6 b 型式 (赤羽・中野 1994) で 13 世紀後葉頃の所産と思われる。この集石した土坑状遺構の用途については不明である。

第 3 面 12 層中出土遺物 (図 4・18) : 第 3 面は調査区西端から東端へ向かって緩やかに傾斜していく地形が確認された。東端付近ではこの傾斜した地行面上に黒色土ブロックを多く混入した締りある暗茶褐色粘質土の薄い堆積があり、中から 2・3 のロクロ成形のかわらけ小皿と、4・5 の竜泉窯系青磁の鍋蓮弁文碗・折腰皿が出土した。

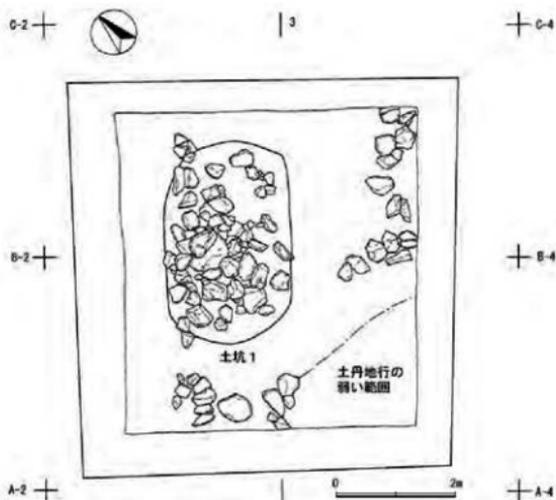


図16 第3面全測図

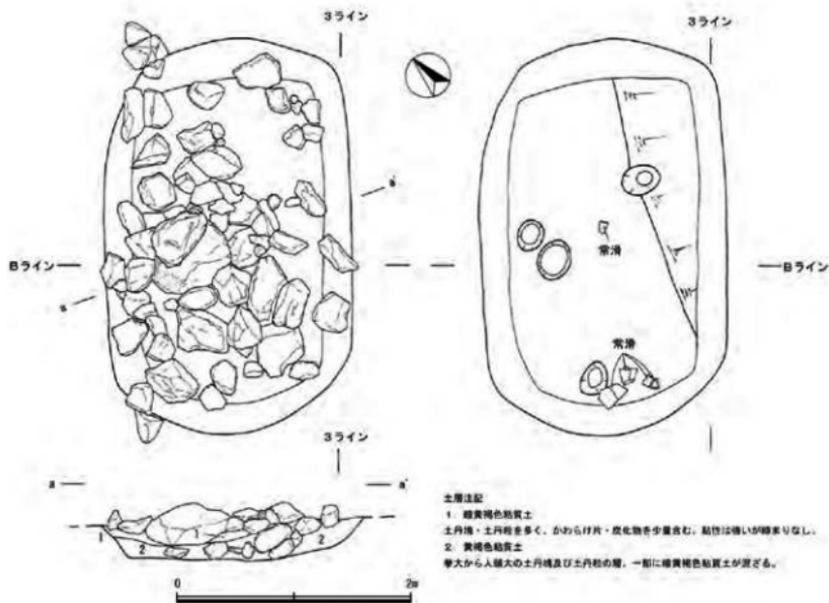


図17 第3面土坑1

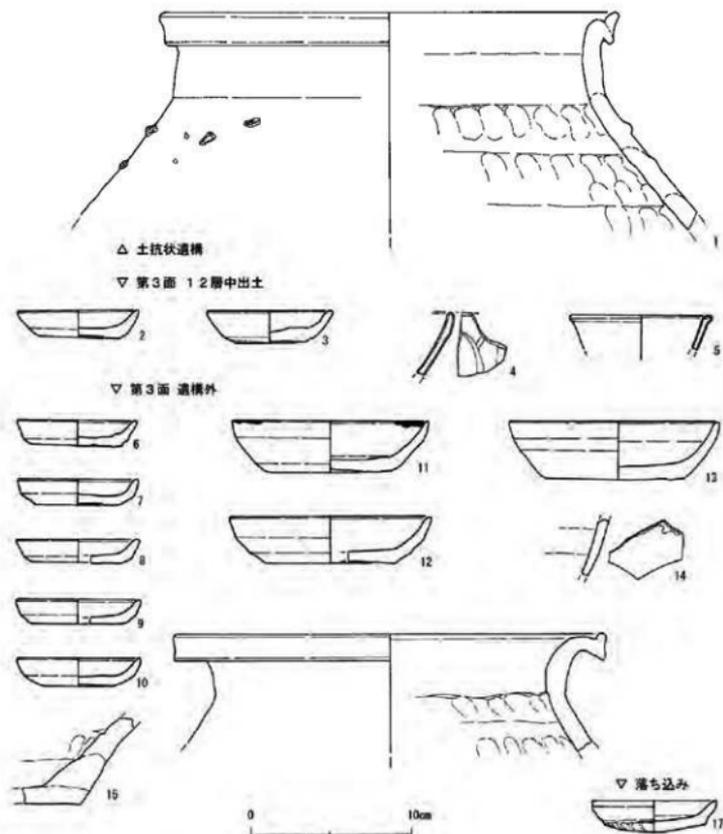


図18 第3面、落ち込み出土遺物

第3面遺構外出土遺物(図18): 6~13はロクロ成形のかむらけ大小皿。14は褐釉壺の胴部小片、15・16は常滑窯の甕である。16の口縁形態から常滑窯の中野編年6a型式に相当するものと思われる。

第3面下落ち込み出土遺物(図18): 17は土坑状遺構底面の北東側で確認された落ち込み遺構から出土したもので、今回の調査で出土した唯一の手づくね成形かむらけである。

中野晴久 1994 「赤羽一郎・中野晴久『生産地における編年について』『中世常滑焼をとおって』シンポジウム資料 日本福祉大学知多半島総合研究所

藤沢良祐 1995 「京・鎌倉における古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

宗盛富貴子 1996 「鎌倉・今小路(御成り小学校内)の瀬戸用製品について」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯

山本信夫 2000 「大宰府条坊跡XV—陶磁器分類表—」『大宰府の文化財』第49集 大宰府教育委員会

2. II地点の遺構と遺物

a. 層徐と生活面

調査区中央のI・II区分割の境及びII区西壁の観察から土層堆積を表したものを図1に示したものであり、地層は概ね均等に堆積している。現地表の海拔標高は21.85m前後でI地点でも述べたが、周辺の現況は本寺跡の第3・4次調査後に削平整地の宅地造成が実施されたこともあり、旧地形が失われた状況になっていた。

地表下40~110cmはバラス等を含む1層の近・現代の客土層が覆い、調査区西壁一部では近世以降の耕作土と考えられる厚さ20~60cm程の茶灰色土(2層)が堆積しており、調査ではこれらの表層を含めた堆積層を重機により削除することから開始された。その下は暗茶灰色弱粘質土の3層で試掘調査の際には、中世遺構面(第1面)としたものであったが、人力で遺構確認の精査を実施したところ顕著な遺構や、それに伴う遺物など発見が疎らであった。この為、I地点と同様に中世前期の遺物包含層の可能性が高いと判断して除去すると、海拔高21.20m前後でほぼ水平に堆積して小土丹・かわらけ片などを全体に多く内包した縮りのある茶褐色粘質土の地行層を第1面とした。第1面構築土(4層)を削除すると、その下からかわらけ片・炭化物粒を多く含む厚さ25cm程の遺物包含層(5層)が認められた。さらに5層を挟んで茶褐色粘質土と土丹粒を混交した(6・7層)薄い版築の硬化面を調査区中央

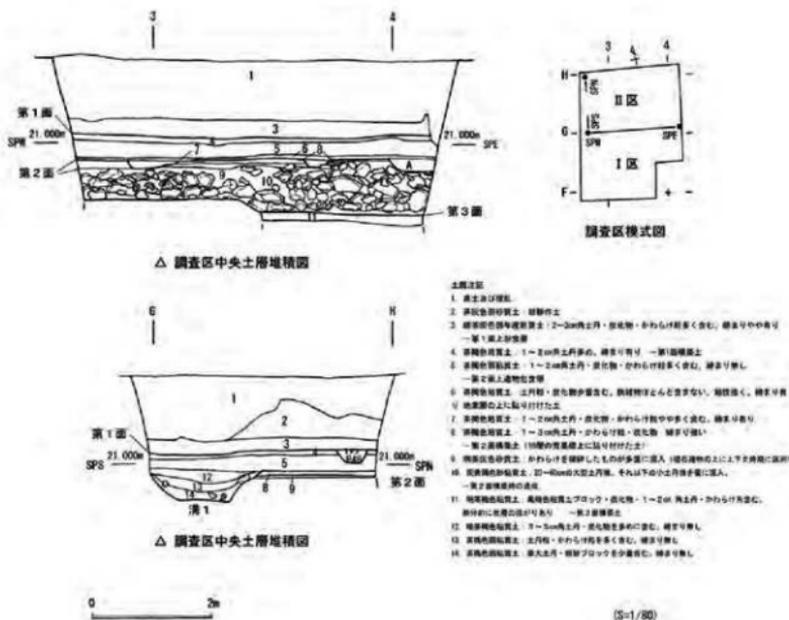


図1 調査区中央・西壁土層堆積図

部だけの限られた範囲に認められた。その直下（8層）には土丹塊を突き固めた堅牢な地行面が調査区全体に表出したので、これを第2面として調査を実施した。この面の上下層（6～9層）ではほとんど間層を挟まず繰り返り連続した版築地行が施されており、短期間のうちに貼り増して細かな整地で生活面を更新が行われていたと考えられる。この面の海拔高は20.8m前後である。9層は破碎したかわらけを敷き詰めた地行が行われ、礎石建物が確認されている。連続した整地を繰り返す第2面の地行を除去すると、大型土丹塊を密に交えて大造成した暗黄褐色土の厚い整地層（10層）の堆積が認められ、土地利用の大きな変革がこの場にあったことを窺わせる。しかし調査区の掘削深度は現地表下2m近くで崩落する危険を伴う深度に達していたので、北壁際にトレンチを入れて第2面以下の堆積土層の確認を実施した。第2面構築土（粗い基礎的な造成土）は層厚80cm以上の厚い堆積を示し、その下から黒褐色粘土ブロックと土丹粒を混交した締りある地行を成した第3面（11層）を確認することができた。確認した海拔高は19.8m程である。

b. 第1面の遺構・遺物

前章「層序と生活面」の項でも述べたように調査開始にあたる第1面は、現地表下約170cmの8層上面を遺構確認面としたが、上層からの遺構も含まれている。この面で検出した遺構は、土坑3基、掘立柱建物を構成しないピット52口などがある。

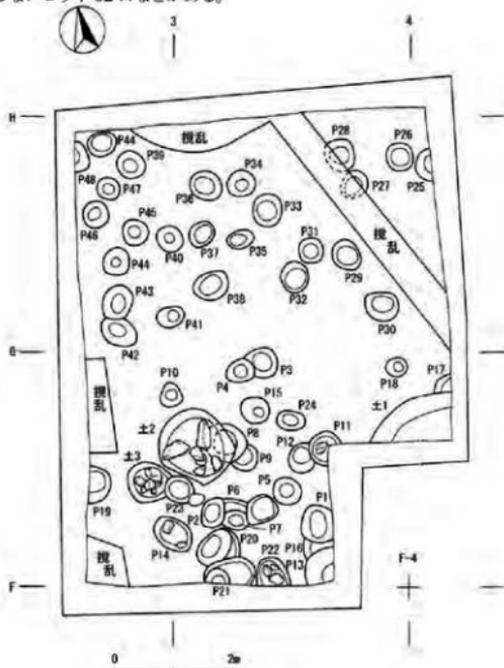


図2 第1面全測図

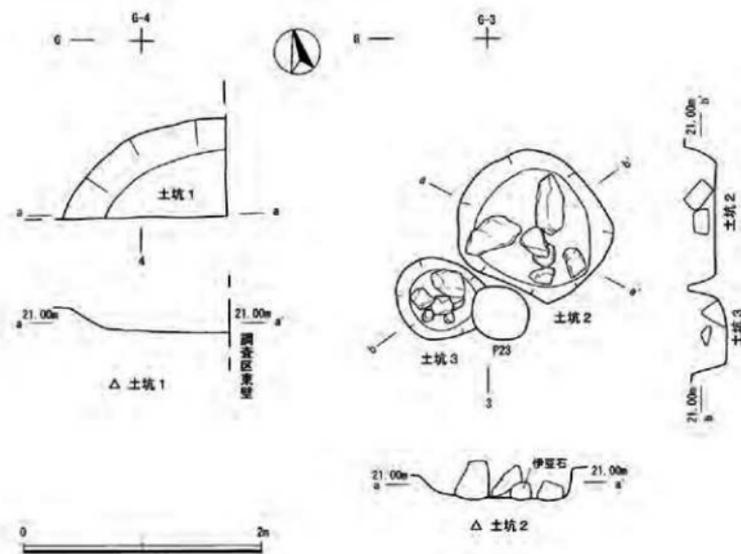


図3 第1面土坑

土坑1 (図3・5) : 調査区の南東、G-4杭南側の位置で検出した。土坑の大半は調査区外に伸びている。確認できた大きさ140cm以上、深さ20cmと浅い掘り方である。茶褐色の覆土は2層に分かれ、上層は小土丹を多く含む砂質土、下層は土丹粒が少なく、炭化物粒がやや多い弱粘質土である。出土遺物は1・2の底部回転糸切痕のあるかわらけ大小皿で、背高気味で薄手器壁をもつ器形である。

土坑2 (図3・5) : 調査区南側のG-3杭付近でP8を横す形で検出した。平面形状は不整形円形を呈し、長径125cm、短径110cm、確認面からの深さ30cmの規模をもち、断面は逆台形形で底面が平坦な作り、底面海拔高は20.9mを測る。土坑内には約20~50cmの大小形土丹塊が5個と、伊豆石1個が置かれていた。覆土は一層からなり、土丹粒・炭化物粒を多めに含む茶灰褐色粘質土で、出土遺物は3のロクロ成形かわらけ小皿が背高で薄手器壁のもの、4は外面に格子目叩きをもつ亀山窯の底部片である。

土坑3 (図3) : 土坑2に隣接した位置でP23に一部を横されている。平面形状は楕円形で、断面が逆台形を呈し、確認した大きさは長径80cm、短径70cm、深さ35cmである。土坑内からは径10~30cm程の大きさの土丹塊が投げ込まれていた。覆土は土丹粒・炭化物粒をやや多めに含む茶褐色砂質土、残りの良好な遺物の出土はない。

ビット (図4・5) : 調査区のおもろ全域にわたり、ビット53穴を検出した。柱並びの確かなものではなく、掘立柱建物を復元するには至っていない。ここでは出土遺物を伴うビットを中心に述べる。

P1・13・16 : 調査区南東隅において重複して検出、新旧関係はP13が古い。P1は楕円形で長径65cm、短径55cm以上、深さ35cmで底面海拔高20.8mを測る。遺物は図5-5のロクロ成形かわらけと、6の均質手による北部系山茶碗が出土した。P16は大半が調査区外へはががり、確認できた径60cm、深さ40cmである。

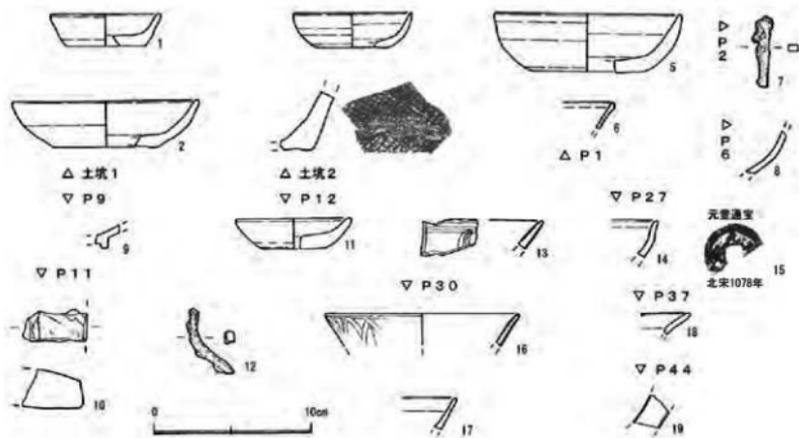


图5 第1面各遺構出土遺物

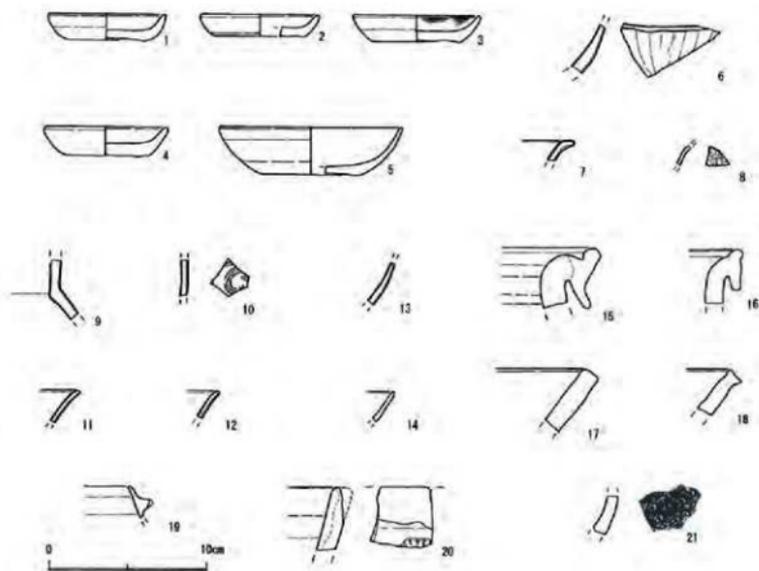


图6 第1面遺構外出土遺物

P13は両ビットに削平され、底部付近を残すのみであった。

P10・15・24：G-3杭付近で検出した。P10は楕円形で径30cm、深さ45cmで平らな底面に木質が腐食した腐跡がみられた。P15は長径53cm、短径46cm、深さ52cmで底面径の小さな深めの掘り方である。ともに図示可能な遺物の出土はない。P24は平面形状が楕円形を呈し、長径46cm、短径33cm、深さ25cmの浅い掘り方で、覆土中からは13の再火を浴びた竜泉窯系青磁劃花文碗の遺物が1点出土した。

P11・12：調査区南東部の位置で重複して検出、P11が新しい。P11は円形を呈し、規模は径約60cm、深さ35cmで底面に鎌倉石片が据えられて根石と思われる。10の遺物は礎石で石材から上野産中砥である。P12は長径50cm程の楕円形を呈し、深さ42cmで底面毎抜高20.7mを測る。覆土中からは11のロクロ成形かわらけ小皿、12は鉄釘片である。

P27・28：調査区北東の位置で下水溝管の埋設に伴う攪乱で大半を破壊されて検出された。P27からの遺物14が瀬戸窯の鉄軸天目茶碗、15が北宋銭の元豊口(面)寶(初鑄1078年)である。

P30：G-4杭の北隣に位置する。平面は隅丸方形を呈し、長さ56cm前後、深さ38cmを測る。遺物は16の竜泉窯系青磁鎊蓮弁文碗である。

P33・37・44：調査区北西北に位置する。P33は径55cm、深さ42cmを測り、炭化物粒の多い茶褐色砂質土の覆土中から17の瀬戸窯入子の口縁小片が出土した。P37は平面が楕円形を呈し、大きさは長径48cm、短径38cm、深さ52cmを測る。遺物は18の白磁元皿が出土。P44は円形で径45cm、深さ55cmで底面毎抜高20.68mを測る。下幅径の小さな深い掘り方のビットである。19の竜泉窯系青磁の酒会蓋銅網小片である。

第1面遺構外出土遺物(図6)：

1～5はロクロ成形のかわらけ大小小皿である。小皿は口径7.5～8.2cm、底径5.8cm前後、器高1.4～1.8cmを測り、背低の内底面が広く開く立ち上りの器壁をもった器形である。大皿は粉質良好な胎土のもので薄手丸深の器形である。舶載品には6・7が竜泉窯系青磁の鎊蓮弁文碗(青磁碗15類)・折縁皿、8・10は青白磁の印花文皿・梅瓶、9・11・12は四耳壺・口元皿である。国産陶器は13・14が瀬戸窯の鉄軸天目茶碗と入子、常滑窯は15～18が甕の口縁部(中野常滑編年6b型式)と片口鉢Ⅱ類になる口縁部片、19が南伊勢系の土師器羽釜、20・21は瓦質製品で外面にスタンプ文様をもつ火鉢と香炉である。

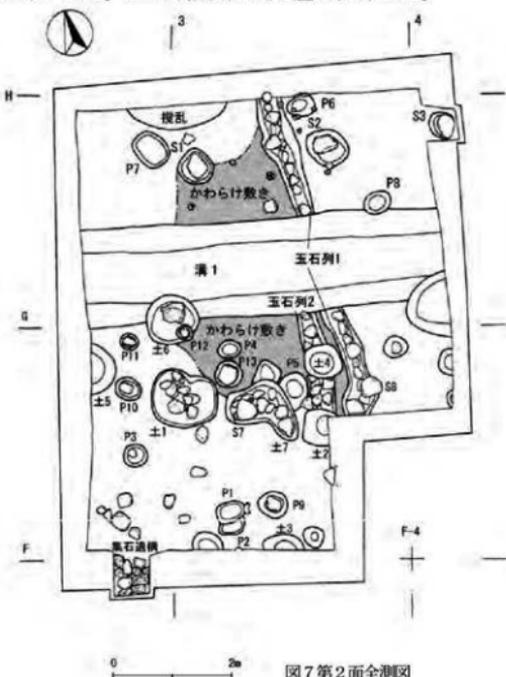


図7第2面全測図

c. 第2面の遺構・遺物

この面で発見された遺構は、礎石建物1棟・玉石列2条・土坑6基・

溝1条の他に、ピットや伊豆石などが多数発見されている。遺構確認した生活面お溝1を挟でグリット3ライン付近までの範囲に破砕したかわらけ敷き面(a面)と、その下から土丹版築地行面(b面)が認められた。

礎石建物(図8): 調査区のほぼ中央で検出され、東西2間×南北2間以上の礎石建物で、中央列は本跡より新しい溝1の掘削で除去され、さらに調査区の北・東外へ広がっているために全体の規模は不明である。なお礎石S3については、東西列往通りの調査区東壁をボーリング棒で探査したところ石の当たりが確認されたので、サブトレンチを入れて礎石の確認を行ったところ、壁面から約30cmの位置で長径42cm、短径28cm、厚さ18cmの南北に長辺をもつ扁平な伊豆石が発見された。柱間寸法は東西列・南北列ともに210cm(約7尺)の柱間距離を測る。礎石に使用された石材はすべて安山岩製の伊豆石、径30~40cmの不整形形の扁平な河原石を用いている。掘り方は径45~60cm程の楕円形もしくは隅丸方形を呈した浅いものである。礎石建物1の

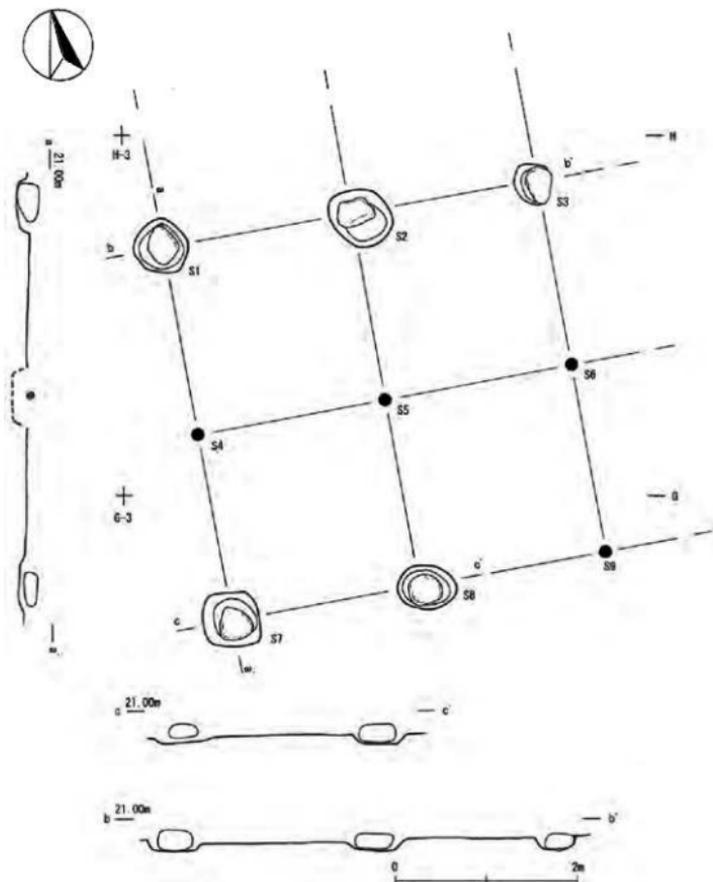


図8 第2面礎石建物1

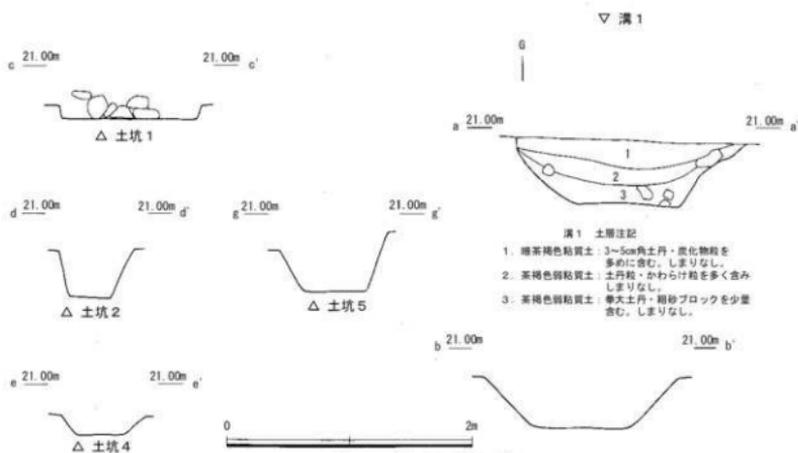
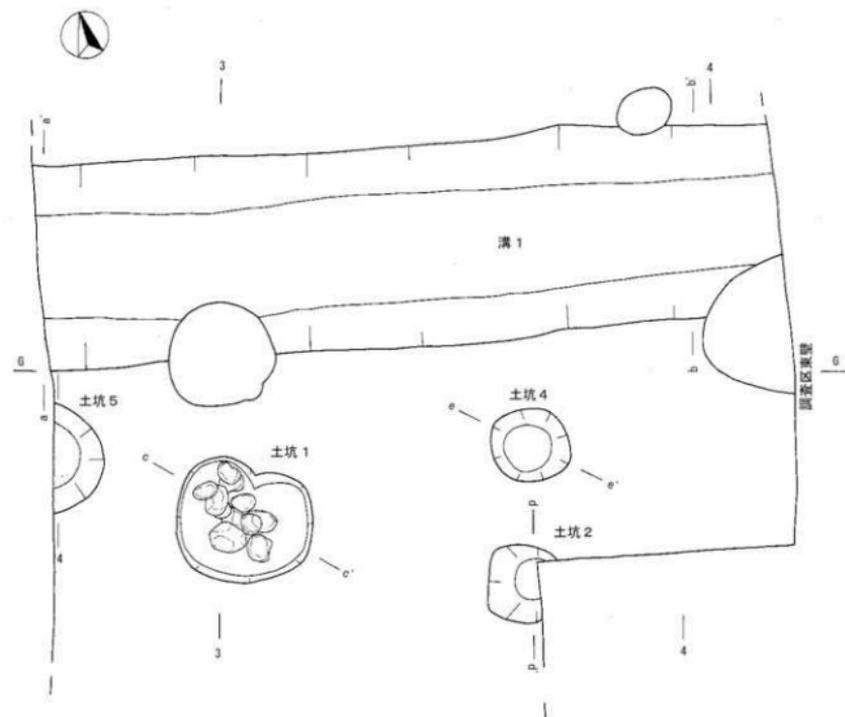


図9 第2面土坑・溝

各礎石毎抜高は20.90m前後を測るが、礎石S7・S8は土坑6と玉石列1上に据えられた礎石である。礎石S7の南方170cm程のほぼ一致した柱通り上に小型の礎石が確認されおり、建物に係わる可能性も考えられる。

土坑1 (図9・10) : G-3杭の南で伊豆石の集石を伴う土坑を検出した。平面形状は楕円形を呈し、長径110cm、短径98cm、確認面からの深さ20cm程の規模をもち、底面抜高約20.6mである。集石は径20~30cmとやや小型の扁平な河原石(伊豆石)10個で構成されている。河原石は掘り方中央の底面から面を接して据えられた様子で確認されているが、その用途については不明である。覆土中からは1のロクロ成形かわらけの小皿が出土した。

土坑2 (図9・10) : 調査区南東の位置で玉石列南端を掘削した形の土坑を検出した。東側は調査区壁にかかるため全形は不明、長辺70cmの隅丸方形に近い形状と思われる。確認面からの深さ40cm、断面は逆台形状を呈し、底面が平坦な掘り方である。覆土は概ね2層に分けられ、上層は土丹を砕いたような茶灰色土の薄い堆積がみられ、下層は径1~3cm土丹粒と炭化物を多く含む暗茶褐色土で構成される。出土遺物は2が小口径のロクロ成形かわらけ小皿、3が瀬戸窯灰釉碗の口縁部片で端反気味の器形である。

土坑3 (図7) : 調査区西壁中央に位置し、南外に拡がり全体規模は不明である。長径72cmの楕円に近い形状と思われる。底面は平坦だが西側の下幅がやや深くなり、抜高20.60mになる。覆土はかわらけ・炭化物を多く交えた茶褐色土の単一層である。図示できる出土遺物はない。

土坑4 (図9・10) : 土坑2の北隣に位置し、玉石列2中央を壊して掘り込んだ土坑である。平面形状はほぼ円形を呈し、直径68cm程、深さ20cmの浅い皿型断面の掘り方である。出土遺物は4・5の回転糸切底をもつかわらけ大小皿である。

土坑5 (図9・10) : 調査区西壁中央に位置するが壁外へ拡がり全形は不明、東西径90cmの楕円形に近い形状と思われる。掘り方の断面は逆台形状を呈し、深さ52cmで平坦な底面である。覆土は主に5cm角土丹と炭化物をやや多く含む茶褐色粘質土で、底面近くに締りのない暗茶灰色粗砂層の薄い堆積が認められた。粗砂層中から6のロクロ成形かわらけの灯明皿が1点出土した。

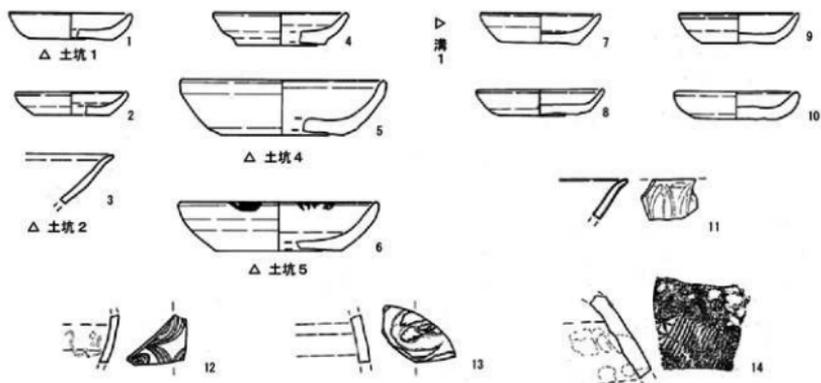
土坑6 (図7) : G-3杭に位置し、溝1・P12と重複する形で掘り込まれている。平面形状はほぼ円形を呈し、径90cm、深さ33cmの大きさを持ち、底面抜高は20.60mである。覆土は小土丹と灰褐色粗砂ブロックを含む暗茶灰色土であり、底面近くから礎石転用と思われる大型河原石の破片が見られた。出土遺物はない。

玉石列1 (図11・12) : かわらけ破砕片を敷いた範囲の東辺に沿って浅い溝状の掘り方をもつ一列の玉石列を検出した。玉石列は南北方向のほぼ真北の主軸方位で直線的に配列されているが、中程を溝1によって削平されている。確認した規模は長さ5.8mで北端が調査区外へ延びており、石列主軸方位はほぼ真北を示している。玉石列は溝状で浅い逆台形の断面をもち、底面が平らな掘り方内の一列で20個の安山岩製河原石が使用されている。玉石は15~25cm大、厚さ5~10cmの楕円形を呈しもので、長辺が南北方向になるように据えられていた。南端の玉石は一回り大型で主軸が西に振れている。玉石列の上面の抜高は20.65~70mである。なお南端玉石上に据えられた礎石(S8)は礎石建物1を構成するものである。

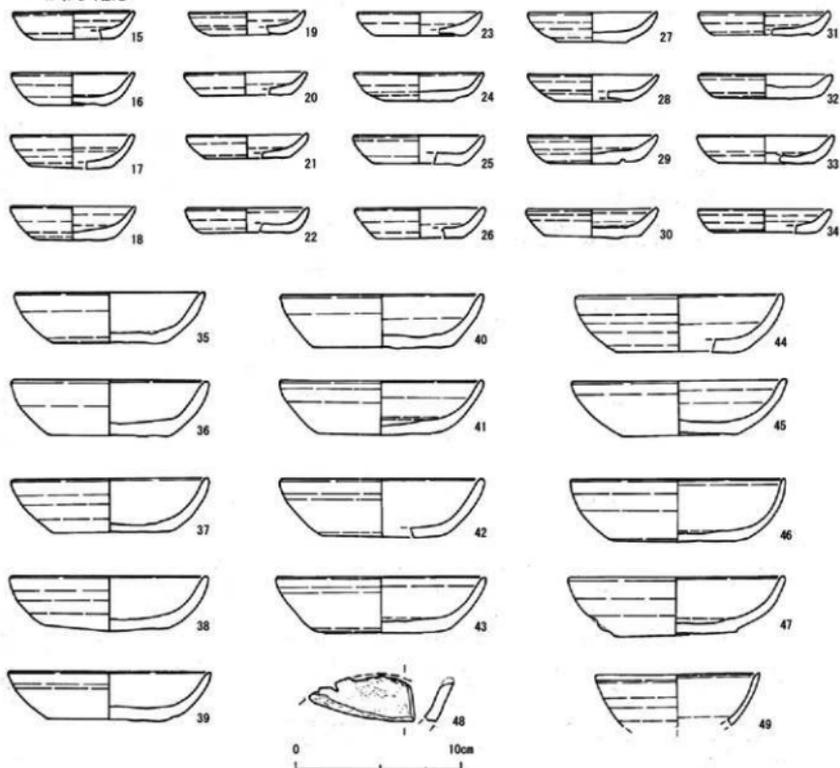
出土遺物は図12-6~9はロクロ成形のかわらけである。小皿の6・7は背底気味で薄手器壁の内灣した器形、大皿は厚手器壁で内灣気味の8と、背高気味でやや薄手器壁になる9の資料がある。10は手づくね成形による白かわらけである。

玉石列2 (図7・12) : 玉石列1の西隣に並行した位置方向で、南北両端を土坑2と溝1南側に、中央部を土坑4で壊された形で検出された。確認できた規模は長さ1.85m、幅30~40cm程の浅い溝状を呈した掘り方中には玉石が4石と3石の二列に並び、さらに溝肩まで間に2石が遺存していた。玉石は径15~20cm、厚さ7cm前後の楕円形で扁平な河原石である。玉石列の上面抜高は20.65mを測る。

出土遺物は図12-11のロクロ成形のかわらけ小皿が1点出土した。



▽ かわらけ敷き



第10 第2面各遺構出土遺物(1)

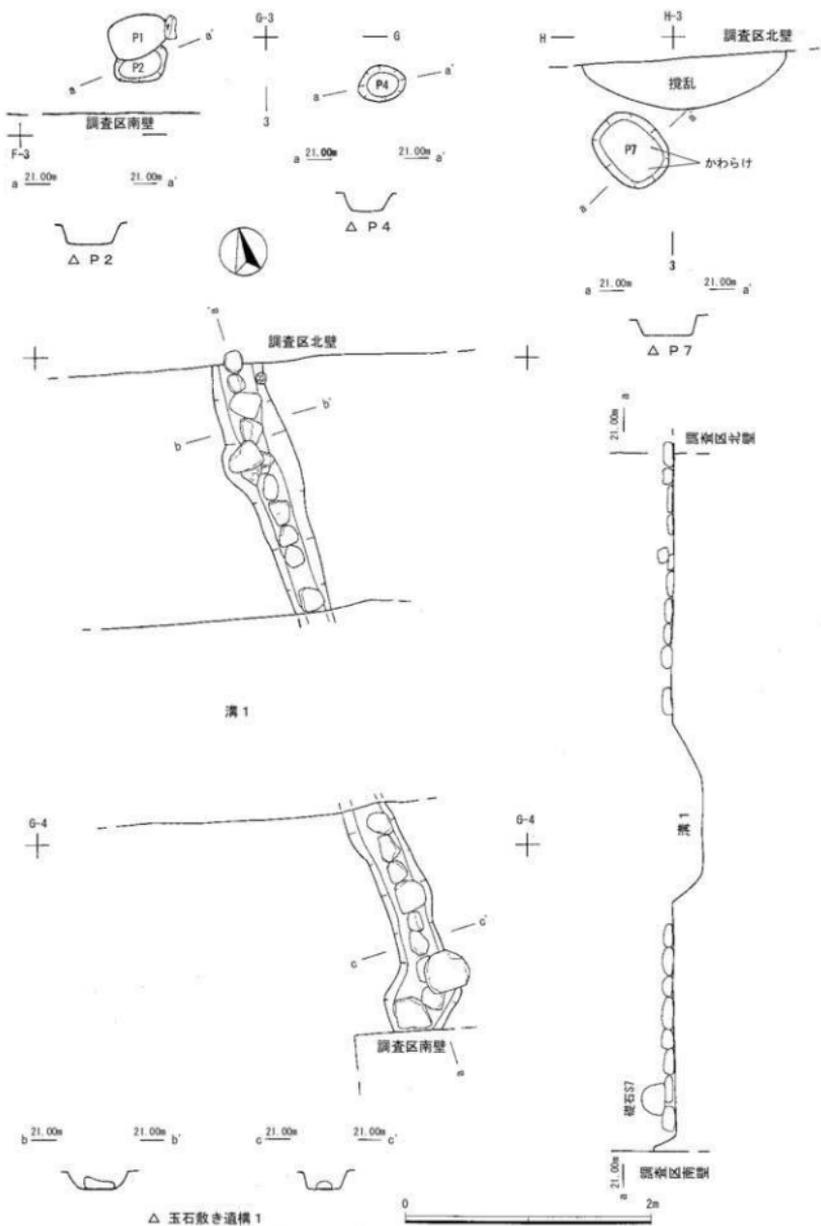


図1 1 第2面 ビット・玉砂利

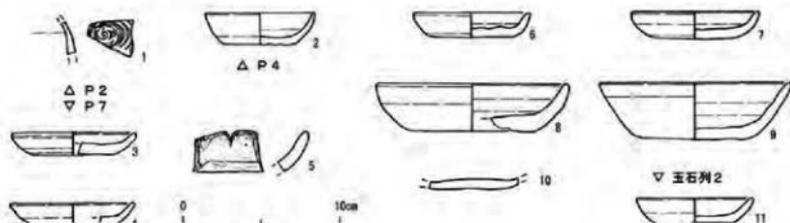


図12 各遺構出土遺物(2)

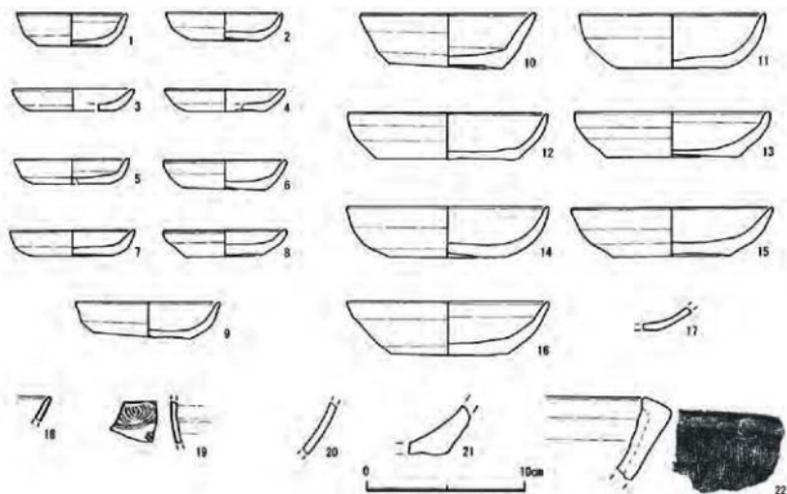


図13 第2面遺構外出土遺物(1)

溝1(図9・10)：調査区中央でグリットGライン北沿いの位置で東西方向に走る素掘り溝であり、東西両端は調査区外に延びている。本溝は礎石建物1や玉石列1、かわらけ敷き面などを壊し掘り込んでいる。確認した規模は調査区内での長さ6.1m以上、上面幅160～170cm、底面幅74～86cm、深さ45cm前後を測る。掘り方断面は整った逆台形を呈し、溝底面の海拔高は20.35m前後である。覆土は三層で、1層は3～5cm角土丹、炭化物粒を多めに含んだ締りのない暗茶褐色粘質土、2層が茶褐色弱粘質土で土丹粒・かわらけ粒を多く含むもの、3層からは土丹小塊(拳大)・粗砂ブロックを少量交えた締りのない茶褐色弱粘質土が認められた。

出土遺物は図10～7～14である。7～10はロクロ成形のかわらけ小皿で、7・9が青高気味の薄い器壁、8が青低で薄い器壁のもの、10が青低で厚い器壁に内彎しながら立ち上がる。11は竜泉窯系青磁の竈連弁文碗で口縁部が外反気味、12・13は青白磁梅瓶で外面に牡丹唐草文を刻り込む。14は常滑窯の甕片で外面に叩き目痕をもつ。

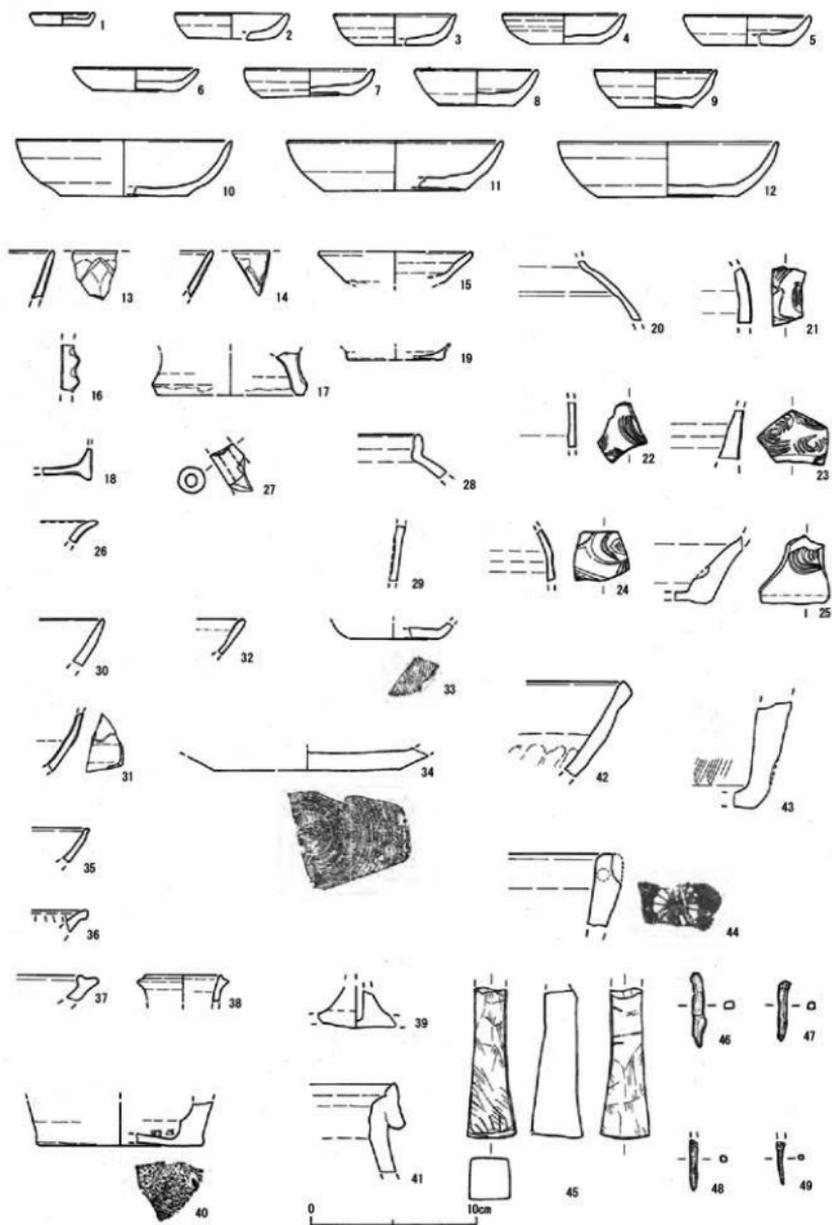


图1 4 第2面遺構外出土遺物(2)

ビット・その他(図7・11・12)：この面からは礎石建物に伴う礎石掘り方以外に建物を構成しない礎石・ビットと、集石遺構・かわらけ敷き面などが確認されている。

P2：調査区南端の土坑3西隣に位置し、P1に一部を壊されている。楕円形状で長径47cm、短径27cm以上、深さ18cmと浅い掘り方である。覆土は炭化物位混じりの茶褐色土で、遺物は1の外面に渦巻文を刻む青白磁梅瓶小片が出土した。

P4：G-3グリット近くでかわらけ敷き面を掘り抜いたビットである。平面形は楕円形を呈し、長径40cm、短径28cm、確認面からの深さ18cmを測り、覆土は粗砂混じりの暗褐色砂質土である。出土遺物は2の糸切底かわらけ小皿、背高気味の薄い器壁をもち、内彎した器形である。

P7：調査区北西隅に位置する。形状は楕円形を呈し、長径65cm、短径50cm、確認面からの深さ17cmと浅い掘り方のビットである。暗褐色砂質土の覆土から3・4のロクロ成形かわらけ小皿と、5のロクロ成形かわらけを転用した増場が出土している。

P9：調査区南東隅でみられ、円形の掘り方底面に礎石を据えている。掘り方は径47cm前後、深さ20cmの底面が平らな浅いもの、礎石は長径30cm程の上面平坦であるが、下面は欠けた伊豆石を使用している。礎石上海抜高20.70mである。

P10：G-3杭の南側に位置する。掘り方は長径50cm、短径37cm、深さ15cmで平面楕円形を呈し、礎石は長径25cm程の伊豆石を東寄りに据えている。礎石上の海拔高20.78m。

P11：P10の北側で見られた。径約30cmのほぼ円形の浅い掘り方内には扁平な小型の伊豆石を据えている。礎石上の海拔高20.75m。

P13：土坑1の北隣に位置し、かわらけ敷き面を掘り込んでいる。掘り方は径45cm程の平面円形を呈し、長径約35cmで一部周囲が欠失した礎石を据えている。

集石遺構：調査区南西隅で壁面から伊豆石・土丹塊の一部が顔を覗かせていたので範囲を確認する目的で拡張トレンチを設定して検出を行った。その結果、トレンチ内には第2面の堅牢な土丹版築地行面上に大型土丹塊と伊豆石の集中する範囲が確認され、東側は調査区外へと広がるため全体範囲は不明である。集石の様相から必ずしも目的・用途をもった遺構とは判断できないが、簡単に触れておく。第2面を構築する数回に及ぶ堅牢な土丹版築地行面上に径25～35cm程の扁平な土丹塊が置かれ、その上に長径30cm程の伊豆石3個が乗せられた状況を検出したが、何か目的をもって意識的に配置されたかは疑問が残る。

かわらけ敷き面(図7・10)：調査区中央～北側、溝1を挟んで玉石列東側には最大幅(東西)2.5m、長さ(南北)5.1mの範囲でかわらけを破砕して突き固めた地行が確認された。なお、第2面の調査ではかわらけ敷き面上をa面、かわらけ敷きを除去して表出した地行面をb面としている。この面は破砕土丹を突き固めた土丹版築地行と同じように、かわらけを粉々に砕いて厚さ5～15cmの整地層になっている。図10に示したかわらけ資料の大半は、かわらけ敷き整地層の下部からのもので潰れ細片になった状態を接合して掲載している。

出土遺物は15～47がロクロ成形糸切底のかわらけ小皿である。小皿は主に背低気味で内彎した器形の資料であるが、15～18・24・27の背高気味で薄手の器壁の資料も認められる。大皿には口径12～13cm程、器高3.3cm以上の薄手器壁で内彎した器形の資料が主体を占めている。48はかわらけを転用した増場である。49は東漸層系の土器碗である。

第2面遺構外出土遺物(図13・14)：遺構外出土遺物のうち、図13に示したのは第2面直上からの資料で、図14は第1面下～第2面までに出土した資料であり、それぞれ分けて掲載している。図13-1～16はロクロ成形による糸切底かわらけである。小皿をみると、1は小口径で背高の薄手器壁、2～8は口径7.7cm前後、器高1.6cm前後で背低の内彎した器形の細小皿タイプが主体をなしている。中皿は9が口径9.3cm、器高2.4cmで内彎気味の薄手器壁、10は口径11.2cm、器高3.5cmの背高で厚手の器壁は直線気味に立ち上がる器形であ

る。11～16の大皿タイプは口径12.3～12.9cm程の主に内彎気味に立ち上がる器形である。11は小さめの口径で背高気味、12・13は背低気味の薄手器壁、14～16は底部が厚手器壁で底径が小さくなるのが特徴である。17は白かわらけ、18～20は舶載陶磁器で、18は龍泉窯系青磁の無文碗、19は青白磁梅瓶で外面に蓮華吉草文を施文、20は泉州窯系の緑釉盤である。21は外面に格子目叩きを施した亀山窯甕、22は浅鉢型火鉢である。

図14-1～12はすべてロクロ成形のかわらけである。1は極小かわらけ、小皿タイプの器高をみると2・6は背低で内底がやや広め、3～5・7は背高気味で薄手の器壁、8・9は背高で薄手の器壁が内彎気味に立ち上がる。大皿タイプの10～12は背高気味で薄めの器壁をもち、内彎した立ち上がりの器形である。13～29は舶載陶磁器である。13・14は龍泉窯系青磁碗で外面に鎮蓮弁文を片切彫り施文、17・18は龍泉窯系青磁花瓶と思われ、16も外面に凹凸文様があり瓶か。15は同安窯の櫛歯文皿である。19～25は青白磁で19の小壺以外はすべて梅瓶小片、26・27は白磁の口元皿と水注である。28・29は褐釉の長胴壺である。30～42は国産陶器である。瀬戸窯には30が鉄釉碗、31が天目茶碗体部片で内外面に黒褐色の釉薬を施す。32・33は灰釉皿、34は折縁深皿の底部片、35は碗型入子、36・37は灰釉鉢皿で36が鎌倉前半期の所産であろう。38は灰釉瓶子で口縁片、39は灰釉仏花瓶である。40は外底砂目底の混美壺、41・42は常滑窯の甕口縁部（中野編年第7型式）と片口鉢I類である。43・44は瓦質火鉢である。45は上野産の砥石、46～49は鍛造の鉄釘である。

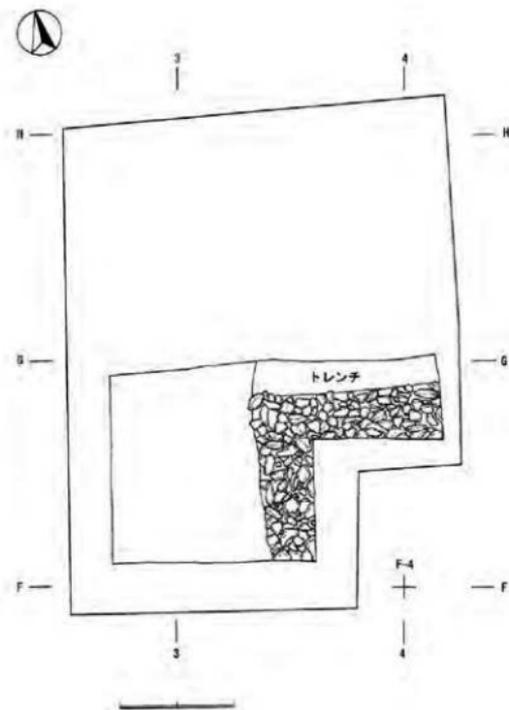


図15 第2面下トレンチ

d. 第2面下の調査

第2面より下層の調査については、I区第2面の調査終了時において地表からの掘削深度は2m近くに達していた。この面を掘り下げていくと、拳〜頭大の土丹塊を多量に混入した粗い造成土(図1-10層)の厚い堆積層で隙間からは豊富な湧水がみられ、調査区壁の崩落する危険性を予想させるものと判断された。さらに調査で発生する廃土を敷地内で処理することができなくなったなどの条件から、I区全体の平面的な調査を実施することが困難と判断した。それ以下の調査は、II区との境となるI区北壁際にトレンチを設定し下層の生活面や遺構・遺物の確認作業を行った。しかし、第3面はトレンチ壁で土層断面の堆積層により生活面を確認しただけであり、II区を含めて平面的な調査は実施していない。第2面を構築する粗い造成土は層厚80cm以上もあった。それを除去して表出した第3面は、地表下2.8m前後で黒褐色粘土ブロックと土丹小块による地行(同図11層)であった。面上の海拔高は約19.80mである。

第2面構築土中出土遺物(図16-1~24): I区東半部の第2面構築土(8~10層)から出土した資料である。1~12のかわらけはすべて糸切底のロクロ成形である。1~3・6~9の小皿は、口径7.5~7.9cc、底径5.3~5.8cm、器高1.6~1.9cmを計り、背低気味の薄手器器壁内湾した立ち上がり、体部中位よりわずかに開く器

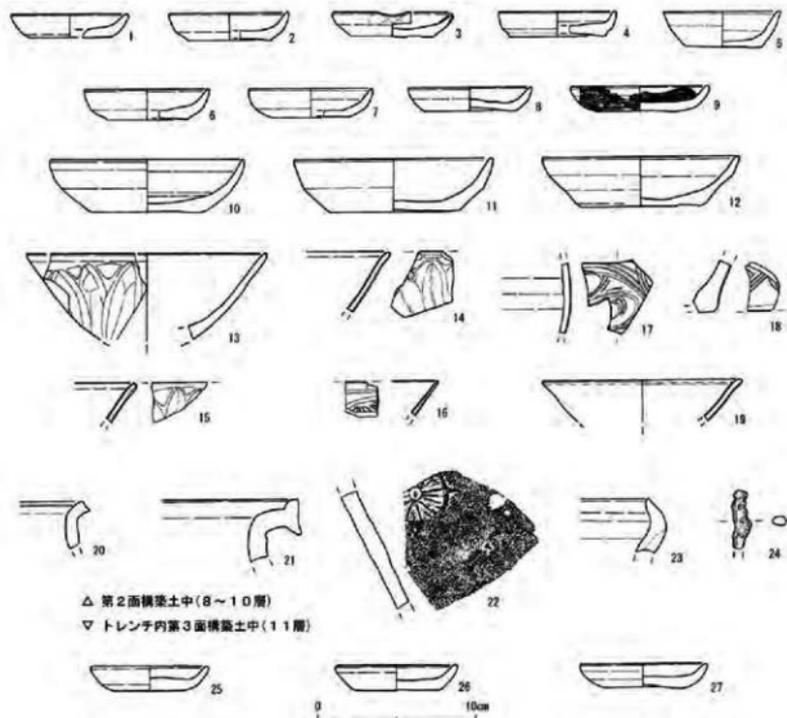


図16 I区第2面下出土遺物

形、4は背低で底部より外反した器壁が中程から直立気味になる器形、5は底径・口径比が大きく、背高の薄い器壁で、内彎して立ち上がり側面観碗型を呈する。3は口縁部に指押し片口状がみられ、9は内外面に煤が付着した灯明皿である。10は背高気味の薄手器壁で側面観碗型を呈し、11・12は薄手器壁が開きながら立ち上がり、体部上位で外反気味になる。13～16は龍泉窯系青磁碗、16は内面に劃花文を施文、13～15は外面に鏡蓮弁文を片切彫りする。17・18は青白磁梅瓶で外面に牡丹唐草文を施文する。19は白磁口元皿で口唇部軸葉掻取りで露臺である。20は黒褐釉壺、21～23は常滑窯壺・甕（中野編年6a型式含む）である。24は鉄釘である。

第3面構築土中（図16～25～27）：3点のかむらけ小皿はトレンチ内で第3面の地行層中(11層)から出土した資料である。ロクロ成形で口径7.8～8.3cm、底径5.3cm、器高1.6cm程の背低で内底面が広め、器壁が開き気味の立ち上がりである。

第4章 まとめ

今回の調査では出土遺物や土層観察からみると、文献による歴史的な様相を示した画期とは異なり、両地点からは15世紀代以降の遺物は第1面の面上包含層や遺構からも出土していない。この区域の様相については近代以降の削平や整地作業に伴う造成などがあり明らかではないが、東勝寺旧境内の主要地域にあたる図1に示した中央支谷の3・6地点、南西支谷の8・9地点、両地点と同じ北東支谷の5地点などを概観してみると、14世紀後葉から15世紀代にかけての遺構とそれに伴う遺物の出土が認められるようである。従って、I・II地点はともに13世紀後葉から14世紀中頃ぐらいの年代が与えられようである。

＜I地点＞

第1面は14世紀中頃、第2面は13世紀後葉～14世紀前半、第2面下は概ね13世紀後葉頃の年代に位置付けたところである。

次に遺物の出土傾向について簡単に触れることにしたい。I地点の調査ではテンバコにして8箱分の遺物が出土しており、その内訳については表8で各生活面に伴う遺物を種類毎に分類したものを破片点数で記載している。また全体の遺物組成については棒グラフによる比率表を提示している。

遺物は破片点数にして1078点（100%）が出土している。この中で各面に伴う遺物の出土数量・比率をみると、最も多く確認したのが第2面の519点（48.2%）で5割近い出土量を示し、次に342点（31.7%）の第3面に伴う資料が3割強とそれに続く、さらに第1面が217点（20.1%）で約2割の出土比率であった。遺物の種類別内訳を見てみると、最も多く出土したのはかむらけで835点（77.5%）を数え、このうち832点（77.2%）が回転糸切底によるロクロ成形の資料で、手づくね成形の資料は第2・3面を併せて僅か3点（0.3%）に留まる特徴的な出土傾向を示している。国産陶器は153点（14.3%）が出土したが、最も多いのは常滑窯の資料で115点（10.7%）を数え、次いで瀬戸窯34点（3.2%）、亀山窯の製品で甕片4点（0.4%）が出土しただけである。舶来陶磁器は青磁（36点）を主体に49点（4.6%）出土し、白磁・青白磁が4点づつ（各0.4%）認められ、緑釉・褐釉陶器の盤・壺類の製品は5点（0.5%）である。瓦・土器質製品の火鉢が第1・2面を中心に14点（1.3%）出土しており、このほか石製品7点、金属製品が鉄釘・銭の8点などの資料がみられた。

＜II地点＞

次に遺物の出土傾向について簡単に触れることにしたい。本地点からはテンバコで14箱分の遺物が出土しており、その内訳については破片点数を基にした数値を表7の遺物分類別の出土数量と比率表（下

段の棒グラフ) に示したとおりである。

Ⅱ地点の調査では、破片点数で7038点(100%)の遺物が出土している。

各面に伴う遺物の出土数量の傾向をみると、最も多く認められてのがかわらけ溜りやかかわらけ敷き面を構築していた第2面に伴う資料で、6359点(90.3%)を数え、9割強にも及ぶ極めて高い出土比率を示していた。それに比べて第1面は総数の1割にも満たない402点(5.7%)、調査面積を狭小とした第2面・3面構築土中に伴う資料では併せても277点(4%)に留まった低い出土比率を示していた。以上のようにⅡ地点も第2面を中心とした遺物が高い出土比率を占めており、Ⅱ地点もⅠ地点と同様、類似した様相の出土傾向が窺われ、さらに生活面の時期も概ね14世紀前半が主要な年代と推定された。

〔引用・参考文献〕

※第3章の引用文献も含む。

川副武胤・貫 達人 1980『鎌倉廃寺事典』 有隣堂

中野晴久 1994「知多半島(常滑)窯の編年」『鎌倉における生産年代と消費状況』シンポジウム資料
中世都市研究同人会

藤澤良祐 1995「京・鎌倉の古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
宗藪富貴子 1996「鎌倉・今小路西遺跡(御成小学校内)の瀬戸窯製品について―瀬戸前期から後期
までの出土様相―」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯

馬淵和雄 1997「中世食文化の諸相―食器からみた中世鎌倉の都市空間―」『国立歴史民俗博物館
研究報告』第71集

2004「中世史学としての土器研究―モノ・空間認識・文化伝播―」『中近世土器の基礎
的研究』XVIII 日本中世土器研究会

大宰府教育委員会編 2000「大宰府条切跡XV―陶磁器分葬編―」『大宰府市の文化財』第49集

鎌倉市教育委員会編 2008『史跡東勝寺跡保存管理計画書』

表2 玉砂利計測表

No.	a	b	c	b/a	c/b	g
1	7.4	5	2.7	0.68	0.54	160.5
2	7.1	5.8	2.9	0.82	0.5	193.6
3	7.3	4.2	3.9	0.58	0.93	156.3
4	6.9	4.4	2.3	0.64	0.52	114.5
5	6.7	4.7	2.8	0.7	0.6	127
6	6.7	4.5	2.9	0.67	0.64	146.2
7	6.9	4.9	1.8	0.71	0.37	86.9
8	6.5	4	2.6	0.62	0.65	87
9	6.2	4.1	3.1	0.66	0.76	121.4
10	6.5	3.9	2.6	0.6	0.67	104.3
11	7.5	3.6	2.3	0.48	0.64	98.5
12	6.6	3.5	2.5	0.53	0.71	98.9
13	6.2	4.2	3.6	0.68	0.86	95.1
14	5.7	4.3	2.5	0.75	0.58	91.8
15	6.7	3.6	2.4	0.54	0.67	80
16	6	4.5	2.7	0.75	0.6	108.2
17	5.8	4.5	2.3	0.78	0.51	88.3
18	5.4	4.7	2.5	0.87	0.53	90.9
19	6.5	4.7	2	0.72	0.43	80.9
20	6.1	3.8	1.9	0.62	0.5	68.4
21	6	5.1	1.5	0.85	0.29	78.8
22	5.2	4.7	2.6	0.9	0.55	94.4
23	6.5	3.5	2.3	0.54	0.66	81
24	6.3	4	2.6	0.63	0.65	105
25	6.6	4.1	2.3	0.47	0.74	78.2
26	5	4.4	1.7	0.88	0.39	60.5
27	5.2	5	1	0.96	0.2	41.3
28	5.6	4.6	2.3	0.82	0.5	66.9
29	6.5	3.4	1.7	0.52	0.5	56.8
30	5.3	4.2	2	0.79	0.48	61.1
31	6.6	3.8	1.6	0.58	0.42	69.9
32	6.5	3.6	2.3	0.55	0.64	81
33	6.2	3.6	1.7	0.58	0.47	58.7
34	5.1	4	2.6	0.78	0.65	76.3
35	5.4	4	2.1	0.74	0.53	67
36	5.4	4	2.3	0.74	0.58	79.4
37	5.5	4.5	2.7	0.82	0.6	81.5
38	5.5	3.8	2.6	0.69	0.68	68.8
39	4.9	3.6	2.4	0.73	0.67	54.9
40	4.6	3.7	2.1	0.8	0.57	58.7
41	7	2.9	1.8	0.41	0.62	52.7
42	6.1	2.8	2	0.46	0.71	58.2
43	5.7	3.5	1.3	0.61	0.37	40.8
44	6.5	2.7	1.6	0.42	0.59	39.7
45	5.5	3.6	2.8	0.65	0.78	69.4
46	4.5	3.8	2	0.84	0.53	52.3
47	5.1	4.2	3.1	0.82	0.74	85.9
48	4.7	2.5	2.5	0.96	0.56	72
49	5.9	2.9	2.3	0.49	0.79	63.8
50	5.3	4.1	1.9	0.77	0.46	62.7
51	5.3	3.4	2.4	0.64	0.71	65.2

No.	a	b	c	b/a	c/b	g
51	5.3	3.4	2.4	0.64	0.71	65.2
52	5	3.8	2.4	0.76	0.63	58.9
53	5.1	3.3	1.9	0.65	0.58	59.9
54	5.1	3.8	1.8	0.75	0.47	50.3
55	5.8	3.3	1.5	0.57	0.45	46.5
56	4.7	3.8	2.1	0.81	0.55	54.7
57	5	3.3	2.2	0.66	0.67	57.2
58	5.2	3.8	1.4	0.73	0.37	43.9
59	5.7	3	1.9	0.53	0.63	53.3
60	5.6	2.7	2.3	0.48	0.85	61.6
61	5.4	3.1	2.6	0.57	0.84	63.1
62	4.8	3.9	1.6	0.81	0.41	42.2
63	5.6	3.3	1.4	0.59	0.42	40.8
64	4.7	3.9	1.8	0.83	0.46	51.3
65	5.2	3.8	1.6	0.73	0.42	50.7
66	5.6	2.9	2	0.52	0.69	52.8
67	4.8	3.9	1.9	0.81	0.49	54
68	4.8	3.6	1.9	0.75	0.53	46
69	4.8	3.8	2.1	0.79	0.55	57.3
70	5.5	2.8	2.1	0.51	0.75	55.9
71	5.6	2.9	1.8	0.52	0.62	38.7
72	5.1	3.6	1.6	0.71	0.44	46.9
73	4.3	4.1	1.3	0.95	0.32	40.1
74	4.3	3.6	2.3	0.84	0.64	44.3
75	5.9	3.1	1.5	0.53	0.48	43.7
76	4.4	3.1	1.9	0.7	0.61	39.5
77	4.4	3.7	2.4	0.84	0.65	51.3
78	4.6	3	2	0.65	0.67	43.6
79	4.7	3	1.9	0.64	0.63	40.1
80	4.2	3.4	2.4	0.81	0.71	57.7
81	5.1	3.3	1.6	0.65	0.48	47.9
82	5	3.4	1.3	0.68	0.38	35.4
83	5	3.6	2	0.72	0.56	51.6
84	5.1	3.1	2.2	0.61	0.71	47.7
85	4.6	3.2	2	0.7	0.63	37.3
86	4.7	3.2	1.7	0.68	0.53	34.2
87	4.7	3.1	1.7	0.66	0.55	33.2
88	5.1	2.8	1.5	0.55	0.54	35.6
89	4.2	3.5	2.1	0.83	0.6	39.2
90	4.5	2.5	2.3	0.56	0.92	44.7
91	4.3	3.3	1.6	0.77	0.48	33.8
92	5	3.2	1.4	0.64	0.44	34.1
93	4.9	2.6	1.5	0.53	0.58	31.1
94	4.7	2.9	1.7	0.62	0.59	38.9
95	4	3.8	1.5	0.95	0.39	35.2
96	4.4	3.4	1.8	0.77	0.53	41
97	4	3.3	1.7	0.83	0.52	37.6
98	3.8	3.5	2	0.92	0.57	35.6
99	4.4	3	1.8	0.68	0.6	33.7
100	3.7	3.5	2.1	0.95	0.6	38.9
101	4.9	4.1	1.7	0.84	0.41	44.9

a:長径(mm) b:中径(mm) c:短径(mm) g:重さ(グラム)

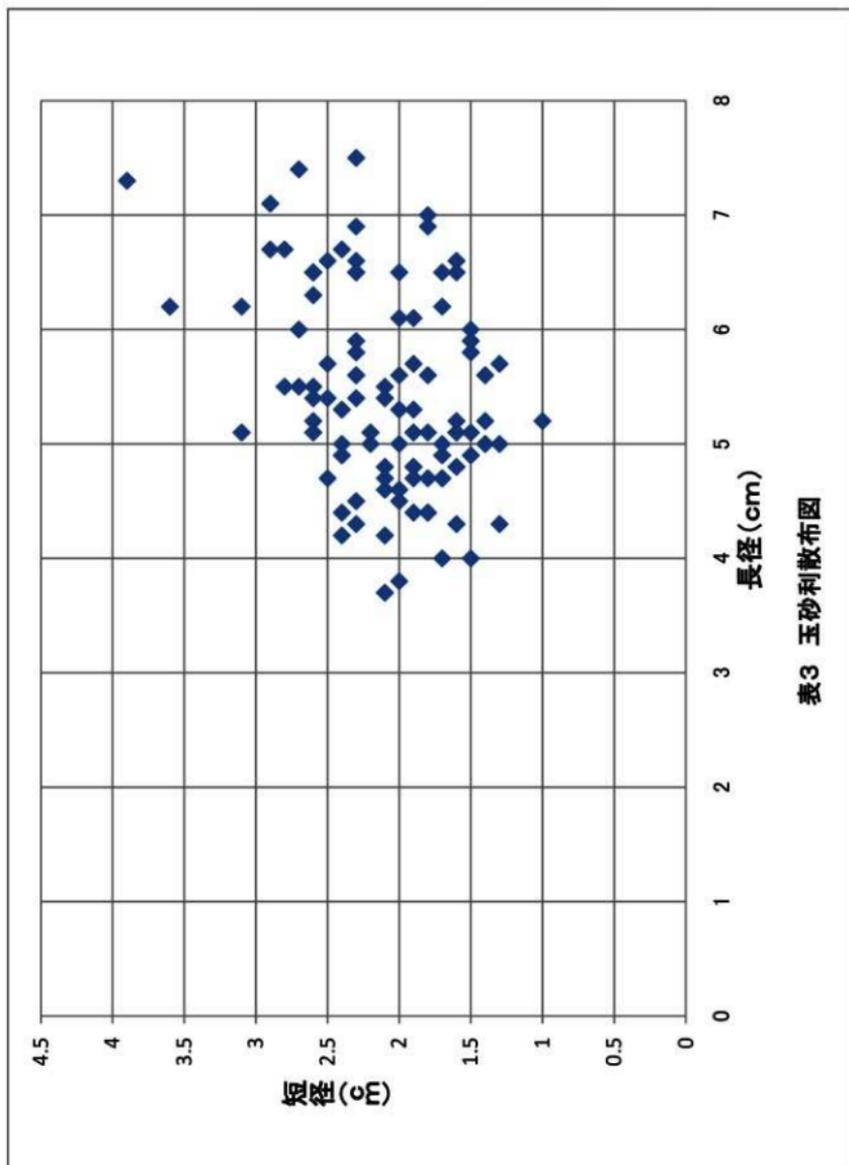


表3 玉砂粒散布圖

表4 遺物観察表(1) I地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	
8-1	第1面 土坑1	青白磁 皿	体部下位片			a. ロクロ 内底外周に凸帯状線あり b. 白色 精良堅緻 d. 水青色透明 外面下位露胎 f. 内底面に細輪文を有する一群と思われる
8-2	#	瀬戸 緑釉小皿	(10.9)	/	/	a. ロクロ b. 灰色 きめ細かな良胎 d. 淡灰緑色不透明 貫入多い 口縁部のみ施釉 e. 堅緻
8-3	#	須恵器 甕	胴部片			a. 外面格子目明き 内面同心円明きを横位ナゲですり消す b. 海綿骨芯 良土 c. 灰色 e. 堅緻
8-4	第1面 土坑2	常滑 壺	口縁部片			a. 輪積技法 b. 茶褐色 長石・鐵を多量に含む c. 茶褐色 e. 良好
8-5	第1面 P2	瀬戸 折縁皿	口縁部片			a. 口縁外反折し b. 灰色 微砂粒を含む良土 e. 堅緻 d. 灰緑色 f. 再火で表面荒れる
8-6	第1面 P4	常滑 甕	胴部片			a. 輪積技法 外面格子目明き b. 灰色 細かな白色粒 やや粘質土 c. 茶褐色 e. 堅緻
8-7	第1面 P8	瀬戸 灰釉瓶子	胴部径(18.6)			a. 輪積技法 横位ナゲ b. 灰白色 微砂粒を含む良土 d. 灰緑色 f. 外面に薄く施釉 e. 堅緻 f. 再火で釉薬表面が気泡状に荒れている
8-8	第1面 P17	かわらけ	(14.6)	(10.4)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 雲母少量 微砂 海綿骨芯 粉質良土 c. 褐色 e. 良好
8-9	第1面 遺構外	極小かわらけ	(5.0)	4.2	1.0	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂・雲母・赤色粒が少ない粉質土 c. 淡褐色 e. 良好
8-10	#	龍泉窯系 青磁 無文碗	口縁部片			a. ロクロ b. 灰白色 黒色微砂 精良堅緻 d. 淡青灰色不透明 貫入多い
8-11	#	白磁 口元皿	口縁～底部片			a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰白色不透明 口唇部輪割り取りで露胎
8-12	#	龍泉窯系 青磁 酒会壺蓋	底部片			a. ロクロ b. 灰色 黒色微砂 精良堅緻 d. 青緑色不透明 厚手施釉 蓋の受部は露胎 f. 外面編蓮弁文を施文
8-13	#	瀬戸 天目茶碗	高台径(4.1)			a. ロクロ 外面体部下位をへら削り b. 微砂 粉質土 d. 黄味灰白色 内面薄く施釉 外面露胎
8-14	#	瀬戸 灰釉瓶子	胴部片			a. 輪積技法 横位ナゲ b. 灰白色 微砂粒を含む良土 d. 灰緑色 f. 外面に薄く施釉 e. 堅緻 f. 再火で表面荒れる 図8-7と同一個体と推定される
8-15	#	瀬戸 弘草瓶	胴部片			b. 灰白色 良土 e. 堅緻 d. 灰緑色透明を外面に薄く施釉 内面露胎
8-16	#	瓦器質 蓋物	(7.2)	/	/	a. 天頂部中央に円形のつまみ状の刺刺痕 b. 灰色 黒色微砂粒を含む良土 c. 黒灰色の極へ焼き風表面顕化し光沢をもつ e. 良好
8-17	#	鉄製品 釘	残存長6.2 幅0.5 厚0.4			鍛造 断面四角形
11-1	第2a面 玉砂利層中	用途不明 石製品	長4.8以上 幅4.1 厚1.5 孔径1.0 深さ0.8			楕円形(長円形) 上面中央部に斜方向へ楕円形の穿孔をもつ
11-2	第2a面 P1	かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・雲母・赤色粒少なめ 良土 c. 淡褐色 e. 良好
11-3	第2a面 遺構外	かわらけ	(7.5)	(5.1)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 黒色微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 淡褐色 e. 良好
11-4	#	かわらけ	(7.6)	5.7	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 黒色微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 褐色 e. 良好
11-5	#	かわらけ	(7.3)	(5.1)	2.2	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 雲母 赤色粒 やや粉質土 c. 褐色 e. 良好
11-6	#	龍泉窯系 青磁 蓮弁文碗	体部下位片			a. ロクロ b. 灰色 黒色微砂 精良堅緻 d. 暗緑色半透明 厚手の施釉 表面傷多し f. 編蓮弁文を片切り削り
11-7	#	景徳鎮窯系 青白磁 樽瓶	胴部片			a. ロクロ b. 白色 精良堅緻 d. 水青色不透明 薄手の施釉 内面露胎 再火で白濁する f. 白濁不鮮明だが外面に線彫り文様あり
11-8	#	景徳鎮窯系 青白磁 香炉	底部片			a. ロクロ 削り出し高台 b. 灰白色 精良堅緻 d. 緑味水青色不透明 高台縁～高台内露胎
11-9	#	景徳鎮窯系 青白磁 香炉	体部上位片			a. 連環状の透かし彫風 三足の筒型香炉 b. 白色 精良堅緻 d. 水青色不透明 再火か白濁と多数の気泡で失透(今小路西遺跡 御成小学校用地 南谷4面出土と類似:44p. 図481-14)
11-10	#	扱輪 壺	胴部片			b. ロクロ目取明瞭 b. 砂粒 石粒状を呈す d. 茶褐色不透明 外面薄く施釉 内面露胎 e. 堅緻
11-11	第2a面 遺構外	瀬戸 四耳壺	(10.1)	/	/	a. 玉鉢状の口縁 b. 灰白色 精良土 e. 堅緻 d. 灰緑 灰白色不透明 内外面再火の為か白濁し 輪割りが発泡
11-12	#	瀬戸 灰釉瓶子	/	(8.6)	/	a. 底部円板に輪積技法を用いる b. 灰白色 白色粒を含む良土 d. 灰緑色を外底に施釉 e. 堅緻
11-13	#	瀬戸 灰釉瓶子	胴部片			a. 輪積技法 横位ナゲ b. 灰白色 黒色粒 白色粒 e. 堅緻 d. 灰緑色を外面に施釉 再火で小気泡多く荒れている

表5 遺物観察表(2) I地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
11-14	第2面 遺構外	瀬戸 卸皿	(14.2)	/	/	a.口縁部肥厚気味 b.淡灰黄色 精良土 d.灰釉黒塗り 淡灰緑色半透明外面までらに施釉
11-15	#	瀬戸 卸皿		口縁部片		a.口縁部成形 外反気味口縁で断面方形の口唇部 b.灰色 白色粒 d.灰釉淡緑色を外面に施釉 e.堅緻
11-16	#	瀬戸 卸皿	/	(7.8)	/	a.口縁部成形 外底糸切痕 b.灰黄色 黒色粒 e.堅緻 f.内底面にへら描き跡目を見む
11-17	#	瀬戸 直縁大皿		口縁部片		a.外面に顕著な口縁目肌 b.赤味のある灰白色 精良土 e.堅緻 d.灰釉淡緑色半透明 内面へ外面中位まで薄手に施釉
11-18	#	常滑 溝口壺	(7.1)	(8.9)	(9.0)	a.輪積技法 口縁外反して玉縁状 肩部と胴部下部に比線あり 外底砂目底 b.灰褐色 砂粒 長石粒 c.灰黒色 e.堅緻
11-19	#	常滑 甕		口縁部片		a.輪積技法 b.茶褐色 長石粒 c.暗茶褐色 e.堅緻
11-20	#	常滑 甕		口縁部片		a.輪積技法 b.暗灰色 白色砂粒 石英粒 c.茶褐色 e.堅緻 f.中野編年7型式
11-21	#	常滑 甕		胴部片		a.輪積技法 内面指頭痕・横位ナゲ 外面縦・横位ナゲ b.灰色 白色砂粒・石英粒や多い e.硬質 堅緻 c.灰黒色
11-22	#	瓦質 火鉢		口縁部片		a.輪積技法 横位の磨き痕 b.灰色 砂粒 白色砂粒 c.灰黒色 e.良好 f.外面口縁下に二条回線に挟まれ菊文文スタンプ。その下に貼付け遺珠文を施文
11-23	#	平瓦(女瓦)	残存長6.6 残存幅6.5 厚2.2			a.両面黒色微砂粒の離れ砂付着 凸面花菱文の明き目肌と離れ砂付着 b.灰色 砂粒 白色砂粒 c.灰黒色 e.良好 f.水福寺日置瓦(女瓦型)と同類
15-1	第2面 砂利層中	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗	(13.3)	/	/	a.口縁部 b.灰色 黒色微砂 d.灰緑色不透明 厚手輪軸 軸貫入多い e.堅致 f.外面に短弁蓮華文を片切彫り
15-2	#	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗		口縁部片		a.口縁部 b.淡灰色 黒色微砂 d.灰緑色不透明 小気泡多い e.堅致 f.外面に単弁蓮華文を片切彫り
15-3	#	常滑 甕		底部片		a.輪積技法 外底砂目底 外面へら状工具掻き上げ 内面指頭痕・横位ナゲ b.明茶褐色 長石粒・石英粒 c.茶褐色 e.硬質 堅緻
15-4	#	石製品 碗	残存長4.3 残存幅3.6 厚6.8			a.極めて滑らかな仕上げ 断面逆台形に加工 わずかに楕圓した作りを残し、西楽碗の可能性あり b.石質 質岩 c.赤灰色
15-5	第2面 土坑5	常滑 甕		胴部片		a.輪積技法 外面に縦長の格子目肌 内面指頭痕・横位ナゲ b.淡褐色 白色粒 長石粒 石英粒 e.堅緻 c.褐色
15-6	第2面 土坑6	かわらけ	(7.7)	(5.3)	1.5	a.口縁部 外底糸切痕 板状圧痕 b.海綿骨芯 雲母 赤色粒少なめ粉質気味 良土 e.良好 c.褐色
15-7	#	かわらけ	(7.7)	(5.5)	1.5	a.口縁部 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 c.淡褐色
15-8	#	かわらけ	(7.8)	5.0	1.4	a.口縁部 外底糸切痕 板状圧痕 b.海綿骨芯・雲母・赤色粒少なめ やや粉質土 e.良好 c.褐色
15-9	#	白磁 印花文皿		底部片		a.型擦し作りの小皿 b.白色 精良堅緻 d.白色半透明 厚手施釉 f.内面印花文 口元小皿と思われる
15-10	第2面 P6	常滑 甕		胴部片		a.輪積技法 外面に縦長の格子目肌 b.灰色 硬粒をほとんど含まない c.灰褐色 e.堅緻
15-11	第2面 P8	かわらけ	(7.6)	(4.9)	1.6	a.口縁部 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 やや粉質土 c.褐色 e.良好
15-12	第2面 P9	かわらけ	(8.3)	(4.9)	1.9	a.口縁部 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 を多めの粗土 c.褐色 e.良好
15-13	第2面 P10	瓦質 火鉢		口縁部片		a.口縁部肥厚して外方へ丸味をもって張り出す 棒先端位の横位磨きを施して表面滑らかな再火楽あり b.淡灰色 黒色微砂 赤色粒 白色粒を多く含む e.やや甘い c.淡赤灰色色
15-14	第2面 遺構外	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗		体部片		a.口縁部 b.灰色 黒色微砂 d.淡黄褐色半透明 やや厚手に施釉 f.外面に編蓮弁文を片切彫り
15-15	#	景徳鎮窯系 青白磁 梅瓶		肩部片		a.口縁部 b.白色 精良堅緻 d.水青色不透明 内外面施釉 再火を受け表面荒れる f.外面唐草文
19-1	第3面 土坑1	常滑 甕	(28.8)	/	/	a.輪積技法 外面口縁へ肩部に灰オーリーブ色の自然釉が多量 外面に縦長の格子目肌 b.灰色 砂粒・長石粒・石英粒を多い粗土 c.暗赤褐色 e.硬質 f.中野編年6型式
19-2	第3面 黒色土中	かわらけ	7.6	5.1	1.8	a.口縁部 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 粗土 e.良好 c.褐色
19-3	第3面 黒色土中	かわらけ	(7.8)	(4.4)	2.1	a.口縁部 外底糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 やや粉質土 e.不良 c.黄褐色
19-4	#	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗		口縁部片		a.口縁部 b.灰白色 精良堅緻 d.緑灰色不透明 厚手の施釉 小気泡多し f.外面に編蓮弁文を片切彫り
19-5	#	竜泉窯系 青磁 折腰皿	(8.7)	/	/	a.口縁部 口縁端部やや肥厚 b.灰色 精良堅緻 d.緑灰色半透明 やや厚手の施釉 f.無文

表6 遺物観察表(3) I地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.軸葉 e.焼成 f.備考
19-6	第3面 遺構外	かわらけ	7.5	5.6	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 口径・底径比少ない b.微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 やや多め粗土 c.褐色 e.良好
19-7	#	かわらけ	7.6	5.4	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.海綿骨芯 雲母 赤色粒 良土 c.褐色 e.良好
19-8	#	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.海綿骨芯・雲母・赤色粒が多くやや粗土 c.褐色 e.良好
19-9	#	かわらけ	(7.9)	(5.7)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
19-10	#	かわらけ	(7.8)	(4.5)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 良土 c.明黄褐色 e.やや不良
19-11	#	かわらけ	(12.4)	(7.5)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂・海綿骨芯・雲母・赤色粒を多く やや粗土 c.褐色 e.良好 f.口縁部に煤付着 灯明皿
19-12	#	かわらけ	(12.6)	(8.2)	3.0	a.ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂・海綿骨芯・雲母・赤色粒を多めに含む粗土 c.褐色 e.良好
19-13	#	かわらけ	(12.7)	(8.3)	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.海綿骨芯 雲母 赤色粒 d.淡褐色 e.良好
19-14	#	髹輪 蓋			胴部片	a.内外面ロクロ目痕 b.灰白色 砂粒 石粒 d.外面暗褐色不透明で薄く施釉 内面露胎 e.堅緻
19-15	#	常滑 甕			底部片	a.輪積技法 内面自然降灰 b.褐灰色 砂粒・長石粒・石英粒多めに含む c.灰褐色 e.堅緻
19-16	#	常滑 甕	(27.4)	/	/	a.輪積技法 内面指頭痕・横穴ナゲ 外面口縁～肩部にかけ明褐色の自然降灰 b.灰色 砂粒・石粒少なめ c.褐灰色 e.堅緻 f.中野編年Ⅳa型式
19-17	第3面下 落込み	かわらけ	8.0	6.5	2.0	a.手づくね成形 外底指頭圧痕 b.黒色微砂 海綿骨芯 雲母 良土 c.黄褐色 e.やや不良

表7 I 地点遺分類別出土数量・比率表

出土地種類		1面	2面	3面	個数	比率(%)
かわらけ	口クロ	159	372	301	832	77.2
	手捏ね	0	2	1	3	0.3
舶載陶磁器	青磁	5	16	15	36	3.3
	白磁	2	2	0	4	0.4
	青白磁	0	4	0	4	0.4
	緑釉	0	1	0	1	0.1
	褐釉	0	2	2	4	0.4
国産陶磁器	瀬戸	14	19	1	34	3.2
	常滑	20	75	20	115	10.7
	亀山	1	2	1	4	0.4
土製品	瓦	1	3	0	4	0.4
	瓦器	2	0	0	2	0.2
	火鉢	3	11	0	14	1.3
	その他	1	0	0	1	0.1
石製品	硯	0	1	0	1	0.1
	砥石	1	0	0	1	0.1
	その他	1	4	0	5	0.5
金属製品	釘	2	4	1	7	0.6
	鉄滓	4	0	0	4	0.4
	その他	1	0	0	1	0.1
自遺燃物	骨	0	1	0	1	0.1
合計		217	519	342	1078	100
比率(%)		20.1	48.1	31.7		

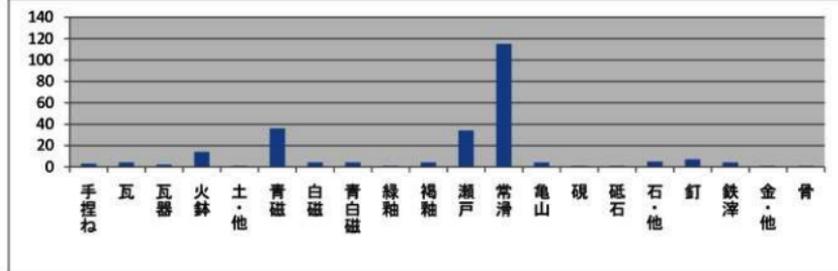


表1 遺物観察表(1) II地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
5-1	第1面 土坑1	かわらけ	(7.1)	(5.1)	2.1	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
5-2	"	かわらけ	(11.9)	(6.8)	3.0	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
5-3	第1面 土坑2	かわらけ	(7.5)	(4.6)	2.2	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.褐色 e.良好
5-4	"	亀山 甕		底部片		a.輪積技法 内面ナデ b.灰色 白色粒 黒色粒 c.灰黒色 e.甘く軟質気味 f.外面 格子叩き目
5-5	第1面 P-1	かわらけ	(12.0)	(7.2)	3.7	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 砂質土 c.黄褐色 e.良好
5-6	"	北部系 山茶碗		口縁部片		a.口クロ b.灰白色 微砂 精良土 d.口縁→内面に白濁の自然降灰 e.良好硬質
5-7	第1面 P-2	鉄製品 釘	残存長4.5 幅0.6 厚0.4			a.鍛造 断面四角形
5-8	第1面 P-6	白かわらけ		体部片		a.体部小片 b.微砂 雲母 良土 c.灰白色 e.良好
5-9	第1面 P-9	白磁 碗		底部片		a.口クロ b.白色 精良堅緻 d.淡白色不透明 内面釉輪 外面露胎
5-10	第1面 P-11	磁石	残存長2.0 幅4.1 厚2.4			b.粘板岩質 f.上面に削痕 側面磨減痕 f.上野産中砥
5-11	第1面 P-12	かわらけ	(7.3)	(4.2)	1.9	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.褐色 e.良好
5-12	"	鉄製品 釘	残存長5.6×幅0.5×厚0.6			a.鍛造 断面四角形
5-13	第1面 P-24	竜泉系系 青磁 劃花文碗		口縁部片		a.口クロ b.明灰色 精良堅緻 d.青緑色不透明 内外面施釉 f.口縁内面に沈線 再火で白濁気味
5-14	第1面 P-27	瀬戸 天目茶碗		口縁部片		a.口クロ b.褐色 良土 d.口唇部赤褐色で木目状 体部:黒褐色 薄手施釉 e.良好硬質
5-15	"	銅銭	径2.4 厚0.1			元豊通寶 北宋1078 初铸
5-16	第1面 P-30	竜泉系系 青磁 蓮弁文碗		口縁部片		a.口クロ b.灰白色 黒色微粒 精良堅緻 d.緑灰色透明 細かな貫入 内・外面薄手施釉
5-17	第1面 P-33	瀬戸 入子		口縁部片		a.口クロ b.灰色 精良土 d.自然降灰 e.良好
5-18	第1面 P-37	白磁 口元皿		口縁部片		a.口クロ b.灰白色 精良堅緻 d.淡青灰色半透明 薄い施釉 f.外面に縮漉弁文が片切彫り 割口に漆付着あり漆漉
5-19	第1面 P-44	竜泉系系 青磁 酒会壺		底部片		a.口クロ b.灰白色 黒色微粒少量 精良堅緻 d.淡緑灰色不透明 内面全々薄手、外面厚手の施釉 f.外面縮文
6-1	第1面遺構外	かわらけ	(7.5)	(5.7)	1.6	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
6-2	"	かわらけ	(7.9)	(5.9)	1.4	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c.黄褐色 e.良好
6-3	"	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.7	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好 f.断状に煤付着 灯明皿か
6-4	"	かわらけ	(7.9)	(5.7)	1.8	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
6-5	"	かわらけ	(12.0)	(6.7)	3.0	a.口クロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.雲母 赤色粒 良土 粉質 c.黄褐色 e.良好
6-6	"	竜泉系系 青磁 蓮弁文碗		体部片		a.口クロ b.灰色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 f.外面に縮漉弁文を片切彫り
6-7	"	青磁 折縁皿		口縁片		a.口クロ 口縁部外方へ折曲げ b.灰白色 黒色微粒少量 精良堅緻 d.灰緑色半透明 再火で表面白濁
6-8	"	青白磁 皿		体部片		a.器壁薄手 b.白色精良堅緻 d.緑味淡灰白色透明 f.内面印花文
6-9	"	白磁 四耳壺		肩部片		a.口クロ b.灰白色 精良堅緻 d.緑味淡灰白色透明 内面が薄く外面が厚い施釉
6-10	"	青白磁 梅瓶		胴部片		a.口クロ b.灰白色 黒色微粒 堅緻 d.緑味淡灰白色 透明 f.二次焼成で白濁
6-11	"	白磁 口元皿		口縁部片		a.口クロ 口縁部外反気味 b.灰白色 精良堅緻 d.緑味淡灰白色透明 口唇部軸割ぎ取りで露胎
6-12	"	白磁 口元皿		口縁部片		a.口クロ 口縁部外反気味 b.黄味灰白色 精良堅緻 d.緑味淡灰白色 透明
6-13	"	瀬戸 天目茶碗		体部片		a.口クロ b.灰白色 精良堅緻 d.黒褐色鉄輪 薄く施釉
6-14	"	瀬戸 入子		口縁部片		a.口クロ b.灰色 精良土 d.無し e.良好
6-15	"	常滑 甕		口縁部片		a.輪積技法 b.灰赤色 砂粒 白色粒 小石粒少量 c.褐色 f.中野産年6b型式

表2 遺物観察表(2) II地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
0-16	第1面遺構外	常滑 甕				a.輪積技法 内面指頭痕 横位ナデb.灰色 砂粒 長石粒 c.暗褐色 e.惣致
0-17	"	常滑 片口鉢Ⅱ類				a.輪積技法 b.灰色 長石粒 小石粒少量 c.褐色
0-18	"	常滑 片口鉢Ⅱ類				a.輪積技法 内面摩耗 b.灰色 砂粒 長石 鉄分の吹き出し c.茶褐色
0-19	"	伊勢系 土鍋				a.輪積技法 薄手器壁 b.黄白色 砂粒 e.良好 f.外面:横位ナデ 木口状工具掻き成形痕 内面:横位ナデ
0-20	"	瓦質 火鉢				a.口縁部小片 b.黄灰色 砂粒 白色粒多く含む c.黄灰色 e.良好 f.外面菊花文スタンプ
0-21	"	瓦質 香炉				a.輪積技法 表面横位ナデナナデ b.灰黄色 c.灰黒色 f.外面菊花文・約針状唐草文
10-1	第2面 土坑1	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c.淡褐色 e.良好
10-2	第2面 土坑2	かわらけ	(6.5)	(5.2)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c.淡褐色 e.良好
10-3	"	瀬戸 灰釉碗				a.クワロ b.黄灰色 砂粒 良土 d.黄灰色半透明 e.良好
10-4	第2面 土坑4	かわらけ	(8.2)	(5.4)	2.0	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.淡褐色 e.良好
10-5	"	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c.淡褐色 e.良好
10-6	第2面 土坑5	かわらけ	(12.0)	(7.8)	3.0	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c.褐色 e.良好 f.口縁部に煤付着 灯明皿
10-7	溝1	かわらけ	7.4	4.9	1.8	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
10-8	"	かわらけ	(7.8)	(4.8)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
10-9	"	かわらけ	7.3	4.5	1.8	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
10-10	"	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄褐色 e.良好
10-11	"	龍泉窯系 青磁 蓮弁文碗				a.口縁部小片 b.灰色 精良堅緻 d.青綠色半透明 半透明気泡あり
10-12	"	青白磁 梅瓶				a.クワロ b.灰色 精良堅緻 d.水青色 透明 薄く施軸 貫入あり f.外面に牡丹青草文を写す
10-13	"	青白磁 梅瓶				a.クワロ b.灰白色 黒色微粒 精良堅緻 d.水青色 透明 薄く施軸 貫入あり f.外面に牡丹青草文を写す
10-14	"	常滑 甕				a.輪積技法 内面指頭痕 横位ナデb.灰色 砂粒 石英粒多量 c.茶褐色 f.外面に吹き目面あり
10-15	第2面 かわらけ敷き	かわらけ	(7.3)	(5.1)	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
10-16	"	かわらけ	(7.4)	(4.3)	2.0	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.褐色 e.良好
10-17	"	かわらけ	(7.5)	(5.1)	2.1	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄褐色 e.良好
10-18	"	かわらけ	(7.7)	(4.5)	2.1	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
10-19	"	かわらけ	(7.1)	(4.7)	1.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c.黄褐色 e.良好
10-20	"	かわらけ	(7.5)	(5.6)	1.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
10-21	"	かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.赤褐色 e.良好
10-22	"	かわらけ	(7.5)	(5.4)	1.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
10-23	"	かわらけ	(7.6)	(5.7)	1.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄灰色 e.良好
10-24	"	かわらけ	7.8	4.2	1.8	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄褐色 e.良好
10-25	"	かわらけ	(7.9)	(5.6)	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.赤褐色 e.良好
10-26	"	かわらけ	(7.9)	(5.5)	1.9	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
10-27	第2面 かわらけ敷き	かわらけ	(7.9)	(4.3)	1.8	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c.黄褐色 e.良好 f.口縁部煤付着 灯明皿
10-28	"	かわらけ	(8.0)	(4.5)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.褐色 e.良好

表3 遺物観察表(3) II地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
10-29	第2面 かわらけ敷き	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
10-30	かわらけ敷き	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.8	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
10-31	かわらけ	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや不良
10-33	かわらけ	かわらけ	(8.3)	(5.9)	1.8	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄褐色 e.良好
10-34	かわらけ	かわらけ	(8.1)	(6.4)	1.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
10-35	かわらけ	かわらけ	(11.9)	(7.4)	3.1	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
10-36	かわらけ	かわらけ	(12.0)	(7.3)	3.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
10-37	かわらけ	かわらけ	12.0	(7.4)	3.3	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄褐色 e.良好
10-38	かわらけ	かわらけ	(12.1)	(7.7)	3.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 粉質良土 c.黄褐色 e.良好
10-39	かわらけ	かわらけ	12.3	7.2	3.1	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.褐色 e.良好
10-40	かわらけ	かわらけ	12.3	8.5	3.2	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
10-41	かわらけ	かわらけ	12.4	7.7	3.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄褐色 e.良好
10-42	かわらけ	かわらけ	(12.4)	(7.3)	3.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.黄褐色 e.良好
10-43	かわらけ	かわらけ	(12.7)	(6.9)	3.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄褐色 e.良好
10-44	かわらけ	かわらけ	(12.9)	(7.5)	3.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや良土 c.黄灰色 e.良好
10-45	かわらけ	かわらけ	(13.0)	(7.0)	3.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.甘い e.良好
10-46	かわらけ	かわらけ	(13.1)	(7.2)	3.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 良土 c.黄灰色 e.甘い
10-47	かわらけ	かわらけ	(13.2)	7.5	3.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.黄褐色 e.良好
10-48	かわらけ買 ルツボ					a.クワロ b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.赤褐色 e.良好 f.強い焙熱帯域で無数の小穴
10-49	東福系 土器埴		(10.0)			a.手づくね 指頭痕 b.砂質 白色粒 明灰色 良土 c.灰白色 e.良好
12-1	第2面 P-2	青白磁 梅瓶				a.クワロ b.白色 黒色微粒 精良型織 d.青緑色半透明 外面薄く施釉 c.褐色 e.良好 f.外面湯染文を削む
12-2	第2面 P-4	かわらけ	(7.1)	(4.7)	2.0	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒多し 良土 c.褐色 e.良好
12-3	第2面 P-7	かわらけ	(7.9)	(5.3)	1.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
12-4	かわらけ	かわらけ	(7.9)	(3.9)	1.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.褐色 e.良好
12-5	かわらけ買 ルツボ					a.クワロ b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.暗灰色 e.良好 f.焙熱帯域に無数の小穴
12-6	第2面 玉石列1	かわらけ	7.3	5.2	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
12-7	かわらけ	かわらけ	(8.0)	(5.0)	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.赤褐色 e.良好
12-8	かわらけ	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.0	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.褐色 e.良好
12-9	かわらけ	かわらけ	(12.3)	(7.0)	3.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 粗土 c.赤褐色 e.良好 f.二次焼成を受け変色
12-10	白かわらけ			(5.8)		a.手づくね 弱い指頭痕 b.微砂 白色粒 良土 c.白黄色 e.良好
12-11	第2面 玉石列2	かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄褐色 e.良好
13-1	第2面 遺構外1	かわらけ	5.2	4.4	2.2	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.褐色 e.良好
13-2	かわらけ	かわらけ	(7.6)	4.5	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 明砂質土 c.赤褐色 e.良好
13-3	かわらけ	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 粗土 c.褐色 e.良好 f.全体に再次赤変

表4 遺物観察表(4) II地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
13-4	第2面 遺構外1	かわらけ	(7.7)	(4.9)	1.5	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.赤褐色 e.極めて良好
13-5	"	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.褐色 e.良好
13-6	"	かわらけ	7.9	5.3	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.不良
13-7	"	かわらけ	(7.9)	(5.1)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 弱粉質土 c.褐色 e.良好
13-8	"	かわらけ	7.9	5.0	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
13-9	"	かわらけ	9.3	6.2	2.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
13-10	"	かわらけ	11.2	7.3	3.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
13-11	"	かわらけ	12.3	7.2	3.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.淡褐色 e.良好
13-12	"	かわらけ	(12.7)	8.9	3.0	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.褐色 e.良好
13-13	"	かわらけ	(12.6)	(8.4)	3.4	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.褐色 e.極めて良好
13-14	"	かわらけ	(12.8)	7.5	3.3	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 c.淡褐色 e.良好
13-15	"	かわらけ	(12.8)	(7.5)	3.2	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.淡褐色 e.良好
13-16	"	かわらけ	12.9	7.5	3.5	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.褐色 e.良好
13-17	"	白かわらけ		底部片		a.平つくね b.微砂 白色粒 c.内面白桃色 外面淡灰白色 e.良好
13-18	"	龍泉窯系 青磁 無文碗		口縁部片		a.クワロ やや厚手器壁 b.灰色 精良壁緻 d.淡緑灰色半透明 やや厚手施釉
13-19	"	青白磁 梅瓶		胴部片		a.胴部片 クワロ b.灰白色 壁緻 d.淡緑灰色透明の外面施釉 内面、極薄の鉄分を含む透明釉施釉 f.外面に蓮華唐草文
13-20	"	泉州窯系 黄釉壺		胴部片		a.クワロ b.鈍い橙色 砂粒白色粒 d.内面再火で釉薬部分白濁 外面施釉 a.壁質 精良壁緻
13-21	"	龜山窯 甕		胴部片		a.輪積技法 内面に横位指ナブ b.灰色 砂粒 黒色粒 砂質気味 c.戻黒色 e.良好 f.外面に格子目肌直
13-22	"	浅鉢型火鉢		口縁部片		a.輪積技法 外面は口縁部横位で体部縦位の刷毛目状ナブ 内面横位ナブ b.灰色 砂粒 黒色粒 やや砂質 c.戻黒色 e.敏質
14-1	第2面 遺構外2	かわらけ	(3.8)	(3.3)	0.8	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
14-2	"	かわらけ	(6.8)	(5.2)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c.褐色 e.良好
14-3	"	かわらけ	7.4	(4.9)	2.3	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 砂質気味の良土 c.黄褐色 e.やや不良
14-4	"	かわらけ	7.6	4.3	1.8	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 海綿骨芯 赤色粒 砂質土 c.淡褐色 e.良好
14-5	"	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.8	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 粗土 c.褐色 e.良好
14-6	"	かわらけ	7.7	5.2	1.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.淡褐色 e.良好
14-7	"	かわらけ	7.8	5.6	1.7	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.明黄褐色 e.やや甘い
14-8	"	かわらけ	(7.4)	4.6	2.2	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c.褐色 e.良好 f.口縁部僅附着 灯明色
14-9	"	かわらけ	(7.5)	4.7	2.3	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.淡褐色 e.良好
14-10	"	かわらけ	(13.1)	(7.8)	3.5	a.クワロ 外底糸切痕 薄手丸深 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 が少ない粉質土 c.褐色 e.良好
14-11	"	かわらけ	(13.2)	(8.6)	3.1	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.黄褐色 e.やや不良
14-12	"	かわらけ	13.3	(8.5)	3.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.褐色 e.良好
14-13	"	龍泉窯系 青磁 蓮弁文碗		口縁部片		a.クワロ b.灰白色 微砂 d.緑灰色半透明 厚手施釉 f.外面施蓮弁文を片切彫り
14-14	"	龍泉窯系 青磁 蓮弁文碗		口縁部片		a.クワロ b.灰色 微砂 d.淡緑灰色不透明 小気泡多し やや厚手施釉 f.外面施蓮弁文を片切彫り

表5 遺物観察表(5) II地点

()は復元値

図番号	部位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
14-15	第2面遺構外2	阿安窯系 細線文皿	(9, 5)			a.口ロコ 胴部中位 屈曲した腰をなす 内面細線文 b.灰色 精良堅緻 d.淡緑灰色透明 薄い施釉
14-16	"	龍泉窯系 青磁花瓶か		胴部部片		a.口ロコ b.黒色粒 精良堅緻 d.明灰緑色半透明 内外面に粗い貫入あり f.同一個体の小破片20点含む
14-17	"	龍泉窯系 青磁花瓶		高台径 (9.1)		a.口ロコ 高台削り出し b.灰色 微砂 d.緑灰色不透明 厚手施釉 費付と高台胎露胎
14-18	"	龍泉窯系 青磁花瓶		底部片		a.口ロコ b.白灰色 精良堅緻 d.明灰緑色不透明 外面底部厚手施釉 f.再火を受け全体光沢なく白濁気味
14-19	"	青白磁 小壺		(5, 7)		a.底部片 外型滑り 薄い器壁 b.白色 緻密精良 d.水青色透明 外底露胎
14-20	"	青白磁 梅瓶		頸部片		a.口ロコ b.黒色粒 精良堅緻 d.外面青灰色不透明 内面明青灰色不透明 f.釉薬全体が再火により釉薬色剥離
14-21	"	青白磁 梅瓶		胴部片		a.口ロコ b.白色 精良堅緻 d.水色透明 薄い施釉 内面露胎 f.外面牡丹唐草文を刻む
14-22	"	青白磁 梅瓶		胴部片		a.口ロコ b.白灰色 黒色粒 精良堅緻 d.青灰色透明 薄い施釉 粗い貫入あり 内面透明釉 f.外面渦文を刻む
14-23	"	青白磁 梅瓶		底部片		a.口ロコ b.白色 黒色粒 精良堅緻 d.水青色半透明 内面薄い透明釉 f.外面に牡丹唐草文を刻む
14-24	"	青白磁 梅瓶		胴部片		a.口ロコ b.白灰色 黒色粒 精良堅緻 d.外面水青色透明 貫入あり 内面に薄い透明釉 f.牡丹唐草文を刻む
14-25	"	青白磁 梅瓶		底部片		a.底部小片 b.灰白色 黒色粒 精良堅緻 d.水青色半透明 外面高台部費付露胎 内面自然釉付着 一部釉ダレあり f.文様 唐草文
14-26	"	白磁 口元皿		口縁部片		a.口ロコ b.灰黄色 精良堅緻 d.明灰白色不透明 外底施釉を抜き取り 口唇部露胎
14-27	"	白磁 水注		注口部片		a.注口部 b.灰白色 緻密 d.淡灰色透明 薄く施釉 粗い貫入あり
14-28	"	褐釉壺		口縁部片		a.口ロコ b.灰色 白・黒色粒交えた陶質良土 d.外面に薄手の黒褐釉 口唇部釉を抜き取り f.耳付き長胴壺であ
14-29	"	褐釉壺		胴部片		a.口ロコ b.褐灰色 粘性もちろ緻密 右腕掛け彩色 d.外面茶褐色薄い施釉 内面露胎 e.硬質
14-30	"	瀬戸 鉄輪碗		口縁部片		a.口ロコ 口縁部武蔵気味 b.黄白色 砂粒 良土 d.暗茶褐色 内外面薄く施釉 e.良好
14-31	"	瀬戸 天目茶碗		体部片		a.口ロコ b.灰色 良好堅緻 d.樹液黒色 内面に禾目状 外面輪磨に輪磨り
14-32	"	瀬戸 皿		口縁部片		a.口ロコ b.灰褐色 砂粒 良土 c.黄灰色 d.灰緑色半透明 口縁部施釉 e.良好
14-33	"	瀬戸 皿		(5, 3)		a.口ロコ 外底回転糸切痕 b.灰白色 堅緻 d.内面淡緑灰色透明な灰釉 外面刷毛塗り 外底露胎
14-34	"	瀬戸 折縁皿		底部片		a.口ロコ b.黄色味 褐灰色 黒色粒 d.内外面薄い灰釉を刷毛塗り 灰白色のまだら 外面露胎 e.堅致
14-35	"	瀬戸 入子		口縁部片		a.口ロコ 口唇外反気味 b.淡黄色 砂粒 良土 c.灰色 e.良好 f.二次焼成により変色 器壁荒れる
14-36	"	瀬戸 御皿		口縁部片		a.口ロコ 口唇丸味もつ b.灰白色 精良土 c.灰白色 降灰部灰黄色 e.良好 f.内面に縁下に削し目
14-37	"	瀬戸 御皿		口縁部片		a.口ロコ 口唇部肥厚し端部上面が凹状 b.淡黄色 砂粒 良土 c.灰白色 e.良好
14-38	"	瀬戸 瓶子	(4, 5)			a.口ロコ b.灰色 砂粒 黒色粒 緻密 d.淡緑灰色 薄く施釉 口唇～外面剥落 e.良好
14-39	"	瀬戸 仏花瓶	残存長4.8 高:2.5 孔径:1.8 穿孔深さ:2.1	10.1		b.淡白色 砂粒 雲母 良土 c.淡褐色～淡白色 e.良好 f.二次焼成により変色 外底中心近くは九輪状の先端で直径1mm深さ1mmのへこみあり
14-40	"	澁美 壺		底部片		a.底部片 輪積技法 外底砂目底 b.灰色 白色粒 堅緻
14-41	"	常滑 甕		口縁部片		a.輪積技法 b.灰色 黒色粒・白色粒をやや多く含む 堅緻 c.表面:暗赤褐色 f.中野編年6B型式と思われる
14-42	第2面遺構外2	常滑 片口鉢Ⅱ類		口縁～体部片		a.輪積技法 b.褐灰色 黒色・白色粒多く含む粗胎 c.暗灰色 f.内面 緑灰色の自然釉
14-43	"	瓦質 火鉢		底部片		a.輪積技法 外面に木口状ナツ 外底砂目 b.灰色 砂粒 小石粒 粗土 c.暗灰色 e.良好 f.外面二次焼成により器壁荒れる
14-44	"	瓦質 火鉢		口縁部片		a.口縁部肥厚の鉢型 輪積技法 口縁～内面磨き肌 b.淡褐色 砂粒 小石粒 粗土 c.茶褐色 e.良好 f.外面に16弁菊花文スタンプ
14-45	"	砥石	残存長9.4 幅:3.1～1.9			a.方柱状 木口面以外の4面を砥面使用 c.明褐色気味 f.土野産中砥

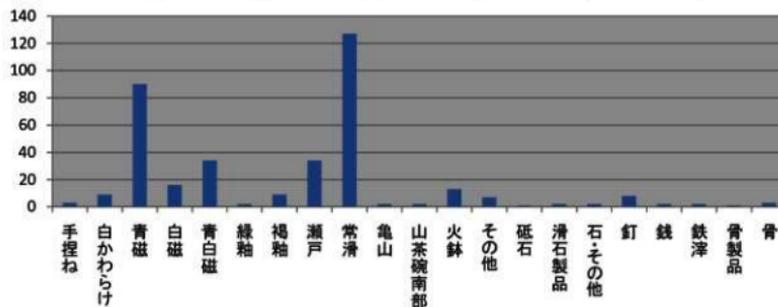
表6 遺物観察表(6) II地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
14-46	第2面遺構外2	鉄製品 釘	残存長4.6×幅0.7×厚0.3			a.鍛造 断面四角形
14-47	"	鉄製品 釘	残存長3.7×幅0.5×厚0.4			a.鍛造 断面四角形
14-48	"	鉄製品 釘	残存長3.1×幅0.4×厚0.4			a.鍛造 断面四角形
14-49	"	鉄製品 釘	残存長2.7×幅0.3~0.5×厚0.3			a.鍛造 断面四角形
16-1	第2面構築土中(8~10層)	かわらけ	7.5	5.7	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.赤色粒 海綿骨芯 やや粗土 c.褐色 e.良好
16-2	"	かわらけ	(7.7)	(5.3)	1.8	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 弱砂質土 c.淡褐色 e.良好
16-3	"	かわらけ	(7.6)	(5.3)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質気味 c.淡褐色 e.良好 f.指押し片口状
16-4	"	かわらけ	(7.5)	(6.2)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
16-5	"	かわらけ	7.5	4.7	2.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.褐色 e.良好
16-6	"	かわらけ	(7.9)	5.2	2.0	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c.淡褐色 e.良好
16-7	"	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.9	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 弱砂質土 c.淡褐色 e.やや甘い
16-8	"	かわらけ	(7.9)	(5.8)	1.5	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c.茶褐色~暗褐色 e.良好 f.全体の欠け
16-9	"	かわらけ	(8.8)	(5.6)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 やや粗土 c.褐色 e.良好 f.全体の欠け僅付着
16-10	"	かわらけ	12.4	7.4	3.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
16-11	"	かわらけ	12.7	6.4	3.2	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 砂質土 c.褐色 e.良好
16-12	"	かわらけ	12.6	7.6	3.2	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒やや砂質粗土 c.淡褐色 e.良好
16-13	"	龍泉窯系青磁 蓮弁文碗	(15.4)		(5.5)	a.クワロ b.暗灰色 精良堅緻 c.褐色 d.暗緑灰色不透明 薄手施輪 小気泡多し f.外面縁蓮弁文を片切彫り
16-14	"	龍泉窯系青磁 蓮弁文碗		口縁部片		a.クワロ b.明灰白色 精良堅緻 d.緑灰色半透明 薄い施輪 粗い貫入 f.外面縁蓮弁文を片切彫り
16-15	"	龍泉窯系青磁 蓮弁文碗		口縁部片		a.クワロ b.灰白色 精良堅緻 d.暗緑灰色不透明 内外面に厚手施輪 軸表が再火で光沢なくあれ肌 f.外面縁蓮弁文を片切彫り
16-16	"	龍泉窯系青磁 劃花文碗		口縁部片		a.クワロ b.灰色 黒色粒 精良緻密 d.緑灰色透明 e.堅緻 f.内面劃花文を彫る
16-17	"	青白磁 梅瓶		胴部片		a.クワロ b.淡白色 精良堅緻 d.水青色透明 外面薄手施輪 再火で栗れ肌 内面露胎 f.外面唐草文を彫る
16-18	"	青白磁 梅瓶		底部片		a.クワロ b.灰白色 黒色粒 精良堅緻 d.水青色透明 底部露胎 内面透明輪 f.外面唐草文を彫る
16-19	"	白磁 口元皿	(12.8)		(2.7)	a.クワロ 口縁~体部片 b.白色 黒色粒 精良堅緻 d.明白灰色半透明 薄手施輪 口唇部露胎
16-20	"	黒陶輪 蓋		口縁部片		a.クワロ 口縁部外反気味 b.褐味灰色 砂粒 白色粒 粘性強く緻密 d.黒褐色 外面に光沢ない薄手の施輪
16-21	"	常滑 甕		口縁部片		a.輪積技法 b.灰褐色 砂粒 長石粒 石英粒 c.暗褐色 降灰部分は灰緑色 e.堅緻 f.中野6型式
16-22	"	常滑 甕		肩部片		a.輪積技法 b.灰色~黄灰色 砂粒 長石粒 多量 c.内面褐色 外面赤褐色 f.外面に車輪文スタンプ
16-23	"	常滑 鉢		口縁部片		a.輪積技法 b.灰褐色 砂粒 長石粒多量 c.褐色 g.口縁部自然降灰
16-24	第2面構築土中(8~10層)	鉄製品 釘	残存長3.8×0.9×0.6			a.鍛造 断面四角形
16-25	トレンチ第3面中(11層)	かわらけ	(7.5)	5.3	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.雲母 赤色粒 良土 c.黄褐色 e.良好
16-26	"	かわらけ	(8.0)	(5.5)	1.6	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 e.やや不良
16-27	"	かわらけ	8.3	5.3	1.4	a.クワロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好

表7 遺物分類別出土数量・比率表 II 地点

出土地 種類	第1面	第2面	第2面下	第2面下 トレンチ	個数	比率(%)	
かわらけ	ロク口	292	6151	215	11	6669	94.76
	手捏ね	2	1	0	0	3	0.04
	白	3	6	0	0	9	0.13
船載陶磁器	青磁	17	63	6	4	90	1.28
	白磁	6	8	2	0	16	0.23
	青白磁	4	26	2	2	34	0.48
	緑釉	0	2	0	0	2	0.03
	褐釉	0	9	0	0	9	0.13
国産陶磁器	瀬戸	16	7	11	0	34	0.48
	常滑	43	64	19	1	127	1.8
	亀山	0	2	0	0	2	0.03
	山茶碗(南部)	0	2	0	0	2	0.03
土製品	火鉢	8	5	0	0	13	0.18
	その他	3	4	0	0	7	0.1
石製品	砥石	0	1	0	0	1	0.01
	滑石製品	1	0	1	0	2	0.03
	その他	1	1	0	0	2	0.03
金属製品	釘	2	5	1	0	8	0.11
	銭	2	0	0	0	2	0.03
	鉄滓	1	1	0	0	2	0.03
骨製品 自然遺物	加工品	0	0	1	0	1	0.01
	骨	1	1	1	0	3	0.04
合計	402	6359	259	18	7038		
比率(%)	5.7	90.3	3.7	0.3	7038	100%	





◀ a. 遺跡遠景(西から)

小町大路 ▶

△北条小町邸跡

△宇津宮辻子幕府跡



◀ b. 第1面全景(東から)

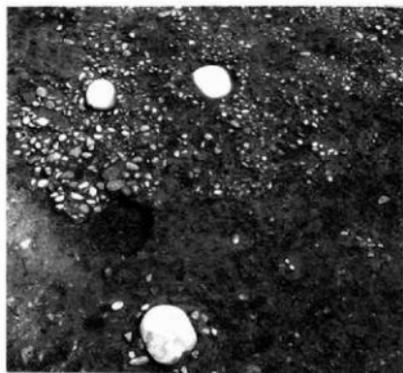
▶ c. 第1面全景(南から)



I 地点(1)



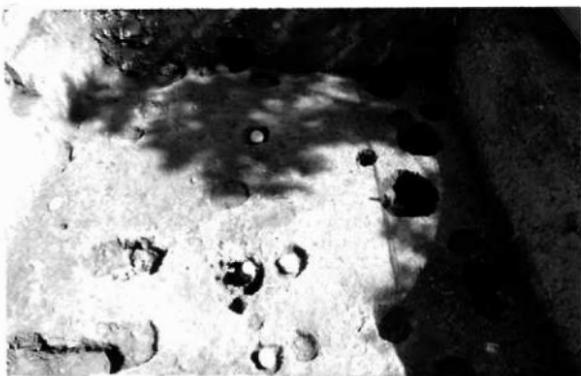
▲ a. 第2a面全景(西から)



▲ b. 建物1の礎石・砂利面



▲ c. 砂利面検出状況



▲ d. 第2b面全景(西から)

I地点(2)



▲a. 第2b面全景(東から)



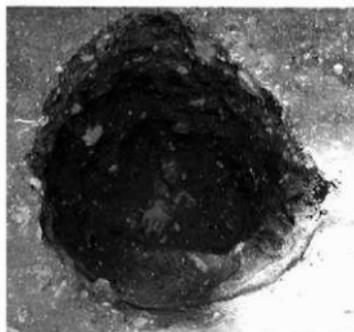
▲b. 建物1 礎石列(西から)



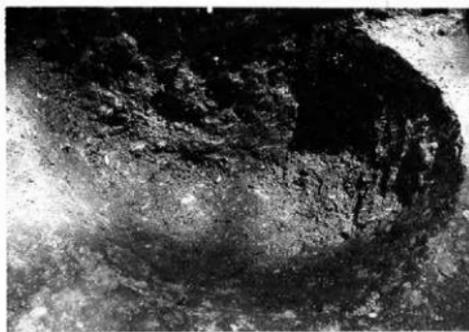
▲c. 建物1の礎石2



▲d. P5



▲e. P6

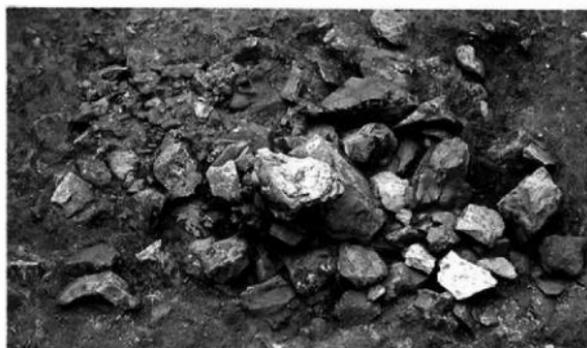


▲f. P8

I 地点 (3)



◀ a. 第3面全景(西から)



◀ b. 土坑状遺構



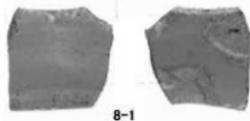
▲ c. 調査区南壁土層

▼ d. 調査区東壁土層

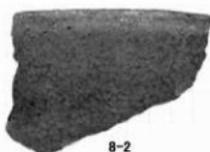


I 地点(4)

▼a. 第1面遺構・遺構外



8-1



8-2

△ 土坑1



8-3



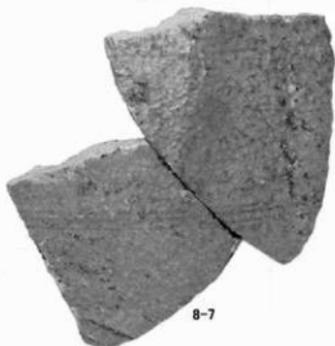
8-4

△ 土坑2



8-6

△ P4



8-7

△ P8



8-5

△ P2



8-8

△ P17



8-9



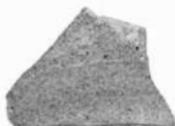
8-10



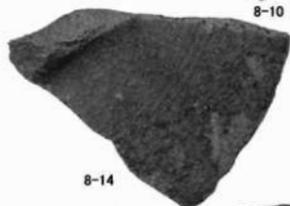
8-11



8-12



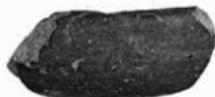
8-13



8-14



8-15



8-16



8-17

▶ b. 第2a面玉砂利層



11-1

▽ P1



11-2

▶ c. 第2a面遺構外



11-3



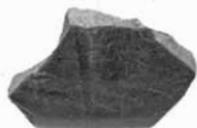
11-4



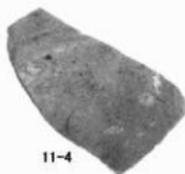
11-5

I 地点 (5)

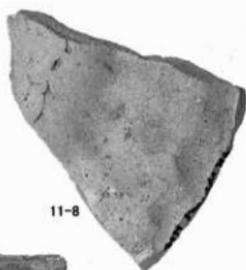
▼a. 第2a面遺構外



11-6



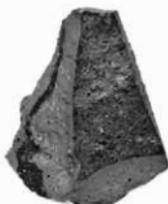
11-4



11-8



11-9



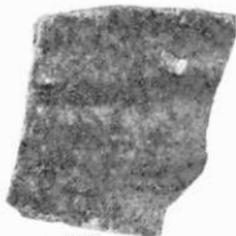
11-10



11-11



11-12



11-13



11-14



11-15



11-16



11-17



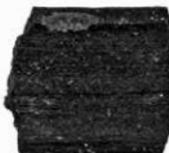
11-18



11-21



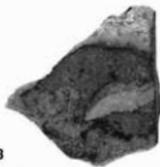
11-19



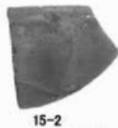
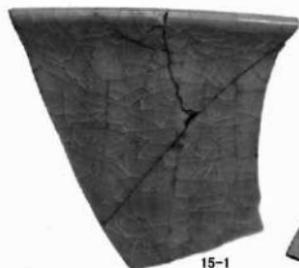
11-20

I 地点 (6)

▼a. 第2a面遺構外



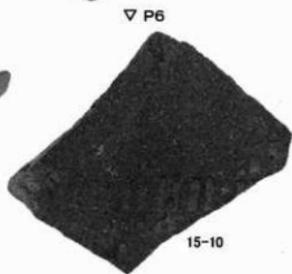
▷ 砂利層中



▼b. 第2b面遺構・遺構外



▽ P5



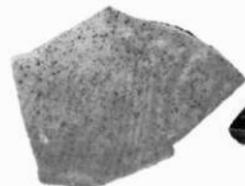
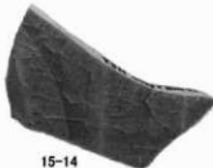
▽ P8



▽ P9



▽ P10



▼c. 第3面遺構 土坑1



I 地点(7)

図版8

▼a. 第3面遺構外



19-2



19-3



19-4



19-5



19-6



19-7



19-8



19-9



19-10



19-11



19-12



19-13



19-14



19-15

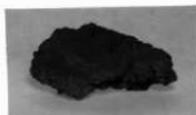


19-16

▼b. 第3面下トレンチ



19-17



▲c. 第1面出土の焼け壁土



▲d. 第2面遺構外出土の焼け壁土

I地点(8)



▲ a. 遺跡周辺遠景



▲ b. 調査地点遠景

II 地点



◀ a. 調査地点近景

左手の奥がⅠ地点で
手前がⅡ地点である



▶ b. Ⅰ区第1面全景（西から）



◀ c. Ⅱ区第1面全景（南から）

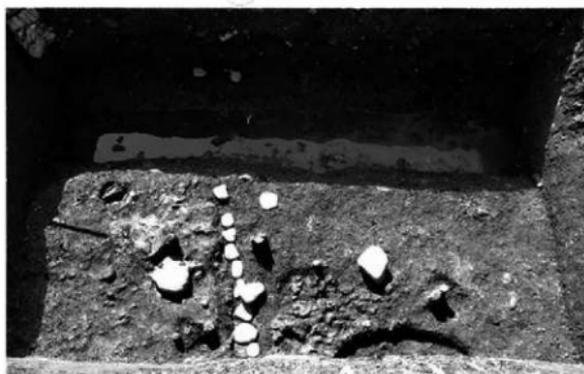
Ⅱ地点



◀ a. I区第2面全景（北から）



▶ b. II区第2面全景（南から）



◀ c. II区第2面全景（北から）

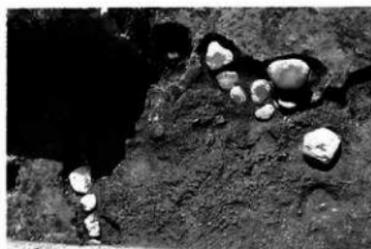
II地点



▲ a. I区第2面 (北から)



▲ c. I区第2面 (北から)



▲ b. I区第2面 (北から)

▶ e. I区調査区南壁
拡張トレンチ



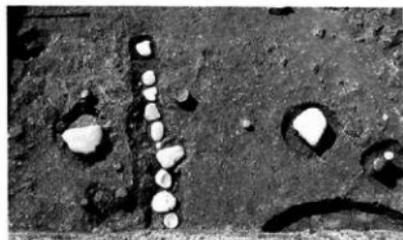
▼ f. I区第2面 土坑1 (西から)



▲ d. I区第2面 礎石建物1 (南から)



▼ g. II区第2面 礎石建物1・溝1 (西から)



▲ h. II区第2面 礎石建物・玉砂利



II地点



▲ a. I区第3面全景
(西から)



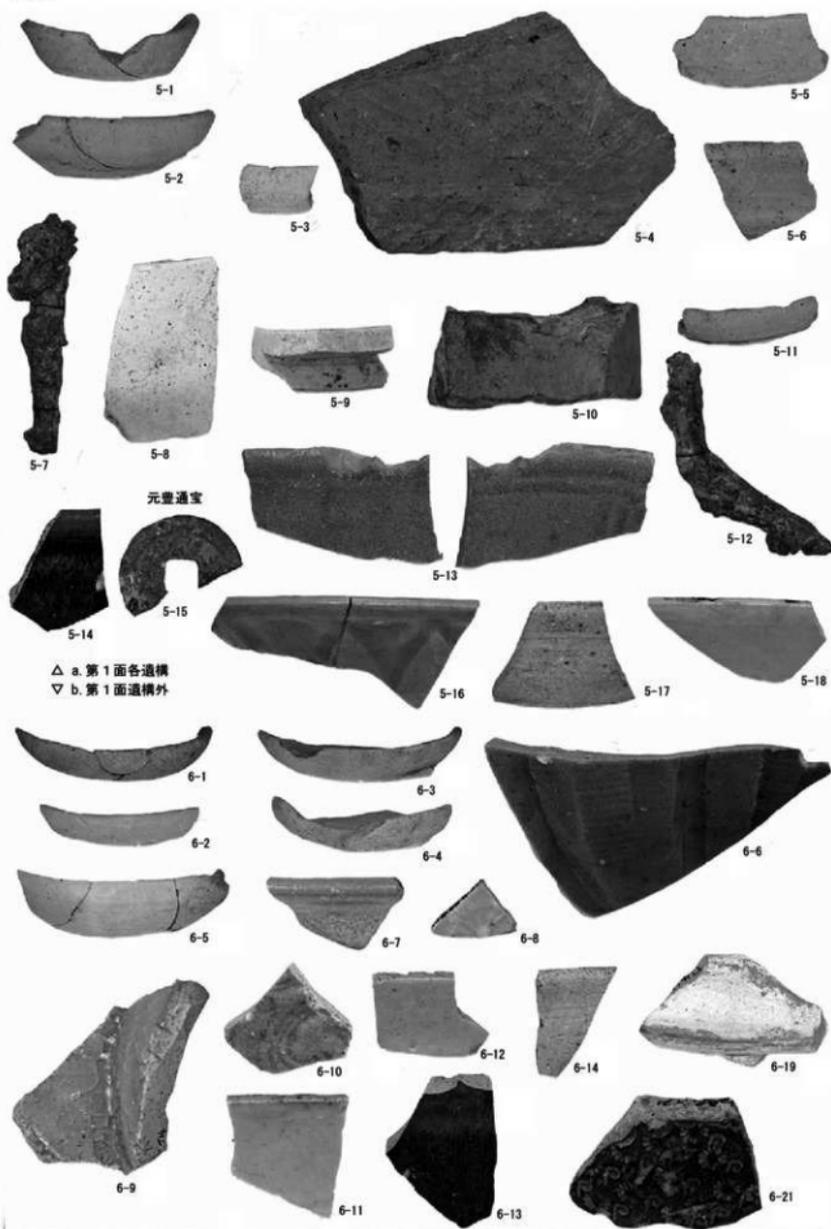
▲ b. I区第3面全景 (北から)

▼ c. I区調査区北壁土層

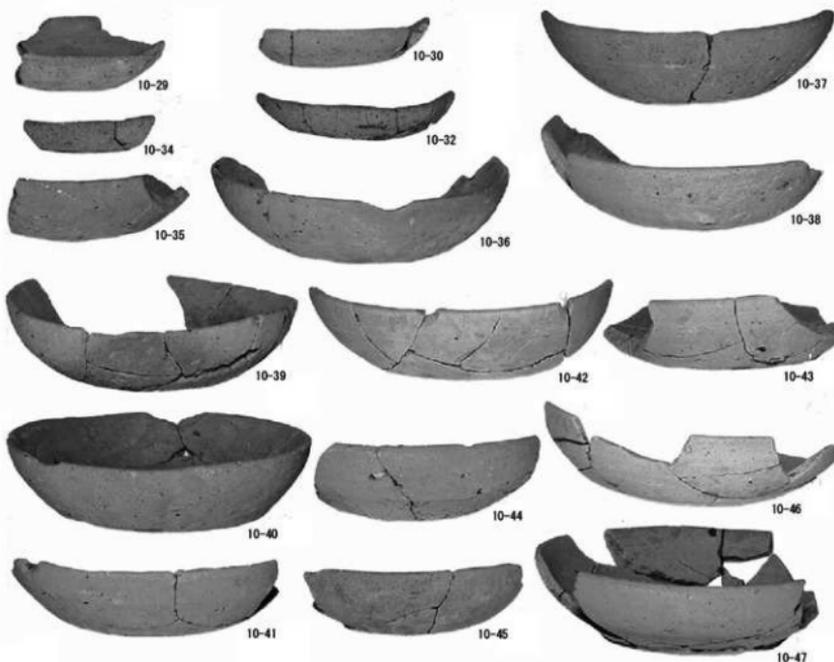
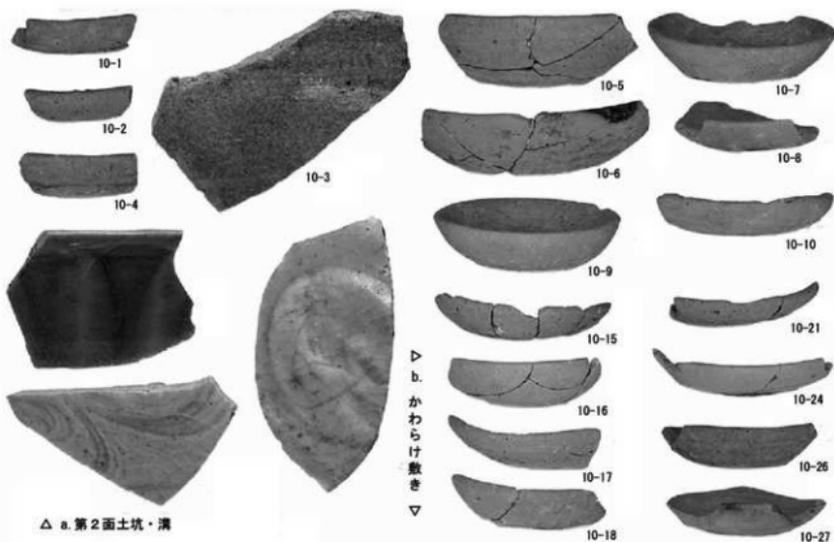


◀ d. II区調査区西壁土層

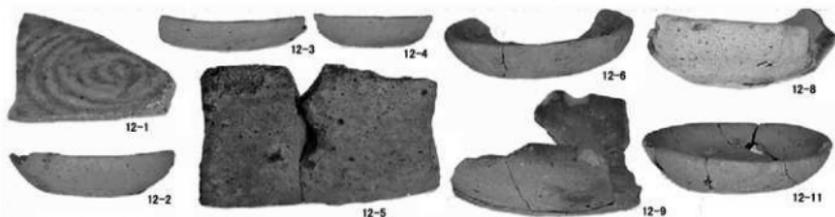
II地点



II地点 第1面

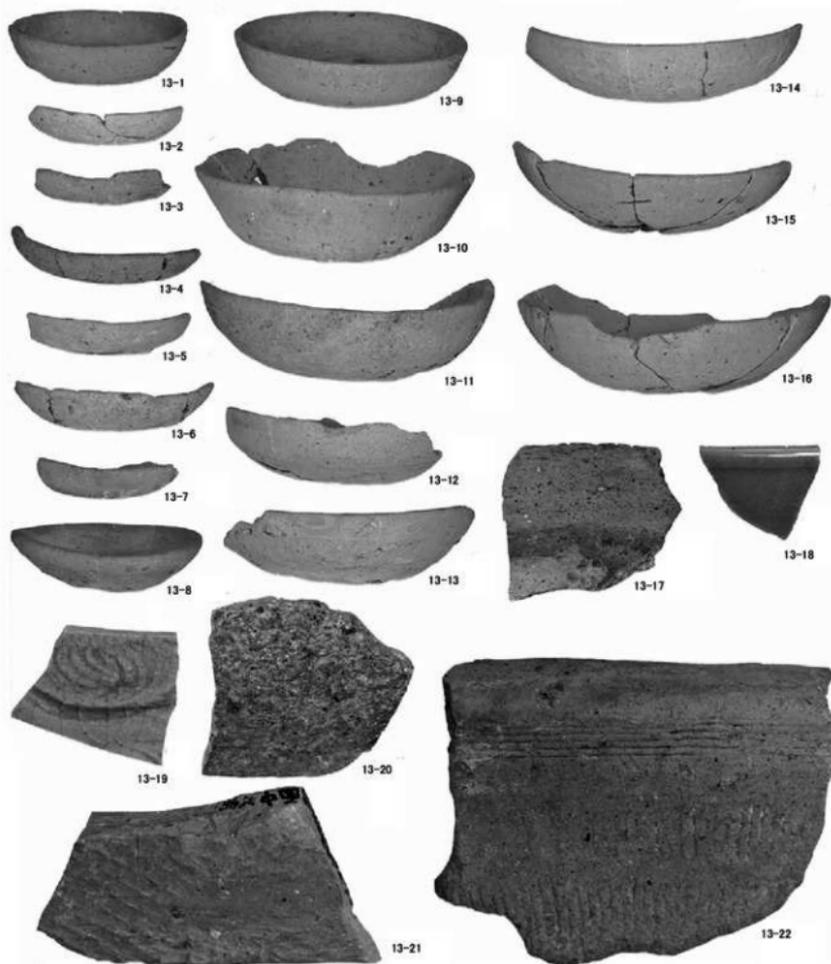


II 地点 第2面(1)



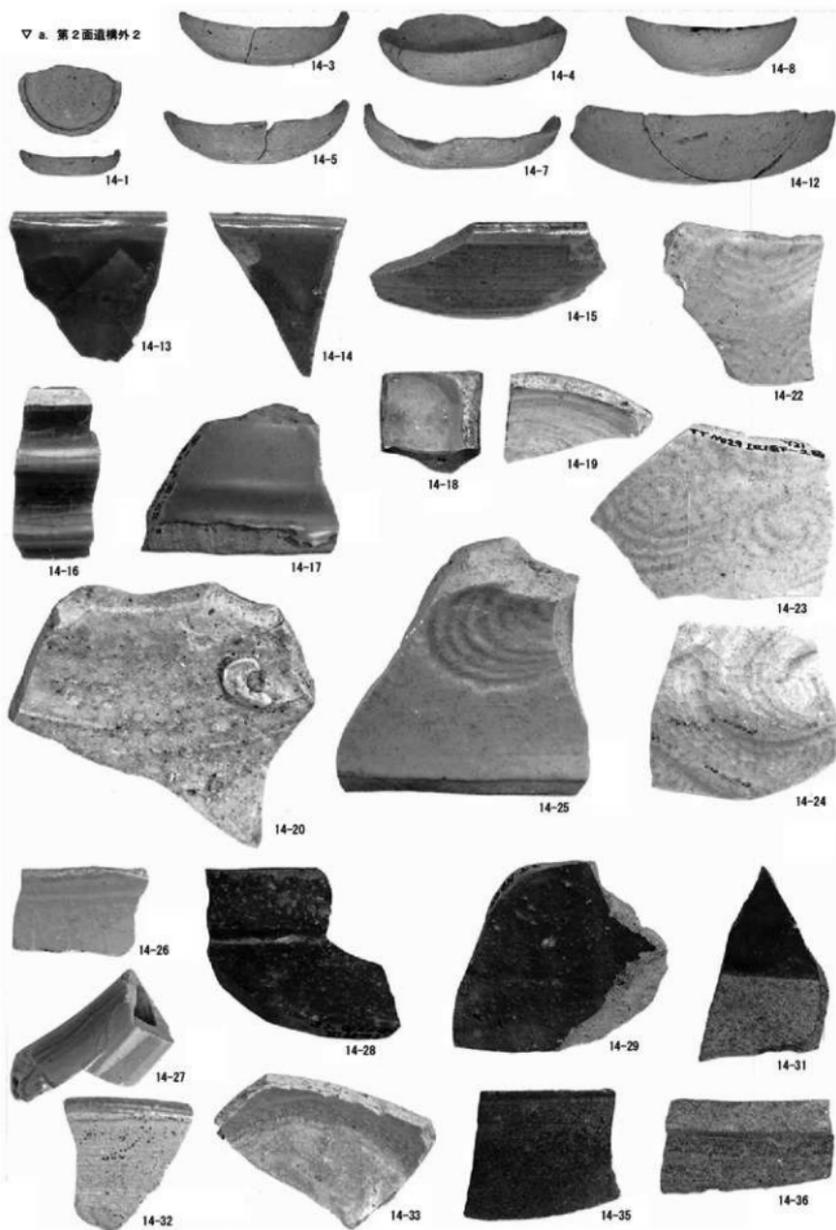
△ a. 第2面ビット
▽ c. 第2面遺構外1

△ b. 第2面玉石列

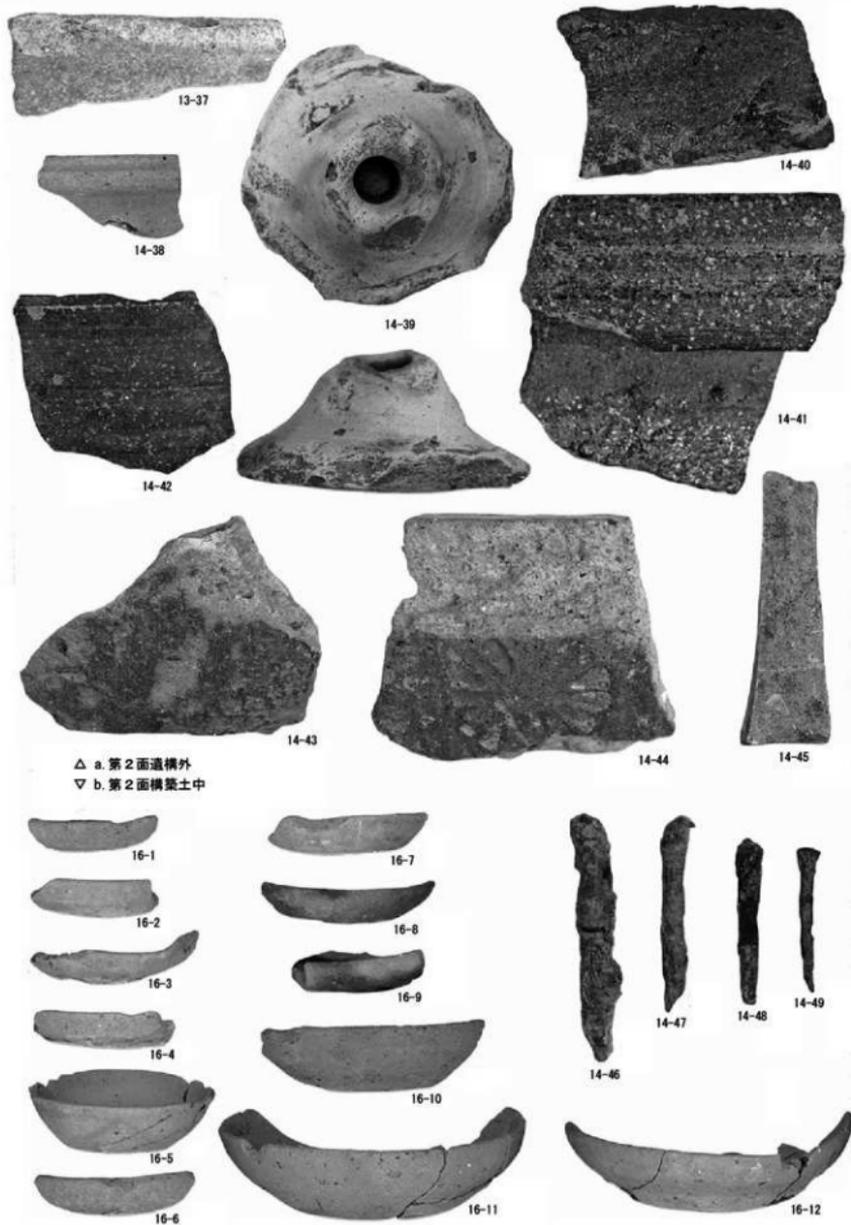


II 地点 第2面(2)

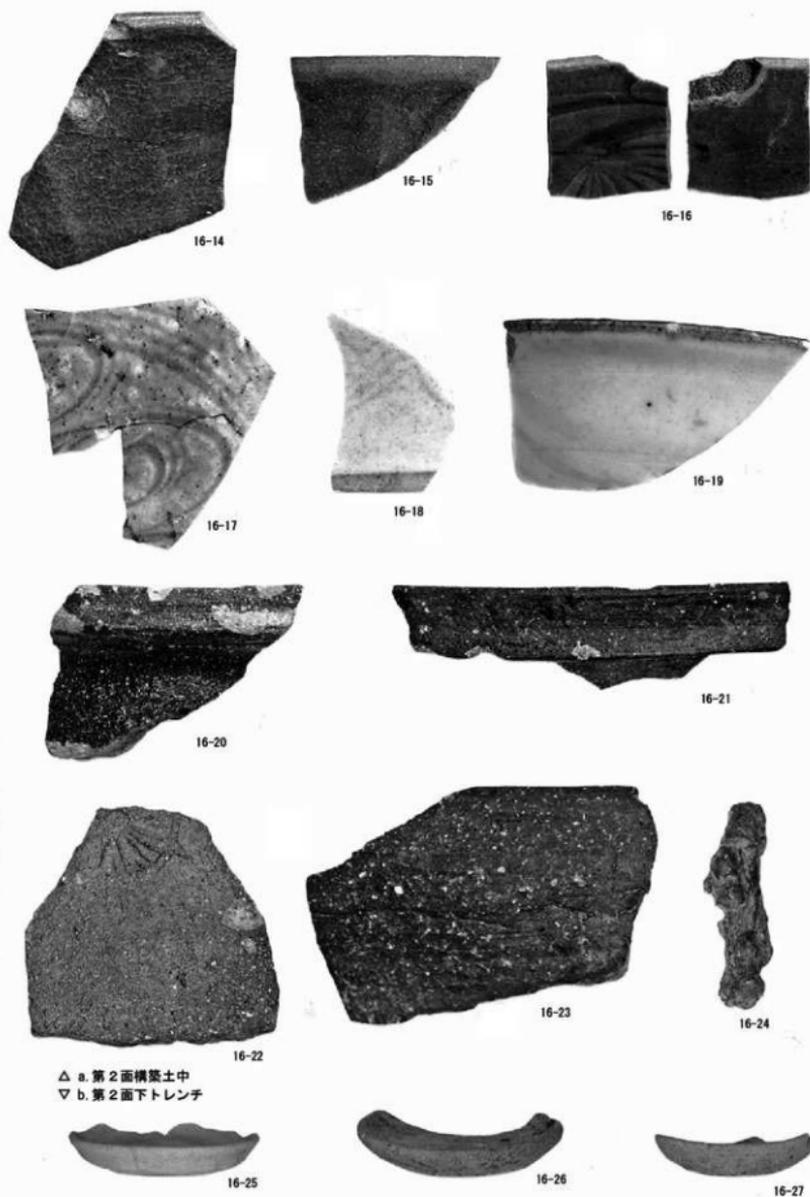
▽ a. 第2面遺構外2



Ⅱ地点 第2面(3)



II地点 第2面遺構外・構築土中



△ a. 第2面構築土中
▽ b. 第2面下トレンチ

II地点 第2面構築土中

浄妙寺旧境内遺跡 (No.408)

浄明寺三丁目 122 番 1・2

例 言

1. 本報は「浄妙寺旧境内遺跡」内、浄明寺三丁目 122 番 1・2 における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2. 調査期間 2004 年 8 月 9 日～同年 10 月 22 日（9 月 14 日～9 月 29 日中断）

調査面積 49.5 m²

3. 本調査地点の略称は J3122 とした。

4. 調査体制

担 当 者 馬淵和雄

調 査 員 松原康子・鍛冶屋勝二・根本志保（資料整理）

調査補助員 白石哲也・大塚悠介・岩崎卓治（資料整理）

作 業 員 小口照男・川崎由紀夫・川島仁司・北島清一・田島道夫（以上社団法人鎌倉シルバー人材センター）

5. 本報作成分担

遺構図整理 馬淵・松原・鍛冶屋

遺物実測 松原・根本・岩崎

同墨入れ 松原・根本・岩崎

同観察表 松原

原稿執筆 馬淵・松原（担当部分末尾に執筆者名を記す）

編集・総括 馬淵

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	117
1. 浄明寺略村誌	117
2. 位置と地勢	117
3. 歴史的環境	119
第二章 調査の概要	125
1. 調査にいたる経緯	125
2. 調査方法と経過	125
第三章 調査結果	127
第1節 層序と各面の概要	127
第2節 各節	130
1. I面	130
2. II面	134
3. III面	138
4. IV面上層面	143
5. IV面下層面	145
6. V面	151
7. VI面	160
8. 遺構外採集遺物	161
第四章 まとめで考察	171
1. 遺構の変遷と年代	171
2. まとめ	173

挿 図 目 次

図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡	118	図18 溝2・柱穴列12・石列, 同出土遺物	144
図2 座標と海拔	126	図19 IV面下層面遺構全区	145
図3 調査区壁土層断面, 同出土遺物(1)	128	図20 建物2, 同出土遺物	146
図4 調査区壁土層断面, 同出土遺物(2)	129	図21 建物3, 同出土遺物	147
図5 I面遺構全区	131	図22 柱穴列13~15, 同出土遺物	148
図6 柱穴列1~5, 同出土遺物	132	図23 井戸1, 同出土遺物(1)	150
図7 土坑1~3, 土師器集中部1, 同出土遺物	133	図24 井戸1出土遺物(2)	151
図8 I面出土遺物	134	図25 土坑7, 同出土遺物	152
図9 II面遺構全区, 建物1・柱穴列6, 同出土遺物	135	図26 土坑6・7・9・12, 同出土遺物・IV面柱穴出土遺物	153
図10 柱穴列7~10・土坑4, 同出土遺物	136	図27 IV面出土遺物	154
図11 土坑14, 同出土遺物, 土坑15・II面柱穴出土遺物	137	図28 V面遺構全区, V面上出土遺物	155
図12 II面出土遺物	138	図29 建物4・土坑13・P.73, 同出土遺物	156
図13 III面遺構全区	139	図30 溝3・4, P.80 出土遺物	157
図14 溝1・柱穴列11・土坑5, 同出土遺物・土坑11・P.34 出土遺物	140	図31 VI面遺構全区	158
図15 土師器集中部2・同出土遺物	141	図32 VI面上/溝5 出土遺物	159
図16 III面・III面構成土出土遺物	142	図33 溝5, 深掘り出土遺物	160
図17 IV面上層面遺構全区	143	図34 遺構外採集遺物	161
		図35 遺構変遷図	172

表 目 次

表1 出土遺物観察表 (1)	162	表6 出土遺物観察表 (6)	167
表2 出土遺物観察表 (2)	163	表7 出土遺物観察表 (7)	168
表3 出土遺物観察表 (3)	164	表8 出土遺物観察表 (8)	169
表4 出土遺物観察表 (4)	165	表9 出土遺物観察表 (9)	170
表5 出土遺物観察表 (5)	166		

図 版 目 次

図版1	175	6-1 建物5 (南から)	
1-1 調査地点鳥瞰		6-2 同前 (東から)	
1-2 浄妙寺背後から調査地点方向を望む (矢印の下)		6-3 V面全景 (西から)	
1-3 稲荷小路 (調査地点は奥右手)		6-4 V面全景 (南から)	
図版2	176	6-5 溝4 (東から)	
2-1 I面全景 (西から)		6-6 溝3 (南から)	
2-2 I面全景 (東から)		図版7	181
2-3 土坑1 (南から)		7-1 溝4側板 (北から)	
2-4 II面全景 (南から)		7-2 溝4内柱穴・東柱 (北から)	
2-5 土坑14 (西から)		7-3 土坑13 (北東から)	
2-6 土坑14 東側石敷き (東から)		7-4 栢杓出土状況 (北壁際)	
図版3	173	7-5 VI面全景 (西から)	
3-1 漆布状物質が付着した常滑片		7-6 溝5 (東から)	
3-2 III面全景 (西から)		図版8	182
3-3 溝1 (南から)		8-1 調査区東壁土層断面	
3-4 土師器集中部2 (西から)		8-2 調査区南壁土層断面	
3-5 IV面下層面全景 (南から)		8-3 調査区西壁土層断面	
3-6 IV面下層面全景 (西から)		図版9	183
図版4	178	出土遺物1	
4-1 溝2・柱穴列12・石列 (東から)		図版10	184
4-2 溝2・柱穴列12・石列 (西から)		出土遺物2	
4-3 溝2・柱穴列12・石列 (南から)		図版11	185
4-4 溝2 (南から)		出土遺物3	
4-5 溝2 内常滑集中部 (西から)		図版12	186
4-6 溝2 (東から)		出土遺物4	
図版5	179	図版13	187
5-1 井戸1 (北から)		出土遺物5	
5-2 井戸1 木枠 (北東から)		図版14	188
5-3 土坑7 (西から)		出土遺物6	
5-4 土坑6内検出の柱・礎板 (東から)		図版15	189
5-5 V面上層面全景 (東から)		出土遺物7	
5-6 V面上層面全景 (南から)		図版16	190
図版6	180	参考資料「浄妙寺境内絵図」	

第一章 遺跡と調査地点の概観

1. 浄明寺略村誌

調査地点は鎌倉市浄明寺三丁目 122 番 1・2 に所在する。浄明寺は滑川中上流域に形成された谷間の集落で、北は二階堂、東は十二所、南は大町と逗子市久木（旧三浦郡久野谷村）、西は雪ノ下に接し、中央を県道金沢・鎌倉線、通称六浦道が貫通する。鎌倉五山の一つである浄妙寺の所在地であるところから、その名が生じた。近世には常明寺とも書かれた。徳川家康が天正十九年（1591）十一月日付で鶴岡八幡宮に与えた社領寄進の判物には、「相模国小坂郡鎌倉之内」の「常明寺」で「八拾九貫七拾文」とみえ（『鎌倉市史 史料編』1-141）、また江戸時代初期の「十二所村等鎌倉中幕領相給村総高帳」に、他の諸村と並んで「常明寺村」がみえる（『神奈川県史 資料編』6）。以後江戸時代を通じて1村であったが、滑川上流の谷間に位置する西御門村・二階堂村・十二所村の3村と併せ、「谷合四ヶ村」として一括されることも多かった。近世は幕府直轄領と鶴岡八幡宮・報国寺・浄妙寺などの社寺領であった。『新編相模国風土記稿』には、天保年間初期（1830年代初め）の浄明寺村家数は29とある。『神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌』によると、明治九年（1876）の家数43、人数213、同十二年（1879）では、田4町6段（反）1畝余り、畑17町3段6畝余り、宅地は2町1段4畝、茅山・藪・山林48町・芝地があり、大町村と雪ノ下村にも田畑や山林の飛地がある。ほかに牛馬4頭となっている（『神奈川県郷土資料集成』第12集「浄明寺村」）。

村内に延福寺・大休寺・泰安寺といった禅宗の廃寺がある。

2. 位置と地勢

調査地点の位置

六浦道を東に進むと、「歌ノ橋」付近から峠状の微高地となったあと杉本寺の手前あたりから次第に下り始め、滑川沿いに200mほどの直線が続く。道は報国寺門前手前から川に沿うかたちで右に折れ、ついで次の微高地に向かって緩やかに上りつつ左に曲がり、約50mで左手（北）の臨濟宗浄妙寺の参道入口にいたる。そこからさらに30m先（東）には参道に平行して北に延びる路地があり、調査地点はこれを100mほど入った右側に位置する。調査地点から約100m奥（北）には「鎌足稲荷」と呼ばれる稲荷社があり、おそらくはそれに由来するのであろう。一帯はかつて「稲荷耕地」と呼ばれていた（『鎌倉町土地宝典』1930など）。ここはまた、南北朝～室町時代前期にこの付近にあった関東の首府「鎌倉府」のほとんど西側隣地というに近い場所でもある。

調査地点西側の路地は「稲荷小路」という。小路は先に触れた稲荷社の下で山裾に当たって右（東）に大きく折れ、200mほどで北に入る狭い谷（「胡桃ヶ谷」）の入口と丁字形に接したあと、平地のへりを囲むようにさらに巡って、「青砥橋」の先で再び六浦道に出てくる。「稲荷小路」に囲まれた場所は東西約400m、南北（奥行）約180mで、調査地点はその西端近くに位置する。東半部には鎌倉府に由来するとみられる「御所ノ内」の遺称がある。

地勢

地勢上からみれば、調査地点は東の朝比奈山塊を下ってきた滑川が、十二所付近の狭い谷間を抜けて両岸に形成した河岸段丘、もしくは山麓平野の上に位置する。段丘平野は平坦ではなく、ほぼ二カ所の微高地とその前後の低地から成る。調査地点付近の六浦道に沿っていえば、いわゆる「青砥橋」付近か

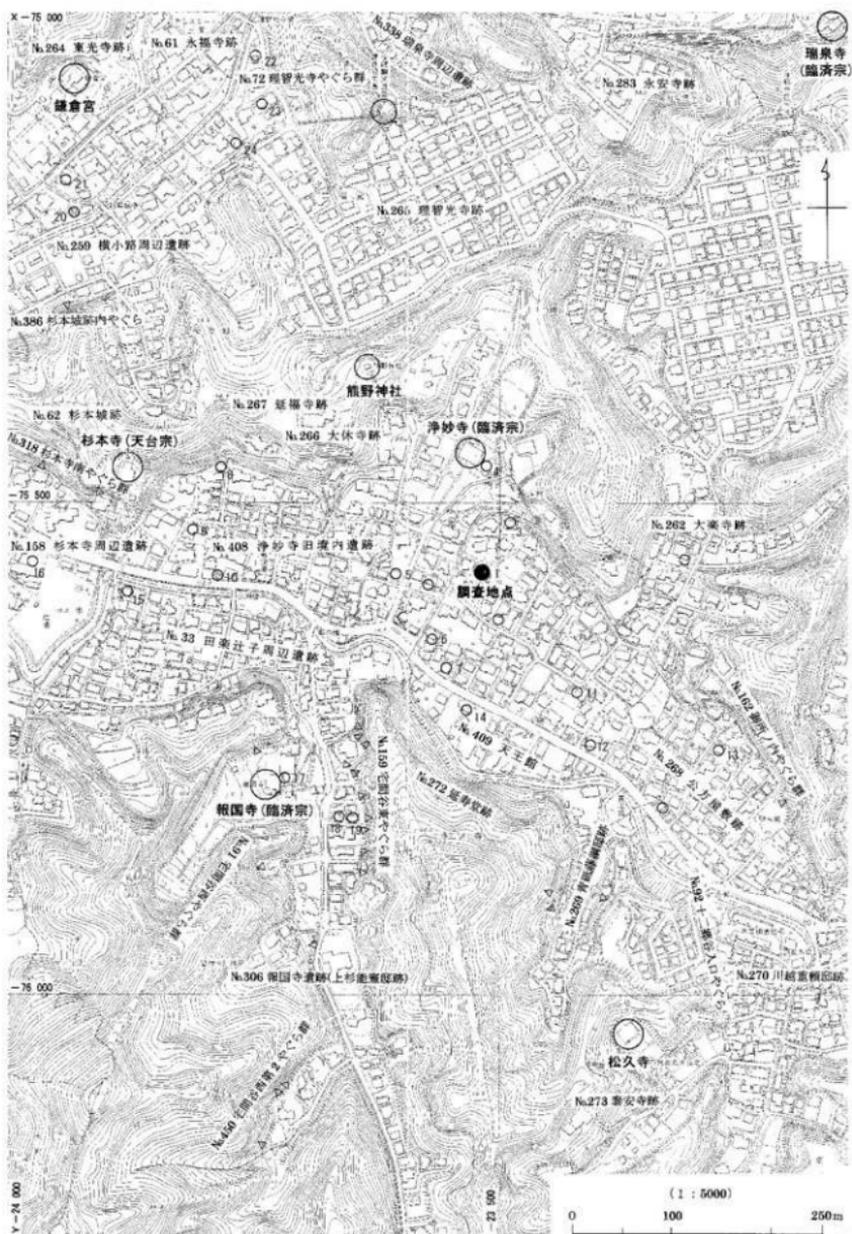


図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図1 調査地点名(遺跡名)・地点番号・地番・(担当者と調査年度)・「調査報告書」(編集者と発行年度)

(No.408 浄妙寺旧境内遺跡)

1. 本調査地点 浄明寺 3-122-1・2(馬淵 2004)
2. 浄明寺字稲荷小路 129-2(原 1984)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1」(原ほか 1985)
3. 浄明寺 3-126(原 2002)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21第2分冊」(原 2005)
4. 浄明寺字向小路 78(斎木 1977)「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1」(斎木 1983)
5. 浄明寺字向小路 90-1(田代・原 1989)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7」(田代・原 1991)
6. 浄明寺 3-101-13(斎木 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22第2分冊」(斎木ほか 2006)
7. 浄明寺 3-115-2(田代 1997)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15第2分冊」(松山 1999)
8. 浄明寺 3-16-1(鎌 2000)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18第2分冊」(宗養 2002)
9. 浄明寺 3-126(原 2002)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21第2分冊」(原 2005)
10. 浄明寺 3-6-3(大河内 1994)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12第2分冊」(大河内 1996)
- (No.268 公方屋敷跡)
11. 浄明寺 3-143-2(原 1992)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10第1分冊」(原 1994)
12. 浄明寺 3-151-1,151-4(宮田 1994)「公方屋敷跡発掘調査報告書」(宮田 1996)
13. 浄明寺 4-273(熊谷 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22第2分冊」(熊谷 2006)

(No.409 天王館)

14. 浄明寺 5-1-10(河野 1980)

(No.33 田楽辻子周辺遺跡)

15. 浄明寺字宅間 562-33(大上 1990)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8」(大上 1992)
- (No.158 杉本寺周辺遺跡)
16. 二階堂 912-1(馬淵 1990, 1999)「杉本寺周辺遺跡」(馬淵 2002)
- (No.306 報国寺遺跡 上杉能登跡)
17. 浄明寺字宅間 533(田代 1976)「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I」(田代 1983)
18. 浄明寺 2-474-12(原 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23第1分冊」(小野ほか 2007)
19. 浄明寺 2-474-11外(原 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23第1分冊」(山口 2007)
- (No.259 横小路周辺遺跡)
20. 二階堂字横小路 110-3(宗養 1994)「横小路周辺遺跡」(宗養 1996)
21. 二階堂字四つ石 115-3の一部(福田 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23第2分冊」(福田 2007)
- (No.265 理智光寺跡)
22. 二階堂字理智光寺谷 749-1(1973 大三輪)「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I」(大三輪 1983)
23. 二階堂字稲葉越 802-7(大河内・瀬田 1990)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7」(大河内・瀬田 1991)
24. 二階堂字理智光寺谷 750-1(手塚 1999)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17第1分冊」(手塚・野本 2001)

ら下流に向かって徐々に高くなっていき、最高位で標高 18.9m ほどの微高地となるが、ここを過ぎて次の微高地である杉本寺前面まで、長さ 500~600m にわたって、最大幅 300m ほどの低平な平坦面が形成されている。

調査地点はこの微高地間低地東縁にある。一帯の現地表の標高は 17.6~17.8m 前後で、微高地間の最低位地点(浄明寺郵便局前面付近)とは 4m の比高差がある。東側微高地より 2m 余り低く、約 100m 北の浄妙寺本堂付近よりもやはり 2m ほど低い。

3. 歴史的環境

縄文時代

縄文時代については、本地点と最も近いところでいえば、直線距離で 700~800m 北西に位置する荏柄天神社の参道脇地表下約 3m・標高 9m 前後の層から、前期の諸磯 b 式土器が採集されたことがあるが(赤星 1959)、本地点付近での報告例はまだない。縄文海進絶頂期の汀線が現在の海拔で 15m~20m だとすると、採集地点の離水時期や遺跡形成時期、あるいは出土層の性格などについて、あらためて検討されなければならない。

弥生時代

滑川沿い中上流付近の平坦面は広くはないが、弥生時代中期には早くも開けていたらしい。本地点西 400m にある杉本寺周辺遺跡(地点 16)では、この辺の基盤層である黒褐色粘質土上に弥生時代の住居址らしい落ち込みが検出され、中期後半頃の遺物も数点採集されている(馬淵ほか 2002)。もう少し西

に行けば、本地点から 900m ほど離れた大倉幕府周辺遺跡群で、住居址数 10 軒と方形周溝墓で構成される中期後半～後期にかけての集落が報告されている（馬淵 1998・1999／斎木ほか 2007）。川沿いでは点々と弥生時代中期後半以降の土器が採集されているので（地点 10—大河内 1996／地点 14—未報告、筆者実見）、本地点周辺でもその頃から人の往来があったとみるべきだろう。本地点西北 600m の横小路周辺遺跡では、西遠江の系譜を引く後期後半の高塚が出土している（野本ほか 1999）。

古墳時代

前期の遺構は、鎌倉市内で今のところ山稜部と海岸部でしか発見されていない。六浦道沿道では、大倉幕府周辺遺跡群のうち鎌倉時代の大倉幕府東南角に当たる地点で、弥生時代末期～古墳時代初期の土師器甕が 1 点見ついているのみで、本地点近在では報告例がない。しかし、逗子市と葉山町の境の山上に 4 世紀代の 2 基の前方後円墳が築かれていることから（「長柄・桜山古墳群」）、古墳時代前期、鎌倉地方にきわめて有力な豪族が蟄居していたことは間違いない。当然、広範な集落の存在も予想されよう。なお 2 基の前期古墳の位置は、後の律令時代では鎌倉と御浦の郡境にあたり、また奈良時代の古東海道に臨む場所でもあるのは、この地が早くから交通の要衝であったことを示唆している。

『古事記』には、倭建命の子足鏡別王が「鎌倉別」などの祖と記されている。ヤマト王権とつながりの深い「ワケ」が鎌倉にいたとすれば、当地が王権にとって東国経営の重要な場所であったことが想像できよう。

後期になるといっきに情報が増える。周辺丘陵地のいたるところで集落が発見され、横穴墓も少なくない。海岸地帯にあったといわれる古墳群（「下向原古墳群」）も、この時期のものであろう。本地点西 800m の大倉幕府周辺遺跡群の一角では、東御門川旧流路とその周辺から当該期の土師器が多数出土しており（馬淵 1993）、西御門山麓の横穴墓の点在と併せて考えれば、近隣に集落の存在することが十分に予想できる。

律令時代（奈良時代～平安時代前期）

この時代、当地方は相模（模）国八郡の一つ「鎌倉郡」に属していた。鎌倉郡はいくつかの郷からなり、律令時代では、尺度・荏草・鎌倉・沼浜・方瀬の五郷が見える（天平七年 735『相模国封戸租交易帳』／天平勝宝元年 749「正倉院古製」）。平安時代中期承平五年（935）成立の『倭名類聚抄』には、上記に加えて梶原・尺度・大島が現れており（方瀬を除く）、これらもあるいはもっと早くから存在した地名であった可能性はあろう。

郷それぞれの範囲はいまだ確定的ではないが、調査地点付近は荏草郷に属していた可能性が高い。「荏草」の読みは、多くの写本を残す『倭名類聚抄』のうち那波道円の元和古活字本では、「エカヤ」と振られている。『新編相模国風土記稿』は、これがのちに現在の大倉東側一帯に残る字「エガラ」に変わったのであろうというが、根拠は示されていない。「エカヤ」と振られているのは元和古活字本の他になく、「荏草」郷の範囲についても議論を要する。おそらく後世の「大倉」以東で（高柳 1959）、六浦道を中心とした地域を指すのであろう。

さて、大化改新直後、五畿七道制が施行され、初期東海道は鎌倉を通過する。鎌倉郷への入り方については後世の大仏坂からと稲村ヶ崎からの二説あり、郷内での経路等についても確定的ではないが、おおむね海岸寄りを通っていたとみて間違いない。初期東海道は鎌倉郡内では鎌倉郷からおそらく小坪を経て沼浜郷（逗子市）に出て、田越川を河口近くで渡った後御浦郡に抜ける。そして葉山町堀内付近から同町木古庭の地溝帯を通過、東京湾側の馳水（横須賀市走水）から房総に渡り、北上して終点の常陸

国府（石岡市）にいたる道筋をとった。

宝亀二年（771）五畿七道制の改編にともない、武蔵国が東海道的に入れられ、代わって常陸国が東山道に編入される。これによって、相模国府を出た東海道駅路は相模野を北上して武蔵府中に行く道筋に変わり、鎌倉から外れることとなった。このことが、後述するように、鎌倉の集落構造に新たな要素を付け加えることになる。それは調査地点付近にも大きな影響を与えずにはいなかったはずである。

王朝国家時代

房総の大乱平忠常の乱（長元元年 1028～長元四年 1031）を平定するため、源頼義は父頼信とともに関東を下り、検非違使平直方に代わってこれを収める。頼義は康平五年（1062）、安倍貞任を討って「前九年の役」に勝利し、東国で「武家の棟梁」としての地歩を固めた。頼義は岳父となった直方から鎌倉の所領を譲られ、由比に石清水八幡宮を勧請して瑞籬を営んだ。みずからの拠点に精神的な核を据え、これによって鎌倉は名実ともに東国における河内源氏の拠点となった。

1世紀後、頼義四代の後裔義朝は、のちの寿福寺の場所に居館「鎌倉之楯」を構えた。朝比奈岬を越えて鎌倉に入ってきた「六浦道」は、鶴岡八幡宮のまだなかったこのころ、大倉の辺から直線的に義朝の館に向かう。当時「鎌倉之楯」は、いわば六浦道の終点ともいえる場所に位置している。要するに「六浦道」は、当初、六浦津から義朝邸に向かう道として出発したのである。

かつて直方や頼義は、平忠常の乱に向かう際、鎌倉を兵站基地とした（野口 1993・馬淵 1994）。房総に渡る彼らの船はどこから出航したのだろうか。かつての東海道駅路の津であった走水は、鎌倉からは現在の単位で 30km 近くあり（地図により馬淵概測）、当時でも、駅路が廃されてから 300 年近くを経て衰退の気配すでに濃かったのではないか。このとき、より鎌倉に近い東京湾側の天然の良港であった平潟湾が、代わって津として整備された可能性を視野に入れておきたい。六浦は武蔵国久良（岐）郡に属するが、中世には「相州六浦」などと記された史料が散見される。西岡芳文はこの点に関して、「平忠常の乱の追討のために、鎌倉から上総へ通じる六浦が、海上交通の要衝・兵站基地として、事実上相模国の支配下におかれていたのではないだろうか」とし、「実は六浦が鎌倉と一体化して相模国衙の支配下にあった痕跡」である可能性を指摘している（西岡 2001, 53 頁）。背ける意見である。

このころ、六浦道に至近の位置にある調査地点一帯がどういう状況であったかは、伝わらない。律令時代の「荏草」は平安時代のいつかの時点で「荏柄」に転訛した可能性が高いとされるが、今のところ当地点とのかかわりは不明である。

鎌倉時代

平安時代末期から鎌倉時代の初めにかけて、六浦道は三浦一族が要所を固めていた。東の起点である六浦には「和田ヶ谷」があって和田氏の本拠とされ（異見もある）、また朝比奈岬には和田義盛三男の朝夷奈三郎義秀が蟠居していたと伝わる。中間の要衝杉本にはここを名字の地とする杉本義宗（三浦大介義明長男、和田義盛父）が住み、のちにおそらく和田に相承されている（馬淵ほか 2002）。西の起点義朝の館跡には、平安末期、岡崎義実（義明弟）・土屋義清父子が堂を営んでおり、義朝死後その地を管理していたことがわかる。また、六浦道から指呼の距離にある「荏柄（社）」の前にありて御所の東隣たる「『吾妻鏡』建保元年三月二十日条）場所には、義盛甥和田胤長の「屋地」もあった。ここにみられる三浦一族の配置には、彼らが「源家累代の家人」を名乗る所以が示されている。六浦道を守る意識の背後には、旧義朝邸が依然として武士団の精神的な拠りどころであり、それに向かう六浦道が集落の基軸と看做されていることがわかる。しばしば指摘されるように、頼朝が大倉に居館（「御所」）を構えたのも

その認識に立っていたからであろう。

しかし鎌倉時代において、調査地点付近の情報の伝わるのは中期になってからである。現在の地名「浄明寺」の元となった臨濟宗寺院浄妙寺の開創以後のことであるが、この寺については後述する。鎌倉後期から末期にかけて鎌倉中で何度か起きた災害が、この一帯に及んだかどうかはわからない。しかし、弘安三年（1280）の火災や『鶴岡社務記録』など、永仁元年（1293）の大地震（『随聞私記』）、乾元元年（1302）の大火（同前）・延慶三年（1310）の火災（『北条九代記』）などは近在での罹災が記録されているので、その影響を想定しておくべきだろう。

南北朝～室町時代前期

元弘三年（正慶二年、1333）5月、鎌倉幕府が滅ぶ。直後に鎌倉に入った足利尊氏の嫡子千寿王（義詮）は、二階堂の別当坊に居を占めたという。これを『新編相模国風土記稿』では永福寺といているが、高柳光寿はこれについて、「二階堂の別当坊ということは永福寺の別当坊ということで永福寺そのものではない」といっている（高柳 1959, 1972 改訂版 372 頁）。従うべき見解と考えるが、いずれにせよ永福寺のある谷間のどこかであろうから、調査地点とも山一つ隔てた、当地点からそう遠くない場所ということになる。この戦乱の影響については不明である。

延元二年（建武四年、1337）、陸奥の北畠頼家は奥州五十四郡の勢を合わせて10万余騎をもって鎌倉に攻め入る。頼家は朝比奈宗幹から鎌倉に入り、「杉本城」で足利方の大将である斯波三郎家長と戦った（『常楽記』建武四年十二月廿二日条）。このとき自軍の不利を知った足利方は、「城ヲ堅クシ翌ヲ深クスル謀ヲモ事トセス、一萬余騎ヲ四手ニ分ケテ、道々ニ出合、懸合懸合、一日支テ、各身命ヲ惜シマス戦」ったという（『太平記』巻十九「追奥勢跡道々合戦事」）。家長は三浦に退いて自刃している（『御的日記』、ただし『常楽記』『鎌倉大日記』は杉本城とする）。「杉本城」とは杉本寺背後の山塊のことである。この山塊が「城」と呼ばれるのはこの時期を措いて史料上にないが、赤星直忠は城域を東に広く見て、浄妙寺はもちろん北東の瑞泉寺の裏山付近まで郭の存在を想定している。北畠軍は合戦後東海道を西に向かうが、『太平記』によれば彼らは「無慚無愧の夷ども」で、途中路次の民家を掠奪し神社仏閣を焼き払っている。「城」の範囲内に本地点背後の山も当然含まれていること、また戦いが「道々」でおこなわれた、とあること、そして北畠軍の行状からみて、戦火が調査地点にも及んだ可能性は高い。

建武二年（1335）、権力を得た足利尊氏は、嫡子義詮を鎌倉に置き関東の管理にあたらせる。暦応元年（延元三年 1338）8月に征夷大将軍となった尊氏は、貞和五年（1349）10月、義詮のかわりに5歳の次男基氏を関東の首長として下向させる。彼の居宅を「鎌倉府」・「鎌倉御所」・「関東幕府」（義詮周信『空華日用工夫略集』）・「公方」などと呼んだ（ここでは「鎌倉府」と呼ぶ）。鎌倉府は以後足利五代にわたって存続するが、実質的には四代目持氏の永享十一年（1439）に滅ぶ（永享の乱）。鎌倉府については、調査地点東側のほとんど隣地というに近い場所にあり、その動静が当地点にも直接的影響を与えたことは間違いないので、これについては別に述べる。

さて、鎌倉府の設置により、鎌倉の街構造は大きく変わった。すなわち少なくとも権力者の意識構造の内部においては、石井進のいうように、街路の基軸が鎌倉時代の鶴岡八幡宮と若宮大路からかつての六浦道に戻ったと看做さざるをえない。それは確実に、旧幕府による都市空間を否定する意図に発していたと考えたい。しかし、鎌倉の全体的な顔勢のなかにあつて、かつての若宮大路一帯のような繁栄が六浦道にもたらされることは、ついになかったであろう。

永享の乱から10年後の宝徳元年（1449）、持氏の子成氏（永寿王）が京から下つて公方となる。この

とき従来の浄妙寺の公方屋敷は焼けていたという『鎌倉大草紙』。これがいつの火災によるものかは不明だが、その時には調査地点にも影響が及んだ可能性は高い。享徳三年（1455）、成氏は下総古河に去り、鎌倉府は完全に潰えた。以来鎌倉は政治的にも一集落に戻り、都市的性格を急速に失っていったはずである。高柳光寿によれば、明応の頃（1492～1500）にそれまでの都市区画である丈尺制に基づいた屋地の制はすたれ、かわって坪の制が用いられるようになった、という（高柳 1959）。これは鎌倉内の土地管理制度が、都市のそれから村落のそれに移行したということである。

鎌倉の都市的な場は、鎌倉幕府崩壊後若宮大路周辺から次第に失われていき、14世紀第3四半期以降の鎌倉府の時代には六浦道沿いに移行していたであろう。しかし、それとてもかつての繁栄には遠くおおよばず、鎌倉府の滅亡を待たずして、14世紀後半頃には早くも衰退の気配濃厚だったのではないかと。

近世以後

近世に入ると、鎌倉を扱った旅行記・地誌は多く書かれるようになるが、調査地点近辺に関する記述は、杉本寺を除いて目ぼしいものはない。江戸時代後期になると、相模湾でとれた魚を材木座に集積し、六浦道を経由して金沢（六浦）に運んだあと、船で江戸に向かう搬路が形成されたという（阿部 1958）。六浦道自体の往来はある程度盛んだったことがうかがえる。本章第1項に述べたように、『皇国地誌』によれば、明治初期の浄明寺村が山がちの地形であって、漕川沿いにさほど広くはない田畑があるという状況が見てとれる。

稲荷山浄妙寺について

遺跡名ともなっている浄妙寺は、調査地点から北西へ直線距離で約80m（山門まで）の位置にある。山号稲荷山。この寺の動静は、六浦道や鎌倉府とともにこの一帯の情勢に深く影響したであろう。この寺の沿革について、川副 1959 などにより要点だけ記しておくたい。

浄妙寺の開創経緯については、不明な点が多い。寺伝『稲荷山浄妙禅寺略記』（『浄妙寺略記』）によれば、文治四年（1188）足利義兼が創建し、寺号を極楽寺とつけた。開山は退修行勇であった。のち義兼の子義氏が、当初密教の道場であった極楽寺をあらためて禅刹とした。『新編相模国風土記稿』は、宝暦八年（1758）の碑文（『浄妙寺略記』所載）により、極楽寺が禅刹となった年代を建仁元年（1201）とする。しかし、『略記』中の「当山歴代」にはその後寿福寺系の妙寂全玄・大猷が心が住したとあるので、禅刹とはいえ密教的な傾向が強かった。それを足利貞氏が中興したらしい。川副武胤はこれを次のように整理している。

はじめ極楽寺といい、寿福寺と同じく密教的な傾向のある寺院であったのが正嘉のはじめ關溪道隆に嗣法した月峯了然が住山して後、純粹の禅にかわり、さらに後に寺号を浄妙と改めた。又貞氏がこれに帰依し、この寺の檀那となったと考えられる（川副／貫 1959, 242 頁）。

鎌倉時代浄妙寺の沿革に関しては、筆者は大きく次のように把握する。当地にあった足利義兼建立の極楽寺が禅刹に変えられたのは、寿福寺創建と同じく宋風禅の導入政策の一環としてとらえられる。正嘉のはじめ（1257年頃）の純粹禅への移行は、建長年間から弘長・文永年間（1260年代～70年代前半）にかけて全国的に起きた北条得宗政権による禅律重視策（馬淵 1998）の現われであろう。

貞氏の子尊氏もこの寺に縁が深かった。ただしずっと足利氏の氏寺だったわけではなく、北条高時が元弘二年（1332）から建武元年（1334）までの一時期、竺仙梵樞を浄妙寺に請住させている（川副／貫 1959, 244 頁）。元亨三年の貞時十三回忌に、浄妙寺の僧衆51人が参加していることから、川副武胤は寺の総人口を100人前後と推定している。

鎌倉幕府滅亡後ほどなく、鎌倉の諸寺院に対し後醍醐天皇の新政府はそれらの所領を安堵している。鎌倉府の時代には、足利氏菩提寺の一つとして毎年2月公方の参詣を受けている。南北朝時代はこの寺のもっとも盛んであった時代であろうと推測されるが、資料に乏しく、規模など詳細は伝わらない。関東五山に列せられたのは、制度がはじまってしばらく経った文和二年(1353)以後のことである。

鎌倉府は当寺の東300~400mの距離にあるので、火災などがあれば当寺も影響を免れえなかったであろう。応永三十一年(1424)には寺が焼けており、永享元年(1429)および永享二年にも焼けている。享徳四年(1455)の乱のとき、幕命により公方成氏を討つために鎌倉に入った今川範忠の軍は、御所と「谷七郷」に火を放ったが、これらの火が当寺に及んだ可能性は高い。とすればその間にある調査地点もまた、確実に罹災したであろう。

鎌倉府の庇護を失ってからは衰えたらしく、文明十八年(1486)にこの寺を訪れた堯恵は、「台あれて春の草にかたぶき、ひはだ朽て苔のみどりにひとし」と荒廃を伝えている(『北国紀行』)。

その後、鎌倉の寺社の復興に努めた小田原北条氏から、天文年間に計四貫三〇〇文の寺地の寄進を受け(天文十六年1547・同二十二年1553)、天正十九年(1591)には徳川家康からも北条氏と同高が寄進されている。承応二年(1653)には、天正十八年(1590)以来欠いていた梵鐘を铸造した(『新編鎌倉志』所引の梵鐘銘文による)。寛文二年(1662)再興のための勅進がおこなわれた。寛延元年(1748)、火災。宝暦四年(1754)には仏殿が再興された(『浄妙禅寺略記』)。江戸時代の塔頭は10余りあったが、現在はすべて廃絶した。明徳三年(1393)銘の足利貞氏逆修の宝篋印塔が境内にある。

鎌倉府と当地点

鎌倉府は調査地点の東隣の地にあたり、その動静が当地点に直接的な影響を与えたことは間違いない。あらためてその消長をみて、当地点とのかかわりを探ってみたい。

鎌倉府は関東10カ国を統治する機関で(のち氏満の明徳三年1392に12カ国に)、首長は「関東公方」・「鎌倉公方」・「鎌倉殿」などと呼ばれ、基氏以下、氏満・満兼・持氏・成氏の五代をいう。補佐役として執事が置かれ、当初義詮の執事として斯波家長があつたが、家長が先述の杉本の戦いで敗死したあと、尊氏は高師冬と上杉憲顕を京都から下した。補佐役の二院制は尊氏と弟直義の二頭政治を反映したもので、観応二年(正平六年1351)まで続く。

観応の擾乱(1350~1352)で直義が滅んだ後、尊氏は配下の畠山国清を基氏の補佐役に置いたが、国清没落後の貞治二年(正平十八年1363)、基氏は隠棲していた旧直義派の憲顕を管領として再び迎えた。関東管領の称が確立されるのはこれ以後である。

基氏没後、公方は次第に京都の将軍と対立するようになり、四代持氏のとき上杉禪秀の乱後将軍を足利義政と競い、六代將軍義教と衝突して永享十一年(1439)乱をおこした(永享の乱)。戦いは幕府方の勝利に終わり、持氏は永安寺で自刃する。これにより鎌倉府は実質的に消滅したといえる。

永享の乱から10年後の宝徳元年(1449)、持氏の子成氏(永寿王)が京から下って公方となる。このとき従来の浄妙寺の公方屋敷は焼けていたので、成氏は山内の龍奥(興)院を経て浄智寺に入った。翌宝徳二年十一月、新第ができてそれに移ったという(『鎌倉大草紙』など)。この「新第」がどこであったかはわからない。しかし成氏も管領上杉憲忠を謀殺して幕府と衝突し、康正元年(1455)下総古河に逃れる。これで鎌倉府は完全に消滅した。

(馬淵)

引用・参考文献は第四章末に一括

第二章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

本調査区は市内東部の浄明寺三丁目、県道金沢・鎌倉線の北側、現在の浄妙寺境内の東南約 80 メートルに位置する。個人専用住宅の鋼管杭打ちによる基礎工事が行われることになり、平成 16 年 (2004) 6 月 3・4 日に確認調査を行った結果、表土下約 75cm より中世遺物・中世遺構面を確認したため本調査を行うことになった。

2. 調査方法と経過

北側に小山を控えた平坦な場所に位置する当調査地は旧浄妙寺境内に含まれる可能性がある。現地地表 60～70 cm までおよぶ表土層のうち、50～60cm まで重機を用いて除き、以下を人力により掘削した。

調査面積は 49.50 m²。調査時の測量は便宜上、任意の方眼設定を用いて実測した。本書に図化するにあたっては、周辺の 4 級基準点から調査地点の座標を求めた後、遺構図と座標軸を照合したものを掲載した。調査区は X-75 566～75 576・Y-23 517～23 524 (エリア 9) 内に位置する。

調査は平成 16 年 8 月 9 日～同年 10 月 22 日の期間を要した。主な作業内容は以下のとおり。

8 月 9 日 (月) 重機による表土掘削	遺構確認開始
8 月 17 日 (火) 機材搬入	10 月 4・5 日 (月・火) 豪雨により水没
8 月 18 日 (水) I 面遺構確認開始	10 月 6・7 日 (水・木) V 面上層全景撮影
8 月 23 日 (月) I 面全景撮影・平面実測	10 月 8 日 (金) 台風に備え養生
8 月 24 日 (火) II 面への掘り下げ・遺構確認開始	10 月 14 日 (木) V 面全景撮影
8 月 27 日 (金) II 面全景撮影	10 月 15 日 (金) V 面平面実測・VI 面へ掘り下げ開始
8 月 28・30 日 (土・月) 平面実測	10 月 16 日 (土) 調査区壁精査開始
8 月 31 日 (火) III 面へ掘り下げ・遺構確認開始	10 月 19 日 (火) 台風に備え養生
9 月 3 日 (金) III 面全景撮影	10 月 22 日 (金) VI 面全景撮影。調査区壁土層断面実測および座標移動をおこなったのち機材撤収、調査を完了する
9 月 4 日 (土) III 面平面実測	
9 月 14 日 (火) 作業中絶	
9 月 29 日 (水) 発掘調査再開。IV 面全景撮影	
9 月 30 日 (木) IV 面平面実測・V 面への掘り下げ・	

(松原)

第三章 調査の成果

第1節 層序と各面の概要

地表面

標高は、調査区東側が高く約 17.70m、西側が 17.60mであり、その下の表土は平均 60 cm前後の厚みがある。表土は多く近世～近代の耕作土で、粗い暗灰褐色を呈している。これを除くと、10～20 cmの遺物包含層を挟み、第Ⅰ面が現れる。

Ⅰ面

標高 17.0～17.1mにある。面上にある包含層は大量の炭化物や泥岩の小塊、遺物片を含む粘性ある土で、出土遺物からみて、南北朝時代以後の中世後期にすでに入っているとみてよい。

この面はおおむね拳大～半人頭大の破砕泥岩による地形で構築され、下層ほどには遺構密度は高くない。検出遺構には土坑 4 基、土師器集中部 3 群、柱穴列 5 列を含む柱穴様の小穴 34 口などがある。そのほか、面上に土師器皿の大型片が 10 数点散在している。調査区西南角付近で、近世とみられる大型の浅い土坑 1 基が検出されている。

Ⅱ面

Ⅰ面を構成する泥岩群や挟雑物の多い茶褐色～暗褐色粘質土は、15～25 cmの厚みがあり、これを排除すると、広い範囲で人頭大凝灰岩切石の粗く敷かれた面が現れ、これを「Ⅱ面」とした。凝灰岩と凝灰岩の間は拳大～半人頭大の泥岩や黄褐色のロームで充填される。面の標高は 16.8～16.9m。

検出された遺構は、土坑 3 基、掘立柱建物 1 棟・柱穴列 5 列を含む柱穴様の小穴 51 口などで、小穴の中には礎石の可能性のある加工された凝灰岩の入ったものもある。

Ⅲ面

Ⅱ面構成土である凝灰岩・泥岩・ローム地形土を排除すると、15～20 cmでⅢ面に当たる。この面はおおむね数cm大の泥岩や炭化物・遺物が大量に入った明黄褐色土を敷いて構築されているが、西南の一部は人頭大泥岩を敷いた強固な地形層が見られる。面の標高は 16.6～16.8m。

調査区中央部から東南域にかけて、東側は溝 1 に落ちていき、西側も直線的に段をなす約 3m幅、高さ 10 cmほどの浅い高まりがある。

検出された遺構は、溝 1 条、土坑 3 基、柱列 1 列を含む柱穴様の小穴 9 口、土師器集中部 2 群などである。

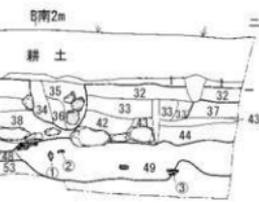
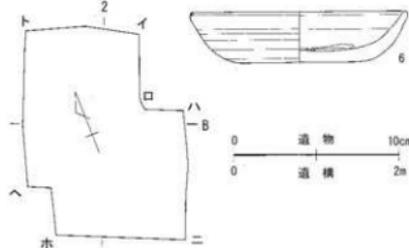
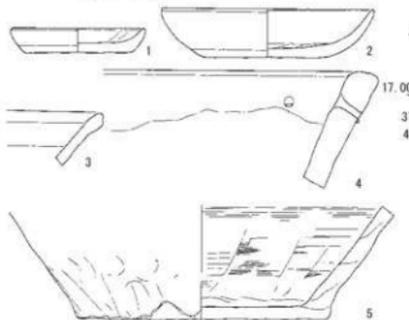
Ⅳ面上層面

Ⅲ面構成土は 20～30 cmの厚みがあり、その下に暗茶褐色～明茶褐色の泥岩地形と炭化物の混じった硬い面がある。これをⅣ面とした。しかし「Ⅳ面」の構成層は 5～10 cmの厚みを持ち、その下にはもう一枚の面がある。調査時点ではこれを「Ⅳ面下層面」とし、当初の面を「上層面」と称して区別した。後述するように、両者はまったく異なった面の状況を持っているため、本来ならば下層面には別の数字（「Ⅴ面」）を与えることを考慮すべきであるが、資料整理時の混乱を避けるため変更しなかった。

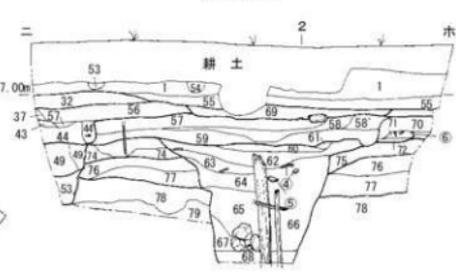
上層面は標高 16.35～16.5mにある。面西半部に土師器・木製品等の遺物の散在する平坦面があり、その東端は南北に列をなす 7 個の凝灰岩切石で示されている。その 80 cm前後東側には切石列に平行して柱穴の連接する長さ 2.1mほどの落ち込みがあり、さらに 80 cm東側の調査区東壁際には、木枠を持つ溝 1 条が南北方向に通じる。また二箇所炭化物のひろがりが見られる。切石列の西側には土師器と角



東壁北側



東壁南側

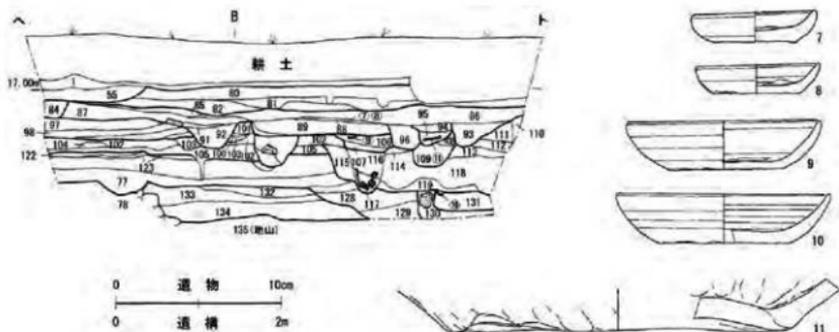


南壁

- 1 黒褐色粘質土 泥岩粒、炭化物、スコリア、山砂 1面
- 2 赤褐色粘質土 泥岩粒多量、玉石、土師器片少量 1面
- 3 暗茶褐色粘質土 泥岩粒多量、炭化物、土師器片少量
- 4 茶褐色粘質土 大泥岩粒多量、土師器片、炭化物少量
- 5 暗茶褐色粘質土 小泥岩粒多量、土師器片、炭化物少量
- 6 黒褐色粘質土 泥岩粒多量、ロームブロック少量
- 7 ローム土 泥岩粒、炭化物少量
- 8 暗茶褐色粘質土 泥岩粒多量、炭化物、土師器片
- 9 暗茶褐色粘質土 泥岩粒多量、炭化物、土師器片
- 10 暗茶褐色粘質土 泥岩粒多量、炭化物、土師器片
- 11 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、ロームブロック 炭化物少量
- 12 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物、土師器片
- 13 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、ロームブロック
- 14 暗茶褐色粘質土 砂岩ブロック、木片
- 15 暗茶褐色粘質土 砂岩、ロームブロック多量
- 16 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、泥物、木片、土師器片少量
- 17 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物多量 炭化物、土師器片
- 18 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物多量
- 19 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物、土師器片、炭化物
- 20 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物、土師器片、炭化物
- 21 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物、土師器片、炭化物
- 22 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物、土師器片、炭化物
- 23 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物、土師器片、炭化物
- 24 木炭層
- 25 大泥岩〜大泥岩がつまる 隙間は暗褐色腐植土
- 26 黒褐色粘質土 木片、貝片多量、泥岩
- 27 黒褐色粘質土 遺人物などなし
- 28 暗茶褐色粘質土 炭化物、木片
- 29 暗茶褐色粘質土

- 30 暗茶褐色粘質土 準大泥岩、炭化物、山砂
- 31 暗茶褐色粘質土 小石大泥岩、炭化物、土師器片
- 32 準大泥岩、炭化物、土師器片
- 33 明褐色粘質土 泥岩粒、炭化物多量、土師器片、山砂
- 34 暗褐色粘質土 土師器片、炭化物多量、粒〜準大泥岩
- 35 暗褐色粘質土 泥岩、炭化物、土師器片、炭化物
- 36 暗褐色粘質土 泥岩、炭化物
- 37 準大泥岩連行 炭化物多量
- 38 暗茶褐色粘質土 粒〜準大泥岩、炭化物多量
- 39 暗茶褐色粘質土 粘性強、土師器片、山砂
- 40 暗茶褐色粘質土 準大泥岩多量、炭化物、土師器片
- 41 暗茶褐色粘質土 準大〜大泥岩つまる、炭化物
- 42 暗茶褐色粘質土 粒〜準大泥岩多量に粘る
- 43 黒褐色粘質土 炭化物多量、小石大泥岩、土師器片
- 44 大泥岩層
- 45 暗茶褐色粘質土 炭化物多量、小石大泥岩、木片、土師器片
- 46 暗茶褐色粘質土 炭化物多量、小石大泥岩、粘性強
- 47 暗茶褐色粘質土 小石大泥岩多量、粘性強
- 48 暗茶褐色粘質土 小石大泥岩、炭化物、木片、粘性強
- 49 暗茶褐色粘質土 小石大泥岩、炭化物、木片、土師器片
- 50 暗茶褐色粘質土 準大泥岩多量、炭化物、木片
- 51 大泥岩層
- 52 暗茶褐色粘質土 小石大泥岩、炭化物
- 53 暗茶褐色粘質土 炭化物多量
- 54 暗茶褐色粘質土 土師器片、炭化物、木片、礫、泥岩粒
- 55 暗茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物、土師器片
- 56 泥岩地行
- 57 明褐色粘質土 粒〜小石大泥岩非常に多量
- 58 暗茶褐色粘質土 炭化物、土師器片、山砂
- 59 暗茶褐色粘質土 炭化物、木片、小石大泥岩、土師器片、山砂
- 60 炭化物、青灰色土、泥岩、木片
- 61 暗茶褐色粘質土 砂分多量
- 62 暗茶褐色粘質土 炭化物、木片非常に多量、泥岩、遺物片
- 63 暗茶褐色粘質土 木片非常に多量、炭化物、泥岩
- 64 青灰色粘質土 炭化物多量、小石大泥岩、粘性強
- 65 青灰色粘質土 少量の木片、炭化物、小石〜準大泥岩
- 66 大泥岩層、砂岩層 炭化物混入
- 67 青灰色粘質土 準大泥岩の泥岩、砂岩多量
- 68 砂岩層、礫、小石大泥岩、砂岩からなる
- 69 暗茶褐色粘質土 準大泥岩、炭化物、礫、土師器片多量
- 70 準〜大泥岩、砂岩地行 炭化物多量
- 71 明褐色粘質土 土師器片、炭化物、泥岩
- 72 炭化物
- 73 暗茶褐色粘質土 泥岩と炭化物混じりの粘土状層に 埋まり4
- 74 泥岩連行層 下層に炭化物を含む青灰色粘質土多量
- 75 明褐色粘質土 少量の泥岩粒、炭化物、木片、礫、灰色砂 粘性強
- 76 礫砂〜大泥岩層砂岩地行
- 77 暗茶褐色粘質土 木片、炭化物、小石〜準大泥岩 粘性強
- 78 大泥岩層、砂岩層
- 79 明褐色粘質土 少量の泥岩粒、炭化物、木片、礫、灰色砂 粘性強

図3 調査壁土層断面図 同出土遺物(1)



80 暗褐色粘質土	炭化物、泥岩粒、土師器片・森・山砂	1面	100 明灰色粘質土	小石大泥岩、砂岩、炭化物多量	土坑7
81 赤褐色粘質土	多量のローム土、小石～半人頭大泥岩、炭化物	2面	107 青灰色粘質土	炭化物多量、小石大泥岩、腐植土	土坑7
82 暗褐色粘質土	ローム土ブロックと暗～半人頭大泥岩存在 耕土行	2面	108 黄灰色粘質土	泥岩粒、炭化物、木片	土坑12
83 小石～半人頭大泥岩地行			109 暗灰色粘質土	半人頭大泥岩多量、炭化物、木片	土坑12
84 明灰色粘質土	小石大泥岩多量、炭化物・森・土師器片	土坑15	110 灰褐色粘質土	炭化物多量、毒大泥岩	
85 暗褐色粘質土	暗～半人頭大泥岩の平輪行土		111 灰褐色粘質土	毒大泥岩粒多量	
86 暗褐色粘質土	炭化物多量、暗～半人頭大泥岩、砂岩・山砂、 遺物片・炭片		112 青灰色粘質土	泥岩粒多量、大泥岩片	
87 大型泥岩、砂岩地行			113 暗灰色粘質土	炭化物、小石大泥岩多量、纏まりやや柄	
88 土師器中層区			114 青灰色粘質土(腐植土)	泥岩粒多量、大型泥岩含む	溝4
89 明褐色粘質土	暗～毒大泥岩、炭化物・山砂		115 青灰色粘質土	腐植土、炭化物	溝4
90 明褐色粘質土	暗～毒大泥岩、炭化物・山砂		116 青灰色粘質土(腐植土)	1.1.4より泥岩少ない	溝4
91 暗褐色粘質土			117 青灰色粘質土	炭化物、泥岩粒、腐植土、大型泥岩含む	溝4
92 明褐色粘質土	毒大の泥、砂岩多量		118 青灰色粘質土	大型泥岩粒多量、炭化物、木片	溝4
93 灰茶褐色粘質土	木片、炭化物、遺物片	土坑11	119 暗褐色粘質土	腐植土、炭化物、木片	溝4
94 黄褐色粘質土	泥岩粒多量、炭化物、纏まり良		120 青灰色粘質土	炭化物、小石大泥岩多量	F. 5.7
95 黄褐色粘質土	泥岩粒多量、炭化物		121 炭化物層	泥岩粒少量	F. 5.7
96 暗褐色粘質土	小石大泥岩、炭化物多量、遺物片		122 暗褐色粘質土	炭化物多量、泥岩粒、土師器片	5面
97 半人頭大泥岩地行		3面	123 明灰色粘質土	炭化物多量、泥岩粒、土師器片	5面
98 明褐色粘質土	泥岩砂岩粒、炭化物、土師器片	3面	124 黄灰色粘質土	砂岩、砂岩地行	5面
99 明褐色粘質土	泥岩砂岩粒が散る	3面	125 青灰色粘質土	毒大泥岩	5面
100 暗褐色粘質土	泥岩粒、山砂	3面	127 暗灰色粘質土	貝片、泥岩粒、炭化物	溝4C
101 毒大泥岩地行		3面	128 暗灰色粘質土	貝片、泥岩粒、纏まり強	溝4C
102 大型泥岩地行		4面	129 黄灰色粘質土	腐植土、明灰色土ブロック、木片	溝4B
103 暗褐色粘質土	非常に多量の炭化物、泥岩粒、山砂、土師器片	4面	130 暗褐色粘質土	炭化物、木片	溝4B
104 明褐色粘質土	多量の山砂、炭化物、土師器片	4面	131 暗褐色粘質土	炭化物、木片	溝5
105 青灰色粘質土	暗～小石大泥岩、炭化物多量、土師器片	4面	132 暗褐色粘質土	炭化物、炭化物少量、粘性強	溝5
			133 黄褐色粘質土	多量の木片、炭化物泥岩	溝5
			134 暗褐色粘質土	腐植土、炭化物、木片混入	溝5
			135 黒灰色粘質土	炭化物ブロック混入	堀山

図4 調査区壁土層断面、岡出土遺物(2)

材が散見され、人の生活痕跡らしき状況が認められる。

IV面下層面

上層面を構成する泥岩層などを除くとすぐさままた硬い平坦面が現れ、掘立柱建物2棟・柱穴列3列を含む柱穴様の小穴69口、大型の舟形を含む土坑3基、井戸1基が検出された。上層面と近接しているために「IV面下層面」と名づけたが、むしろこの間に当遺跡の面期を設定してよいほどに、面の状況はIV面上層面とはまったく異なる。この面は鎌倉時代後期に属する。

この面はおおむね平坦で、標高は16.4～16.5mにある。

V面

IV面構成層は平均して20cm前後の厚みがある。この下には泥岩による地形層が広がっており、これをV面とした。泥岩は拳大から人頭大まで大きさは場所により異なるが、強固で、泥岩と泥岩の空隙は褐色の植物性腐食土や青灰色の粘質土に充填されている。

この面は北側に溝、東側にも溝らしき板壁を持ち、町並の1区面の北東角に相当するとみてよい。北

側の溝から 2.8m のところで北に向かって落ちる、落差 10 cm 弱の段状部がある。検出された遺構は、段を越えて存在する掘立柱建物 1 棟を含む小穴 23 口、土坑 1 基、北側溝に加えられた修復時の凝灰岩石積み 1 基等がある。

面の標高は、段の上部で 15.8~15.9m、下部で 16.8m 前後である。

VI 面

V 面を構成する厚い泥岩地形層、およびその下の青灰色粘質土は、併せて 20 cm から場所によっては 40 cm もの厚みがある。これを除くと、今度は人頭大、あるいはそれ以上の大型泥岩で地形された面に当たる。これを VI 面とした。

面の調査区南寄りには、北西から南東にかけて凝灰岩切石と板によって段差が形成され、北側が一段低くなっている。掘削深度規制により全体を底面まで掘り下げることはできなかったが、西壁際を深掘りして基盤層を確認した。面の標高は、上段で 15.9~16.2m、下段基盤層面上で 15.3~15.4m である。

第 2 節 各説

1. I 面 (図 5)

検出高：17.0~17.1m 構成土：暗褐色粘質土・破砕泥岩や泥岩塊による地形 検出遺構：土坑 4 基・小穴 34 口 (柱穴列 5 列含む)・土師器皿集中部 3 群

近世土坑 (図 5)

位置：X-75 570~75 576 Y-23 524~23 519 規模：南北 3.3m 以上×東西 5m 以上×深さ 18 cm 主軸方位：N-60° -E 重複関係：柱穴列 1 を切る 特記事項：近世遺物片を包含する浅い落ち込み、近世の池か？ ※土層断面は図 3・4 参照

柱穴列 1 (図 6)

位置：X-75 568~75 575 Y-23 517~23 520 規模：南北 3 間 (柱間距離約 1.96m) 柱穴底面高 16.63m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位：N-18° -E 重複関係：土坑 3 に切られる。南端の 1 穴は近世土坑により消失し、礎石のみ残る。出土遺物：P.3 土師器皿 R 種皿小型 (1) 特記事項：柱間距離に安定性を欠くが、4 穴が 1 列に並んでいるので抽出した。

柱穴列 2 (図 6)

位置：X-75 567~75 572 Y-23 518~23 520 規模：南北 2 間 (柱間距離 1.90m) 柱穴底面高 16.8m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位：N-21° -E 重複関係：柱穴列 4・5 を切る。出土遺物：図化しうるものなし 特記事項：柱穴らしいほぼ同規模の小穴が並ぶ。

柱穴列 3 (図 6)

位置：X-75 571~75 576 Y-23 517~23 520 規模：南北 2 間 (柱間距離約 1.96m) 柱穴底面高 16.89m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位：(N-17° -E) 重複関係：土坑 2 に切られる 出土遺物：図化しうるものなし 特記事項：柱間が不安定だが、大きさ、深さとも同程度のものが並んでいる。

柱穴列 4 (図 6)

位置：X-75 568~75 573 Y-23 517~23 522 規模：南北 1 間 (柱間距離約 1.87m) 東西 2 間 (柱間距離約 2.09m) 柱穴底面高 16.73m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：(N-24° -E) 重複関係：柱穴列 5 を切り、柱穴列 2 に切られる 出土遺物：図化しうるものなし 特記事項：東

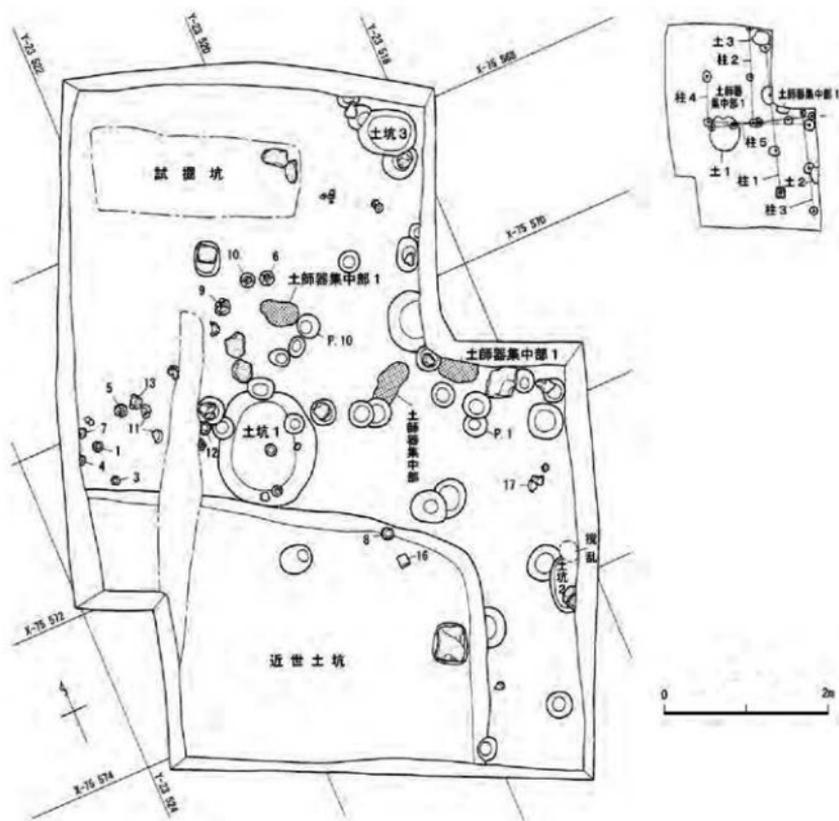


図5 I面遺構全図

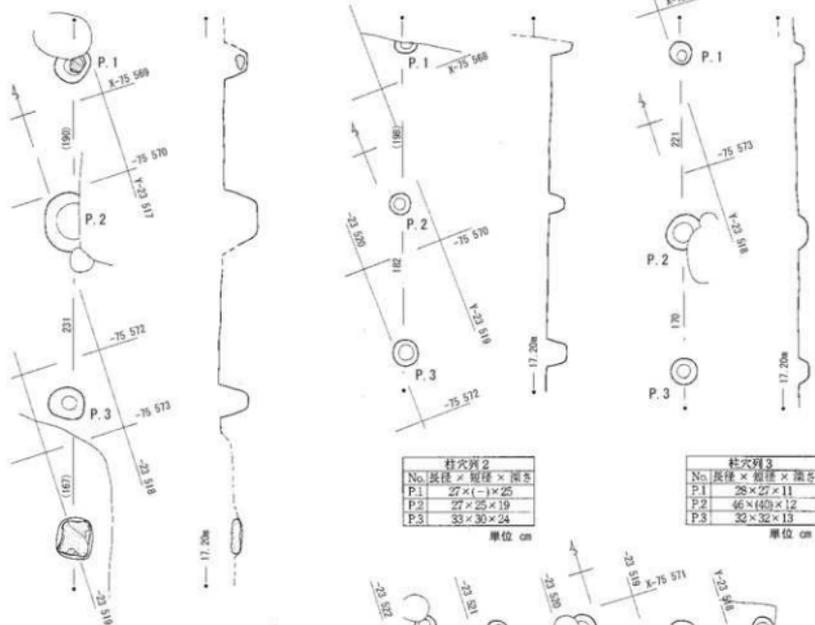
西3穴の並びと、西端に1間直角に北に延びる柱間が見られる。掘立柱建物の一部か。

柱穴列5 (図6)

位置：X-75 570～75 572 Y-23 517～23 522 規模：東西4間(柱間距離約1.03m) 柱穴底面高16.75m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 主軸方位：(N-73°-W) 重複関係：土坑1を切り柱穴列2・4に切られる 出土遺物：図化するものなし 特記事項：半間ずつの短い柱間でほぼ1列に並ぶ。この主軸方位が地割区画の方位でもあろう。

土坑1 (図7)

位置：X-75 570～75 572 Y-23 520～23 522 規模：東西約120cm×南北137cm×深さ約24cm(底面高16.79m) 平面形：楕円形 断面形：深皿形 主軸方位：(N-31°-W) 充填土：図に記載 重複関係：柱穴列5に切られる 出土遺物：土師器皿R種皿小型(1～4)・同大型(5)・瀬戸天目



柱穴列 2	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	27 × (—) × 25
P.2	27 × 25 × 19
P.3	33 × 30 × 24

単位 cm

柱穴列 3	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	28 × 27 × 11
P.2	46 × (45) × 12
P.3	32 × 32 × 13

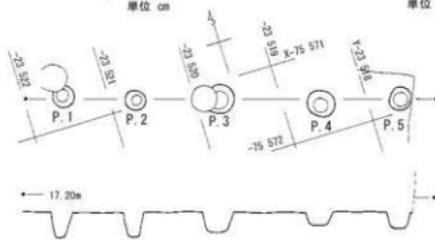
単位 cm



柱穴列 1 P.1出土

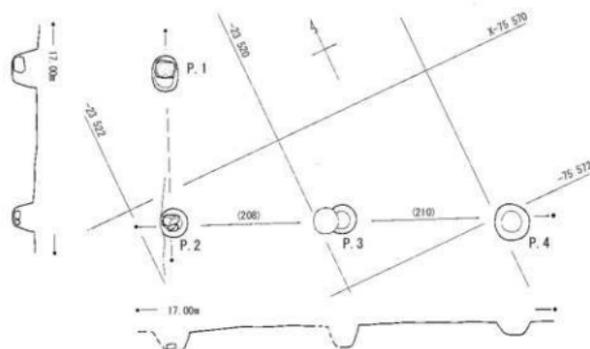
柱穴列 1	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	46 × 40 × 29
P.2	73 × (—) × 33
P.3	43 × 39 × 35

単位 cm



柱穴列 5	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	27 × (26) × 31
P.2	25 × 24 × 31
P.3	30 × (35) × 24
P.4	35 × 31 × 16
P.5	29 × 25 × 20

単位 cm



柱穴列 4	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	43 × 31 × 31
P.2	35 × (34) × 26
P.3	35 × (35) × 26
P.4	45 × 43 × 16

単位 cm

図6 柱穴列 1～5 同出土遺物

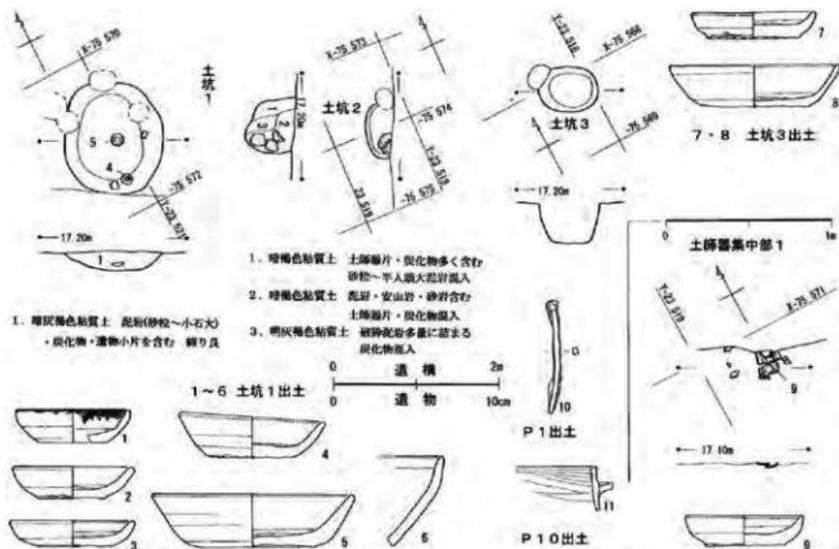


図7 土坑1～3. 土師器集中部1. 同出土遺物

茶碗(6) 特記事項:(1)には油煤付着、灯明皿として使われたか。全体に14世紀後半の様相を持つ。

土坑2(図7)

位置: X-75 573～-75 575 Y-23 518～-23 519 規模: 東西34cm以上×南北68cm×深さ約59cm(底面高16.52m) 平面形: 楕円形 断面形: 不整碗形 主軸方位: (N-9° -W) 充填土: 図に記載 重複関係: 柱穴列3を切る 出土遺物: 図化するものなし 特記事項: 中に凝灰岩詰まる。柱穴とみるべき。

土坑3(図7)

位置: X-75 568～-75 569 Y-23 518～-23 519 規模: 東西72cm×南北55cm×深さ約49cm(底面高16.54m) 平面形: 楕円形 断面形: 逆台形 主軸方位: (N-62° -W) 出土遺物: 土師器皿R種小型(7)・同中型(8) 特記事項: これも柱穴か

土師器集中部1(図7)

位置: X-75 571～-75 572 Y-23 518～-23 519 出土遺物: 土師器皿R種小型(1) 特記事項: 検出高16.9m前後, 調査区外への広がり程度は不明

I面柱穴出土遺物(図7)

P.1より鉄釘(10)・P.10より鏝鍋(11)

I面出土遺物(図8)

土師器皿R種小型(1～4)・同中型(5～7)・同大型(8～14)・南部系山茶碗(15)・常滑甕(16)・瀬戸大平鉢(17)・青白磁梅瓶(18) 特記事項: ほとんどが13世紀後半～14世紀初頭、すなわち鎌倉時代後期～末期の様相を持つが、17のみは15世紀前半か。

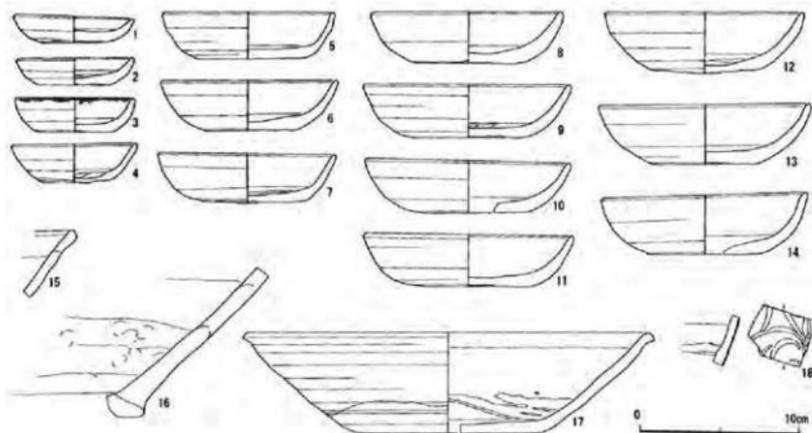


図8 I面出土遺物

2. II面 (図9)

検出高：約 16.9～16.7m 構成土：北側はローム（赤褐色土）に砂岩・泥岩片、炭化物が混入したものが主体 南部分は人頭大の凝灰岩・泥岩による版築層 検出遺構：土坑3基・小穴51穴（掘立柱建物1棟・柱穴列5含む）

建物1 (図9)

位置：X-75 569～75 573 Y-23 519～23 523 規模：東西1間（柱間距離1.99m）×南北1間（柱間距離1.95m）・柱穴底面高 16.69m（平均）※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-26° -E 重複関係：柱穴列7に切られる 出土遺物：P.4より刀子（1） 特記事項：後述の土坑4北側にあり、西側調査区外に広がる可能性が高い。柱間は2m弱と鎌倉時代後期に特徴的な数値を示す。

柱穴列6 (図9)

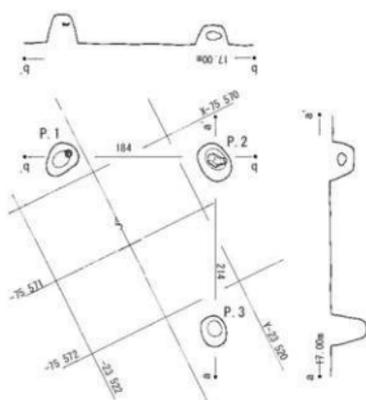
位置：X-75 568～75 571 Y-23 519～23 521 規模：南北3間（柱間距離 1.18m・0.77mの2タイプ）柱穴底面高 16.71m（平均）※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-25° -E 重複関係：土坑4を切る 出土遺物：P.1より土師器皿R種小型（2）・同大型（3）・常滑片口鉢I類（4） 特記事項：間隔は一定ではないが、同程度の深さのものが直線をなしているのでひとまず抽出しておいた。北側2穴は礎石らしき凝灰岩を伴う。

柱穴列7 (図10)

位置：X-75 569～75 573 Y-23 519～23 522 規模：東西1間（柱間距離1.84m）×南北1間（柱間距離2.14m）柱穴底面高 16.48m（平均）※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-26° -E 重複関係：建物1を切る 出土遺物：P.1より土師器皿R種小型（1） 特記事項：これも西側調査区外に広がる可能性がある。P.2に半人頭大の泥岩を含む。

柱穴列8 (図10)

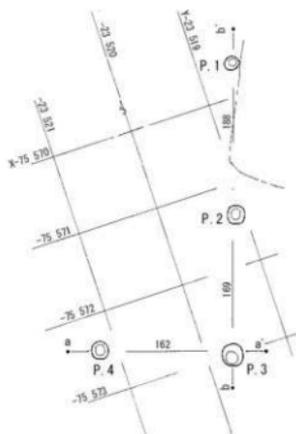
位置：X-75 570～75 573 Y-23 518～23 524 規模：東西2間（柱間距離約196.5m）柱穴底面高 16.60m（平均）※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-62° -W 重複関係：柱穴列9を切る



柱穴列7 P.1出土

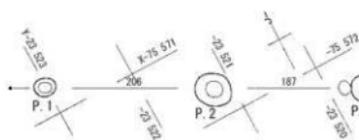
柱穴列7		
No.	長さ × 幅 × 深さ	
P.1	44 × 35 × 36	
P.2	48 × 37 × 29	
P.3	38 × 31 × 44	

単位 cm



柱穴列10		
No.	長さ × 幅 × 深さ	
P.1	18 × 16 × 18	
P.2	22 × 21 × 31	
P.3	27 × 26 × 58	
P.4	22 × 21 × 19	

単位 cm

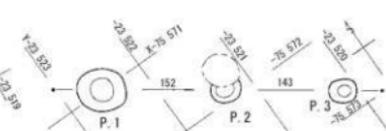


柱穴列8		
No.	長さ × 幅 × 深さ	
P.1	27 × 23 × 15	
P.2	44 × 40 × 45	
P.3	36 × 23 × 30	

単位 cm

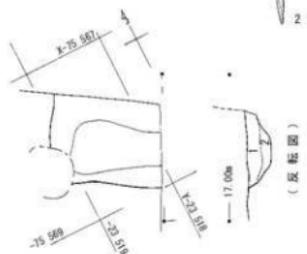


柱穴列8 P.2出土

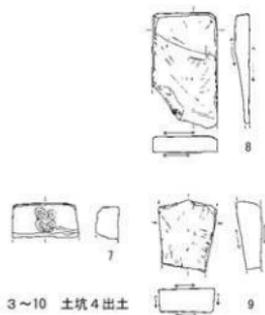
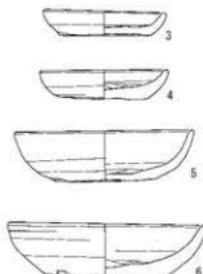


柱穴列9		
No.	長さ × 幅 × 深さ	
P.1	39 × 33 × 22	
P.2	37 × (33) × 44	
P.3	34 × 29 × 25	

単位 cm



- 土坑4 1. 暗茶褐色粘質土 1~2cmの泥層多く含む
土層砂小片・炭化物多く含む
2. 4に属する炭化物や中多い。



3~10 土坑4出土

図10 柱穴列7~10・土坑4 同出土遺物

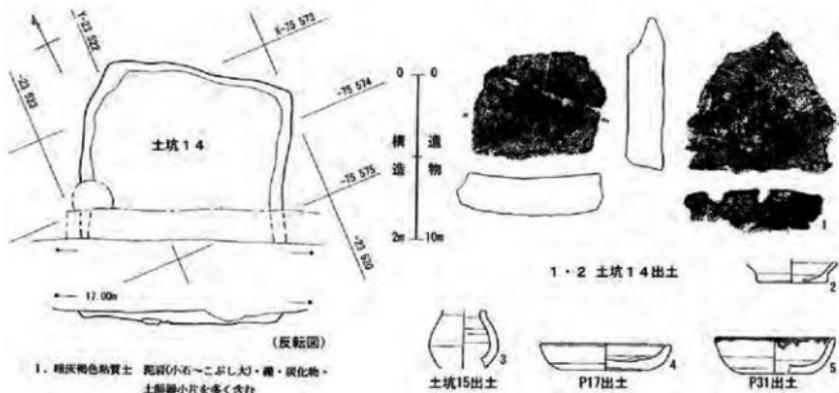


図 11 土坑 14, 同出土遺物, 土坑 15・II 面柱穴出土遺物

出土遺物：P.2 より鉄釘 (2) 特記事項：平均するとちょうど鎌倉後期に一般的な柱間距離の並びとなったので、列として図化しておく。

柱穴列 9 (図 10)

位置：X-75 570～75 573 Y-23 520～23 523 規模：東西 2 間 (柱間距離約 147.5m) 柱穴底面高 16.60m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-54° -W 重複関係：柱穴列 8 に切られる 出土遺物：図化するものなし 特記事項：3 穴が直線的に並んでいるので、ひとまず列として呈示しておく。

柱穴列 10 (図 10)

位置：X-75 569～75 574 Y-23 518～23 522 規模：東西 1 間 (柱間距離 1.62m) × 南北 2 間 (柱間距離約 1.79m) 柱穴底面高 16.55m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-19° -E 重複関係：なし 出土遺物：図化するものなし 特記事項：細めの同規模の穴が組をなしているように見える。西側調査区外に広がるのであろう。II 面では本址のみ、主軸方位が I 面建物群に共通する。

土坑 4 (図 10)

位置：X-75 567～75 569 Y-23 517～23 520 規模：東西 140cm 以上 × 南北 110cm 以上 × 深さ約 32cm (底面高 16.49m) 平面形：隅丸長方形か 断面形：逆台形 主軸方位：(N-61° -W) 充填土：図に記載 重複関係：柱穴列 6 に切られる 出土遺物：土師器皿 R 種小型 (3・4)・同中型 (5) 同大型 (6)・滑石印判 (7)・砥石仕上砥 (8)・同中砥 (9) 特記事項：土坑 14 出土の青白磁合子 (図 11-2) に接合する破片が出土

土坑 14 (図 11)

位置：X-75 572～75 575 Y-23 520～23 523 規模：東西 250 cm × 南北 220cm 以上 × 深さ約 17cm (底面高 16.70m) 平面形：(隅丸方形) 断面形：浅皿形 主軸方位：(N-32° -E) 充填土：図に記載 重複関係 出土遺物：平瓦 (1)・青白磁合子 (2) 特記事項：浅い方形土坑。性格不明だが、多くの柱穴列が本址以北にあるので、共時性は否定できない。(2) の青白磁合子は土坑 4 出土の破片と接合した。

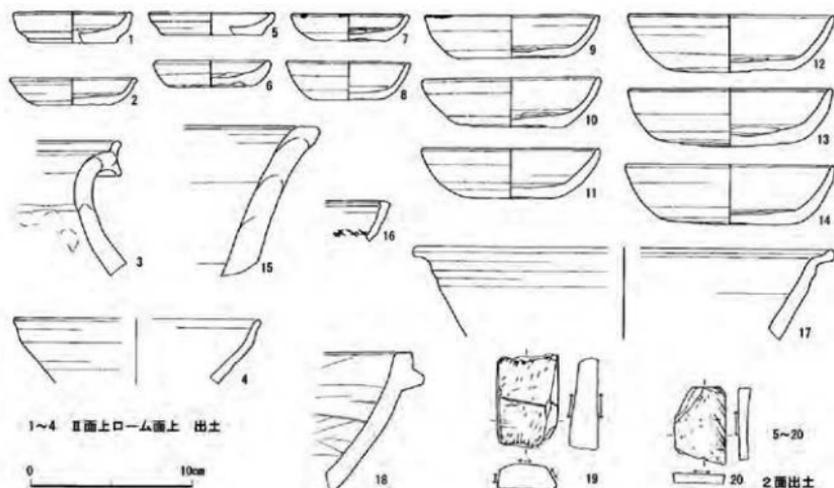


図12 II面出土遺物

土坑 15(個別図省略, 図9)

位置: X-75 571~75 573 Y-23 523~23 524 規模: 東西 80 以上cm×南北 25cm 以上×深さ約 12cm 以上(底面高 16.74m 以下) 平面形・断面形: 大半が調査区外にあり、東辺は攪乱に切られ不明 主軸方位: 不明 重複関係: なし 出土遺物: 瀬戸黄褐釉小壺 (3) 特記事項: 全形は不明ながら、北辺は東側の土坑 14 と横並びにあり、位置的からいっても共時性が認められる。

II面柱穴出土遺物 (図11)

P.17 より土師器皿R種小型 (4) P.31 より土師器皿R種小型 (5) 特記事項: (5) の口縁部には油煤が付着しており、灯明皿として使われたことがわかる。

II面出土遺物 (図12)

II面ローム面上出土: 土師器皿R種小型 (1・2)・常滑甕 (3)・瀬戸平碗 (4) II面出土: 土師器皿R種小型 (5~8)・同中型 (9・10)・同大型 (11~14)・瀬戸卸皿 (15)・瀬戸折縁鉢 (16)・滑石鍋 (17)・砥石中砥 (18)・砥石仕上砥 (19) 特記事項: おおむね 13 世紀後半~14 世紀初頭、すなわち鎌倉時代後期の年代を示すが、(4) のみ 14 世紀後半~15 世紀前半に属する

3. III面 (図13)

検出高: 約 16.8m~16.7m 構成土: 明茶褐色粘質土に小石~半人頭大泥岩多量に含む 検出遺構: 溝 1 条 土坑 3 基・小穴 9 穴 (柱穴列 1 含む)・土師器集中部 1 箇所・土師器細片集中部 2 箇所

溝 1 (図14)

位置: X-75 571~75 576 Y-23 517~23 520 規模: 幅 80 cm 以上×深さ約 28cm 断面形: 箱形 主軸方位: (N-29° -E) 充填土: 東壁・南壁土層図 (図3) 参照 流下方向: 北→南 重複関係: なし 出土遺物: 土師器皿R種小型 (1~3)・同中型 (4)・同大型 (5~9)・常滑甕 (10) 特記事項: 後

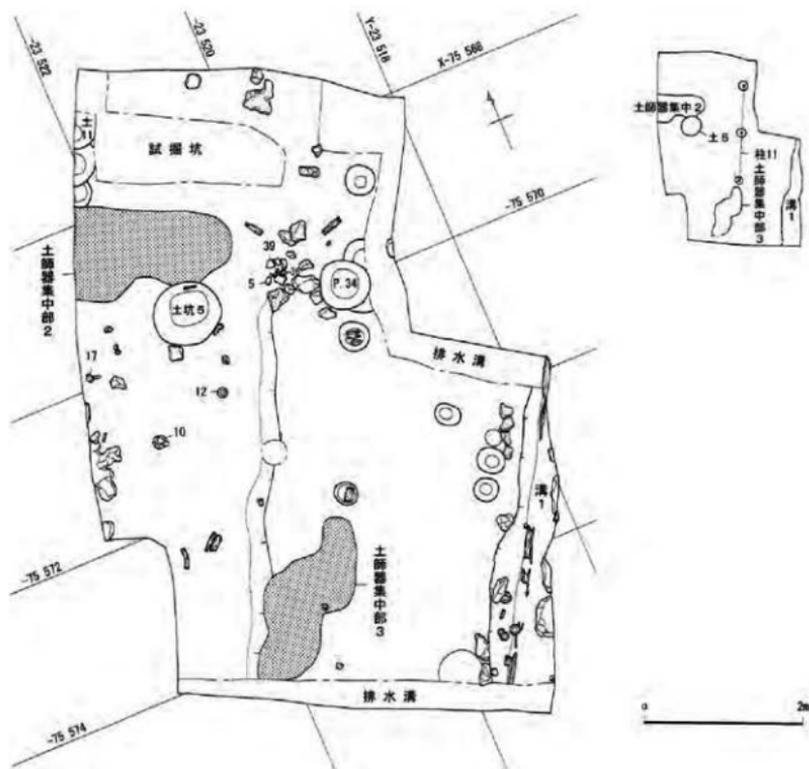


図13 III面遺構全圖

述のV面時に早くも現われる区画で、II面の石敷の東端とも場所が一致する。鎌倉時代後半を通じて存続していたとみてよい。出土遺物の年代は、土器でいえば13世紀第3四半期を中心とし、常滑は14世紀初頭前後のもの(図14-10, 赤羽/中野編年「第6b形式」)を含む。

柱穴列11(図14)

位置: X-75569~75573 Y-23518~23521 規模: 南北2間(柱間距離約200m) 柱穴底面高16.37m(平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位: N-26°-E 重複関係: なし 出土遺物: P.3より内折れ土師器皿R種極小型(11) 特記事項: 同規模の柱穴様の穴が直線状に並ぶので抽出しておいた。P.2・P.3に礎板残る。

土坑5(図14)

位置: X-75569~75570 Y-23521~23522 規模: 東西87cm×南北80cm×深さ41cm(底面高16.19m) 平面形: 円形 断面形: 逆台形 重複関係: 土師器皿集中部2を切る 出土遺物: 常滑片口鉢I類(12) 特記事項: 調査区中央部を南北に走る浅い落ちの西側にあり、土師器集中部2にも近い

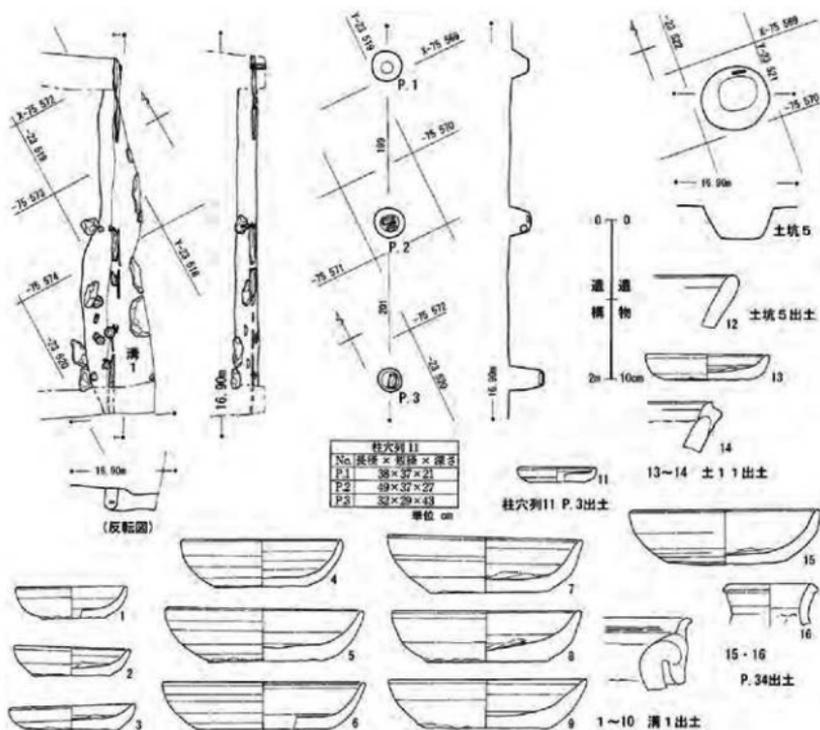


図 14 溝 1・柱穴列 11・土坑 5、同出土遺物・土坑 11・P.34 出土遺物

土坑 11 (図 13・14)

出土遺物：土師器皿 R 種小型 (13)・常滑片口鉢 II 類 (14) 特記事項：年代は 13 世紀後半か P.34

出土遺物 (図 11・12)：土師器皿 R 種大型 (15)・常滑小壺 (16) 特記事項：年代は 13 世紀後半
土師器集中部 2 (図 13・15)

位置：X-75 567～-75 570 Y-23 520～-23523 検出高：16.6m 前後 出土遺物：土師器皿 R 種小型 (1～19) 同中型 (20～23) 同大型 (24～35) 特記事項：大きくみて 13 世紀後半か

土師器集中部 3 (図 13)

位置：X-75 572～-75 575 Y-23 523～-23520 検出高：16.6m～16.7m 出土遺物：土師器皿の小片のみで図示しうるものなし 特記事項：集中部 2 とは異なり、細片ばかりで構成される

Ⅲ面出土遺物 (図 16)

Ⅲ面出土：土師器皿 R 種小型 (1～9)・同大型 (10～18)・内折土師器皿 R 種極小型 (19・20)・円

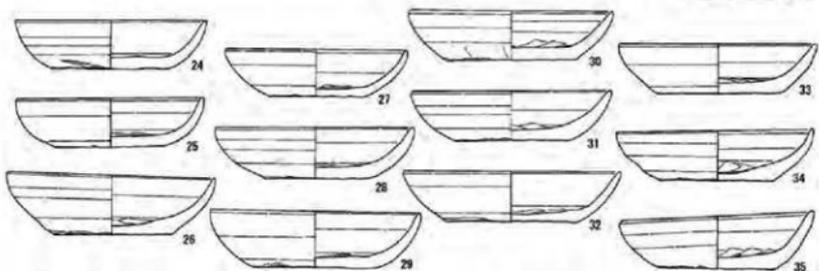
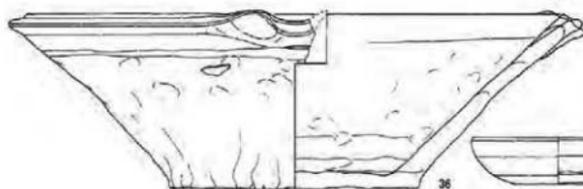
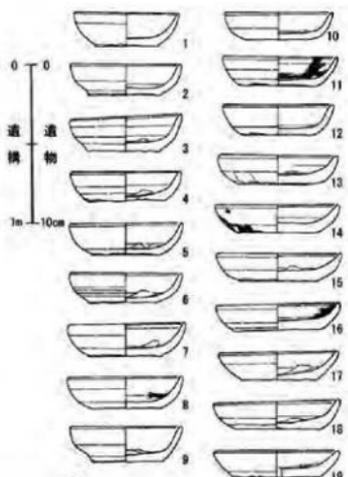


図15 土師器集中部(2)

板状土製品 (21)・手培り (22)・瓦器香炉 (23)・常滑片口鉢1類 (24~27)・常滑甕 (28~34) 瀬戸入子 (35・36)・瀬戸折縁鉢 (37)・白磁口はげ皿 (38)・平瓦 (39)・元祐通宝 (40)・砥石仕上砥 (41)・Ⅲ面構成土出土：鏝鍋 (42)・常滑甕 (43)・元宝通宝 (44・45)・皇宋通宝 (46)・熙寧元宝 (47)・紹定通宝 (48) 特記事項：(34)の常滑片には漆を含んだ布状の物質が付着している。年代は總体的にみて13世紀第4四半期ごろか。

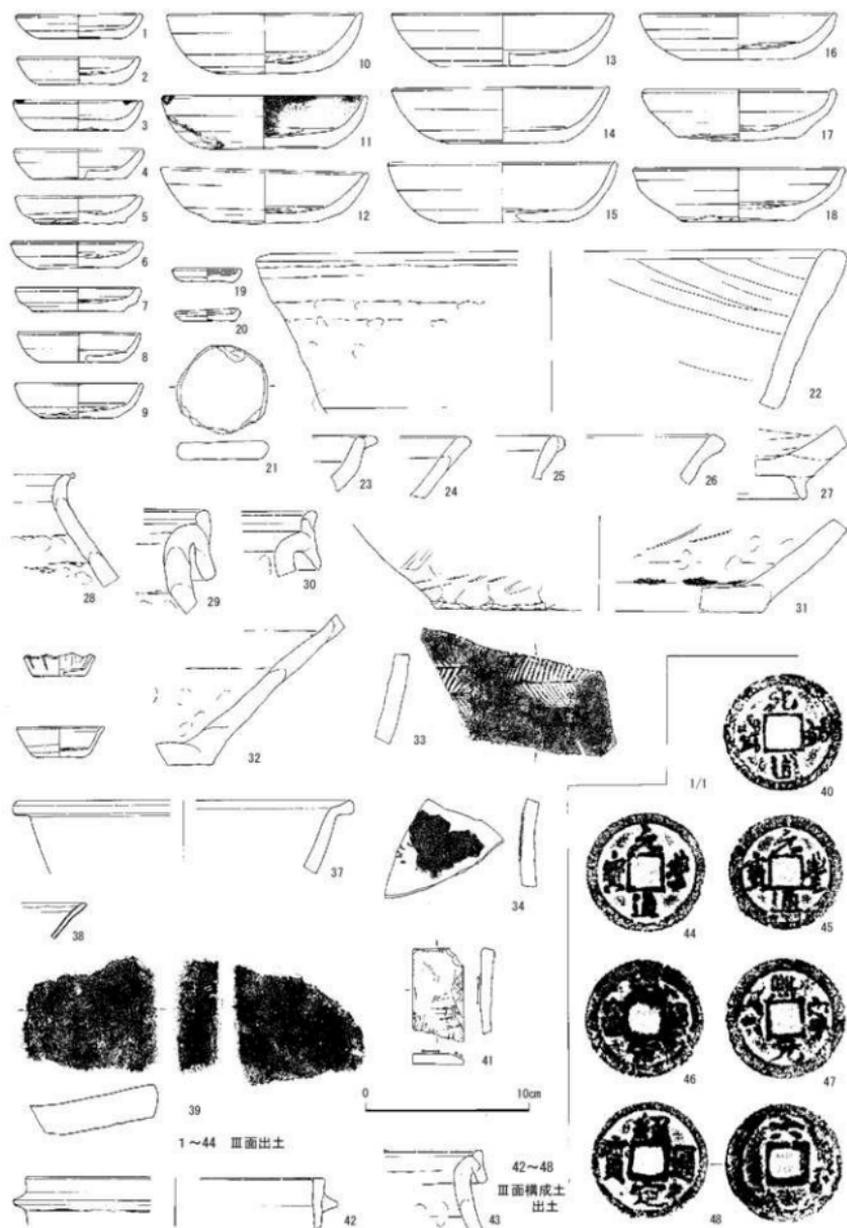


图16 Ⅲ面・Ⅲ面構成土出土遺物

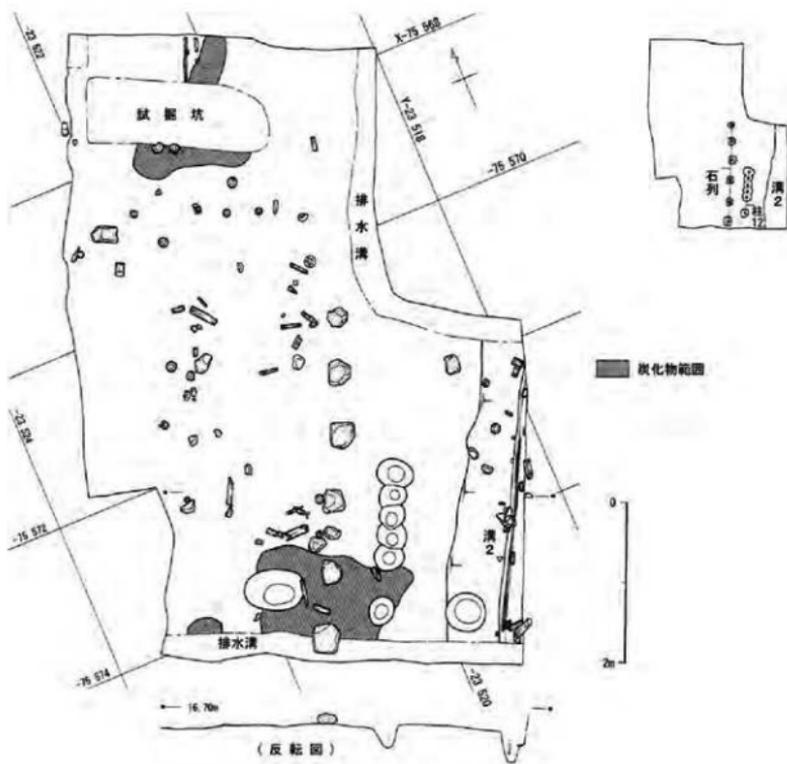


図 17 IV面上層面遺構全図

4. IV面上層面 (図 17)

検出高: 約 16.3m~16.5m 構成土: 小石大~拳大の泥岩を含む粘質土。色調は暗褐色から明黄褐色・明灰色、さらには青灰色と場所により異なる 検出遺構: 溝 1 条・小穴 3 穴・石列 1 列

溝 2 (図 18)

位置: X-75 571~75576 Y-23 517~23 520 規模: 深さ 75 cm 以上 断面形: 箱型か? 東岸の一部のみの検出で多くは調査区外にあるため不明確 主軸方位: (N-28° -E) 充填土: 東壁・南壁土層図 (図 3) 参照 流下方向: 北→南 重複関係: なし 出土遺物: 土師器皿 R 種小型 (1・2)・同大型 (3・4)・骨角製双六駒 (5)・常滑甕 (6)・砥石中砥 (7)・串状木製品 (8)・不明部材 (9) 特記事項: 既述の III 面溝 1 と重なる位置にあり、断絶なく続く。掘り方から 70 cm 前後離れた位置に木製の溝枠が設けられる。溝枠の構造は、一番外側に縦板を横に連ねて立て、その内側に横板を張ってさらにそれを縦の杭で止めて内側への倒壊を防ぐ、というもの。(9) は礎板様の板の片側に径 3~3.5 cm の穴があけ

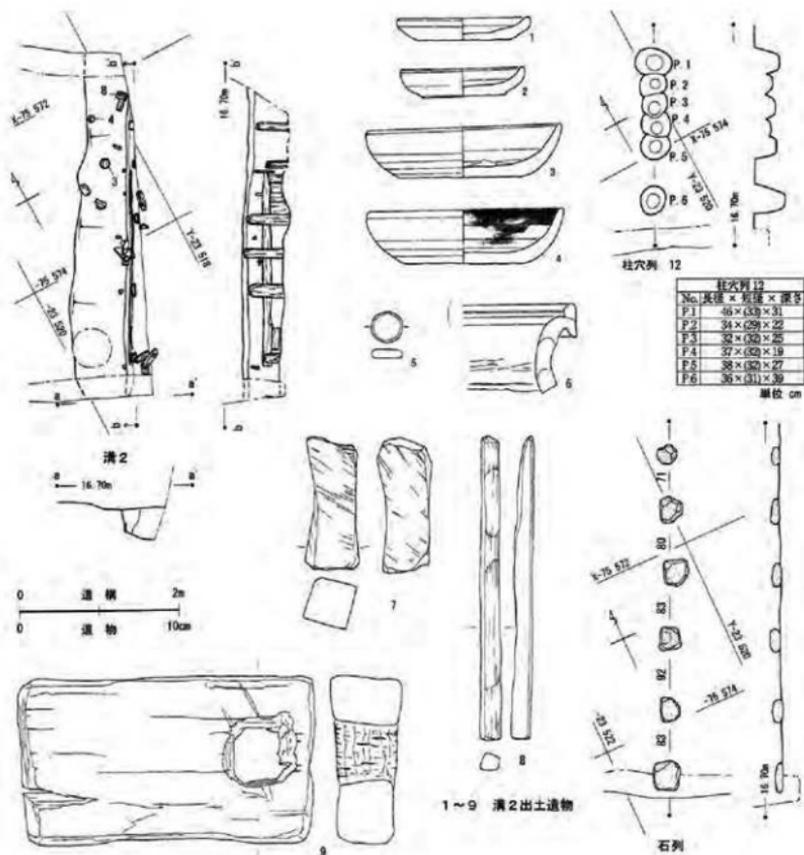


図 18 溝 2・柱穴列 12・石列、同出土遺物

あけられている。出土遺物の年代は 13 世紀第 3 四半期か。

柱穴列 12 (図 18)

位置：X-75 572～-75 575 Y-23 519～-23 521 規模：柱穴底面高 16.17m (平均) ※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-28° -E 重複関係：なし 出土遺物：図示しうるものなし 特記事項：本址西側に平行して存在する次述の石列との関連を考えざるを得ないが、柱穴列ではなく、石を引き抜いた跡とすれば、踏み石のようなものを想定してもよいかもしれない。

石列 (図 18)

位置：X-75 570～-75 575 Y-23 519～-23 522 規模：南北 5 間，全長 4m38cm (石間距離

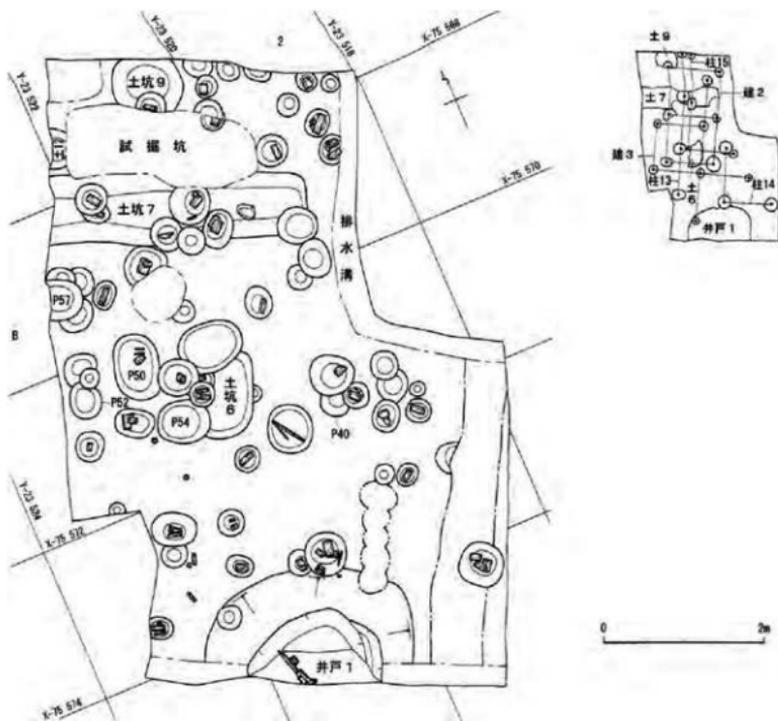


図19 IV面下層面遺構全圖

約82cm)石上面高16.63m(平均) 南北軸方位:N-24°5′-E 重複関係:なし 出土遺物:図示しうるものなし 特記事項:ほぼ半間ごとに同規模の凝灰岩が並ぶ。建物の根太の下に敷かれたものか、あるいは縁束の可能性もあろう。位置的に見て前述の柱穴列12との関連は明らかであり、本址を縁束とすれば、柱穴列12は縁の前に据えられた踏み石の痕跡とみることもできよう。

5. IV面下層面(図19)

検出高:約16.4m~16.5m 構成土:暗茶褐色粘質土・泥岩地形 検出遺構:小穴69穴(建物2棟・柱穴列3含む)土坑3基 井戸1基

建物2(図20)

位置:X-75 567~75 572 Y-23 518~23 523 規模:東西1間(柱間距離2.00m)×南北2間(柱間距離2.02m)・柱穴底面高16.23m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位:N-27°-E 重複関係:土坑9を切る 出土遺物:P.2より土師器皿R種小型(1) 特記事項:南東隅のP.4は他よりも際立って浅く、直径も大きい感があるが、6穴の柱穴が等間隔で2列に並んでいるので、掘立柱建物と

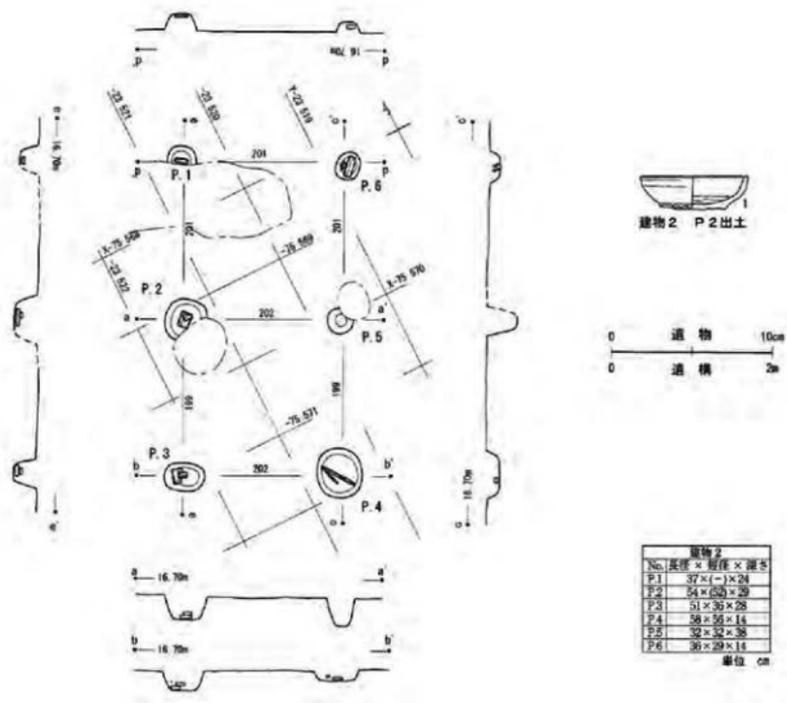


図 20 建物 2. 同出土遺物

して呈示する。建物だとすれば北と西の調査区外に広がる可能性が高い。P.2 出土の土師器皿は 13 世紀第 4 四半期～14 世紀初頭ごろか。

建物 3 (図 21)

位置：X-75 568～-75 574 Y-23 519～-23 523 規模：東西 2 間（柱間距離 2.00m）×南北 3 間（柱間距離 1.98m）・柱穴底面高 16.21m（平均）※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-27° - E 重複関係：井戸 1 を切る 出土遺物：P.3 より常滑片口鉢 1 類 (1) 特記事項：北方の調査区外に広がる建物で、調査区内では上層遺構に削り取られたりなどして多くは残らないが、柱間は 2m 弱という鎌倉時代中期以降通有の数値を持つ。

柱穴列 13 (図 22)

位置：X-75 567～-75 573 Y-23 519～-23 523 規模：南北 3 間（柱間距離約 1.94m）柱穴底面高 15.94m（平均）※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-27° - E 重複関係：土坑 6・7 を切る 出土遺物：P.1 より串状木製品 (1) ・ P.2 より瀬戸入れ子 (2) ・ 砥石中砥 (3) ・ P.4 より土師器皿 R 種小型 (4) 特記事項：柱間が少し違うので次述の柱穴列 14 とは分けて呈示するが、あるいは連結す

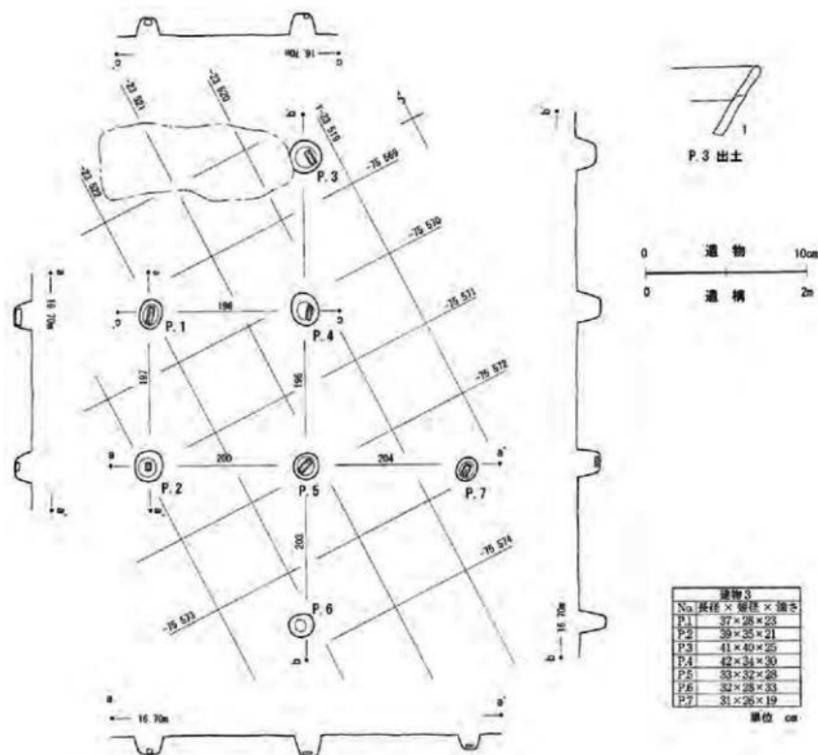


図 21 建物 3. 同出土遺物

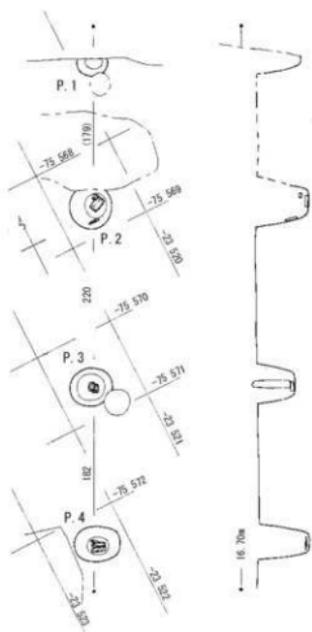
る可能性もある。北・東・西の調査区外に広がる可能性が高い。柱間はほぼ鎌倉時代後期に一般的な数値を示している。

柱穴列 14 (図 22)

位置：X-75 571～-75 575 Y-23 518～-23 521 規模：東西 1 間（柱間距離 1.98m）×南北 1 間（柱間距離約 2.23m）柱穴底面高 15.97m（平均）※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-27° - E 重複関係：柱穴列 15・井戸 1 を切る 出土遺物：図化するものなし 特記事項：同規模の深めの穴が直線をなしているのでひとまず列としたが、前述のように、柱穴列 13 とつながる可能性もある。おそらく掘立柱建物の一部であり、東側調査区外に延びる可能性が高い。年代の指標となる遺物を欠くものの、柱間の平均は 1.98m と、鎌倉時代後期の典型的な数値を持つ。

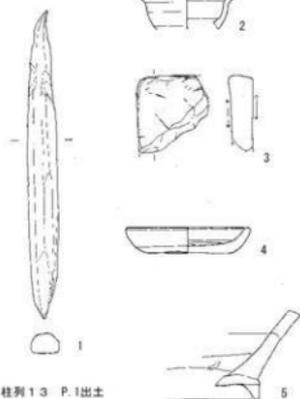
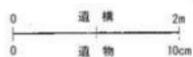
柱穴列 15 (図 22)

位置：X-75 567～-75 572 Y-23 519～-23 522 規模：東西 1 間（柱間距離 1.97m）×南北 2



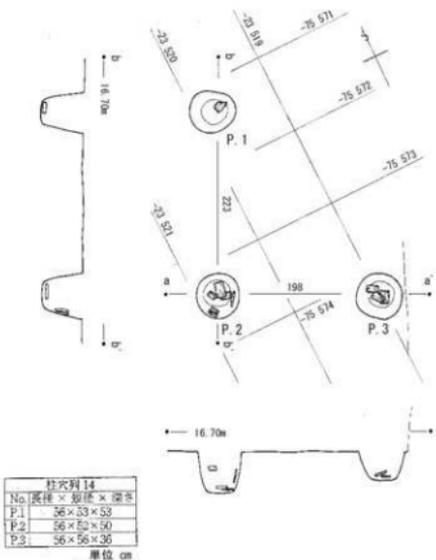
柱穴列 13	
No.	直径 × 长度 × 深さ
P.1	38 × 17 × 33
P.2	54 × 53 × 64
P.3	53 × 48 × 45
P.4	57 × 44 × 62

単位 cm



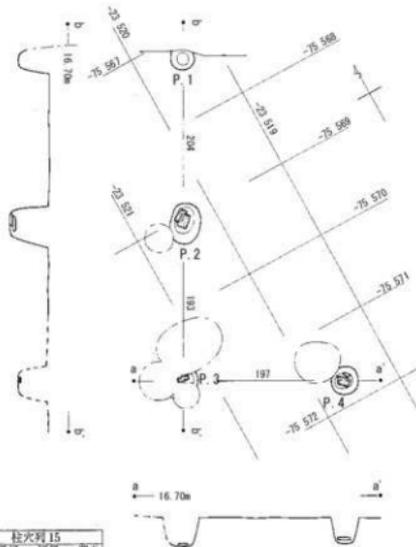
柱列 13 P.1出土

柱列 15 P.2出土



柱穴列 14	
No.	直径 × 长度 × 深さ
P.1	36 × 33 × 53
P.2	56 × 52 × 50
P.3	56 × 56 × 36

単位 cm



柱穴列 15	
No.	直径 × 长度 × 深さ
P.1	30 × 28 × 36
P.2	51 × 36 × 47
P.3	(42) × (40) × 35
P.4	36 × 32 × 31

単位 cm

図22 柱穴列 13～15 同出土遺物

間(柱間距離約1.99m)柱穴底面高16.06m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位:N-28.5°
-E 重複関係:土坑6・7を切る 柱穴列13・14に切られる 出土遺物:P.2より常滑片口鉢Ⅱ類(5) 特
記事項:調査区内の4穴で構成されるが、北方調査区外に広がる可能性が高く、掘立柱建物の一部とみ
られる。(5)の常滑片口鉢Ⅱ類は同一個体と思われる破片がⅣ面面上と土坑7から出土している。

井戸1(図23・24)

位置:X-75573~75576 Y-23523~23520 規模:平面形:掘方は円形に近い隅丸方形か、
木枠は方形か 断面形:筒形 主軸方位:不明 充填土:図に記載 重複関係:建物3・柱穴列14に切られる
出土遺物:土師器皿R種小型(1~4)・土師器皿R種大型(5~10)・瓦器火鉢(11)・常滑甕(12)・
13)・常滑片口鉢Ⅱ類(14)・青磁蓮弁文鉢(15)・曲物(16)・折敷(17~19)・箸状木製品(20~22)・
木製馬形(23)・草履芯(24)・漆器碗(25・26)・加工角(27)・嘉祐通宝(28) 特記事項:位置的に
みて、建物2・柱穴列13・同14などがこの井戸と組み合わせになる可能性がある。安全面への配慮か
ら、掘削は底面まで及んでいないが、井戸枠の一部とおぼしい板と角材が見られるので、鎌倉時代中期
以後一般的な、隅柱と縦板で組まれた方形枠を持つ井戸であろう。(4)の土師器皿には底裏に円盤状の
高台部が貼り付けられている。漆器碗の文様は(25)・(26)いずれも手描きによる。

土坑6(図26)

位置:X-75570~75572 Y-23520~23522 規模:東西55cm以上×南北110cm以上×深
さ約25cm(底面高15.51m) 平面形:(長円形) 断面形:皿形 主軸方位:(N-21° -E) 重複関係:
柱穴列13・15に切られる 出土遺物:土師器皿R種小型(22)・磨耗陶片(23)・漆器皿(24) 特記事
項:建物・柱穴列のどれかと関係する可能性があるが、詳細不明。出土遺物の年代は13世紀後半。

土坑7(図25・26)

位置:X-75567~75570 Y-23519~23523 規模:東西320cm以上×南北87cm×深さ約
32cm(底面高16.13m) 平面形:(推定隅丸長方形) 断面形:逆台形 主軸方位:(N-67.5° -W) 充
填土:図に記載 重複関係:柱穴列13・15に切られる 出土遺物:土師器皿R種小型(1~3)・土師器皿
R種中型(4)・土師器皿R種大小型(5~7)・瓦器火鉢(8・9)・常滑片口鉢Ⅱ類(10)・常滑甕(11)・
白磁口元皿(12)・砥石仕上砥(13)・砥石中砥(14)・漆器皿(15・16)・円板状木製品(17~19)・棒
状木製品(20・21) 特記事項:東の調査区外に抜ける溝。大半の柱穴列・掘立柱建物の範囲の中にあ
り、関係が不明。遺物は多く、年代は13世紀後半としてよい。

土坑9(図26)

位置:X-75566~75568 Y-23520~23521 規模:東西90cm×南北(90)cm×深さ約
43cm(底面高16.01m) 平面形:円形 断面形:逆台形 主軸方位:不明 充填土:繊維質を多く含む茶
褐色粘質土 重複関係:建物2に切られる 出土遺物:土師器皿R種小型(25)・白磁口元皿(26) 特記
事項:これも遺物年代は13世紀後半

土坑12

出土遺物(図19・26):南部系山茶碗(27)

P.40

出土遺物(図19・26):竜泉窯青磁蓮弁文碗(28)

P.50

出土遺物(図19・26):土師器皿R種小型(29)・土師器皿R種大型(30・31)・瓦器火鉢(32)・常滑片口
鉢Ⅰ類(33)・白色系土師器皿(34)

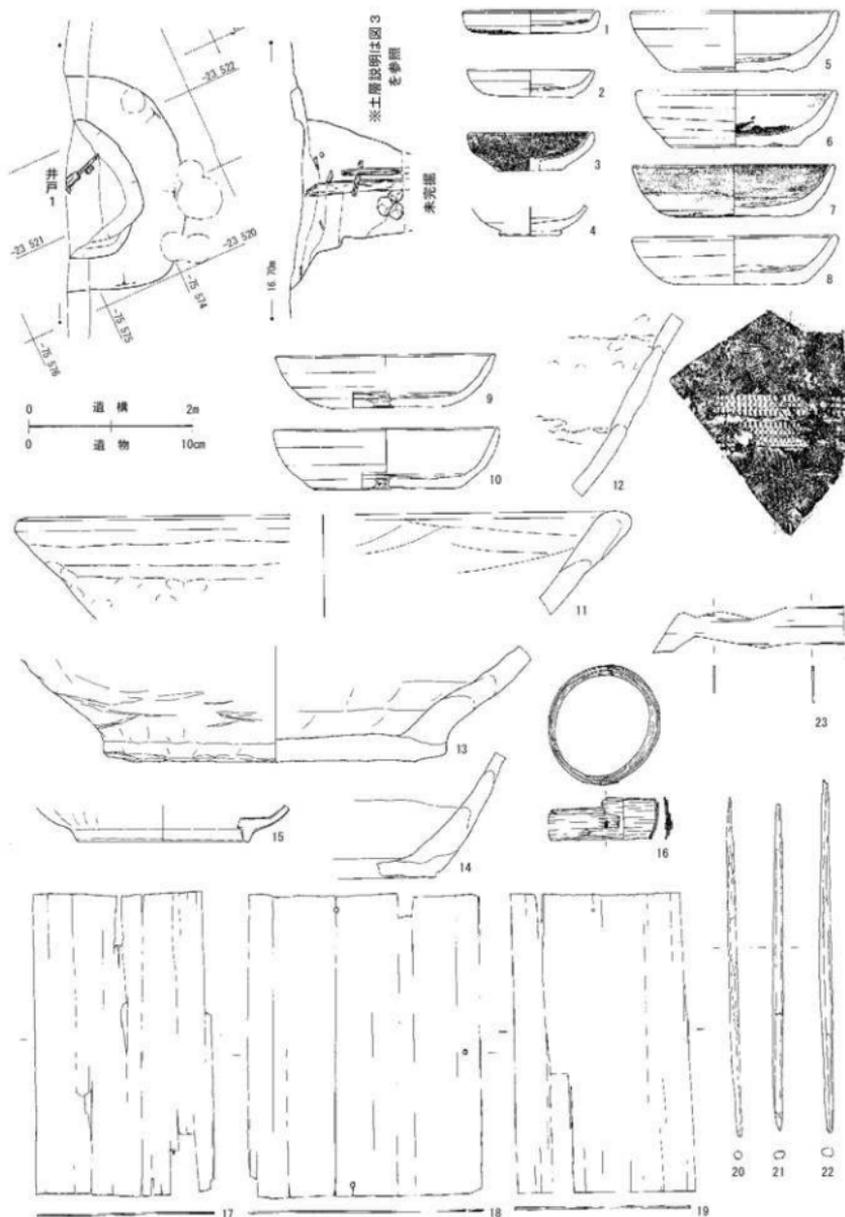


图23 井戸1 同出土遺物(1)

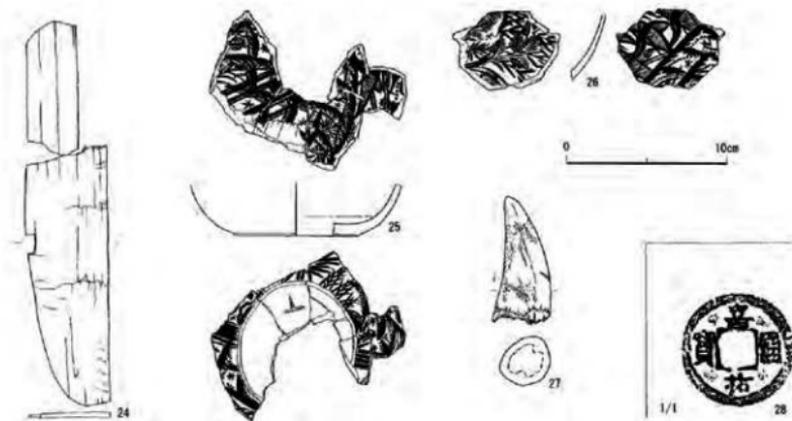


図24 井戸1出土遺物(2)

P. 52 (図19・26)

出土遺物：連歯下駄(35)

P. 54 (図19・26)

出土遺物：常滑片口鉢Ⅰ類(36)・土師器皿Ⅱ種大型(37)

P. 57 (図19・26)

出土遺物：土師器皿Ⅱ種小型(38)・箸状木製品(39)

IV面出土遺物(図27)

土師器皿Ⅱ種小型(1)・土師器皿Ⅱ種小型(2~13)・土師器皿Ⅱ種中型(14)・土師器皿Ⅱ種大型(15~23)・火鉢(24)・常滑甕(25)・常滑片口鉢Ⅱ類(26)・南部系山茶碗(27)・常滑片口鉢Ⅰ類(28・29)・磨耗陶片(30)・白磁口元型押盤(31)・白磁口元皿(32)・白磁梅花鉢(33)・竜泉窯青磁蓮弁文碗(34・35)・竜泉窯青磁折縁鉢(36)・高麗青磁鉢(37)・青白磁梅瓶(38)・咸平元宝(39)・天禧通宝(40)・皇宋通宝(41)・熙寧元宝(42)・元豐通宝(43・44)・元祐通宝(45~47)・政和通宝(48)・紹聖元宝(49)・砥石中砥(50)・漆器皿(51) 特記事項：上層と下層を分けていないが、年代は13世紀後半で大過ない。

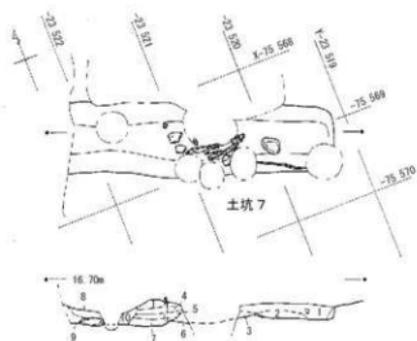
5. V面(図28)

検出高：約16.3m~16.2m 構成土：人頭大泥岩・砂岩の間に破砕泥岩が詰まる地形 検出遺構：溝2条 土坑1基・小穴21穴(内建物1含む) 土師器皿・土師器皿細片集中部2箇所

V面上出土遺物(図28)

出土遺物：円盤状土製品(1)・白磁皿(2)・竜泉窯青磁蓮弁文碗(3)・不明木製品(4)・箸状木製品(5)・棒状木製品(6)

建物4(図29)



1. 青灰褐色粘質土 小石〜こぶし大泥粒
2. 暗青灰色粘質土 強粘性 1より色調暗く、含有物多め
3. 黒灰色砂質土 炭化物多く含む
4. 青灰色粘質土 泥炭粒・木片・炭化物含む
5. 黒青灰色砂質土 多量の炭化物と泥炭粒・木片含む
6. 明灰褐色土 炭化物・木片・泥炭含む
7. 茶褐色粘質土 腐植土混入し軟らかい 炭化物・木片・泥炭粒含む
8. 暗青灰色粘質土 泥炭粒・心砂・鉄分・木片・炭化物含む
9. 泥岩地行層 半人頭大泥粒を傾角(5度か)
10. 明褐色粘質土 泥炭粒多く含む 炭化物含む(ピットの覆土か)

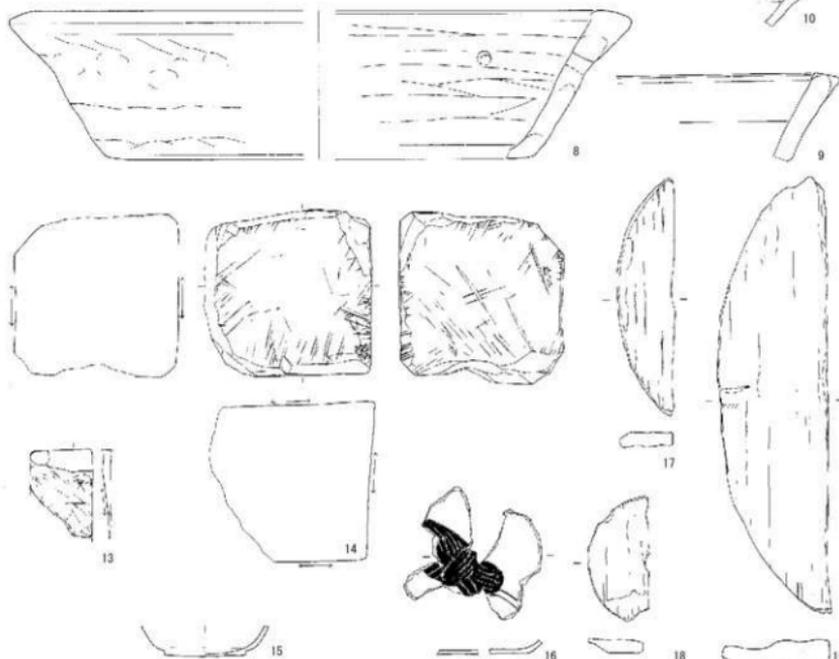
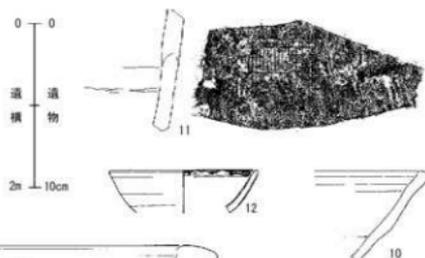
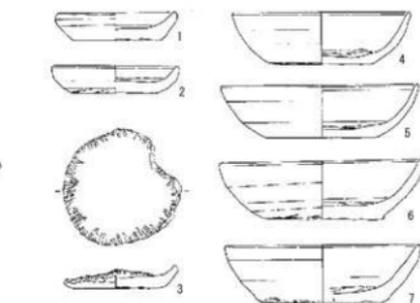


図25 土坑7 同出土遺物

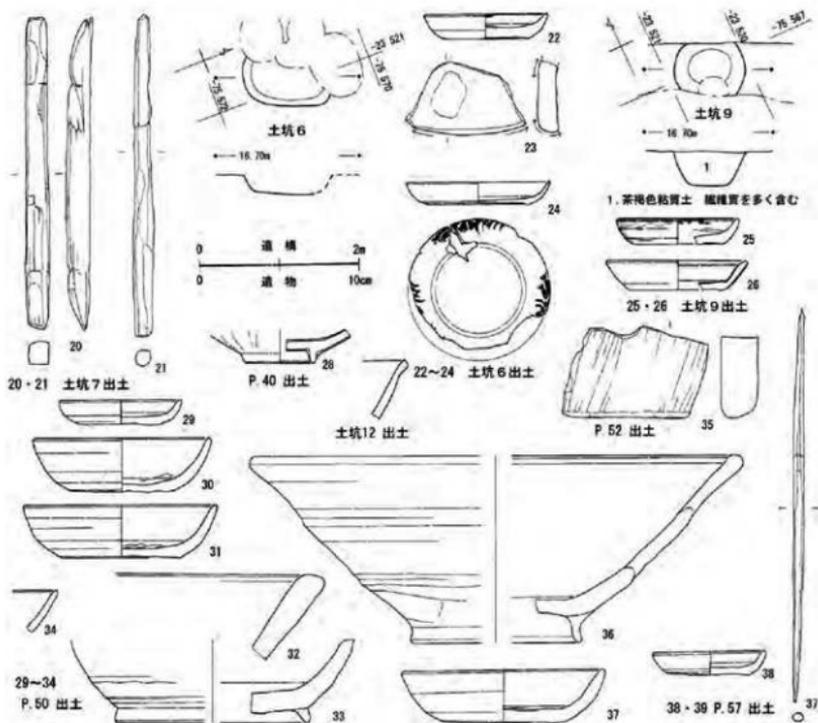


図26 土坑6・7・9・12、同出土遺物・IV面柱穴出土遺物

位置：X-75 570～75 574 Y-23 519～23 523 規模：東西I間（柱間距離1.70m）×南北2間（柱間距離1.93m）・柱穴底面高15.88m（平均）※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位：N-27° - E 重複関係：なし 出土遺物：P.1より砥石中砥（1） 特記事項：溝により北・東の境界が示されている中におさまっているとみてよい。柱穴は同規模で、いずれも礎板を持つ。

土坑13（図29）

位置：X-75 570～75 572 Y-23 519～23 521 規模：東西87cm×南北98cm×深さ約54cm（底面高15.67m）平面形：円形 断面形：碗形 充填土：茶褐色粘質土 出土遺物：土師器皿R種小型（2・3）・丸瓦（4） 特記事項：土師器の年代は13世紀中葉～後半か。図29-4丸瓦端縁のケズリには鎌倉時代でも古い様相があり、13世紀の前葉にまで遡る可能性がある。

P.73（図28・29）

出土遺物：元符通宝（5）

溝3（図28・30）

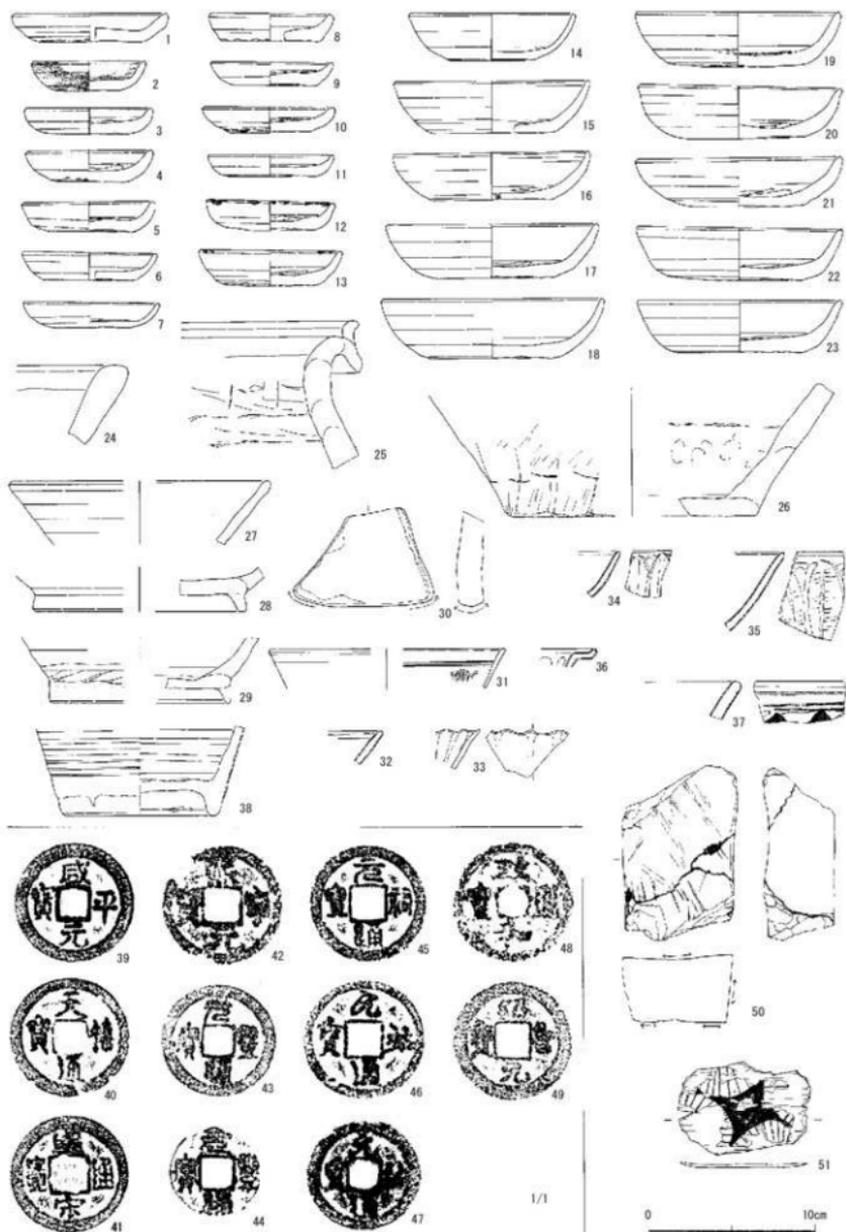


圖27 IV面出土遺物

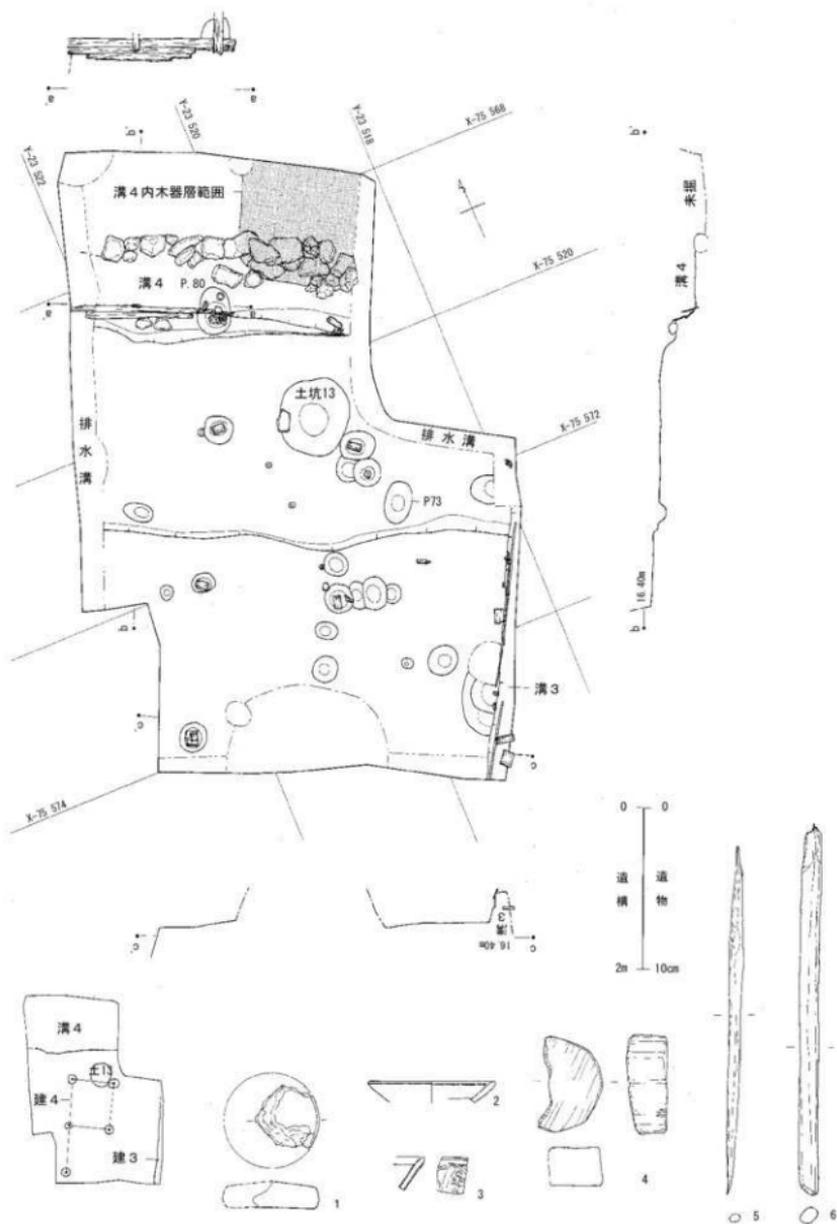
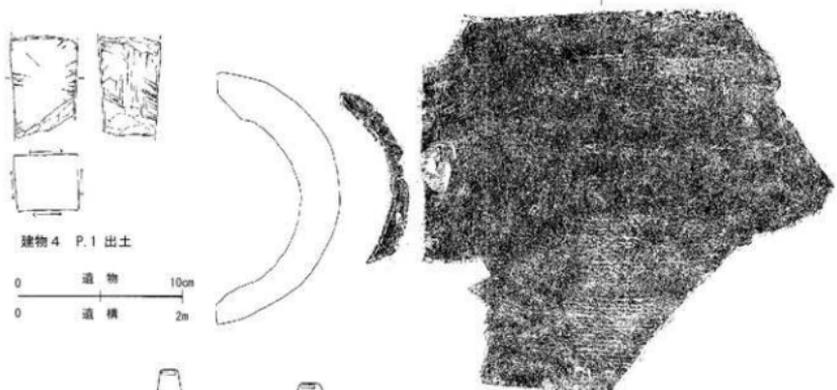
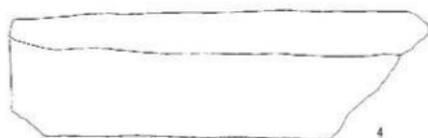
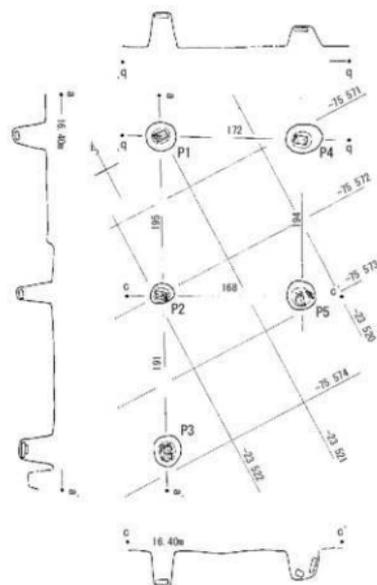


图28 V面遺構全圖 V面上出土遺物

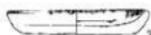
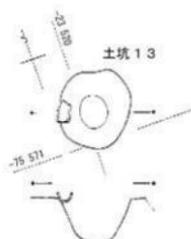


建物4 P.1出土

0 遺物 10cm
0 遺構 2m



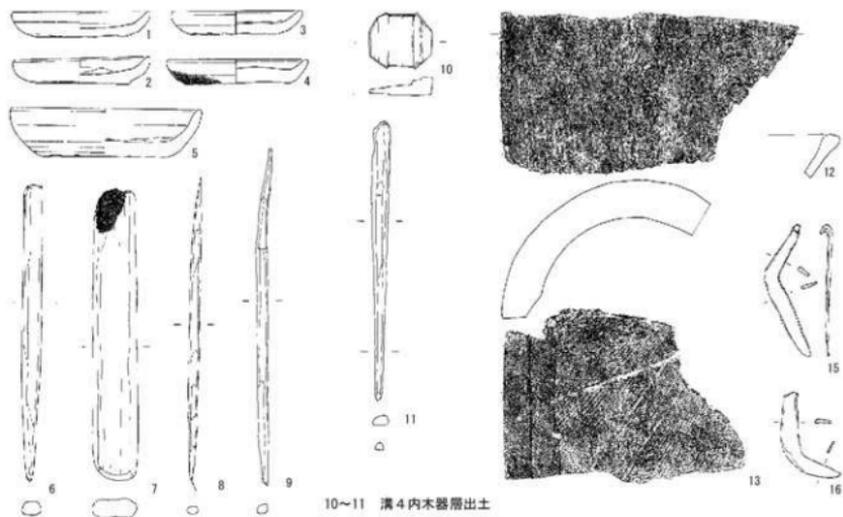
建物4	
N.	長×寬×厚×深
P.1	36×36×42
P.2	29×29×42
P.3	36×33×41
P.4	44×36×23
P.5	37×36×37
單位 cm	



2~4 土坑13出土



图29 建物4·土坑13·P73 同出土遺物



1~7 溝3出土

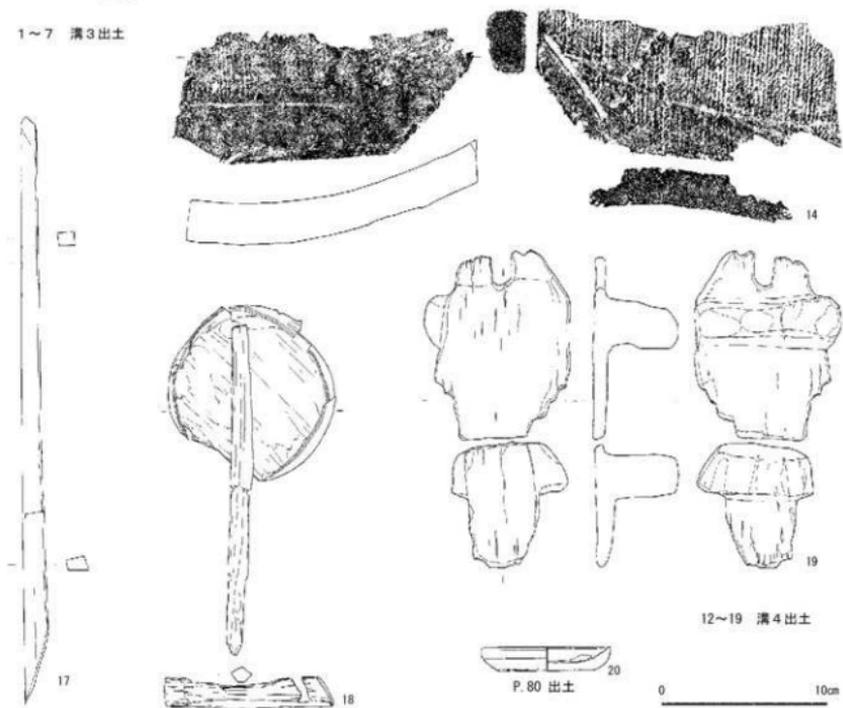


圖30 溝3・4 P. 80 出土遺物

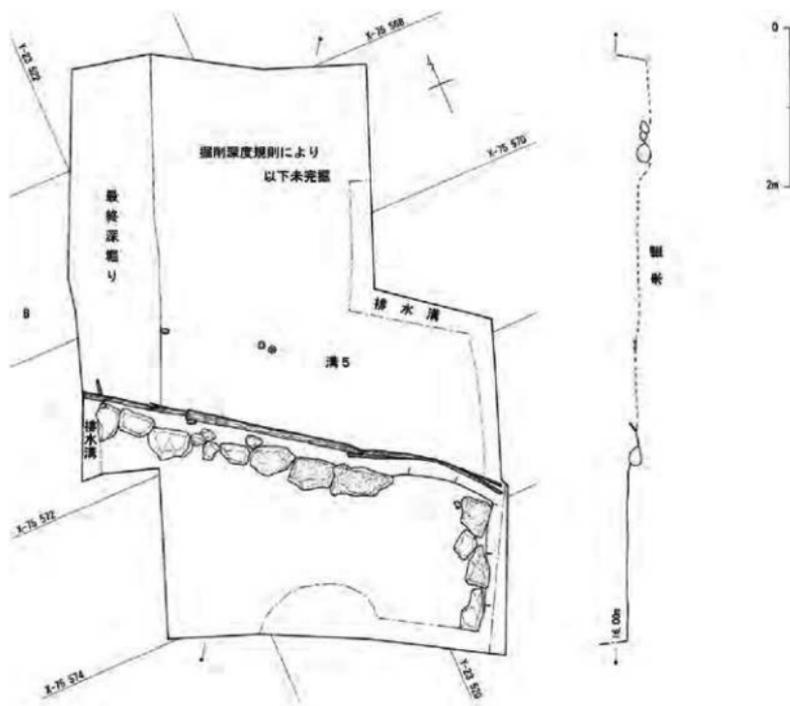


図31 VI面遺構全圖

位置：X-75 573～-75 576 Y-23 518～-23 520 規模：26 cm以上 断面形：逆台形か 主軸方位：(N-27° -E) 充填土：東壁・南壁土層図(図3)参照 流下方向：? 重複関係：なし 出土遺物：土師器皿R種小型(1~4)・同大型(5)・串状木製品(6)・棒状木製品(7)・箸状木製品(8・9) 特記事項：土師器はおおむね13世紀中葉～第3四半期であろう。

溝4内木器層(図28・30)

出土遺物：不明木製品(10)・串状木製品(11) 特記事項：溝4堆積土上面に薄く広がる茶褐色繊維質の層から出土したもの。土師器の年代は13世紀中葉前後か。

溝4(図28・30)

位置：X-75 566～-75 576 Y-23 518～-23 523 規模・断面形：ともに深度規制により未完掘のため不明 主軸方位：(N-65° -W) 充填土：土層図(図3・4)参照 流下方向：東→西 重複関係：溝5を切る 出土遺物：常滑片口鉢I類(12)・丸瓦(13)・平瓦(14)・不明金属製品(15・16)・串状木製品(17)・柄杓(18)・下駄(19) 特記事項：木器層の下に凝灰岩を敷いて構築された面があり、

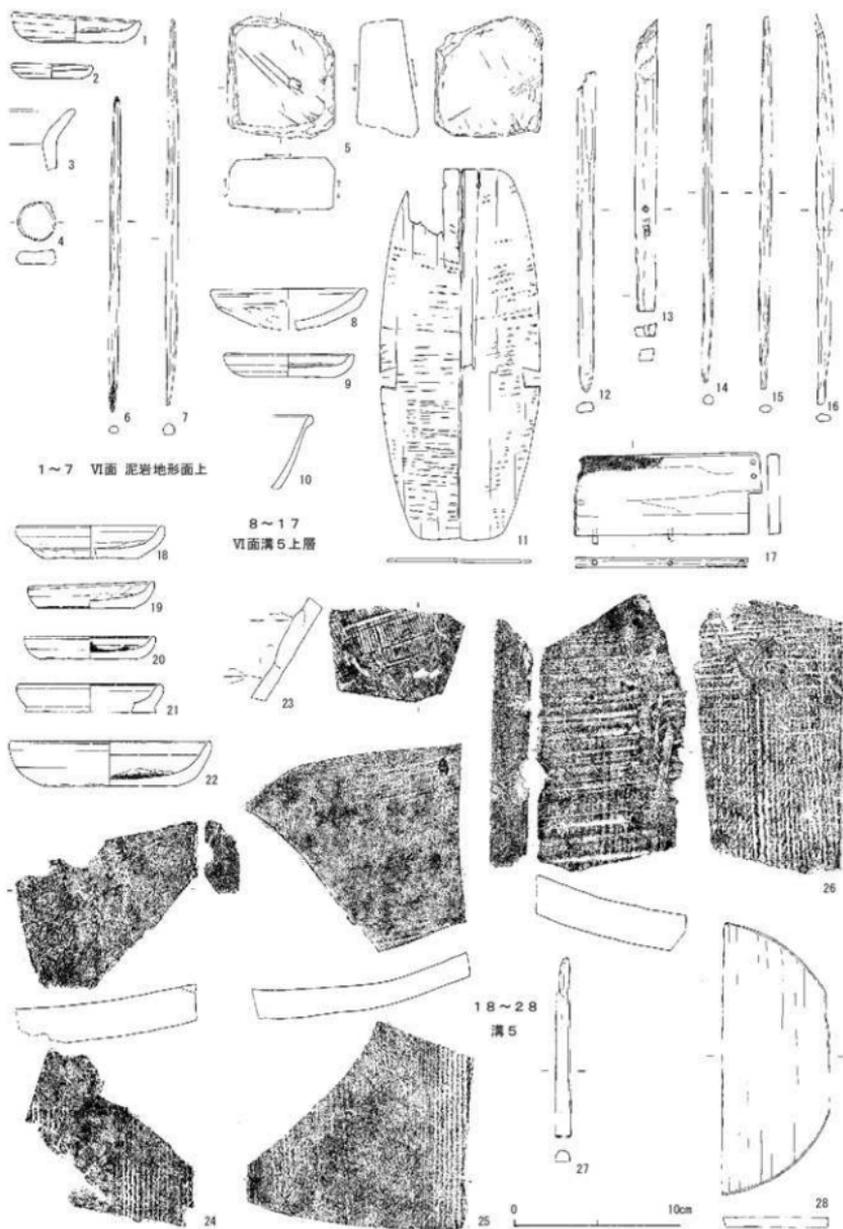


图32 VI面上 溝5 出土遺物

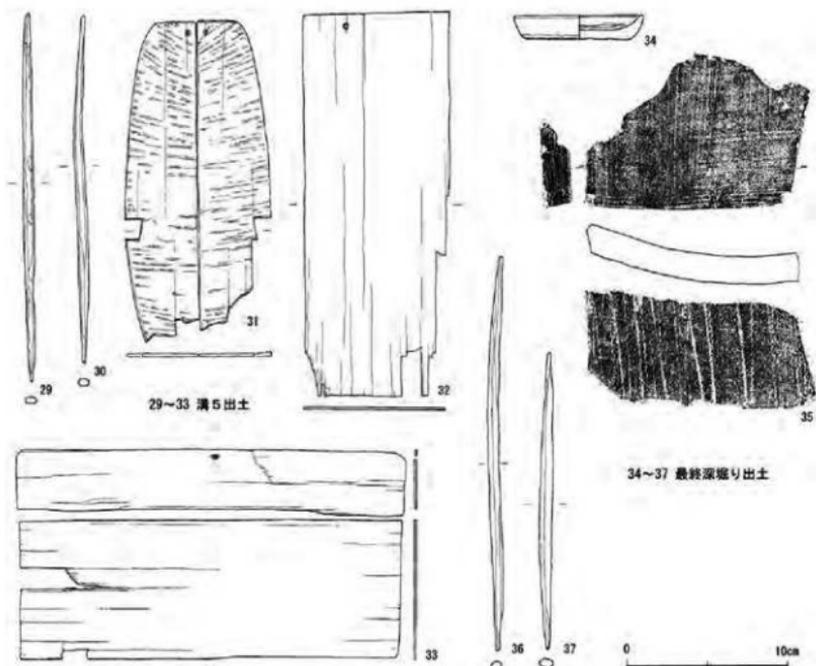


図33 溝5、深掘り出土遺物

これが一時期の溝底部をなす。さらにその下に一時期古い溝が見える。深掘りの断面観察ではさらに下に落ちていくことが確認できたが（「4-B・C」図4 土層番号129）、底部には達しなかった。出土遺物からみると、図30・13・14の瓦はともに図29・4と共通する要素を持ち、13世紀前半まで遡ることができよう。図30・1~5の土師器には13世紀第1四半期までの多様性を脱して浅い皿形に統一された様相が認められ、同第2四半期に位置付けられる。

P.80 (図28・30)

出土遺物：土師器皿R種小型 (20)

6. VI面 (図31)

検出高：約16.0m~15.8m 構成土：大型泥岩・砂岩地形 検出遺構：溝1条

溝5 (図31・32・33)

位置：X-75 574以北 Y-? 規模・断面形：初期は箱形、改修後は深度規制により未完掘のため不明 主軸方位：(N-56° -W) 充填土：土層図 (図3・4) 参照 流下方向：不明 重複関係：溝4に切られる 出土遺物：土師器皿T種小型 (18)・土師器皿R種小型 (19~21)・土師器皿R種大型 (22)・常滑甕 (23)・平瓦 (24~26)・棒状木製品 (27)・円板状木製品 (28)・箸状木製品 (29・30)・草履芯

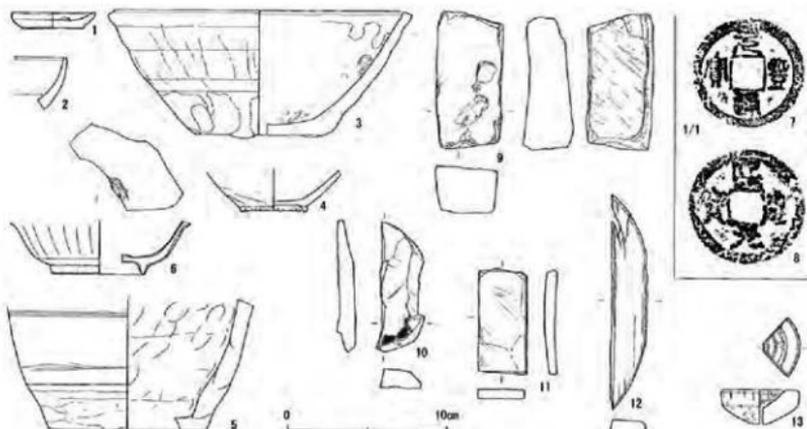


図34 遺構外採集遺物

(31)・折敷(32・33) 特記事項：南半部の凝灰岩・泥岩を敷いたような面が板壁を境に北に向かって落ちる。ひとまず「溝」とは称したものの北側の対岸が調査区内で見つかっていないので、性格については確実でない。池のようなものである可能性もあろう。断面から、一度改修を受け、北側に岸が移行していることがわかるが、これも広がりや深さ等については不明である。年代は図32-24～26の瓦類に鎌倉時代でも早い時期の様相があり、また同18～22の土師器は13世紀前半のうちに収まる。

VI面地形面上出土遺物(図32)

出土遺物：土師器皿R種小型(1)・土師器皿R種超小型(2)・土師器甕(3)・円盤状土製品(4)・砥石中砥(5)・箸状木製品(6・7) 特記事項：図32-1の土師器は器形がT種のように低く、13世紀前半。同-3の土師器は7世紀後半と思われ、下層もしくは近辺に古代遺構のあることを示唆している。

VI面溝5上層出土遺物(図32)

出土遺物：土師器皿T種小型(8)・土師器皿R種小型(9)・北部系山茶碗(10)・板草履芯(11)・へら状木製品(12・13)・箸状木製品(14～16)・箱型製品部材(17) 特記事項：8・9の土師器は13世紀前半のもの。17は木釘によってとめる。

深掘り(図31・33)

出土遺物：土師器皿R種小型(34)・平瓦(35)・箸状木製品(36・37) 特記事項：土層断面により溝5底部、溝4B・C等を確認したが、後者はなお底に達しなかった。34の土師器、35の平瓦などはこの深掘りが13世紀前半であることを示している。

7. 遺構外採集遺物(図34)

土師器皿R種超小型(1)・白色系土師器皿(2)・古瀬戸鉢(3)・北部系山茶碗(4)・瀝美壺(5)・竜泉窯青磁蓮弁双魚文折縁鉢(6)・元豊通宝(7)・熙寧元宝(8)・砥石中砥(9)・風字硯(10)・砥石仕上砥(11)・円板状木製品(12)・木製独楽(13) 特記事項：掘乱坑や表採品などを一括した。

(松原・馬淵一補綴)

出土土物観察表(1)

探出番号	出土遺構	種別	備考
図3-1	調査区 東壁	土師器ⅢB種 小型	口径18.1cm 底径6.6cm 器高1.5cm 右回転ロコ口 底面糸切り、薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・炭粒を含む
		土師器ⅢB種 大型	口径12.8cm 底径8.2cm 器高3.0cm 右回転ロコ口 底面糸切り、薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・炭粒を含む
		常滑片口鉢I類 類	口縁部片 胎土は灰色 ロコ口成形 長石・石英粒を含む
		調査区 南壁	口縁～体部片 胎土は暗灰色、砂質 長石・石英粒を含む 器表は被熱により剥離 口縁下に孔貫通
		調査区 南壁	常滑片口鉢II類 類
調査区 南壁	土師器ⅢB種 大型	口径12.8cm 底径7.7cm 器高3.0cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む	
		口径7.5cm 底径5.2cm 器高1.7cm 右回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・炭粒を含む	
図4-7	調査区 西壁	土師器ⅢB種 小型	口径7.3cm 底径5.3cm 器高1.7cm 右回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・炭粒・砂を含む
		土師器ⅢB種 大型	口径11.1cm 底径5.9cm 器高3.0cm 右回転ロコ口 底面糸切り、はっきりした板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡い肌色、赤色粒子・炭粒を含む・精良土
調査区 西壁	土師器ⅢB種 大型	口径12.8cm 底径9.3cm 器高3.0cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、海綿骨芯・炭粒を含む・精良土	
		常滑 壺	底径21.0cm 輪縁み成形 胎土は淡灰色、長石・石英を含む 器表は赤褐色
図6-1	柱穴VI P.3	土師器ⅢB種 小型	口径7.4cm 底径5.4cm 器高1.8cm 右回転ロコ口 底面糸切り、薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
		土師器ⅢB種 小型	口径6.3cm 底径4.15cm 器高2.05cm 回転ロコ口 底面糸切り 胎土は肌色、砂粒・赤色粒子を含む 口縁部に曲線付着
図7-1	土灰1	土師器ⅢB種 小型	口径7.1cm 底径4.1cm 器高1.95cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・炭粒を含む
		土師器ⅢB種 小型	口径7.8cm 底径4.6cm 器高1.55cm 右回転ロコ口 底面糸切り、微かに板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒を含む
	土灰1	土師器ⅢB種 小型	口径8.6cm 底径5.2cm 器高2.5cm 右回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒を含む
		土師器ⅢB種 大型	口径12.0cm 底径7.2cm 器高3.3cm 右回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒・炭粒を含む
	土灰1	瀬戸 天目茶碗	口縁～体部片 黒焼釉 胎土は淡灰褐色
		土灰3	土師器ⅢB種 小型
	土灰3	土師器ⅢB種 中型	口径10.25cm 底径6.4cm 器高2.55cm 右回転ロコ口 底面糸切り、薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、砂粒・赤色粒子を含む・砂質土 口縁部を平に削る
		土師器ⅢB種 小型	口径7.6cm 底径5.3cm 器高1.75cm 右回転ロコ口 底面糸切り、薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・炭粒を含む
	P.1	鉄釘	長さ16.0cm 幅1.2cm 厚0.3cm
		P.10	小銅錐
図8-1	1面	土師器ⅢB種 小型	口径7.4cm 底径4.4cm 器高1.65cm 右回転ロコ口 底面糸切り、薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・炭粒を含む 口縁の一部に曲線付着
		土師器ⅢB種 小型	口径7.25cm 底径4.6cm 器高1.75cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
	1面	土師器ⅢB種 小型	口径7.4cm 底径5.3cm 器高2.2cm 右回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部曲線付着
		土師器ⅢB種 小型	口径7.8cm 底径4.7cm 器高2.4cm 回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む
	1面	土師器ⅢB種 中型	口径10.6cm 底径5.05cm 器高6.8cm 回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子を含む
		土師器ⅢB種 中型	口径11.0cm 底径6.1cm 器高3.2cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子を含む
	1面	土師器ⅢB種 中型	口径11.0cm 底径7.2cm 器高3.15cm 右回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
		土師器ⅢB種 大型	口径11.9cm 底径7.0cm 器高3.3cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、白色粒子・赤色粒子・多量の砂粒・炭粒を含む・砂質土
	1面	土師器ⅢB種 大型	口径12.8cm 底径7.5cm 器高3.4cm 右回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
		土師器ⅢB種 大型	口径12.7cm 底径7.4cm 器高3.33cm 右回転ロコ口 底面糸切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、白色粒子・赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
	1面	土師器ⅢB種 大型	口径12.9cm 底径8.0cm 器高3.3cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
		土師器ⅢB種 大型	口径12.3cm 底径7.1cm 器高3.9cm 右回転ロコ口 底面糸切り、薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子を含む
	1面	土師器ⅢB種 大型	口径13.2cm 底径7.0cm 器高3.8cm 回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
		土師器ⅢB種 大型	口径12.7cm 底径7.4cm 器高3.8cm 回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子を含む
	1面	南部系 山崎輪	口縁部～体部片 胎土は淡灰褐色
		1面	常滑 壺
	17面	瀬戸大平鉢	口径25.3cm 底径11.8cm 器高6.45cm 胎土は肌色～灰色、炭粒・骨やりに後漬け掛け
		1面	青白磁 梅瓶
図9-1	建物1 P.4	刀子	残存長(6.7cm) 最大幅(1.3cm) 小孔あり 柄部と思われる
		土師器ⅢB種 小型	口径7.15cm 底径5.2cm 器高1.4cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・炭粒を含む 口縁下内側に薄く曲線付着

出土遺物観察表(2)

採回番号	出土遺構	種別	備考
3	柱六列6 P.1	土師器ⅢB種 大型	口径11.35cm 底径7.4cm 器高2.75cm 回転口コ 底面糸切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子を含む
4	柱六列6 P.1	常滑片口鉢 P.1 細型	口縁部片 胎土は灰色、白色粒を含む
10-11	柱六列7 P.1	土師器ⅢB種 小型	口径7.85cm 底径5.4cm 器高1.8cm 回転口コ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	柱六列8 P.2	鉄釘	長さ7.9cm 幅0.55cm 厚0.7cm
3	土坑4	土師器ⅢB種 小型	口径7.2cm 底径5.4cm 器高1.4cm 回転口コ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色 赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
4	土坑4	土師器ⅢB種 小型	口径7.6cm 底径5.3cm 器高1.75cm 回転口コ 底面糸切り 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
5	土坑4	土師器ⅢB種 中型	口径10.8cm 底径6.2cm 器高3.1cm 回転口コ 底面糸切り、板状圧痕あり 胎土は淡赤褐色、白色粒子・赤色粒子・砂粒多めに含む砂質土
6	土坑4	土師器ⅢB種 大型	口径11.8cm 底径7.3cm 器高3.4cm 回転口コ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
7	土坑4	滑石印判	遺存長(2.1cm) 幅(1.4cm) 厚(1.4cm) 表面に陽刻の文様、裏面は煤付着 滑石鑄転用品
8	土坑4	砥石 仕上砥	遺存長(17.0cm) 幅(4.0cm) 厚(51.6cm) 砥面2面 淡黄褐色 鳴鹿産
9	土坑4	砥石 中砥	遺存長(4.2cm) 幅(3.5cm) 厚(51.5cm) 砥面4面 褐色が混じる淡緑灰色
10-11	土坑14 P.1	平瓦	厚52.3cm 胎土は淡灰色、白色粒子・赤色粒子を含む 凸面に薄く捺子印あり
2	土坑14	青白磁 合子	身の底部 底径4.1cm 裏面灰白色 内側は木色平通明焼 土坑4出土の破片と接合した
3	土坑15	瀬戸 小壺	胴部片 コロ成形 胎土は淡灰褐色、堅緻 黄褐色
4	P.17	土師器ⅢB種 小型	口径7.7cm 底径5.5cm 器高1.6cm 回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・砂粒を含む 口縁部コ 能平に磨接
5	P.31	土師器ⅢB種 小型	口径7.15cm 底径4.8cm 器高2.2cm 回転口コ 底面糸切り 口縁部に油煤付着 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
10-12	Ⅱ面上口→ Ⅱ面上	土師器ⅢB種 小型	口径7.0cm 底径5.4cm 器高1.95cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む
Ⅱ面上口→ Ⅱ面上	土師器ⅢB種 小型	口径7.55cm 底径4.7cm 器高1.7cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む砂質土	
Ⅱ面上口→ Ⅱ面上	常滑 壺	口縁部片 胎土は灰色、白色粒子少し含む 器表は茶色	
4	Ⅱ面上口→ Ⅱ面上	瀬戸 平瓶	口縁部片 口径(14.9cm) 灰釉 胎土は淡黄褐色
5	Ⅱ面	土師器ⅢB種 小型	口径7.4cm 底径6.2cm 器高1.4cm 回転口コ 底面糸切り 胎土は淡褐色、赤色粒子・泥岩粒・砂粒を含む
6	Ⅱ面	土師器ⅢB種 小型	口径6.7cm 底径5.3cm 器高1.65cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色 赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
7	Ⅱ面	土師器ⅢB種 小型	口径7.0cm 底径4.6cm 器高1.7cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、白色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む 口縁部2箇所に油煤付着
8	Ⅱ面	土師器ⅢB種 小型	口径(7.35cm) 底径(4.6cm) 器高(2.35cm) 右回転口コ 底面糸切り、外底部に薄く板状圧痕 胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
9	Ⅱ面	土師器ⅢB種 中型	口径10.4cm 底径6.9cm 器高2.7cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む砂質土、口縁部2箇所に油煤付着
10	Ⅱ面	土師器ⅢB種 中型	口径10.7cm 底径6.65cm 器高3.0cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
11	Ⅱ面	土師器ⅢB種 中型	口径10.1cm 底径5.8cm 器高3.05cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む砂質土
12	Ⅱ面	土師器ⅢB種 大型	口径12.45cm 底径7.1cm 器高3.45cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む
13	Ⅱ面	土師器ⅢB種 大型	口径(12.25cm) 底径(8.8cm) 器高(3.55cm) 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
14	Ⅱ面	土師器ⅢB種 大型	口径12.7cm 底径7.55cm 器高3.7cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
15	Ⅱ面	瓦葺 火鉢	口縁部が胴部片 胎土は明灰色、漆・多量砂・砂粒を含む
16	Ⅱ面	瀬戸 初皿	口縁部が胴部片 胎土は明灰褐色、堅緻 長柄漬川掛け
17	Ⅱ面	瀬戸 折縁深	口径(25.35cm) 胎土は淡黄灰色 灰釉ハケ塗り
18	Ⅱ面	滑石鍋	口縁が胴部片 顔灰色
19	Ⅱ面	砥石 中砥	遺存長(5.7cm) 幅(3.8cm) 厚(51.8cm) 砥面4面 褐色が混じる乳白色 天草産
20	Ⅱ面	砥石 仕上砥	遺存長(4.8cm) 幅(3.15cm) 厚(50.7cm) 砥面1面 淡灰褐色 鳴鹿産
10-11	Ⅱ面	土師器ⅢB種 小型	口径(6.8cm) 底径(4.2cm) 器高(2.0cm) 回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	Ⅱ面	土師器ⅢB種 小型	口径7.2cm 底径4.9cm 器高1.8cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
3	Ⅱ面	土師器ⅢB種 小型	口径7.6cm 底径5.3cm 器高1.6cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子・泥岩粒を含む
4	Ⅱ面	土師器ⅢB種 中型	口径9.8cm 底径5.7cm 器高2.9cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・泥岩粒を含む精良土
5	Ⅱ面	土師器ⅢB種 大型	口径12.2cm 底径7.3cm 器高3.3cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
6	Ⅱ面	土師器ⅢB種 大型	口径(12.6cm) 底径(8.4cm) 器高(3.0cm) 回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む砂質土
7	Ⅱ面	土師器ⅢB種 大型	口径12.0cm 底径7.4cm 器高3.5cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
8	Ⅱ面	土師器ⅢB種 大型	口径(11.6cm) 底径(7.8cm) 器高(3.1cm) 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子を含む砂質土
9	Ⅱ面	土師器ⅢB種 大型	口径12.3cm 底径7.5cm 器高3.1cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子・泥岩粒を含む砂質土

出土遺物観察表(3)

地区番号	出土遺構	種別	備考
10	Ⅷ	常滑 壺	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石を含む、粘性強い。器表は黒色
11	柱穴Ⅱ1	土師器ⅡB種 小型	口径4.6cm 底径3.6cm 器高0.95cm 右回転口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む
12	土坑5	常滑片口鉢Ⅰ 類	口縁部片 胎土は灰色、長石・石英粒含む
13	土坑Ⅱ1	土師器ⅡB種 小型	口径7.53cm 底径5.33cm 器高1.6cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む
14	土坑Ⅱ1	常滑片口鉢Ⅱ 類	口縁部片 口口成形 胎土暗灰色、長石含む 器表は暗紫色
15	P.34	土師器ⅡB種 大型	口径11.8cm 底径7.5cm 器高3.45cm 右回転口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
16	P.34	常滑 小壺	口縁部片 口径5.00cm 口口成形 胎土は灰褐色 器表は暗灰色
15-1	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径6.43cm 底径4.0cm 器高2.15cm 右回転口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
2	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径6.9cm 底径4.4cm 器高2.0cm 右回転口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
3	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径6.8cm 底径4.5cm 器高2.2cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
4	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径6.7cm 底径4.9cm 器高1.8cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
5	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.03cm 底径4.4cm 器高2.0cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
6	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径6.8cm 底径4.3cm 器高1.9cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む
7	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.1cm 底径4.5cm 器高2.9cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
8	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.1cm 底径4.5cm 器高2.0cm 回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒・白色粒を含む
9	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径6.9cm 底径4.4cm 器高2.2cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色～赤褐色、赤色粒子・白色粒・砂粒を含む
10	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径6.53cm 底径4.2cm 器高1.7cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒・砂粒を含む
11	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.2cm 底径4.9cm 器高1.8cm 回転口口 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
12	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径6.73cm 底径4.5cm 器高1.9cm 右回転口口 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、赤色粒子・砂粒を含む 口縁部に曲線すまじ付
13	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.2cm 底径5.4cm 器高1.8cm 右回転口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
14	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.5cm 底径5.2cm 器高1.8cm 右回転口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・白色粒子を含む
15	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.7cm 底径4.8cm 器高1.7cm 右回転口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む 一部に薄く窪付
16	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.7cm 右回転口口 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
17	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径8.3cm 底径4.8cm 器高1.7cm 右回転口口 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
18	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.8cm 底径5.3cm 器高1.6cm 右回転口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
19	土師器ⅡB種 中2型	小型	口径7.63cm 底径5.2cm 器高1.7cm 回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
20	土師器ⅡB種 中2型	中型	口径9.4cm 底径5.3cm 器高2.7cm 回転口口 底面糸切り 胎土は淡褐色、赤色粒子・微砂粒を含む精良土
21	土師器ⅡB種 中2型	中型	口径10.5cm 底径7.6cm 器高2.7cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
22	土師器ⅡB種 中2型	中型	口径10.2cm 底径5.8cm 器高3.0cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
23	土師器ⅡB種 中2型	中型	口径10.6cm 底径6.3cm 器高2.8cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
24	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径12.0cm 底径5.4cm 器高3.0cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
25	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径11.6cm 底径6.83cm 器高3.1cm 右回転口口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
26	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径12.9cm 底径7.3cm 器高3.7cm 回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・泥岩粒を含む
27	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径11.2cm 底径6.3cm 器高3.5cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は本褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
28	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径12.2cm 底径6.8cm 器高3.3cm 回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
29	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径13.0cm 底径8.0cm 器高3.5cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む砂質土
30	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径12.5cm 底径8.5cm 器高3.1cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
31	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径12.3cm 底径7.4cm 器高3.2cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
32	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径13.4cm 底径8.4cm 器高3.2cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・微砂粒を含む
33	土師器ⅡB種 中2型	大型	口径12.1cm 底径7.7cm 器高3.2cm 右回転口口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・白色粒子を含む

出土遺物観察表(4)

種別番号	出土遺物	種別	備考
34	土師器集 中2	土師器ⅡB種 大型	口径12.4cm 底径7.3cm 器高3.1cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・白色粒子・泥岩粒を含む
35	土師器集 中2	土師器ⅡB種 大型	口径11.9cm 底径7.5cm 器高3.3cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒・泥岩粒・白色粒子を含む
36	土師器集 中2	常滑片口鉢1 類	口径33.8cm 底径15.5cm 器高11.1cm 輪積み成形 胎土は長石・大きめの石英粒を含む灰褐色 器表は内側灰色、外側茶褐色 体部中央から下は使用により磨耗
図16-1	甕面	土師器ⅡB種 小型	口径7.4cm 底径5.35cm 器高1.5cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
2	甕面	土師器ⅡB種 小型	口径7.15cm 底径4.855cm 器高1.7cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
3	甕面	土師器ⅡB種 小型	口径7.63cm 底径5.7cm 器高1.9cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
4	甕面	土師器ⅡB種 小型	口径7.65cm 底径5.8cm 器高1.9cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む
5	甕面	土師器ⅡB種 小型	口径7.5cm 底径5.5cm 器高1.75cm 右回転コクロ 底面糸切り 胎土は淡褐色、赤色粒子・微砂粒・泥岩粒を含む
6	甕面	土師器ⅡB種 小型	口径7.7cm 底径5.4cm 器高1.6cm 右回転コクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・泥岩粒・海綿骨芯を含む
7	甕面	土師器ⅡB種 小型	口径7.33cm 底径5.4cm 器高1.5cm 回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む精良土
8	甕面	土師器ⅡB種 小型	口径7.853cm 底径5.05cm 器高1.85cm 回転コクロ 底面糸切り 内底部ナデ 見込み周面に沈痂 胎土は淡褐色、赤色粒子・微砂粒を含む
9	甕面	土師器ⅡB種 小型	口径7.65cm 底径4.9cm 器高1.5cm 回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・微砂粒を含む精良土
10	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径11.65cm 底径6.6cm 器高3.7cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
11	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径12.25cm 底径8.2cm 器高3.25cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む 薄く煤付着
12	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径12.35cm 底径6.5cm 器高3.3cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・白色粒子を含む
13	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径13.25cm 底径7.6cm 器高3.25cm 右回転コクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
14	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径13.0cm 底径7.9cm 器高3.45cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む
15	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径13.7cm 底径7.95cm 器高3.7cm 右回転コクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
16	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径11.7cm 底径6.6cm 器高2.85cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
17	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径11.35cm 底径7.3cm 器高3.15cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
18	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径12.55cm 底径7.1cm 器高3.3cm 回転コクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
19	甕面	土師器ⅡB種 大型	口径3.9cm 底径3.3cm 器高0.85cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・微砂粒を含む
20	甕面	土師器ⅡB種 極小型	口径3.75cm 底径3.3cm 器高0.7cm 右回転コクロ 底面糸切り 外底部薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・微砂粒を含む
21	甕面	土師器ⅡB種用 品	直径5.2～5.5cm 厚さ1.1cm 土師器ⅡB種の底部を使用した円盤
22	甕面	瓦器 火鉢	口縁～体部片 口径(34.0)cm 胎土・器表は、灰色、白色粒・砂粒を含む
23	甕面	瓦器 香炉	口縁～体部片 胎土・器表とも明灰色～灰褐色、微砂粒を含み肌理は細かめ
24	甕面	常滑片口鉢1 類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒・微砂粒を含む
25	甕面	常滑片口鉢1 類	口縁部片 輪積み成形 胎土は明灰色、白色粒・微砂粒を含む
26	甕面	常滑片口鉢1 類	口縁部片 輪積み成形 胎土は淡灰色、白色粒・微砂粒を含む
27	甕面	常滑片口鉢1 類	底部部片 輪積み成形 胎土は淡灰色、長石・石英・砂粒を含む 内底部は使用により磨耗
28	甕面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 4型式 胎土は明灰色、長石粒・黒色粒を含む 器表は褐色～茶色
29	甕面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石粒・石英粒を含む 器表は暗茶色
30	甕面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒・黒色粒少量を含む 器表は茶褐色
31	甕面	常滑 甕	底部片 底径(20.0)cm 輪積み成形 胎土・器表とも明茶褐色、長石・石英・褐色粒・砂粒を含む 内底部の周面に沿って茶色の遺着状付着物あり
32	甕面	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰色と淡褐色が層状に混じり、長石・石英・砂粒を含む 器表は灰褐色
33	甕面	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英粒を含む 器表は茶色 外面は明き目粗小現る
34	甕面	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英粒・褐色粒を含む 器表は外側茶褐色、内側明灰色 外面に溝を含んでいると思われる明灰色の帯(約4×3cm)が付着している
35	甕面	瀬戸 輪花入子	口径(4.2)cm 底径(3.1)cm 器高1.3cm コクロ成形後へつりに内側面を入れ輪花を作る 胎土は明黄灰色、緻密土
36	甕面	瀬戸 入子	口径5.2cm 底径3.1cm 器高1.9cm コクロ成形、回転糸きり 胎土は明黄灰色、緻密土
37	甕面	瀬戸 灰輪 折れ縁鉢	口径(20.1)cm m コクロ成形 胎土は明黄灰色、微砂粒を含み緻密
38	甕面	白磁 元瓦重	口縁部片 コクロ成形 素焼は灰白色 輪は軸みがかった半透明
39	甕面	平瓦	厚52.0cm 胎土は白色粒・砂粒を多く含む灰褐色土、表面は灰色 末福寺前期
40	甕面	元祐通宝	初鋳1086年 北条 行書
41	甕面	磁石 土師器	直径45.7cm 厚さ1.3cm 厚50.85mm 紙面1面 淡褐色～黄褐色 鳩輪
42	甕面	土師器	口縁部片 底元口径(18.0)cm 胎土は明灰色、微砂粒を含む 口縁上から外側に沿って暗灰色
43	甕面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は赤みがかった灰褐色、石英粒・砂粒を含む 器表は茶色
44	甕面	元祐通宝	初鋳1078年 北条 行書

出土遺物観察表(5)

採出番号	出土遺構	種別	備考
45	甕面構成	元尊通室	初師1078年 北米 行書
46	甕面構成	泉奈通室	初師1038年 北米 篆書
47	甕面構成	船塚通室	初師1068年 北米 雑書
48	甕面構成	船塚通室	初師1228年 南米 雑書 書文、穴
図18-1	溝2	土師器ⅢB種 小型	口径8.0cm 底径5.3cm 器高1.4cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、海綿骨・砂粒を含む砂質土
2	溝2	土師器ⅢB種 小型	口径7.5cm 底径5.3cm 器高1.6cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、海綿骨・砂粒を含む
3	溝2	土師器ⅢB種 大型	口径12.0cm 底径7.7cm 器高3.2cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤褐色、海綿骨・砂粒・白色粒を含む砂質土
4	溝2	土師器ⅢB種 大型	口径12.3cm 底径7.8cm 器高3.4cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色・海綿骨・砂粒・白色粒を含む 内面に薄く付着
5	溝2	灰・銅	口径1.8cm 厚3.0、5.5cm 骨角質 側面は丁字に面取り、両面に溝3mmに溝かいてい
6	溝2	常滑 壺	口縁部片 輪縁欠成形 胎土は灰褐色、白色粒少し含む 器表は褐色
7	溝2	磁石 中破	遺存長(8.2cm) 幅3.2cm 厚3.1cm 磁石面 灰褐色～灰褐色 伊予産
8	溝2	串状木製品	長さ19.1cm 幅1.2cm 厚3.1cm 一端が斜めに削り削落している
9	溝2	磁板	長さ18.6cm 幅10.6cm 厚3.4cm 粗い作りで径4cm弱の孔が貫通
図20-1	建物2	土師器ⅢB種 小型	口径6.55cm 底径4.2cm 器高2.1cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は灰色、白色粒・微砂粒・赤色粒を含む精良土
図21-1	建物3	南部系 山形鍋	口縁部片 胎土は灰褐色、砂質、白色粒を含む
図22-1	柱穴列13 P.1	へつ状木製品	長さ18.6cm 幅1.8cm 厚3.12cm 両端が削られて尖っている 断面はかまぼこ型を呈す
2	柱穴列13 P.2	瀬戸 入り	口径(5.7)cm 胎土は淡灰色、緻密土
3	柱穴列13 P.2	磁石 中破	遺存長(4.6)cm 遺存幅(4.3)cm 厚3.15cm 磁石面2面 黄灰白色 伊予産
4	柱穴列13 P.4	土師器ⅢB種 小型	口径7.3cm 底径5.3cm 器高1.6cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒・海綿骨・砂粒を含む
5	柱穴列15 P.2	常滑片口鉢Ⅱ種	口縁部片 輪縁欠成形、高台貼り付け 胎土は暗灰色、長石・石英粒、黒色粒を含む 器表は褐色 内底部は使用により摩滅 図25-10、図27-29と同一個体と思われる
図23-1	井戸1	土師器ⅢB種 小型	口径8.2cm 底径6.9cm 器高1.4cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒・海綿骨・砂粒を含む 外底部黒く硬化
2	井戸1	土師器ⅢB種 小型	口径7.45cm 底径5.4cm 器高1.65cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒・微砂粒を少し含む精良土
3	井戸1	土師器ⅢB種 小型	口径7.45cm 底径3.9cm 器高2.3cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は灰色、赤色粒・白色粒・微砂粒を含む 内・外表面とも黒く炭化している部分あり
4	井戸1	土師器ⅢB種 小型	底径3.7cm 右回転ロコ口 底面糸切り 高台部分貼り付け 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、精良土
5	井戸1	土師器ⅢB種 大型	口径(12.4)cm 底径8.3cm 器高3.75cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒・海綿骨・砂粒・微・でがりが粒を含む
6	井戸1	土師器ⅢB種 大型	口径12.0cm 底径8.0cm 器高3.5cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、海綿骨・砂粒を含む 内表面に油漬
7	井戸1	土師器ⅢB種 小型	口径(12.15)cm 底径7.5cm 器高3.2cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒・海綿骨・微砂粒を含む 内・外表面とも薄く油漬付着
8	井戸1	土師器ⅢB種 大型	口径12.3cm 底径8.1cm 器高3.0cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒・海綿骨・炭岩粒・砂粒を含む 内側の一部に薄く油漬付着
9	井戸1	土師器ⅢB種 大型	口径(13.3)cm 底径(7.6)cm 器高3.25cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒・微砂粒を少し含む精良土 内底部中央に径0.85cmの穿孔あり
10	井戸1	土師器ⅢB種 大型	口径(13.7)cm 底径(8.8)cm 器高3.7cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、白色粒・微砂粒を少し含む精良土 器表は褐色 内底部中央に径0.8cmの穿孔あり
11	井戸1	瓦部 火鉢	口径～体部片 輪縁欠成形 口径(36.4)cm 胎土・器表とも赤褐色、白色粒多く含む砂質土
12	井戸1	常滑 壺	胎土片 胎土は灰色、白色粒・砂粒を含む 器表は灰色色 叩き目(格子に斜線あり)
13	井戸1	常滑 壺	胎土片 胎土は淡灰色、少量の白色粒と砂粒を含む 器表は灰褐色 内表面に摩滅
14	井戸1	常滑片口鉢Ⅱ種	胎土片 胎土は淡灰色、長石・石英・微・砂粒を含む 器表は淡褐色 内表面は使用により摩滅
15	井戸1	東京泉青磁 弁文鉢	胎土片 底径(10.5)cm コロコ成形、削り出し高台、整付きの丸蓋 裏地は明灰色～赤褐色 輪は水色、不透明 細い貫入あり 継ぎ目・内底面に擦痕
16	井戸1	曲物 飯板	外径6.8～7.4cm 遺存高(2.6)cm 柄内の部分または小型容器の胴部か
17	井戸1	折敷	長さ18.5cm 遺存幅(10.9)cm 厚0.1cm 榎目材
18	井戸1	折敷	長さ18.7cm 遺存幅(14.3)cm 厚0.1cm 榎目材 3辺の柱状中央に小孔貫通
19	井戸1	折敷	長さ19.5cm 遺存幅(10.9)cm 厚0.09cm 榎目材 小孔貫通一箇所
20	井戸1	箸状木製品	長さ20.9cm 幅0.5cm 厚0.4cm 両口
21	井戸1	箸状木製品	長さ20.1cm 幅0.7cm 厚0.45cm 両口
22	井戸1	箸状木製品	長さ21.8cm 幅0.75cm 厚0.5cm 両口
23	井戸1	木製 男形	長さ11.7cm 幅2.3cm 厚0.08cm 榎目材
24	井戸1	灰覆土	長さ24.3cm 幅面側面距離(10.4)cm 厚0.25cm
25	井戸1	漆器 椀	口径(7.6)cm 輪高台 全体黒漆塗りで内面・外面とも朱漆手掻きで楕円・輪・星型などが組み合わさった構成文 外表面に丁字形の刻痕あり
26	井戸1	漆器 椀	胴部片 接合は出来なかったが図22-25同一個体と思われる
27	井戸1	加工 角	長さ8.2cm 最大径3.1～3.7cm 根元の一部分に切断痕 表面に複数の切り傷あり
図28	井戸1	喜祐通佛	初師1050年 北米 雑書
図25-1	土坑7	土師器ⅢB種 小型	口径7.0cm 底径5.5cm 器高1.7cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒・海綿骨・砂粒を含む
2	土坑7	土師器ⅢB種 小型	口径7.35cm 底径5.3cm 器高1.7cm 右回転ロコ口 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒・海綿骨・砂粒を含む
3	土坑7	土師器ⅢB種 小型	底径5.5cm 遺存器高(1.4)cm 円筒状に開通した高台・右回転ロコ口 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒・海綿骨・砂粒を含む
4	土坑7	土師器ⅢB種 中大型	口径10.6cm 底径6.1cm 器高3.2cm 右回転ロコ口 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は灰色、赤色粒・白色粒・砂粒を含む精良土

出土遺物観察表(6)

採回番号	出土遺構	種別	備考
5	土坑7	土師器ⅢB種 大型	口径11.9cm 底径7.0cm 器高3.25cm 右回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
6	土坑7	土師器ⅢB種 大型	口径12.1cm 底径7.3cm 器高3.1cm 右回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒・泥岩粒を含む
7	土坑7	土師器ⅢB種 大型	口径(11.8)cm 底径(7.3)cm 器高3.55cm 回転クワロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・砂粒を含む
8	土坑7	瓦器 火鉢	口径(34.6)cm 底径(26.1)cm 器高0.1cm 輪横み成形 胎土は灰色、白色粒・多量の砂粒を含む 胴部の上から三分の一の位置に径約1.1cmの孔貫通
9	土坑7	瓦器 火鉢	口径部片 輪横み成形 胎土は灰色、白色粒・多量の砂粒を含む
10	土坑7	常滑片口鉢Ⅰ類	口径部片 輪横み成形 胎土・器表ともに褐色色、長石・石英粒・黒色粒を含む 内側下位は使用により摩滅
11	土坑7	常滑 壺	図22-5、図27-29と同一体か
12	土坑7	白磁 口瓦皿	口径(9.9)cm クワロ成形 胎土は灰白色、微砂粒を含む微塵 輪は緑色を帯びた灰色、半透明 口径部の内側と断面の一部に漆状黒色物質付着
13	土坑7	砥石 仕上げ砥	遺存長(5.4)cm 幅3.8cm 遺存厚(0.6)cm 緑色を帯びた明灰色 砥面1面 鳴瀬(奥殿)産
14	土坑7	砥石 中砥	縦9.0cm 横(10.0)cm 厚9.7cm 灰色から乳白色 砥面3面
15	土坑7	漆器 皿	底径(4.9)cm 平高台 外底面も含め全体黒漆塗り 無文
16	土坑7	漆器 皿	底部片 無高台の皿の底面と思われる 全体黒漆塗り 内底面に朱漆手描きで、横き出線・不明文様
17	土坑7	丹板状木製品	遺存長(14.5)cm 遺存幅(3.4)cm 厚0.9cm
18	土坑7	丹板状木製品	復元径(8.0)cm 厚0.8cm 中央に丸い孔 紡輪か
19	土坑7	丹板状木製品	遺存長(26.6)cm 遺存幅(6.5)cm 厚1.4cm 断面に木釘2本残る 種ナジの底板か
図26-1	土坑7	漆器木製品	長19.6cm 幅1.3cm 厚1.45cm 一面は平ら、反対面は面取り、両端を尖らせ柄を施す
20	土坑7	漆器木製品	長20.3cm 幅0.9cm 厚1.0cm 断面は円形、一端を尖らせる
21	土坑6	土師器ⅢB種 小型	口径7.55cm 底径5.1cm 器高1.55cm 右回転クワロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土 口径部に油煙少量付着
22	土坑6	土師器ⅢB種 小型	口径7.55cm 底径5.1cm 器高1.55cm 右回転クワロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
23	土坑6	磨料陶片	常滑製または片口鉢胴部片使用 長4.6cm 幅7.6cm 厚1.3cm 胎土は褐色色、石英粒・長石粒を含む 断面の2辺と表面使用
24	土坑6	漆器 皿	口径(9.8)cm 底径6.4cm 器高1.4cm 輪高台 外側は底面も含め黒漆塗り、口径部に3箇所朱漆で横子文を手描き 内面は黒漆の上に朱漆を重ね、無文
25	土坑9	土師器ⅢB種 小型	口径7.4cm 底径5.6cm 器高1.65cm 回転クワロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、赤色粒子・砂粒を含む 内・外面一部僅け付着
26	土坑9	白磁 口瓦皿	口径(6.6)cm 底径(5.8)cm 器高1.85cm 回転クワロ 素地は灰白色、黒色微粒子含む 輪は淡灰緑色半透明 口径部に僅け付着
27	土坑12	南部系山茶碗	口径部片 胎土は明灰色、砂粒・少量の白色粒を含む
28	P.40	竜泉寺青磁造 弁文碗	底部片 底径(4.2)cm クワロ成形、削り出し高台、畳付きのみ露筋 素地は淡褐色色 輪はオーブ型、半透明 細かき貫入あり
29	P.50	土師器ⅢB種 小型	口径7.55cm 底径5.2cm 器高1.55cm 右回転クワロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
30	P.50	土師器ⅢB種 大型	口径(10.9)cm 底径(6.6)cm 器高3.4cm 右回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・白色粒子を含む精良土
31	P.50	土師器ⅢB種 大型	口径11.0cm 底径7.8cm 器高3.35cm 右回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子を含む
32	P.50	瓦器 火鉢	口径部片 輪横み成形 胎土は赤灰色、白色粒・多量の砂粒を含む
33	P.50	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片 底径(12.1)cm 輪横み成形、高台取り付 胎土は灰色、石英粒・長石・砂粒を含む 内底面使用により磨耗
34	P.50	白色系土師器ⅢI種大型	口径部片 胎土は赤色粒子を僅かに含む黄白色粉質精良土
35	P.52	下駄 前	遺存長(5.8)cm 遺存幅(7.9)cm 最大厚2.3cm
36	P.54	常滑片口鉢Ⅰ類	口径(30.2)cm 底径(10.3)cm 器高11.8cm 輪横み成形 胎土は灰色、微・砂粒、大粒の石英・長石多く含む 内面の中心以下は使用のため磨耗
37	P.54	土師器ⅢB種 大型	口径12.4cm 底径7.6cm 器高3.4cm 右回転クワロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む
38	P.57	土師器ⅢB種 小型	口径(6.8)cm 底径5.2cm 器高1.5cm 右回転クワロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
39	P.57	箸状木製品	長24.7cm 幅0.65cm 厚0.55cm 両口
図27-1	IV面	土師器ⅢI種 小型	口径(9.15)cm 器高1.7cm 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を僅かに含む精良土
2	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径(6.7)cm 底径(4.0)cm 器高1.8cm 右回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、海綿骨芯・砂粒を少し含む 内・外面とも僅け付着
3	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径7.55cm 底径5.4cm 器高1.65cm 右回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、赤色粒子・白色粒子・多量の砂粒・泥岩粒を含む砂質土
4	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径7.35cm 底径4.85cm 器高1.9cm 右回転クワロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
5	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径7.85cm 底径6.15cm 器高1.8cm 右回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
6	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径(8.0)cm 底径5.6cm 器高1.7cm 回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、少量の微砂粒を含む精良土
7	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径(8.1)cm 底径5.0cm 器高1.6cm 右回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・砂粒を含む
8	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径(7.1)cm 底径6.0cm 器高1.7cm 回転クワロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む

出土遺物観察表(7)

採区番号	出土遺構	種別	備考
9	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径7.15cm 底径5.2cm 器高1.4cm 右回転口口 底面未切り 内底部ナデ 胎土は褐色、赤色粒子・海綿骨を少し含む精良土
10	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径7.6cm 底径5.1cm 器高1.6cm 右回転口口 底面未切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨と・微砂粒を含む
11	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径7.53cm 底径4.83cm 器高1.3cm 回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
12	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径7.55cm 底径5.5cm 器高1.85cm 回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨・砂粒、泥岩粒を含む砂質土 口縁部に濃煤付着
13	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径(8.4)cm 底径(5.7)cm 器高2.2cm 右回転口口 底面未切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒、海綿骨・泥岩粒を含む 口縁部に2箇所油煤付着
14	IV面	土師器ⅢB種 小型	口径9.9cm 底径5.45cm 器高2.9cm 右回転口口 底面未切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・微砂粒、白色粒子を含む
15	IV面	土師器ⅢB種 大型	口径(11.6)cm 底径(7.0)cm 器高3.2cm 回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は褐色、微砂粒、白色粒子を少し含む精良土
16	IV面	土師器ⅢB種 大型	口径(11.7)cm 底径(7.2)cm 器高2.9cm 回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・微砂粒を少し含む精良土 内底部中央付近に径約2.5mmの穿孔(箇所あり)
17	IV面	土師器ⅢB種 大型	口径(12.6)cm 底径(7.4)cm 器高3.3cm 右回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨・砂粒を含む
18	IV面	土師器ⅢB種 大型	口径(13.3)cm 底径(8.4)cm 器高3.65cm 右回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、白色粒子・泥岩粒・微砂粒、やや多めの赤色粒子を含む
19	IV面	土師器ⅢB種 大型	口径(12.15)cm 底径(8.55)cm 器高3.4cm 右回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、赤色粒子・海綿骨・砂粒、白色粒子を含む砂質土 内底部に黒灰色の物質付着
20	IV面	土師器ⅢB種 大型	口径(11.15)cm 底径(7.9)cm 器高3.25cm 右回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・大粒粒を含む砂質土
21	IV面	土師器ⅢB種 大型	口径(12.25)cm 底径(7.6)cm 器高2.9cm 右回転口口 底面未切り 内底部ナデ 胎土は赤褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒・泥岩粒を含む
22	IV面	土師器ⅢB種 大型	口径(12.3)cm 底径(8.4)cm 器高3.2cm 右回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨・砂粒、白色粒子を含む砂質土
23	IV面	土師器ⅢB種 大型	口径(12.05)cm 底径(8.0)cm 器高3.2cm 右回転口口 底面未切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨・砂粒を含む砂質土
24	IV面	瓦器 火鉢	口縁部片 輪轆み成形 胎土は灰褐色、白色粒、多量の砂粒を含む
25	IV面	瓦器 壺	口縁部片 輪轆み成形 胎土は灰色、白色粒を少し含む 器表は黒色
26	IV面	常滑片口鉢 鉢	底部片 底径(15.0)cm 輪轆み成形 胎土は褐色灰色、長石・石英粒を多く含む 器表は明茶色、内側中位以下は黒く上磨料を
27	IV面	常滑系 山形鉢	口縁部片 胎土は淡灰褐色色、白色粒を含む
28	IV面	常滑片口鉢 類	底部片 底径(12.7)cm 輪轆み成形、高台取り付け 胎土は灰色、長石・石英粒、砂粒を多く含む 内底部は使用により摩耗 図23-10、図25-29同一個体と思われる
29	IV面	常滑片口鉢 類	底部片 底径(10.7)cm 輪轆み成形、高台取り付け 胎土は暗灰色、長石・石英粒、黒色粒を含む 器表は褐色色 内底部は使用により摩耗 図22-5、図25-10同一個体と思われる
30	IV面	常滑片口鉢 類	常滑片使用 長6.0cm 幅8.6cm 厚1.5cm 胎土は灰色、石英粒・長石粒を少し含む 断面の2辺使用
31	IV面	白磁口鉢	口径(14.3)cm ロウロ成形 素地は灰白色 軸は水色を帯びた灰色、透明 口縁部は輪状 内側は口縁部以下に本木の線と花弁らしき文様彫刻
32	IV面	白磁口鉢	口縁片 ロウロ成形 素地は明灰色 軸は淡灰色、不透明 口縁部は輪状
33	IV面	白磁復元鉢	口縁片 素地は白色 軸は緑色を帯びた水色、透明 口縁部は輪状
34	IV面	常滑系青磁壺 弁文碗	口縁片 素地は明灰色、黒色微粒子を含む 軸は水色、不透明で厚く掛かる
35	IV面	常滑系青磁壺 弁文碗	口縁へ胴部片 素地は淡灰色 軸は緑灰色、半透明 外側に大き目の貫入あり
36	IV面	常滑系青磁壺 緑鉢	口縁部片 素地は淡灰色 軸は水色、不透明で厚く掛かる 内側に蓮華形の陰刻を配す
37	IV面	高麗青磁 花鉢	口縁部片 鉢型か、素地は灰色で緻密 軸は水色、不透明で厚く掛かる、表面はつやがない 貫入あり 外尾の下側に陰刻を施す 口縁下に白木の条線1本、その下に白・黒交互の条線2本、その下は白土部分を埋めずに黒土で蓮華形の文様彫刻を施す
38	IV面	青白磁 梅鉢	口径9.8cm ロウロ成形 素地は明灰色、黒色微粒子を含む 軸は水色、不透明 外側は高台上で軸が厚く掛かり、胴部下位に複数の文様が彫る 内側は薄く塗られる
39	IV面	成平元寶	初時998年 北宋 權書
40	IV面	天福通寶	初時1017 北宋 權書
41	IV面	皇宋通寶	初時1017 北宋 權書
42	IV面	聖寧元寶	初時1068年 北宋 權書
43	IV面	元豊通宝	初時1078年 北宋 篆書
44	IV面	元豊通宝	初時1078年 北宋 篆書 西縁部を削った加工銭
45	IV面	元祐通宝	初時1086年 北宋 篆書
46	IV面	元祐通宝	初時1086年 北宋 行書
47	IV面	元祐通宝	初時1086年 北宋 行書
48	IV面	政和通宝	初時1111年 北宋 權書
49	IV面	紹聖元寶	初時1094年 北宋 行書
50	IV面	磁石 中碗	遺存(長10.7cm 横6.8cm 厚4.3cm 黄灰色から赤灰色 磁面3面 3片に割れた個体を漆で接着したものと思われる)
51	IV面	漆器 皿	無高台 外側は底面も含め黒漆塗り、内面は黒漆に朱漆で、手掻き文(車輪または扇の意匠化)
図29-1	V面上	円盤状土製品	径6.0cm 最大厚1.7cm 胎土は褐色色、微砂粒、少し海綿骨・泥岩粒を含む
2	V面上	白磁 口元皿	口縁片 ロウロ成形 素地は明灰色 軸は緑色を帯びた淡灰色、不透明 口縁部は輪状
3	V面上	常滑系青磁壺 弁文碗	口縁部片 ロウロ成形 素地は灰白色 軸は水色、半透明
4	V面上	不明土製品	径5.8cm 最大厚2.4cmの円筒状
5	V面上	箸状木製品	長1.5cm 幅0.8cm 厚0.6cm 圓口
6	V面上	箸状木製品	長22.7cm 幅1.2cm 厚1.0cm 一端は斜めに切捨、他端はやや薄く削られている
図29-1	建物4 P.1	磁石 中碗	遺存(長6.2cm 横1.1cm 厚0.8cm 黄灰色 磁面4面)

出土遺物観察表(8)

標記番号	出土遺構	種別	備考
2	土灰13	土師器ⅢB種 小型	口径8.35cm 底径6.8cm 器高1.5cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部に油煤付着
3	土灰13	土師器ⅢB種 小型	口径8.3cm 底径6.45cm 器高1.6cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部に油煤付着
4	土灰13	丸瓦	遺存長25.0cm 幅15.6cm 厚2.8cm 胎土は白色粒を少し含む肌理の細かな灰色土 凸面は隅目、凹面は布目 水福寺1期
5	P.73	元元通宝か	初時1098年 北宋 篆書
図30-1	溝3	土師器ⅢB種 小型	口径8.0cm 底径5.1cm 器高1.5cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	溝3	土師器ⅢB種 小型	口径8.0cm 底径6.0cm 器高1.3cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
3	溝3	土師器ⅢB種 小型	口径7.7cm 底径5.8cm 器高1.4cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
4	溝3	土師器ⅢB種 小型	口径8.3cm 底径6.4cm 器高1.5cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む 器表の一部と胎土は黒灰色
5	溝3	土師器ⅢB種 大型	口径11.3cm 底径7.8cm 器高3.0cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
6	溝3	串状木製品	遺存長(18.1)cm 幅1.2cm 厚0.8cm
7	溝3	棒状木製品	長17.7cm 幅2.8cm 厚1.1cm 一端が炭化している 縁を丸く面取り
8	溝3	箸状木製品	長19.2cm 幅0.6cm 厚0.45cm 両口
9	溝3	箸状木製品	長20.5cm 幅0.6cm 厚0.5cm 両口
10	溝4内木器層	不明木製品	長3.3cm 幅3.8cm 厚1.1cm
11	溝4内木器層	串状木製品	長17.1cm 幅1.0cm 厚0.6cm 一端は削りにより細く尖り、他端は丸く削る
12	溝4	常滑片口鉢1類	口縁部片 輪縁つ成形 胎土は灰色、白色粒・砂粒を含む
13	溝4	丸瓦	遺存長(10.4)cm 遺存幅(12.4)cm 厚2.4cm 胎土は肌理の細かな灰色土で白色粒・砂粒・最少も含む 凸面は隅目のちやうど消し、線状の僅あり 凹面は布目 水福寺1期
14	溝4	平瓦	遺存長(9.0)cm 遺存幅(18.5)cm 厚2.6cm 胎土は肌理の細かな明灰色土で白色粒・砂粒を少し含む 凸面は隅目 凹面は隅目後ナデ消し 水福寺1期
15	溝4	不明金属製品	長8.0cm 最大幅1.0cm 厚0.3cm くの字型に曲がっている 一端は釘の頭状に折れ曲り、他端は刃状に尖り薄く欠けている
16	溝4	不明金属製品	遺存長8.9cm 最大幅1.1cm 厚0.3cm 図28-15と同字製品の中間部分と思われる
17	溝4	串状木製品	長35.7cm 幅1.5cm 厚0.8cm
18	溝4	柄杓	板板 直径10.0cm 厚3は一律でなく中央で0.6cm周縁部は薄い 側板は二重 遺存最大幅2.0cm 柄は長20.0cm 幅1.4cm 厚0.9cm
19	溝4	連車下駄	遺存幅(8.8)cm 高3.5,2cm
20	P.80	土師器ⅢB種 小型	口径7.6cm 底径5.8cm 器高1.5cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
図32-1	VI面泥岩面上	土師器ⅢB種 小型	口径7.65cm 底径5.8cm 器高1.6cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 器表の一部炭化
2	VI面泥岩面上	土師器ⅢB種 小型	口径(4.7)cm 底径(3.7)cm 器高0.9cm 回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・砂粒を含む
3	VI面泥岩面上	土師器 Ⅱ	口縁部片 胎土は淡赤褐色、赤色粒子・白色粒子・多量の砂粒を含む砂質土
4	VI面泥岩面上	土製 円盤	土師器ⅢB種の底部を転用 直径2.4cm 厚0.9cm 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む
5	VI面泥岩面上	砥石 中砥	遺存長(7.2)cm 幅(6.5)cm 厚3.7cm 黄灰白色 砥面4面 伊予産
6	VI面泥岩面上	箸状木製品	長19.3cm 幅0.55cm 厚0.4cm 両口 両端炭化
7	VI面泥岩面上	箸状木製品	長23.5cm 幅0.75cm 厚0.9cm 両口
8	VI面泥岩面上	土師器ⅢB種 小型	口径(9.2)cm 器高(2.55)cm 手すくね後口縁部・内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む
9	VI面泥岩面上	土師器ⅢB種 小型	口径(7.65)cm 底径(5.5)cm 器高1.4cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
10	VI面泥岩面上	北部系山系陶	口縁〜胴部片 胎土は明灰褐色、炭粒
11	VI面泥岩面上	板草履芯	長22.7cm 幅展開推測値9.7cm 厚0.25cm 植物圧痕残る
12	VI面泥5上	へう状木製品	遺存長(19.5)cm 幅1.1cm 厚0.7cm
13	VI面泥5上	不明木製品	長17.8cm 幅1.3cm 厚0.8cm 角棒状で一端は斜めに削られる 小孔2箇所貫通
14	VI面泥5上	箸状木製品	長22.0cm 幅0.6cm 厚0.55cm 両口
15	VI面泥5上	箸状木製品	長22.9cm 幅0.75cm 厚0.45cm 両口
16	VI面泥5上	箸状木製品	長23.8cm 幅0.9cm 厚0.5cm 両口
17	VI面泥5上	箱部材?	遺存長(11.8)cm 幅(5.0)cm 厚(0.85)cm 板目材 箱状のものの一部か 木釘5本残存 本体のない釘孔1箇
18	溝5	土師器ⅢB種 小型	口径(8.8)cm 器高2.0cm 手すくね後口縁部、内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、白色粒子・砂粒を含む
19	溝5	土師器ⅢB種 小型	口径7.5cm 底径5.9cm 器高1.4cm 右回転口コ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
20	溝5	土師器ⅢB種 小型	口径7.8cm 底径5.0cm 器高1.3cm 右回転口コ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 内・外面の一部に油煤付着
21	溝5	土師器ⅢB種 小型	口径(8.7)cm 底径(8.1)cm 器高1.7cm 右回転口コ 底面糸切り 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む

出土遺物観察表(9)

标本番号	出土遺構	種別	備考
22	溝5	土師器皿R種大型	口径12.1cm 底径8.0cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、赤色粒子・海泡石・微砂粒を含む 内底面に油漬付着
23	溝5	常盤 壺	胴部片 胎土は灰色、白色粒を含む 胎土は暗褐色 則き目(格子)あり
24	溝5	平瓦	遺存長9.5cm 遺存幅11.2cm 厚2.25cm 胎土は肌理の細から明灰色土で白色粒・砂粒を少し含む 凸面は隅目 永福寺1期
25	溝5	平瓦	遺存長12.8cm 遺存幅13.0cm 厚1.8cm 胎土は肌理の細から灰色土で白色粒を少し含む 凸面は隅目後ナデ消。凹面は布目、糸きり痕 永福寺1期
26	溝5	平瓦	遺存長17.2cm 遺存幅9.6cm 厚2.3cm 胎土は肌理の細から灰色土で白色粒を少し含む 凸面は隅目 凹面は糸きり痕 永福寺1期
27	溝5	棒状木製品	遺存長(11.0)cm 幅0.9cm 厚0.65cm
28	溝5	円板状木製品	径元径(16.8)cm 厚0.6cm 柾目材
図33-1	溝5	箸状木製品	長23.3cm 幅0.7cm 厚0.4cm 両口
29			
30	溝5	箸状木製品	長21.9cm 幅0.6cm 厚0.5cm 両口
31	溝5	草履芯	遺存長(20.1)cm 幅0.1cm 厚0.3cm 植物圧痕残存
32	溝5	折敷	長24.3cm 遺存幅(8.9)cm 厚0.1cm 小孔1箇所
33	溝5	折敷	長24.5cm 遺存幅(12.4)cm 厚0.1cm 小孔1箇所
34	最終深塚	土師器皿R種小型	口径7.8cm 底径6.8cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・泥岩粒を含む 凹面は糸きり痕 永福寺1期
35	最終深塚	平瓦	遺存長9.9cm 遺存幅(13.7)cm 厚1.8cm 胎土は肌理の細から灰色土で白色粒を含む 凸面は隅目 凹面は糸きり痕 永福寺1期
36	最終深塚	箸状木製品	長24.75cm 幅0.6cm 厚0.4cm 両口
37	最終深塚	箸状木製品	長18.6cm 幅0.9cm 厚0.4cm 両口
図34-1	遺構外	土師器皿R種極小型	口径5.2cm 底径2.7cm 器高1.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・やや多目の砂粒を含む
2	遺構外	白色系土師器皿R種大型	口縁部片 胎土は黄灰白色
3	遺構外	瀬戸 鉢	口径(18.3)cm 底径(8.0)cm 器高8.0cm ロクロ成形 底面糸切り 胎土は淡黄灰色、白色粒子・砂粒を含む 内面は使用に磨耗 口縁部から外側下位にかけて灰釉漬け掛け 体部外側下部に目跡あり
4	遺構外	北部系山茶碗	底部片 底径4.1cm ロクロ成形 胎土は明灰褐色、堅緻 高台部に磨痕あり
5	遺構外	陶瓦 壺	底径(9.8)cm 輪済み成形 胎土・器表は灰色
6	遺構外	竜泉系青磁蓮鉢	口縁～胴部片 底径(5.9)cm 素地は明灰色 軸は緑灰色失透、気泡を含む 大き目の貫入し入る 内底面は魚文折縁 柄に魚文貼り付け 柄出し高台、髷付のみ露胎
7	遺構外	元豊通宝	初鑄1078年 北宋 篆書
8	遺構外	順寧元宝	初鑄1068年 北宋 隸書
9	遺構外	磁石 中磁	遺存長(8.8)cm 遺存幅4.2cm 厚3.0cm 黄灰白色 磁面2面 伊予産
10	遺構外	備前磁	遺存長(2.8)cm 遺存幅(8.3)cm 遺存厚(1.2)cm 灰色 高島焼 聖生焼 磁面は四葉か
11	遺構外	磁石 仕上磁	遺存長(6.6)cm 幅3.1cm 厚0.7cm 明黄灰色 磁面2面 鳴滝産
12	遺構外	円板状木製品	遺存長(13.8)cm 遺存幅2.3cm 厚0.8cm 柾目材
13	遺構外	木製 地床	径(5.0)cm 高さ2.2cm 中央に心棒の通る小孔(径0.4cm)貫通 外側は細から明り、内側を同心円状に

第四章 まとめと考察

1. 遺構の変遷と年代

1期

最終面であるVI面が相当する。北西～南東に主軸方位を持つ幅広の溝、もしくは池状の落ち込みがあるが、完掘できなかつたので、何であるかは不明である。面の年代は13世紀前半。溝の方位角はN-56°-Wで、現在の浄妙寺諸堂の主軸方位がN-34°-Eであるところから、いちおう直交していることを指摘しておきたい。ただし、この13世紀前半期には「浄妙寺」は存在せず、あつてとしても「極楽寺」という名の寺院であつた可能性が高いが、もとよりその頃からの伽藍主軸が現在まで引き継がれているとも考えにくいので、ここでは事実の指摘のみにとどめる。

建物も検出されておらず、性格はつかみがたい。

2期

第V面が相当する。町並の1区画の北東角であらう。年代は13世紀第2四半期～中葉を充てたい。掘立柱建物が区画溝とほぼ主軸方位を同じくして建っている。建物の南北柱間距離は約193cmで、これは鎌倉時代中期の13世紀第2四半期以降一般的になる数値の198cm前後にいくらか足りないが、一部分だけの検出であることがその理由かもしれない。柱穴はいずれも礎板を持ち、この点も時代的特徴を備えているといえる。

すぐ西側の小路の軸方位がN-23°-Eで、検出された建物や溝がN-27°-Eなので、浄妙寺よりも稲荷小路のほうに近いといえる。名称は措くにせよ、この小路がこの頃出現した可能性は否定できない。なお、本期以後、遺構主軸方位はこれを踏襲する。すなわち、当地点一帯の歴史の変遷の中で、本期が一つの画期であることが示されている。

遺構の全体的性格としては、かなりしっかりした建物であるが、これが若宮大路一帯で検出される都市型の小規模住居なのか、もっと高位のたとえば武士住居のようなものかはわからない。溝等の区画標識と遠くない位置に方位を合わせて取まっている点は、前者であることをどことなくうかがわせる、といえば印象に頼りすぎだろうか。

3期

IV面下層面を充てる。北側の溝が消えて地境が広がり、ほぼ同一の主軸を持つ掘立柱建物が次々と建て替えられる。井戸も備わる。この期をもって本遺跡はその盛期を迎える。第三章で述べたように、次述のIV面上層面とは遺構のあり方が全く異なり、同じく「IV面」とはしながらもその性格は大きく異なるため、ここでは期を独立させて扱う。年代は大きく13世紀後半、鎌倉時代後期としておきたい。

建物範囲には土坑や溝等が含まれているが、付帯施設としても性格は不明。柱間はおおむね2mという鎌倉時代後期に特有の数値を見せる。

この建物の住民がどういう性格であつたかを、遺物からはかることは難しい。しかし前代よりも区画が拡充されていること、若宮大路沿いによく検出される小規模都市住宅に特有の、板囲いや囲炉裏などの施設が見られないこと、等から武士住居と推定しておく。

4期

IV面上層面が相当する。前代3期にみられた複数の掘立柱建物はなくなり、平坦な面に木材等遺物の散乱する状況になる。前述のように、同じIV面とはしたが下層面とは明らかに性格を異にする。年代は

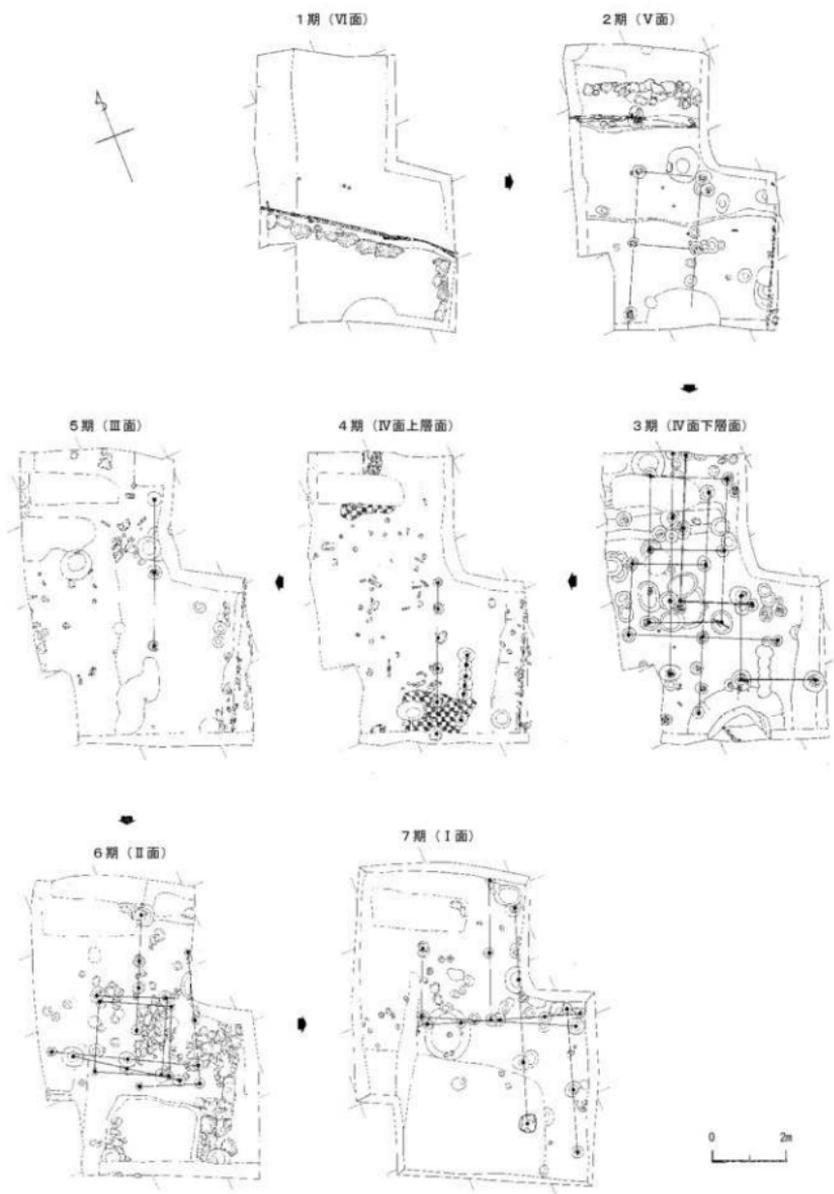


图35 遺構変遷図

Ⅲ面との相対的な関係も考慮して、13世紀第3四半期～第4四半期を充てたい。

南北に直線的に平たく割った石を並べ、縁のようなものの束とする。石列西側は板材や角材、土器皿等の散乱する、若宮大路周辺で多く検出される小規模都市型住居と同様の状況を呈する。前代の武士住宅から住民が変わったことは明白であり、遺構の性格としては、おそらくこれも都市住民の小規模住宅とみたい。石列の東側には5つほど連続した小穴が石列に平行して存在する。おそらく石列と連接する小穴列の二条の列はここが建物の前面であることを示唆しており、とすれば調査区外の東方に何らかの入口施設を想定しても外れではあるまい。遺構主軸方位は西側の稲荷小路に平行している。

5期

Ⅲ面が相当する。地形面上に広がり、掘めない1列の柱穴列があり、西側には土器皿等、遺物の散乱した状況が見られる。しかしこれだけでは情報に乏しく、面の性格は把握しがたい。年代は前代のⅣ面上層面との関係から、13世紀第4四半期～14世紀初頭に位置付けられよう。

次述の6期に東側に出現した溝が、本期から木組を持ちはじめている。

6期

Ⅱ面が相当する。再びこの一帯に建物が建てられる時期である。面は大型凝灰岩とローム土で堅く構築され、建物とおそらく組み合わさって方形の浅い落ち込みが備わる。調査区東側にはこれまでの木組ではなく、石敷きの切れ目という形で敷地境界が示される。年代は13世紀末～14世紀前半、すなわち鎌倉時代末期～南北朝時代初期としておきたい。

性格については、これも判断しにくい。掘立柱建物調査区外に拡がっていく可能性は高く、都市型住居というよりもっと広範な、武士住居や寺院の一隅と捉えたい。掘立柱建物や柱穴列の多くは前代までの主軸方位を維持しており、継続性がうかがえる。しかしその一方で、1棟とはいえ（「柱穴列10」）7期に共通する方位を持っている点は、過渡期と評価することも可能かもしれない。

7期

Ⅰ面が調査で確認できた当地点の最後の生活面である。面上の出土遺物には、14世紀第2四半期以後15世紀前半までのものが含まれている。南北朝時代以後の中世後期にすでに入っているとみてよい。遺構面の性格については判断材料を欠く。

建物主軸方位はこれまでと異なり、いくらか西に傾く。すなわちこの時点であらたな基軸が出現したことになる。また、鎌倉時代中期に始まった調査区東壁際の溝は、本期には消滅している。このような変化について、東側のほとんど隣地といってよい場所にこの頃出現する鎌倉府の影響によるものかどうか、その主軸方位や地割は不明ながら、視野に入れておくべきと考える。

面上の包含層には大量の炭化物が何層か含まれており、それぞれが南北朝～室町時代のいくつかの動乱に対応する可能性は高いと考えるが、具体的には不明である。

2. まとめ

以上みてきたように、本地点の遺跡は13世紀前半の鎌倉時代前期に始まり、14世紀前半の室町時代前期に終わることが確認できた。ほぼ200年間のうちに営為が集中していることになる。しかし、以上の年代比定が妥当であれば、さらに次の点が指摘できる。

本遺跡では実に1期から6期までが鎌倉時代に属し、南北朝以降は最後の7期のみしか相当しない。鎌倉時代にはしきりに生活面の更新があったのに対し、14世紀第2四半期～15世紀前半のほぼ1世紀の間はほとんどそれがなかったということになる。これは本地点に限らず、市内東北部でしばしば観察

できる現象である。

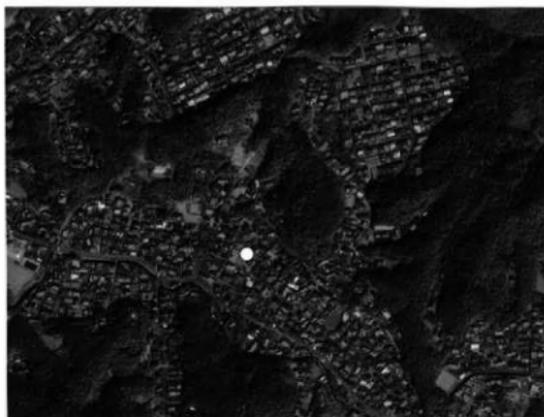
これが何を意味するのか、慎重でなければならないが、地形による生活面の更新が「都市性」の一つの目安であるとする筆者の立場でいえば、鎌倉時代が終われば鎌倉は「都市性」を失った、と評価することもできよう。

2期と7期に観察される建物主軸方位の変化は、このときがこの一帯における画期であったことを示している。前者は稲荷小路に主軸が一致することから、稲荷社の出現にともなう町構造の改変があった可能性を示唆する。後者は先述のように、隣地の鎌倉府の設置に年代的に符合することから、その影響も視野に入れておくべきだろう。

(馬淵)

引用・参考文献（本報全体に共通）

- 赤星直忠 1959 『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
阿部正道 1958 「鎌倉の古道（後篇）」『鎌倉国宝館論集』第2集
大河内勉 1996 「浄妙寺旧境内遺跡 浄明寺三丁目6番地3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会
川副武嵐・貫達人 1959 『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
川副武嵐・貫達人 1980 『鎌倉廃寺事典』有隣堂
斎木秀雄ほか 2007 『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書—雪ノ下4丁目581番5地点—』有限会社 鎌倉遺跡調査会
高柳光寿 1959 『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
西岡芳文 2001 「六浦津のはじまり」西岡ほか『因説 かなざわの歴史』金沢区制五十周年記念事業実行委員会
野口実 1993 「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45 財団法人古代学協会
野本賢二ほか 1999 「横小路周辺遺跡 二階堂字横小路93番11地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15 鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 1993 「大倉幕府周辺遺跡群 二階堂字住柄38番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9 鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 1994 「武士の都—その成立と構想をめぐって—」『中世の風景を読む2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社
馬淵和雄 1998 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 1998 『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
馬淵和雄 1999 『大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄ほか 2002 『杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本912番1ほか地点発掘調査報告』鎌倉市教育委員会



1. 調査地点鳥瞰



2. 浄妙寺背後から調査地点を方向を
望む(矢印の下)



3. 稲荷小路(調査地点は奥右手)



1. I面全景 (西から)



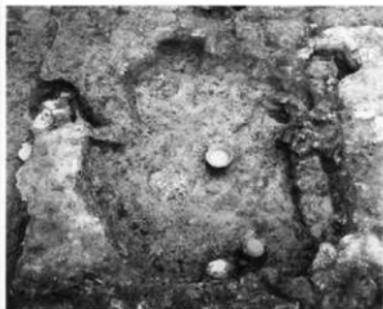
4. II面全景 (南から)



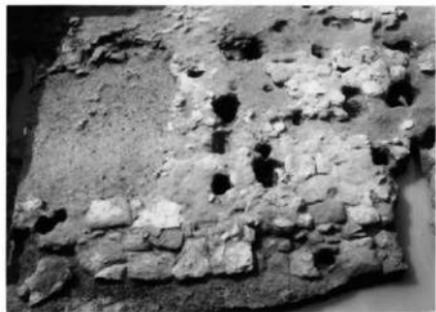
2. I面全景 (東から)



5. 土坑14 (西から)



3. 土坑1 (南から)



6. 土坑14東側石敷き (東から)



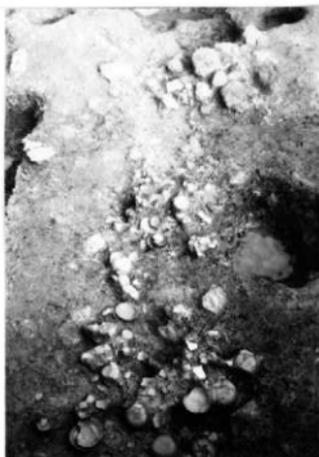
1. 漆布状物質が付着した常滑片



2. III面全景（西から）



3. 溝1（西から）



4. 土師器集中部2（西から）



5. IV面下層面全景（南から）



6. IV面下層面全景（西から）



1. 溝2・柱穴列12・石列（東から）



3. 溝2・柱穴列12・石列（南から）



2. 溝2・柱穴列12・石列（西から）



5. 溝2内常滑集中部（西から）



4. 溝2（南から）



6. 溝2（東から）



1. 井戸1 (北から)



2. 井戸1 (北東から)



3. 土坑7 (西から)



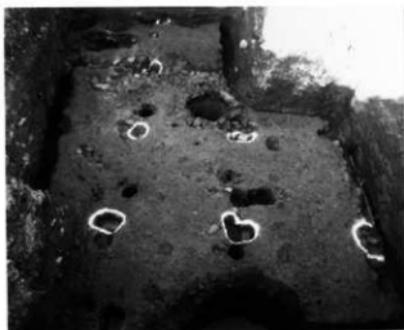
5. V面上層西全景 (東から)



4. 土坑6内検出の柱・礎板 (東から)



6. V面上層面全景 (南から)



1. 建物5 (南から)



4. V面全景 (南から)



2. 同前 (東から)



5. 溝4 (東から)



3. V面全景 (西から)



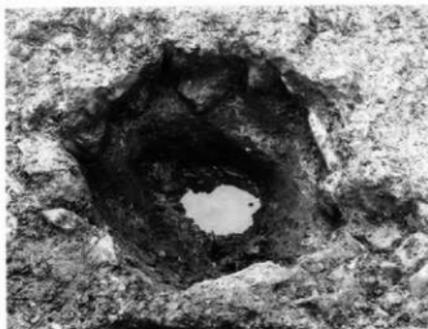
6. 溝3 (南から)



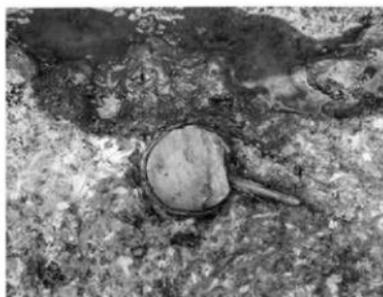
1. 溝4側板(北から)



2. 溝4内柱穴・東柱(北から)



3. 土坑13(北東から)



4. 柄杓出土状況(北壁際)



5. VI面全景(西から)



6. 溝5(東から)



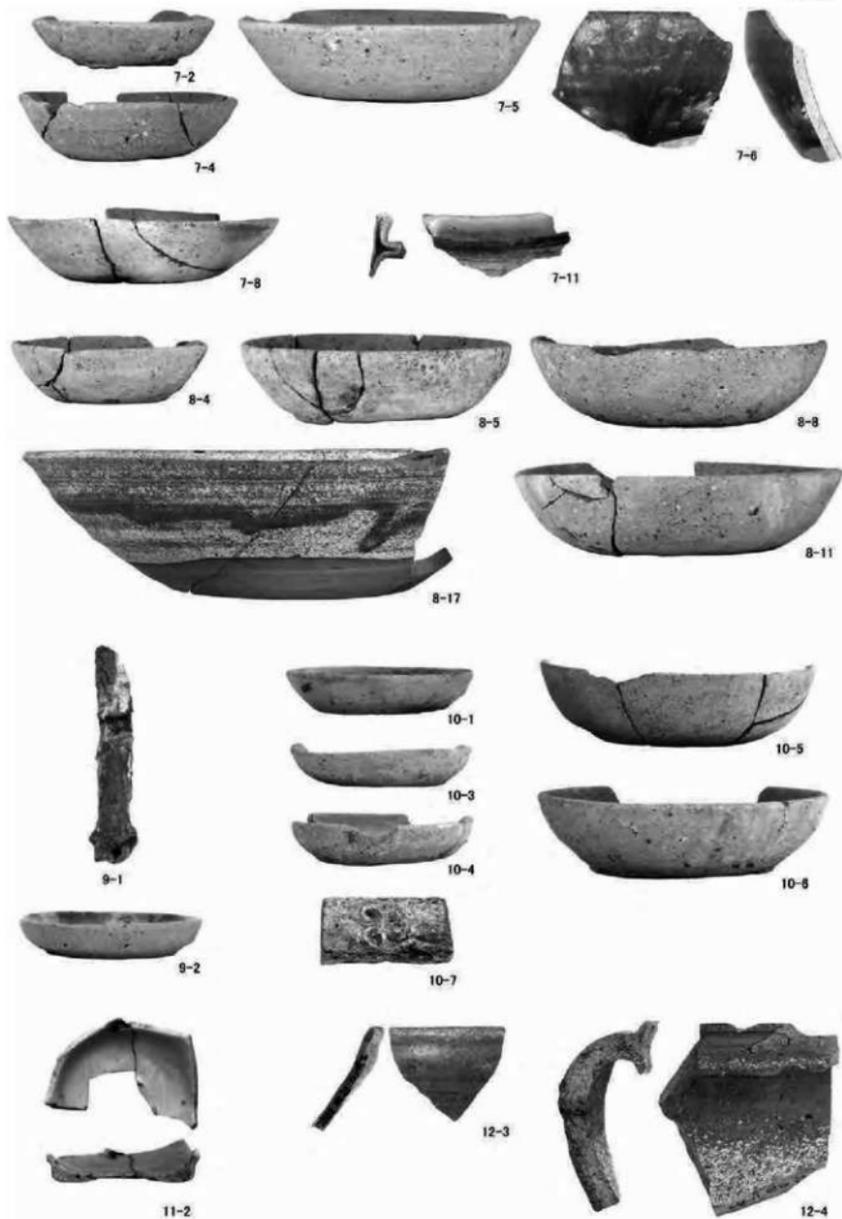
1. 調査区東壁土層断面



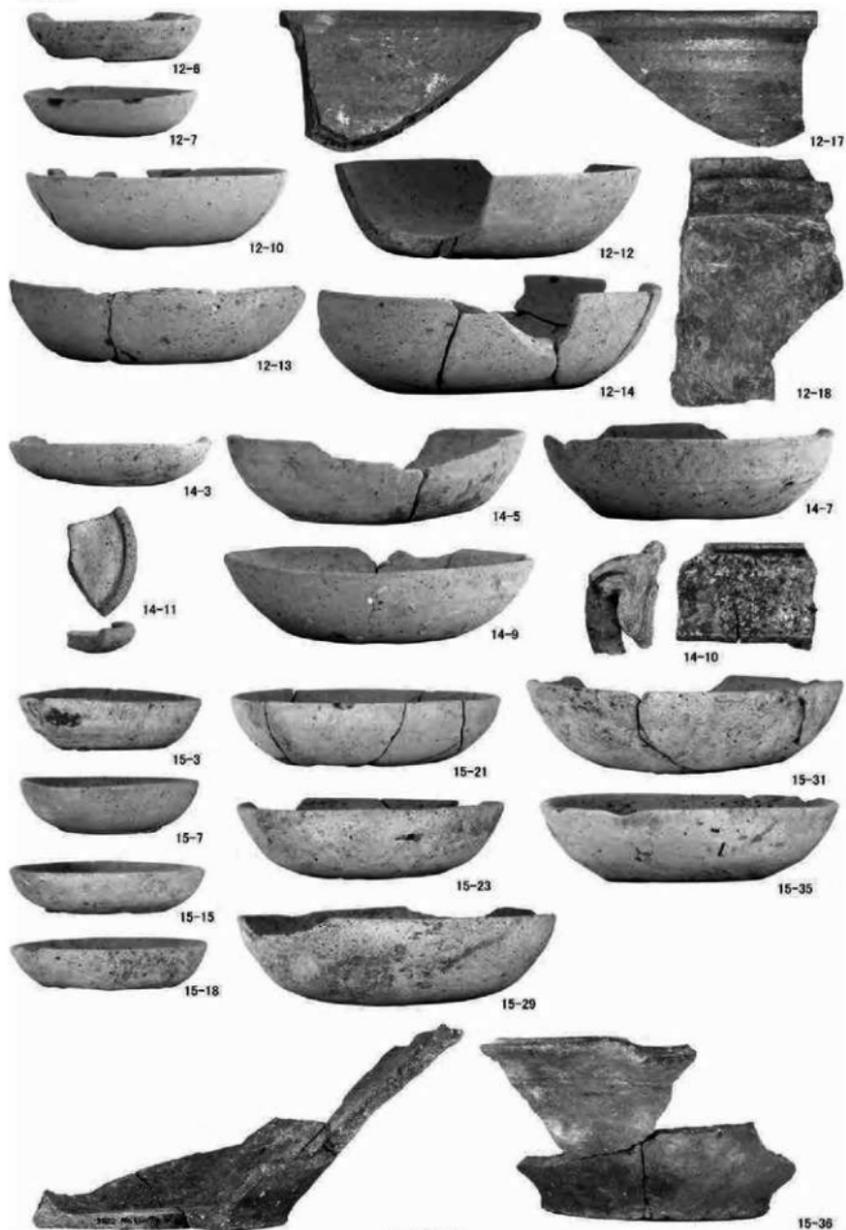
2. 調査区南壁土層断面



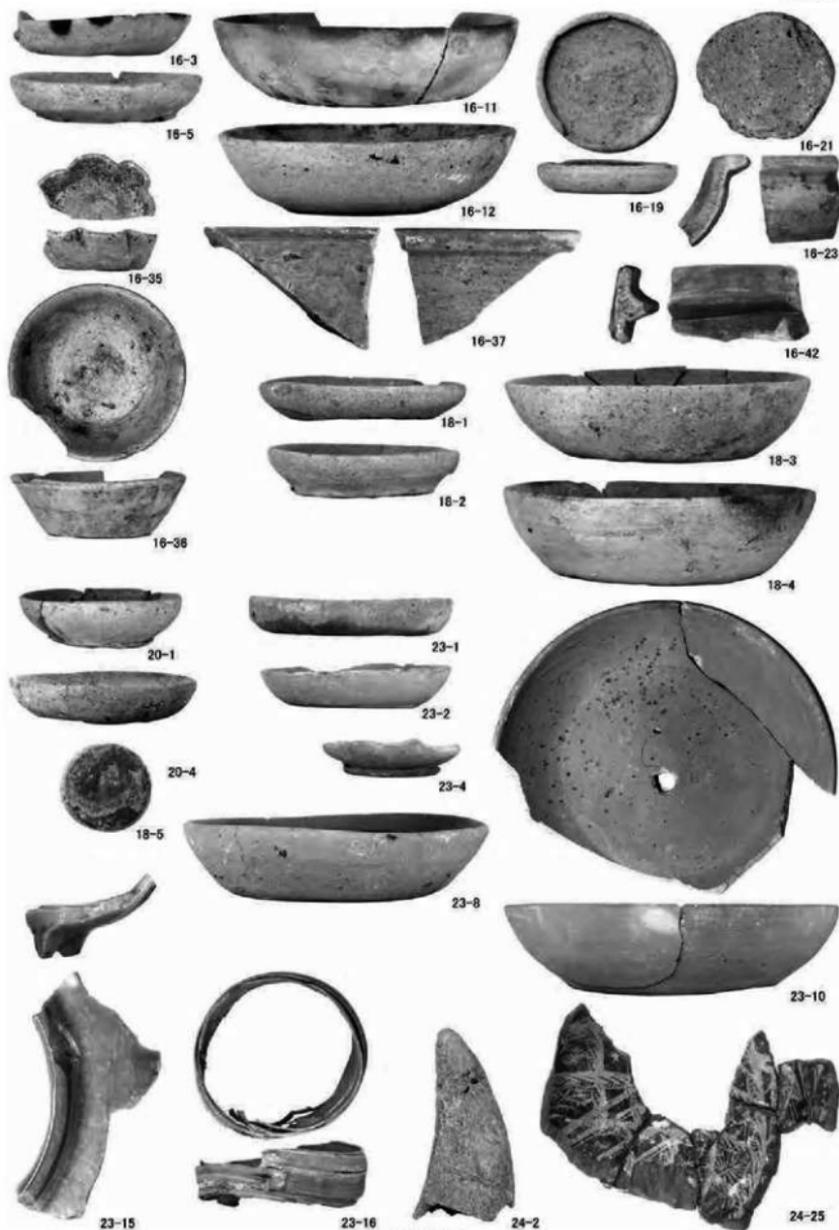
1. 調査区西壁土層断面



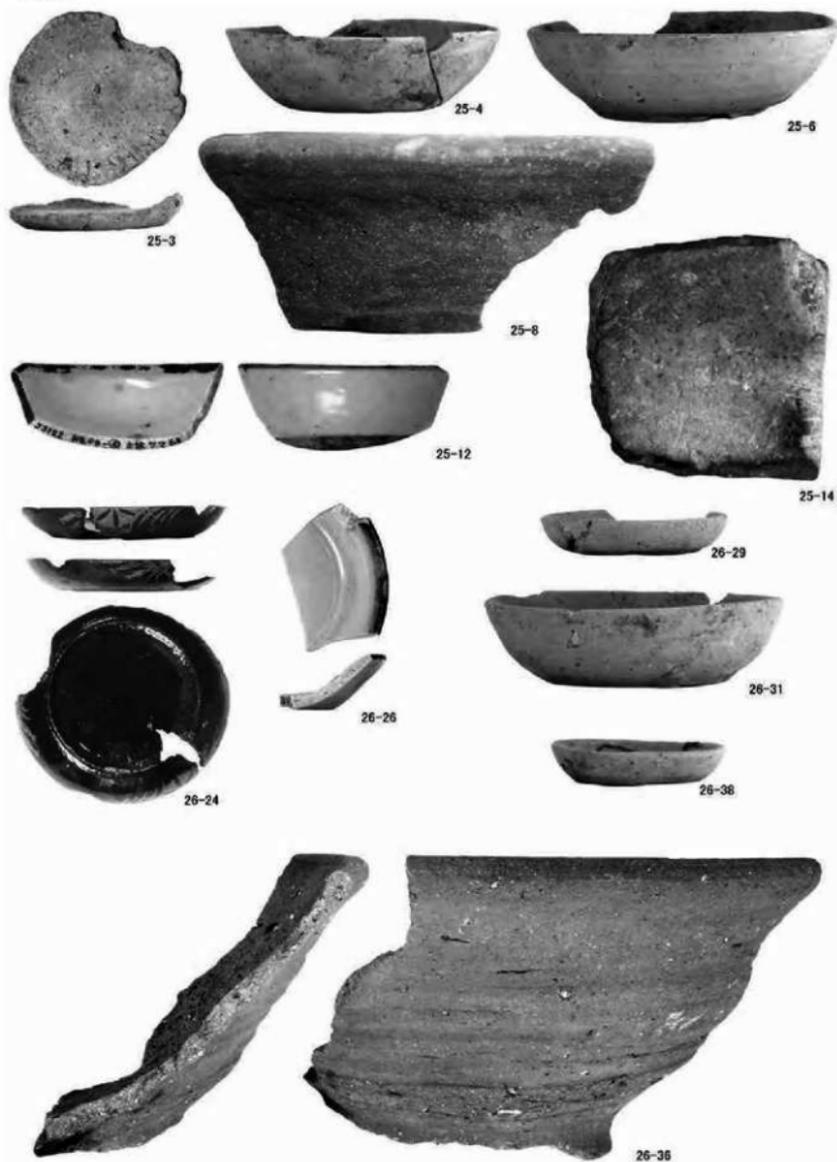
出土遺物 1



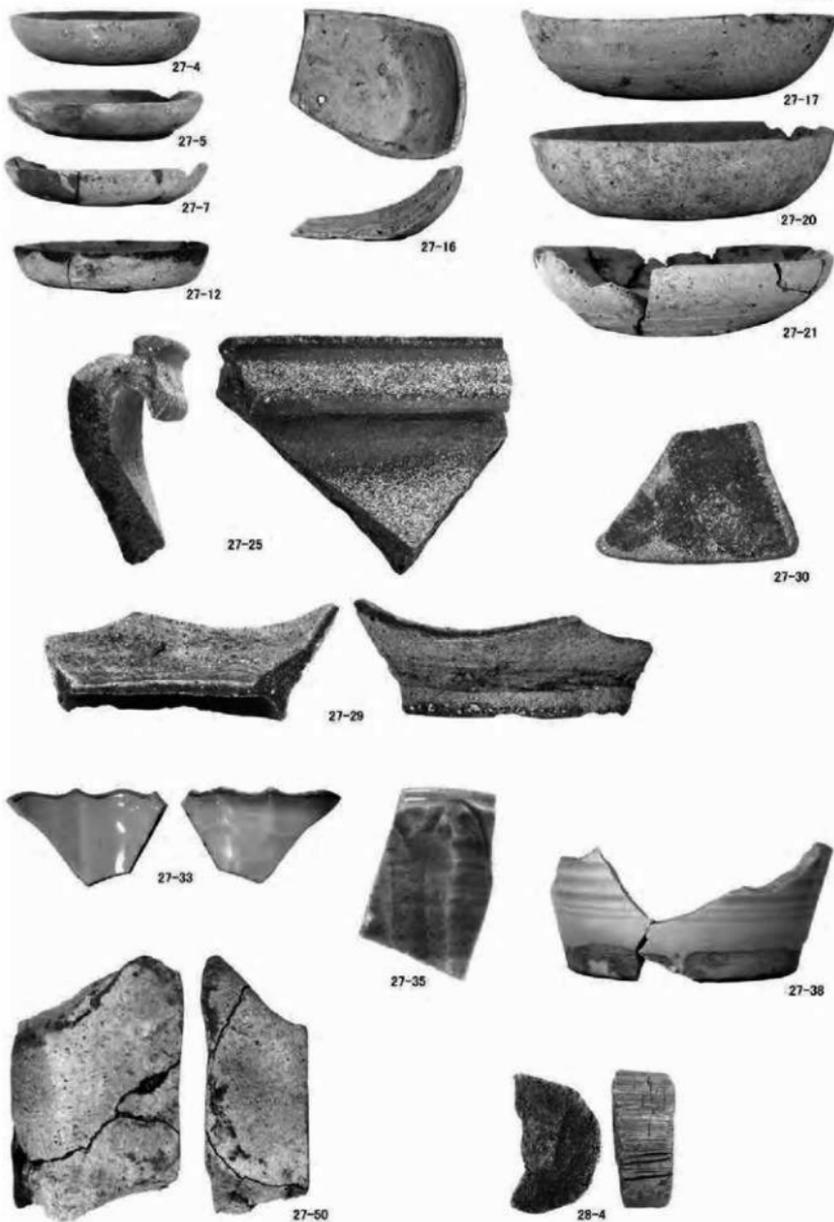
出土遺物 2



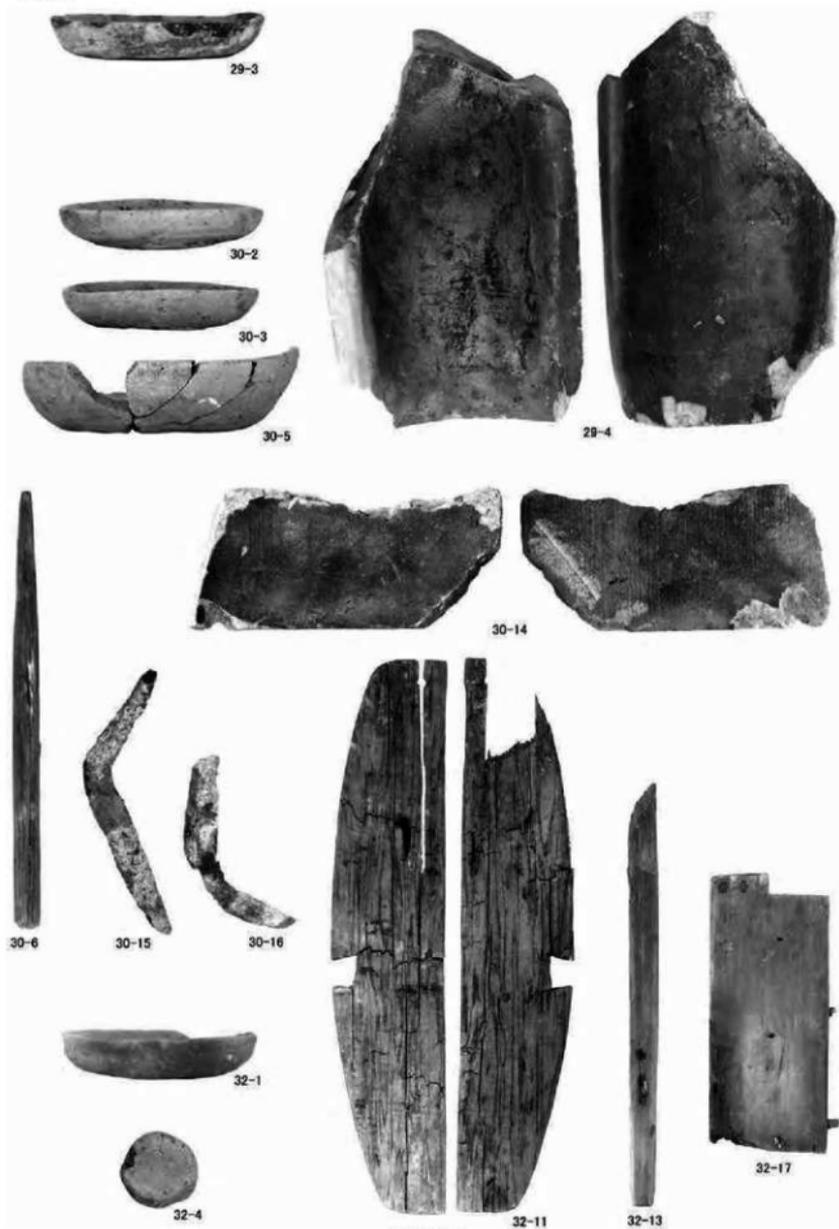
出土遺物 3



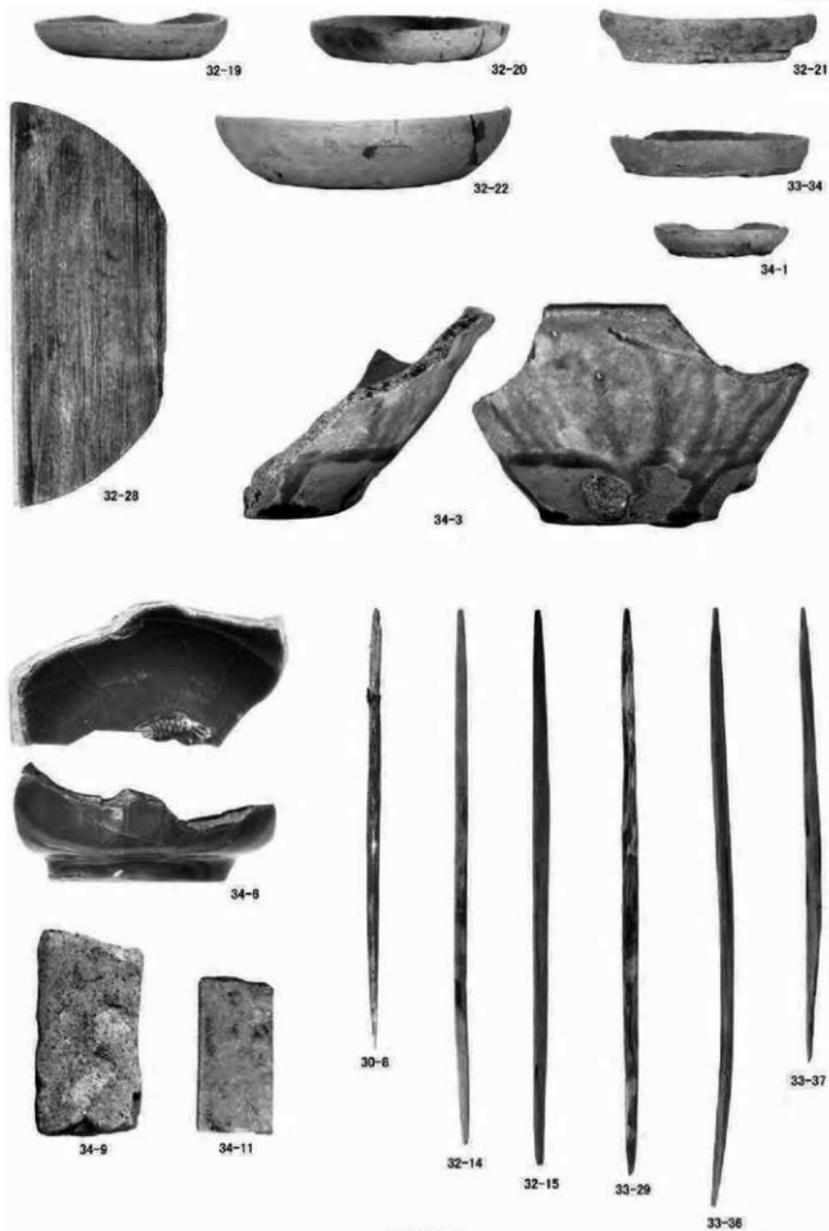
出土遺物 4



出土遺物 5



出土遺物 6



出土遺物 7



参考資料「浄妙寺境内絵図」（『鎌倉の古絵図』1より）

下馬周辺遺跡(No.200)

大町二丁目 1001 番 4 地点

例 言

1. 本報は「下馬周辺遺跡（鎌倉市№200）」内、大町二丁目1001番4地点における個人住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間 2005年2月3日～同年2月28日
調査面積 46.50㎡
3. 本調査地点の略称はG0215とした。
4. 調査体制
担当者 馬淵和雄
調査員 鍛冶屋勝二・松原康子・根本志保（資料整理）
調査補助員 鈴木弘太・吉田智哉・北泉剛史・岩崎卓治（資料整理）
作業員 鯉沼稔・沼上三代治・宝珠山秀雄・渡辺輝彦
5. 本報作成分担
遺構図整理 根本
遺物実測 松原・根本・岩崎
同墨入れ 松原・根本・岩崎
同観察表 松原
同写真撮影 根本
原稿執筆 馬淵・松原・根本（担当部分末尾に執筆者名を記した）
編集・総括 馬淵

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	194
1. 位置と立地	194
2. 歴史的環境	194
第二章 調査の概略	201
1. 調査にいたる経緯	201
2. 調査方法	201
3. 調査の経過	201
第三章 調査結果	202
第1節 層序と面の概要	202
第2節 各説	204
1. 上層遺構群	204
2. 下層遺構群	207
3. 採集遺物	211
4. 鑄造関係の遺物	211
第四章 まとめと考察	217
1. 遺構の変遷について	217
2. 出土遺物の傾向について	217
3. 県道鎌倉葉山線について	218

挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	195	図6 溝2下層・最下層・確認坑出土遺物	206
図2 調査区位置図	197	図7 下層遺構全区、竪穴1・土坑1・出土遺物 ..	208
図3 調査区設定図	202	図8 上層遺構群包含層・上層遺構面出土遺物、	
図4 上層遺構群全区・調査区壁土層断面図、		I面出土遺物	209
同出土遺物	203	図9 最終深掘り出土遺物、世以前の遺物、遺	
図5 溝1・2上層出土遺物	205	構外採集遺物	210

表 目 次

表1 遺物観察表(1)	212	表4 遺物観察表(4)	215
表2 遺物観察表(2)	213	表5 遺物観察表(5)	216
表3 遺物観察表(3)	214		

図 版 目 次

図版 1-1 調査地点付近鳥瞰	220	4-4 溝2内南側ベルト土層断面(南から)・224	
1-2 調査地点近景(東を望む)		図版 5-1 竪穴1(南から)	
1-3 調査地点近景(東から)		5-2 土坑1(南から)	
図版 2-1 全景(南から)	221	5-3 土坑1土層断面(南から)	
2-2 全景(西から)		5-4 土坑1(西から)	
図版 3-1 溝1北半分(南から)	222	5-5 土坑1・P.13(西から)	
3-2 溝1北半分(北から)		図版 6-1 東壁北半分深掘り土層断面(北から)・225	
3-3 溝1南半分(南から)		6-2 南壁溝2部分土層断面	
3-4 青磁碗出土状況(溝2内)		6-3 南壁道路部分土層断面	
図版 4-1 溝2底部材(西から)	223	図版 7 出土遺物1	226
4-2 溝2底部材接続部 拡大(西から)		図版 8 出土遺物2	227
4-3 溝2底部材(南から)			

第一章 調査地点概観

1. 位置と立地

大町は鎌倉東南部名越山麓に位置し、逆川の開析した広い谷（「名越大谷」）と、谷を出て西流する川が形成した山麓平野を占める。中央部に鎌倉南部を横断する街道（現県道鎌倉葉山線）が通じる東西に長い町で、その四至は明治時代初期の『相模国鎌倉郡村誌』（『皇国地誌』）によれば、東は名越山塊で三浦郡久野谷村（逗子市久木）と境を接し、西で長谷村（現由比ヶ浜）、北は浄明寺村、雪ノ下村、小町村、扇ヶ谷村、南で乱橋材木座村に接する。昭和の地名変更まで西は佐助ヶ谷におよんだ。

近世の地誌『新編相模国風土記稿』には、大町は夷堂橋以南とある。町小路・米町・辻町・魚町・名越町・長谷小路・元田代・峰岸・岩崎・かけ澤・中座町・松殿町・傘町などがあった。明治初期の『相模国鎌倉郡大町村誌』（『皇国地誌』）では、米町・辻町・傘町・魚町・松殿町・町小路・中座町・反目久保・高番屋・塔の辻・佐々目力谷・七観音・佐介ガ谷（の半分、もう半分は扇ヶ谷村に属す）・天狗堂・千葉地・裁許橋・蔵屋舗・松葉・名越等の地を合わせて一村となし大町村と名づけたという。若宮大路西側の相当広い範囲まで大町であったことがわかる。なお後者には、往時は本郷と称したこともあったとあるが、真偽はわからない。

調査地点は、鎌倉市大町二丁目 1001 番 4 に所在する。鎌倉市西南部の長谷から若宮大路下馬四ツ角を経て逗子市に抜ける県道鎌倉葉山線の南に接し、JR横須賀線に近接し線路を挟んで西側には延命寺がある。滑川の左岸と逆川の右岸に挟まれた標高 6.4~6.5m ほどの微高地上にあり、ほんの 150m ならず西の下馬四ツ角付近の若宮大路が 3.8m 前後なので、大路から東に向かうと、本地点に向けてぐんと高まる印象がある。上本連二によれば一帯は砂泥質平野である（2000 上本）。

この一帯を描いたことで知られる明応六年（1497）頃成立の「善宝寺寺地図」（津久井光明寺蔵）によれば、調査地点が中世に「米町」と呼ばれていた地域に含まれていることは間違いない。善宝寺は現在の教恩寺西側の場所にあったから、本地点はまさしくその門前に当たる。しかし、「米町」が「大町」の一部なのか、それとも大町とは別にこの名称があるのかは不明である。

中世の「大町」の範囲について、明瞭にはわかっていない。「大町」とはおそらく小町に対する呼称であり、鎌倉時代に幕府より七ヶ所の商業地域の一つに指定されて以来、終始鎌倉の商業活動の中心となった。『吾妻鏡』承久二年（1220）二月十六日条に「大町以南焼亡」とみえ、同月二十六日条には「大町上失火」とある。近世の地誌『新編鎌倉志』は、「大町は夷堂橋と逆川橋との間の町なり」という。「以南」といい、「上」といい、これらの語感からは「大町」が東西に長い地域であることがうかがえる。寛喜三年（1231）一月十六日条には「及横町南北六町余災、出羽前司（中条家長）宅在此内」とみえ、人家のたて込んでいる一方で有力御家人の屋敷もあったことがわかる。

津久井郡光明寺には「善宝寺寺地図」とともに、明応六年（1497）七月二十五日付「善法（宝）寺分年貢注文」が存在する。そこには寺領内の作人十数人の年貢額が記されている。作人名の肩には米町をはじめ中座・塗子または辻子といった地名、日常物屋・紙屋・銀細工・塗しなどの職業が書かれている（『神奈川県史 資料編』3-6410）。

2. 歴史的環境

縄文時代

鎌倉旧市街地内での縄文時代の遺跡の発掘調査は行われていないが、遺物は北側山裾近くを中心にと

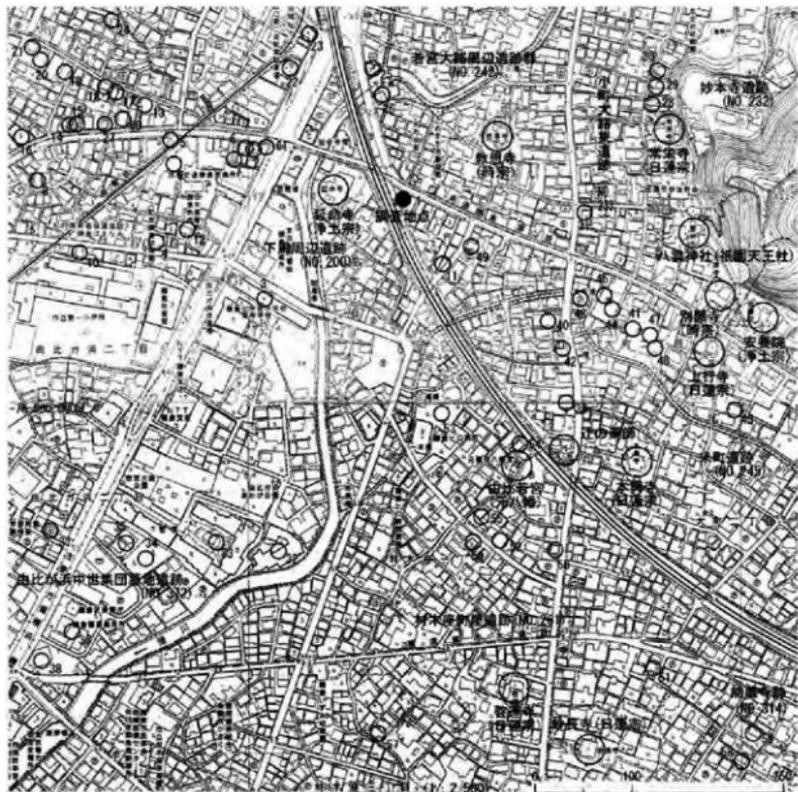


図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図1調査地点名(『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』は『市緊急調査報告書』と略し、個別地点名は省略)

下馬周辺遺跡(No.200) 1. 大町2-1001-4(2005馬淵和雄)本調査地点 2. 由比ガ浜2-2-2(1988福田誠)未報告 3. 由比ガ浜2-1011-1(1989大河内勉)大河内1998『下馬周辺遺跡発掘調査報告書—鎌倉女学院地点—』下馬周辺遺跡発掘調査団 4. 由比ガ浜2-27-9(1988田代郁夫)未報告 5. 由比ガ浜2-18-12(1990宗義秀明)宗義ほか1992『下馬周辺遺跡東京電力鎌倉営業所改築に係る発掘調査報告書』下馬周辺遺跡発掘調査団 6. 由比ガ浜2-2-10(1990福田誠)未報告 7. 由比ガ浜2-2-12(1998青木秀雄)熊谷園1998『下馬周辺遺跡—由比ヶ浜二丁目2番12地点—』下馬周辺遺跡発掘調査団 8. 由比ガ浜2-110-5(1998菊川英政)菊川2001『市緊急調査報告書』17 9. 由比ガ浜2-18-1(2001沙見一夫)未報告 10. 由比ガ浜2-39-14(2004原廣志)原2010『市緊急調査報告書』26 11. 大町2-975-6(2003森孝子)森2006『市緊急調査報告書』22 12. 由比ガ浜2-18-1(2001沙見)未報告

若宮大路周辺遺跡群(No.242) 13. 由比ガ浜1-117-1(1988青木)青木1991『由比ガ浜1-117-1地点遺跡』14. 由比ガ浜1-120-6(1991・1992田代)未報告 15. 由比ヶ浜1-120-2・14地点(2008青木)未報告 16. 由比ガ浜1-128-7(1986馬淵)馬淵1988『市緊急調査報告書』5 17. 由比ガ浜1-118-7(1995田代郁夫)遠藤雅一1998『市緊急調査報告書』13 18. 由比ガ浜1-118(1987・1988馬淵)馬淵1995『若宮大路周辺遺跡群—由比ガ浜一丁目118番地点—の発掘調査について』(地点19報告付載資料)『市緊急調査報告書』11 19. 由比ガ浜1-123-5(1994馬淵)馬淵1995『市緊急調査報告書』11 20. 由比ガ浜1-126-3 21. 由比ガ浜1-126-1 22. 御成町884-6(1997宮田真)宮田ほか1990『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 23. 御成町872-14(1991木村英代治)木村ほか『市緊急調査報告書』8 24. 御成町727(1990木村)未報告 25. 小町1-1028-1(1990大河内勉)大河内1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』小町一丁目1028番1地点』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 26. 大町1-1032-1 27. 由比ガ浜1-118-11 60. 由比ガ浜1-118-10 61. 由比ガ浜2-2-2

妙本寺遺跡(No.232) 28. 大町1-1158-1(1987福田)福田1988『市緊急調査報告書』4 29. 大町1-1158-5(1990宗義)宗義1991『市緊急調査報告書』7 30. 大町1-1146(継1992)継実ほか1994『市緊急調査報告書』10

- 小町大路東遺跡 (№233) 31. 大町1-1181 (原1980) 未報告
 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 (№372) 32. 由比ヶ浜2-1037-1 (1992原) 未報告 33. 由比ヶ浜2-1034-1 (1990~1991原)
 原ほか1993『市緊急調査報告書』9 34. 由比ヶ浜2-1015-23 (2000~2001小山裕之) 小山ほか2005『由比ヶ浜中世集団墓地
 遺跡』玉川文化財研究所 35. 由比ヶ浜2-1015-29 (1989大河内) 大河内1991『市緊急調査報告書』7 36. 由比ヶ浜2-1023
 (1953・1956鈴木尚ほか) 鈴木ほか1956『材木座遺跡 鎌倉市材木座発見の中世遺跡とその人骨』東京大学人類学教室・岩
 波書店 37. 由比ヶ浜2-1203-20 (1998原) 原2000『市緊急調査報告書』16 38. 由比ヶ浜2-1015-1ほか (2005瀬田哲夫)
 瀬田ほか2009『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 鎌倉市由比ヶ浜二丁目1015-1他地点』有限会社鎌倉遺跡調査会
 米町遺跡 (№245) 39. 大町2-929 (1988福田) 未報告 40. 大町2-933 (1988原) 原ほか1990『市緊急調査報告書』6 41.
 大町2-2315 (1993馬淵) 馬淵1995『市緊急調査報告書』11 42. 大町2-291-1 (1996田代) 田代ほか1992『市緊急調査報
 告書』14 43. 大町2-2338-1 (1997宮田) 滝澤1999『米町遺跡発掘調査報告』44. 大町2-2312-4・10 (1998斎木)
 斎木ほか1999『米町遺跡』45. 大町2-2313-15 (1999瀬田) 瀬田2001『市緊急調査報告書』17 46. 大町2-2308-1 (1999
 瀬田) 瀬田2001『市緊急調査報告書』17 47. 大町2-2320-1 (2001斎木) 未報告 48. 大町2-2324-1 (2001馬淵) 馬淵
 2004『市緊急調査報告書』20 49. 大町2-993-3
 材木座町屋遺跡 50. 材木座1-144-3 (1990木村) 木村1990『市緊急調査報告書』7 51. 材木座2-217-6 (1993瀬田)
 瀬田1995『市緊急調査報告書』11 52. 材木座1-890-7 (1998沙見) 沙見2000『市緊急調査報告書』16 53. 材木座1-336
 -7 (2000宮田) 森ほか2001『材木座町屋遺跡発掘調査報告書』54. 材木座1-919-19 (2008) 55. 材木座1-893-19 (2008)
 56. 材木座1-921-5 57. 材木座1-126-8
 龍蔵寺跡 (No.314) 58. 材木座2-303 (1971大三輪) 未報告 (松尾宣方1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』1に略報)
 59. 材木座2-297-7 (2001大河内) 伊丹ほか2003『市緊急調査報告書』19

ころどころで採集されている。市域東部の大倉幕府跡周辺の微高地では、荏柄天神社前で前期諸磯b期および中期阿玉台期の土器14点のほか、敲打痕のある石や獣骨が出土している。横浜国大付属小学校一帯でも後期称名寺式土器が発見され(赤星1959)、近年では鎌倉駅周辺の沖積地でも前期から後期にかけての土器や石器がときに採集されている。縄文の海進範囲との関係が掴めないが、微高地では生活が営まれていたと考えられる。

弥生時代

海退に伴い、古鎌倉湾が次第に後退していく過程で支谷が生まれ、そこを流れる小河川と滑川の合流する付近に自然堤防の微高地が形成される。弥生時代の人々の生活はその上に営まれ始める。滑川と二階堂川が合流する市街地東域の大倉一帯に、弥生時代中期後半の宮ノ台期の集落がある(「大倉幕府周辺遺跡群」)。滑川沿いでは上流近くまで土器が採集されるので、河岸に広範囲に集落が形成されていたのだろう。海岸砂丘地帯では、弥生時代後期の祭祀遺構と思われる遺物が出土し、埋葬人骨や住居址が発見されたほか、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の土壌墓群も発見された(「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡」)。このほか北鎌倉台山・鎌倉山一帯にも集落が存在する(「台山遺跡」・「手広峰西遺跡」ほか)。

古墳時代

前期には鎌倉市の南西、逗子市と葉山町の境の相模湾を見下ろす桜山の丘陵上に、長柄桜山1号、2号墳が築かれる。この古墳はいずれも全長90m前後の前方後円墳で、県内のこれまでに発見された古墳としては最大級に属する。長柄桜山古墳群の地はのちの律令時代には鎌倉郡と御浦郡の境にあたり、相模湾を舞台とした地域統合が広範に進められていたことを物語る。古墳時代後期になると、鎌倉市街地では、砂丘地域で貝などを用いた祭祀遺構が点々と検出される。

またこの時期、横穴墓がほぼかつての郷毎に一箇所ずつ濃密に分布する地域が存在する。鎌倉郷に比定される地域では、御成町を中心とした滑川右岸の丘陵部に集中する。市域の西半部では極楽寺を中心とした地域に多い。和田塚周辺は古い字を向原といい、現在は見る影もないが、高塚式円墳の向原古墳群があったとされる。「采女塚古墳」(「無常堂塚」)はその一つで、明治28年(1895)の『鎌倉旧蹟地誌』によれば円墳状に残っていたという。埴輪が発見されたのは明治20年(1887)のことで、六地藏から由比ヶ浜に向かう道の道路工事に際し、塚を切崩した時に人物埴輪三体の他に馬埴輪、円筒埴輪が出土したとされる。和田塚周辺から御成町一帯にかけては、ときどき埴輪片の出土がある(「今小路西遺跡 御成小学校地点」など)。古墳時代後期から末期にかけて、沖積地を中心として生活痕は点々と残される

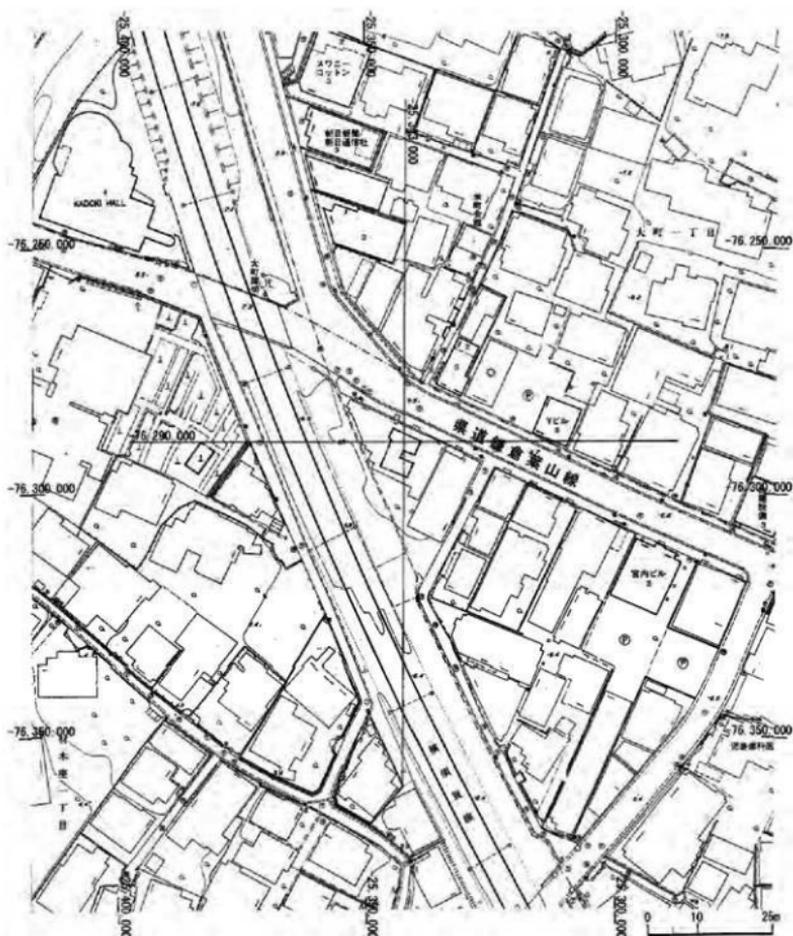


図2 調査区位置図

が、集落としては調査例がない。

律令時代

この時代になると遺構・遺物は急増し、官衙、集落の発見がある。古代行政区画上の相模国は八郡で形成され、その内に鎌倉郡も含まれる。鎌倉郡は五つもしくは七つの郷で構成される。綾瀬市宮久保遺跡出土の「天平五年」銘木簡には鎌倉郷の名がある（天平五年は733年）。正倉院文書にも名はみられる。平安時代成立の「和名類聚鈔」（承平年間931～937成立）にも「鎌倉郷」の名がみられる。それらの史料により奈良時代前半の鎌倉郷に限ってみれば、高田王の食封三十戸と他の官戸二十戸が存在し、相模

国の一郷平均人口である1521人前後（竹内1981）が暮らしていたとする推測が成立する。

今小路西遺跡（御成小学校地点）で鎌倉評もしくは郡家の政庁が発見されたのは、1985年のことである。検出遺構は掘立柱建物12棟、礎石建物5棟、柵9条、池状凹地1基、溝3条などであり、8世紀前半から10世紀初頭までの遺構、遺物の変遷をV期に区分している。その後、周辺の発掘調査により官衙関連とおぼしい遺構が発見された。本調査地点にほど近い地点53では、掘立柱建物が6棟検出されている。報告者は建物の構成や遺跡の立地から、一般集落ではなく水上交通・運搬に関する機関とそれに付属する建物（居館）と指摘している（森2001）。大上周三はこの遺跡に対し、水上交通、とりわけ郡衙の港湾施設、郡津も視野に入れたいとしつつも、検出された遺構、遺物から郡衙の交通関係に直接結びつく管理施設あるいは物流収蔵施設にすることはできないとし、立地からすると水陸交通関係の建物である蓋然性の高さを指摘している（大上2009）。

こうした古代鎌倉の様相について菊川英政は、遺跡を砂丘域・郡衙域・周辺域に分けた上で、遺跡点数の変化から次のように説明する（菊川1997）。

8世紀前半に郡衙は砂丘後背地に付属倉群と共に存在する。それ以前7世紀後半に砂丘域で遺構・遺物と多く見られるのは、菊川によれば、郡衙造営にともなう集団移住が行われたからであり、8世紀前半に郡衙域に遺構・遺物の増加が見られるのはその存在からとする。その一方、このころから砂丘域では逆に急激に落ち込むことから、集落は郡衙が完成するまでの一時的な移住であったという。

9世紀前半は砂丘域、郡衙域とも変化は見られないが、菊川によれば、後半に郡衙域だけ低くなるのは、鎌倉郡衙の消長に対応しているという。他地域に移転した確証がないことに加え、既存集落の撤去あるいは無住の耕地をつぶすにしても政庁域には広大な土地が必要であり、新たな集落の増加が抑えられるはずなので、政庁が同じ郡衙内へ移転したことによるとしている。

周辺域では7世紀中葉から遺跡は見られるが、主に9世紀を主体とした丘陵斜面あるいは尾根上で集落は形成される。このことに関して菊川は、9世紀前半の急増は丘陵部への耕地拡大を図ったものであり、9世紀後半で減少傾向にあるのは元慶二年（878）の大地震による可能性もあるとする。が、周辺域とした傾向が実は異なる地域の特徴が混在したものであり、地域の特徴の根底には立地が大きく関わっているとしている。10世紀前半から後半にかけて砂丘域、郡衙域ともに減少傾向にあり、10世紀後半は三域とも一定の遺跡を残し衰退する様子が観察されるが、10世紀中葉から11世紀後半は律令制が崩壊する時期であり、一般集落遺跡においても住居件数が減少し、集落は解体する。鎌倉中心域の変化はそうした社会変化を反映した現象としている。

さて、大化改新（645）直後から宝亀二年（771）の五畿七道制の改編まで、鎌倉を東海道が通過していた。この街道がどこを通過していたかという問題は、それ以後の鎌倉の町構造を規定する重要な点なので、簡単に触れておきたい。

東海道が鎌倉に入る経路は、ほぼ次の二系統が想定される。一本は、相模国府から海岸沿いに鎌倉郡に至り、稲村ヶ崎と霊山ヶ崎の間の鞍部を越えて鎌倉湾側に抜け、稲瀬川河口から鎌倉郷に入る経路である。もう一本は、海老名から藤沢下土棚を経て、藤沢市川名から鎌倉に入る。この場合は、明治時代に敷設された横須賀水道路（横須賀水道上に敷設された道）にほぼ重なる（木下1997）。以上二経路のいずれも考古資料による検証はまだされていない。またどちらであっても、その先、鎌倉郷を横断する経路にも二系統が想定されている。すなわち、ほぼ六地藏交差点から現在の下馬四ツ角交差点を東に渡ったあと、やはり現在の^{（東）}大町四ツ角から小坪方面へ抜ける経路と、その道よりも一本南の、六地藏交差点から私立中高校の北側を通り小坪に抜ける経路である。前者はもちろん本調査地点北側の県道鎌倉葉

山線だが、南を通る道であってもここからは至近の位置にある。一帯のどこからも基盤層近くから古代の土器が出土するのは、そのことが背景にあるのだろう。古官道の道筋は中世鎌倉の都市構造を解明する上で大変重要な問題であり、今後も注視していく必要がある。

王朝国家時代

源氏が鎌倉に入ってきて礎を築いた時代である。集落は、基本的には源氏居館の存在していたであろう中核部と、それを囲む幹線道路で構成される。北の山際と南の海岸寄りに東西の道が通じ、それを南北の道でつなぐ。北の山際の道は武蔵の六浦津との往還路である。六浦津は東海道の経路変更後衰退したと考えられる三（御）浦走水（馳水）に替わって盛んになったのであろう。この往還路のちに「六浦道」と呼ばれるようになる。鎌倉側の終点（起点）は、現在の寿福寺の地にあった源義朝の居館「鎌倉之橋」であった。南の海岸寄りの東西道はかつての東海道である。この2本の東西道のそれぞれの左右には守護神が置かれ（坂ノ下御堂神社・大町八雲神社・荏柄天神社・佐助稲荷社、集落を保護する（馬淵1994）。

この時代にはほかにいくつかの寺社が開創されている。市街地西南部に位置する甘縄神明社は、和銅三年（710）に行基が開いたと伝えるが、実際には全国に御厨の設置が盛んになる平安時代後期の草創であろう。大庭御厨の東端に当たるか、あるいは飛地があったらしく、そのためここに祀られたともいわれる（高柳1959）。11世紀中葉、勅定により相模守として下向した源頼義は、当社に祈って、康平六年（1063）に社を修復、永保元年（1081）嫡子八幡太郎義家がさらに修理の手を加えた。六浦道に面した杉本寺は、寺伝に天平六年（736）行基が開いたとされるが徴証はない。仏像等の藏品からみて、これも開創は平安時代後期とすべきであろう（馬淵ほか2002）。なおこの寺は、『吾妻鏡』では終始「大倉観音堂」の名で呼ばれている。

この時代、調査地点に近い場所の記事としては、由比若宮がある。「康平六年（1063）秋八月」、源頼義は滯かに石清水を勧請することとし、由比郷に瑞籬を営む（『吾妻鏡』）。18年後の永保元年（1081）2月、これも甘縄神明社と同様、子義家が修復を加えたという。八幡神を置く場所にこの地を選んだ理由はわからない。今でこそ海岸からは遠いが、明治以前はここから300m前後の近さまで潟湖が湾入していた。あるいは汀線近くを古街道（律令時代の東海道か）が通過しており、そこが参道の起点となったのだろうか。

鎌倉時代

治承四年（1180）、源頼朝が鎌倉に入り、大倉に幕府を開いた。このとき旧来の集落構造の上に鶴岡八幡宮と若宮大路が置かれ、現代まで続く町並の骨格ができ上がる。調査地点は先述のとおり県道鎌倉葉山線に臨む場所にある。この県道の前身となったであろう中世の街路の敷設が、このときであったかどうかはわからない。しかし、下馬四ツ角から西の山麓（現私立御成中学校門前）に向かって若宮大路に直交する道が付けられ、東は名越山麓まで至る直線的な街路が通じたのは、それからほどなくのことだったはずである。和田合戦について記した『吾妻鏡』建保元年（1213）五月二日条に、「米町辻、大町大路等之切処」とみえ、この頃にはもうあることがわかる。「米町辻」とは現在の「大町四ツ角」のことであろう。「切処」は、戦いの先端、といったほどの意味か。

県道鎌倉葉山線が歴史的に何であったか、すなわち鎌倉時代の「大町大路」であったかどうか、また律令時代の東海道であったかどうかについては議論がある。この点に関しては、馬淵ほか2007第一章、および馬淵ほか2008第一・四章等を参照してほしい。

「下馬」の名称は、鶴岡八幡宮に対して下馬の礼を取るところからきている。したがって、この地名は鎌倉時代初期におこったものであろう。『吾妻鏡』の中では「中(の)下馬橋」「下(の)下馬橋」が出てくる。「下馬」の近くに作られた橋のため「下馬橋」と呼ばれたと言われている。観応三年(1352)九月三日の將軍足利尊氏御教書(県史三)に「若宮小路三箇所橋造営」と見えることから、若宮大路上・中・下それぞれの下馬に橋が架かっていた可能性が高いが、「上(の)下馬橋」は史料に現われない。

『吾妻鏡』によると「中下馬橋」の初見は建保元年(1213)五月一日条で、今の二ノ馬島付近であることがわかる。「下下馬橋」は、県道鎌倉葉山線が若宮大路と交差する今の下馬四ツ角付近にあった。『吾妻鏡』による「下下馬」の初見は仁治二年(1241)十一月二九日条であり、それによれば、下下馬のあたりは若宮大路を挟んで東西の両側に「好色家」(妓楼か)が並び、武士たちの「酒宴乱舞会」の催される繁華な場所であった。しかし『快元僧都記』天文三年(1534)六月一六日条に出てくる「下ノ下馬」は「七度行路」とともに「下馬橋二ヶ所」修理の歎進状であり、この頃には若宮大路の荒廃とともに中ノ下馬橋、下ノ下馬橋はしばしば破損し修理を要する状態であったようだ。調査地点周辺を描いた、明応年間(1492-1501)頃作成された「善宝寺寺地図」を見ると、図下方の「置石」と注されるのは若宮大路の段葛であり、滑川に架かる橋は現在の下馬四ツ角近くの延命寺橋であろう(図版1)。明応頃の段葛は下馬四ツ角近くまで存在していたことがわかる。延命寺橋から米町と注する道筋は若宮大路から大町四ツ角、名越を経て逗子へ通じる現在の県道鎌倉葉山線に相当し、連なる家並みは繁華であった様子を彷彿とさせる。今回の調査地点は正しくこの辺りである。

鎌倉幕府は建長三年(1251)十二月三日と文永二年(1265)三月五日の二度、市中の商業地区を指定する法令を出した。前者に「米町」の名が見え、後者にもその異称とみられる「穀町」の地名がある。県道鎌倉葉山線沿いに大町・米町・魚町の三地区を集めた点には、それより海岸寄りを異域と明確に認識したことがうかがえるという見方もある(馬淵1998)。この帯状の帯は内にも外にも属さない極めて両義的な場所、彼岸と此岸との境を示す浜の大馬島と、神域たる八幡宮領内を示す下馬四ツ角という、ふたつの境界標識に挟まれた場所である。(馬淵1994)。米町は他に『吾妻鏡』の寛喜三年(1231)一月一六日条米町辺りの失火で「及横町南北六町余災出羽前司宅在此内」と記され、賑やかな商業地域で人家が立て込む一方で、有力御家人の屋敷のある場所でもあったことを表す。

2000年に大町二丁目2312番地10・二丁目2312番4安養院の西側「米町遺跡」(地点44・45)で検出された8枚の版築面は全体の広がりや掘めないため性格を推定するのは難しいとしながらも、性格としては道路を考えたとし、下馬から名越方向に向かう「車大路」もしくは「古い東海道」の可能性を指摘している(斎木ほか2000)。ただしこの見解については異論も出ている(馬淵ほか2004)。

調査地点は県道鎌倉葉山線に面するが、この道は果たして中世期の「大町大路」と比定できるのだろうか。これについては今まで各方面から検討されているが調査地点に近い「小町大路」「車大路」の範囲も今だ明確にされておらず、おのずと「大町大路」の範囲も不明のままである。

南北朝時代以後

大町は中世後期にも商職人ら、いわゆる「町衆」の賑やかに行き交う町であった。鎌倉祇園会と呼ばれる大町祇園社(現八雲神社)の祭礼を担ったのは彼らである(藤木1993)。天正14年(1586)、北条氏直は鎌倉祇園祭における喧嘩口論や押買等についての禁制を出している(『鎌倉市史 史料編』1-403)。町衆の多くは日蓮宗徒で、浄土宗徒もいた(松尾1993、湯浅1994)。津久井郡光明寺には「善宝寺寺地図」とともに、明応六年(1497)七月二十五日付「善法(宝)寺分年貢注文」が存在する。そこには寺領内の作人十数人の年貢額が記されている。作人名の肩には米町をはじめ

中座・塗子または辻子といった地名、日常物屋・紙屋・銀細工・塗しなどの職業が書かれている(『神奈川県史 資料編』3-6410)。善宝寺は調査地点のすぐ北側に位置する。中世末期における門前の、それもおそらくは通り沿いの賑わいがよくうかがえよう。

鎌倉時代後期、法華経を奉じる日蓮は名越山麓を拠点として盛んな布教活動をおこなった。その宗派は当初名越付近に押しとどめられていたが、鎌倉幕府崩壊後徐々に鎌倉市内中心部に進出する。調査地点はその寺域内であった可能性もあろう。日蓮宗の教線拡大の実態と、そのなかでの大町・名越一帯の位置付けは、今後の重要な課題である。

(根本・馬淵=補綴)

※引用・参考文献は第四章末に一括

第二章 調査の概略

1. 調査にいたる経緯

本調査地点は市内のほぼ中心部に所在し、逗子方面に通じる県道鎌倉葉山線の下馬交差点のやや東になる県道の南側、大町二丁目に位置している。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設が調査原因であったが、発掘調査の着手前に鋼管杭打設が行われるという不本意な状況の下で、急遽調査を開始した。

2. 調査方法

調査時の測量は便宜上、街区に合わせて任意に設定した方眼を使用した。国土座標鎌倉市4級点(U131・U132)を基点にして調査地点の座標を計測した後、測量方眼を座標系に変換したものを本報に掲載した。調査区はX-76 289~76 297、Y-25 338~25 347(エリア9)の範囲にある。

3. 調査の経過

調査は平成17年2月2日~同年2月28日の期間を要した。主な作業内容は以下のとおり

- 2月2日(水) 重機による表土掘削。機材搬入。
- 2月3日(木) 中世面の遺構確認作業開始。
- 2月10日(木) 溝1ほぼ完掘。南半部写真撮影。
- 2月12日(土) 1面全景撮影。
- 2月18日(金) 溝2掘り上げ。
- 2月21日(月) 2回目の全景撮影。
- 2月22日(火) 調査区南壁際深掘り。
- 2月23日(水) 調査区東壁深掘り、調査壁土層断面図実測。
- 2月24日(木) 遺構個別写真撮影。撤収準備。
- 2月28日(木) 機材撤収。

(松原)

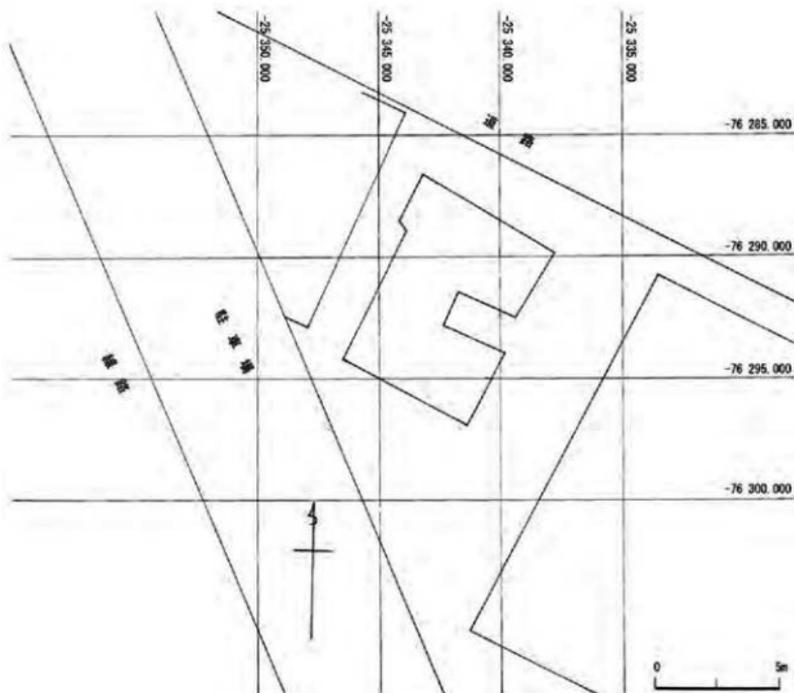


図3 調査区設定図

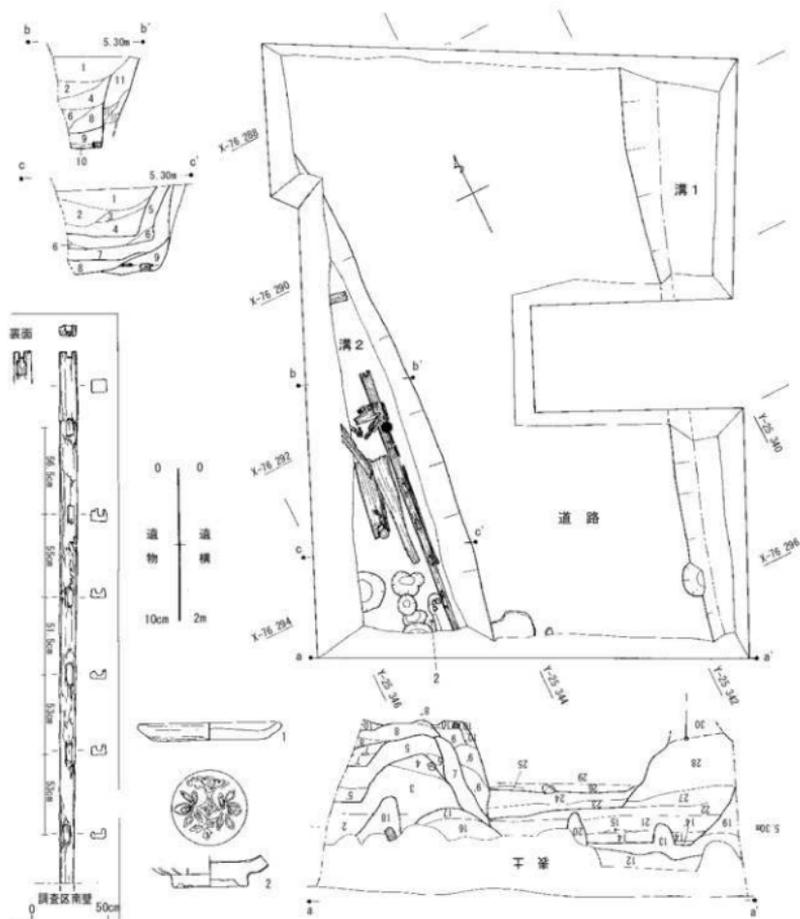
第三章 調査結果

第1節 層序と面の概要

現地表の標高は6.3～6.4mで、40 cm～90 cmほどの厚みの表土を除くと、下にすぐ中世層が現われる。この中世層は泥岩粒子や炭化物を多く含む暗灰褐色砂質土で、10 cm前後の厚みがある（図4土層番号13）。遺構面は調査区中央部に南北に細長く残っており、その最上部で標高5.7m前後となる。両横は急傾斜で直線的に落ち、これはのちに道路とその側溝であると判断した。道路は子午線に近い主軸方位を持ち、幅2.8～4.2mで、北に行くほど広い。

道路遺構最上面から45 cm前後下に初期の道路があるが、上述の道路はそれを拉幅する形で構築されている。このとき当初の側溝は、厚さ50 cm前後の暗茶褐色ないしは暗褐色の砂質土で埋められている（図4土層番号21・22）。

初期道路は二層の暗褐色砂質土で構成される。いずれも泥岩や土器片を少量含む土である（図4土層番号23・24）。



- 1 暗茶褐色砂質土 2層に類似、やや明るい。泥岩粒・炭・土師器片含む。
- 2 暗茶褐色砂質土 やや暗の上。泥岩粒・土師器片・貝含む。
- 3 暗黄色砂質土 1~3cmの泥岩・磁灰岩・土師器片・炭・貝含む。
- 4 暗茶褐色砂質土 10cm以上の泥岩・磁灰岩・少量の炭化物・やや多めの貝含む。
- 5 暗茶褐色砂質土 1~3cmの泥岩・少量の炭化物・やや多めの貝含む。
- 5* 暗茶褐色砂質土 泥岩多く、少量の炭化物を含む。
- 6 暗茶褐色砂質土 土師器片多く、泥岩粒・炭化物・貝粒・焼飯含む。
- 6* 暗茶褐色砂質土 1~3cmの泥岩を含む。 溝2
- 7 暗茶褐色砂質土 1~3cmの泥岩を含む。土師器片・少量の炭を含む。
- 7* 灰褐色粘質土 泥岩粒・貝片・炭化物を含む。
- 7* 灰褐色粘質土 黄灰色砂混入。炭化物・貝粒・土師器片・泥岩粒を含む。
- 8 暗茶褐色砂質土 1~3cmの泥岩・若干の貝を含む。
- 8* 暗茶褐色砂質土 泥岩粒・土師器片・貝粒・炭化物を含む。
- 8* 暗茶褐色砂質土 地山との混入度。泥岩粒・土師器片・貝粒・炭化物を含む。
- 9 暗茶褐色砂質土 1~3cmの泥岩を含む。
- 9* 暗茶褐色砂質土 土師器片・泥岩粒・炭化物を含む。
- 9* 暗茶褐色砂質土 土師器片・泥岩粒・炭化物を含む。
- 10 黄茶色砂質土 地山との混入度。
- 10* 暗茶褐色砂質土 混入物少ない。若干の貝片を含む。
- 10* 暗茶褐色砂質土 地山との混入層。

- 11 茶褐色砂質土 1~3cmの泥岩・土師器片・炭化物を含む。
- 12 暗茶褐色砂質土 木片多く、泥岩粒・炭化物を含む。
- 13 暗茶褐色砂質土 泥岩粒・炭化物を含む。
- 14 暗茶褐色砂質土 泥粒少量含む。締まりなし。
- 14* 暗茶褐色砂質土 貝片含む。締まりなし。
- 15 黄茶色砂 土師器片他遺物多数含む。
- 16 暗茶褐色砂質土 17層と同質。締まりあり。
- 17 暗茶褐色砂質土 泥岩・土師器片を非常に多く含む。キメ細か。
- 18 暗茶褐色砂質土 泥岩・土師器片を非常に多く含む。
- 19 暗茶褐色砂質土 貝・貝粒を多く含む。泥岩・土師器片・炭化物を含む。
- 20 暗茶褐色砂質土 色調ややくらめ。
- 21 暗茶褐色砂質土 泥岩粒・土師器片・炭化物を含む。
- 22 暗茶褐色砂質土 23・28層より若干粗く明るめの土。泥岩粒・土師器片・炭化物を含む。
- 23 暗茶褐色砂質土 24層に類似。泥岩粒・土師器片を少量含む。
- 24 暗茶褐色砂質土 26層よりやや明るい。泥岩粒・炭化物を少量含む。
- 25 漆喰層
- 26 暗茶褐色砂質土 混入物非常に少ない。
- 27 暗茶褐色砂質土 混入物少ない。
- 28 暗茶褐色砂質土 泥岩・貝・炭化物・土師器片含む。 溝1
- 29 黄褐色砂層 風成砂。基盤層

図4 上層遺構群全図 調査区土層断面 同出土遺物

ここまでを上層遺構群と呼ぶ。

土層番号 23・24 (図 4) の土を除くと、道路下の南側に明黄褐色の風成砂層が現れるが、自然堆積層はこの部分のみで、以北は黒褐色ないし暗黄褐色の粘質土となる。風成砂層のない北域 3 分の 2 については、深度規制により掘削できず、落ちていることのみ確認した。またこの層からは、上部を道路西側溝によって損なわれた大きめの円形の穴が 2 基 (土坑 1・P.13)、調査区北端では浅い堅穴遺構の下部とみられる隅丸方形の土坑も検出された。

これらの遺構群を下層遺構群と呼ぶ。

第 2 節 各説

1. 上層遺構群

溝 1 (図 4・5)

位置：X-76 289～-76 297 Y-25 342～-25 338 規模：東西幅 180 cm 以上×深さ 142 cm 以上 断面形：(逆台形) 流下方向：南→北 主軸方位：(N-17.5° -E) 充填土：図 4 に記載 重複関係：堅穴 1 を切る 上層出土遺物：土師器皿 T 種 (1・2)・土師器皿 R 種 (3～6)・瓦器火鉢 (7・8)・伊勢系火鉢 (9)・輪羽口 (10)・南部系山茶碗 (11)・常滑片口鉢 I 類 (13～15)・同 II 類 (12・16～18)・渥美壺 (19)・常滑甕 (20～22)・磨耗陶片 (23～26)・白磁口はげ皿 (27)・同安窯系青磁皿 (28・30)・竜泉窯青磁鎚蓮弁文碗 (29)・磨耗石片 (31)・砥石中砥 (32・33) 下層出土遺物：磨耗陶片 (34・35)・竜泉窯青磁画花文碗 (36) 特記事項：東岸が調査区内に見えないため溝ではない可能性も消えない。しかし、本址西側の調査区中央部を南北に走る高まりに関して、これを挟んで反対側にも溝があるところから道路状遺構と認識できるので、本址もそれにとまう道路東側の側溝であるとみたい。溝は大きく二時期に分けられ、出土遺物からみて、上層は 13 世紀第 2 四半期から同第 3 四半期、下層もあまり変わらず 13 世紀前半に位置付けられる。この年代は次述の溝 2 にも共通しており、鎌倉時代中期にこの場所に道路が設けられたことがわかる (終末は上部が削り取られているためにわからない)。

溝 2 (図 4～6)

位置：X-76 288～-76 296 Y-25 344～-25 346 規模：東西幅 80 cm (上層溝)×深さ 79 cm (同前) 断面形：逆台形 流下方向：南→北 主軸方位：N-6.5° -E (根太ホゾ穴心々方位による) 充填土：図 4 に記載 重複関係：土坑 1 を切る 上層出土遺物 (図 5)：土師器皿 T 種 (37・38)・土師器皿 R 種 (39～41)・瓦器火鉢 (42・43)・常滑片口鉢 I 類 (44)・同 II 類 (45) 渥美甕 (46)・常滑甕 (47)・磨耗陶片 (48～50)・白磁口はげ皿 (51)・竜泉窯青磁折縁鉢 (52)・竜泉窯青磁鎚蓮弁文碗 (53・54)・祥符元寶 (55)・砥石中砥 (56)・使用痕のある石 (57) 下層出土遺物 (図 6)：土師器皿 R 種 (1～3)・鐔鍋 (4)・南部系山茶碗 (5)・常滑片口鉢 I 類 (6～11)・同 II 類 (12～14)・渥美甕 (15)・常滑甕 (16～20)・磨耗陶片 (21～24)・瀬戸仏華瓶 (25)・瀬戸鉢 (26)・平瓦 (27・28)・白磁合子 (29)・竜泉窯青磁酒会壺 (30)・竜泉窯泉窯青磁鎚蓮弁文碗 (31・32)・砥石仕上砥 (33)・砥石中砥 (34・35) 最下層出土 (図 6)：磨耗陶片 (36)・竜泉窯泉窯青磁画花文碗 (36) 特記事項：少なくとも五時期に分けられる改修、もしくは浚渫がある。上層のものに木材はないが、最下層のものはホゾ穴のある根太を備え、底部に板材を敷く。上層は断面逆台形で明瞭に溝の形態をしているが、

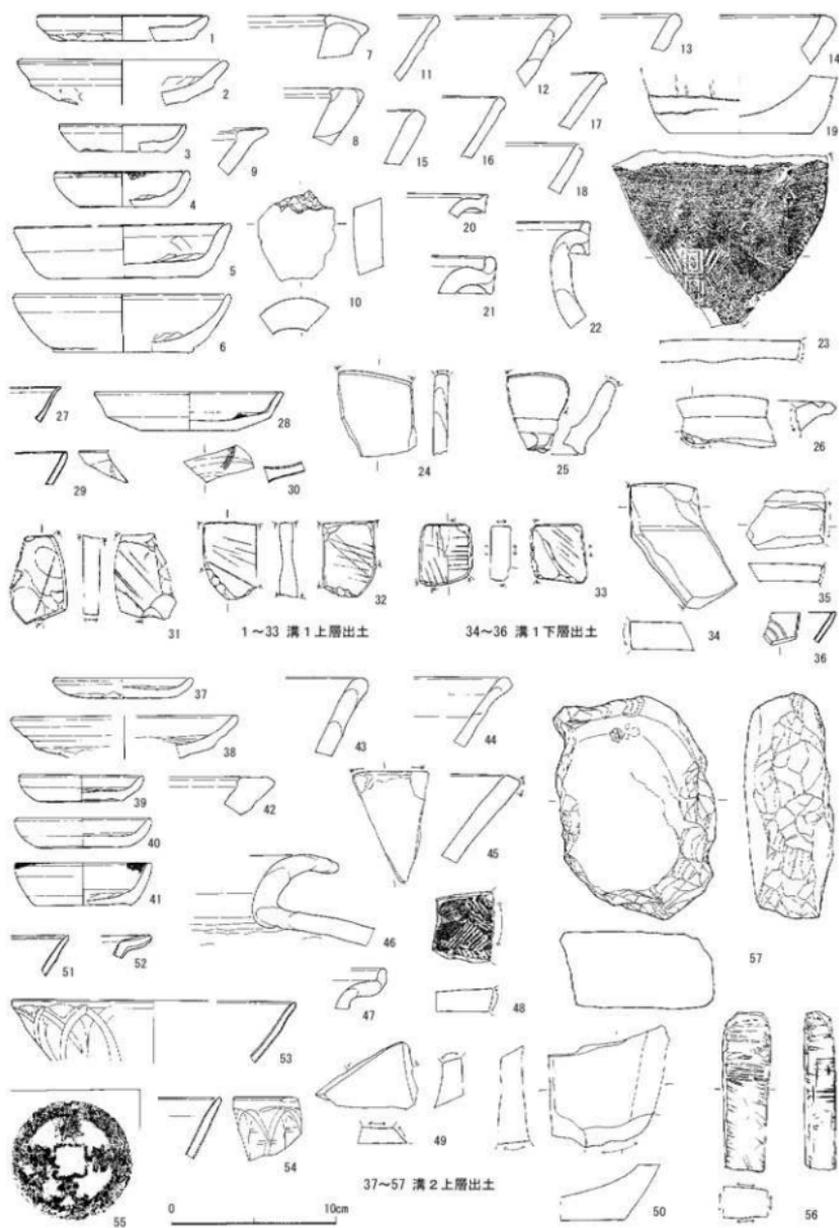


图5 溝1·溝2上層出土遺物

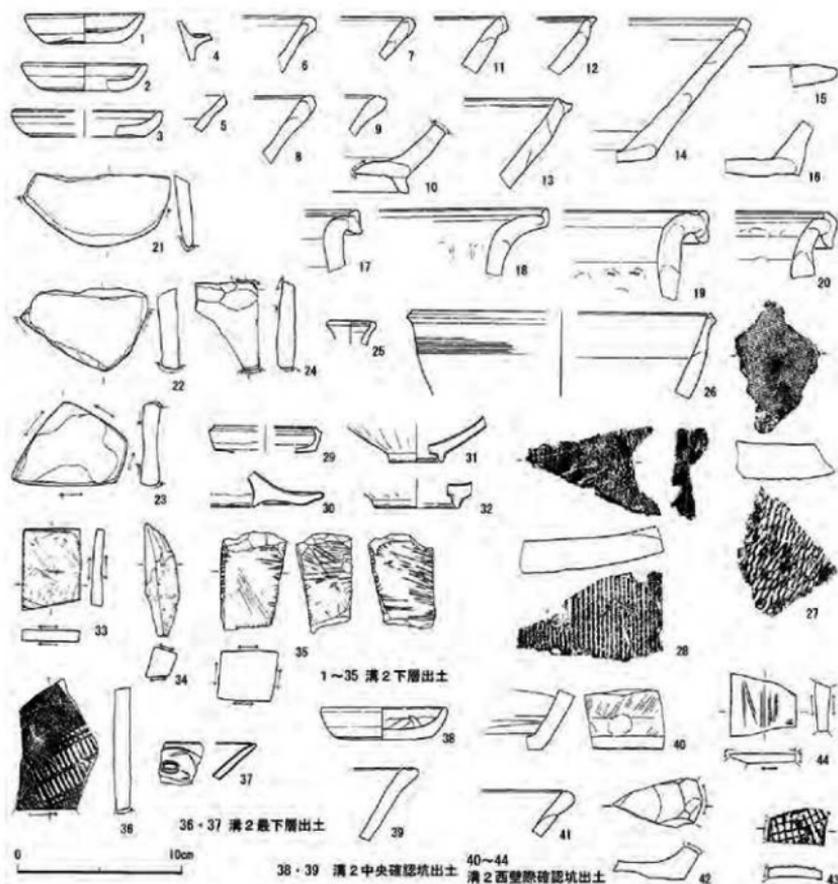


図6 溝2下層・同最下層・確認坑出土遺物

最下層の根太を有する遺構の西岸については、上層溝に削り取られて確認できない。根太(図4)は溝木枠の束柱を立てるためのもので、底面東側壁際に残る。最大幅11.3cm、最大厚8cmの角材で、検出した長さは353cm、南調査壁に続く。貫通しないホゾ穴が6箇所穿たれ、ホゾの心々の距離は51.5~56.5cm、北端は「鎌継ぎ」の女木としてのホゾが彫り込まれている。根太の主軸方位はN-6.5°-Eだが、溝掘り方自体は北に向かってやや西に湾曲している。標高は部材の上面で4.1~4.18m。その他溝底付近では束柱と思われる部材・板状部材が出土している。底面近くから出土した竜泉窯泉窯青磁鎚蓮弁文碗については、図4に位置と実測図(2)を示した。出土遺物の年代は、かなり混乱が認められるが、上層・下層はいずれも13世紀代であり、最下層は13世紀前半中心と考えたい。

溝 2 関連確認坑 (図 6)

出土遺物：土師器皿 R 種 (38)・常滑片口鉢 I 類 (39・41)・瓦器火鉢 (40)・磨耗陶片 (42・42)・砥石仕上砥 (44) 特記事項：13 世紀代 2 四半期～第 3 四半期であろう。

道路状遺構 (図 4)

位置：X-76 288～-76 290 Y-25 341～-25 343 規模：幅 420 cm 以上 平面形：南に比べ北で幅が広がる 断面形：台形 主軸方位：(N-9° -E) 重複関係：堅穴 1・土坑 1 を切る 出土遺物：溝 1・2 出土遺物 (図 5・6) 参照 特記事項：若宮大路は N-26.5° -E であり、軸線を大きく異にする。おそらくすぐ北を通る東西の大路 (「大町大路」か) に接続するのであろうが、接点自体は調査区内に見えていない。年代は上述の溝 1・2 の出土遺物から、13 世紀第 2 四半期頃には設置され、少なくとも 13 世紀後半までは存続する。廃絶期については、上部が完全に失われているため不明である。

上層遺構群包含層出土遺物 (図 8)

土師器皿 R 種 (1～4)・瓦器火鉢 (5)・南部系山茶碗 (6)・常滑片口鉢 I 類 (7～9)・同 II 類 (10～15)・渥美甕 (16)・常滑壺 (17・18)・常滑甕 (19・20)・磨耗陶片 (21～23)・瀬戸仏華瓶 (24)・砥石中砥 (25・27)・砥石仕上砥 (26) 特記事項：13 世紀第 2 四半期を中心とする。全体にやや古く、13 世紀後半をほとんど見ない。

上層遺構面出土遺物 (図 8)

土師器皿 T 種 (28・31)・土師器皿 R 種 (29・30・32～36)・白色系土師器皿 (37)・瀬戸内系土師器碗 (38)・楠葉型瓦器碗 (39)・常滑片口鉢 I 類 (40・41・43)・同 II 類 (42)・渥美甕 (44)・磨耗陶片 (45・46)・常滑甕 (47・48)・青白磁香炉 (49)・不明金属製品 (50・51)・鉄釘 (52～56) 特記事項：年代的には包含層と変わらず、13 世紀第 2 四半期のうちにおさまるが、楠葉型瓦器碗 39 は、あるいは 13 世紀中葉～第 3 四半期となるか。

2. 下層遺構群

堅穴 1 (図 7)

位置：X-76 288～-76 290 Y-25 341～-25 343 規模：東西 315 cm 以上×南北 110cm 以上×深さ約 46cm (底面高 4.88m) 平面形：(隅丸方形) 断面形：浅い逆台形 主軸方位：N-66° -W) 重複関係：道路状遺構および溝 1 に切られる 出土遺物：土師器皿 R 種 (1)・土師器皿 T 種 (2)・連菌下駄 (3) 特記事項：北半は調査区外にあり、東辺は溝 1 に削り取られているので規模は不明。中世のいわゆる「堅穴建物」とはいえない。

土坑 1 (図 7)

位置：X-76 289～-76 292 Y-25 343～-25 345 規模：東西 105 cm 以上×南北 190cm×深さ約 135cm (底面高 3.90m) 平面形：円形 断面形：逆台形 主軸方位：不明 重複関係：溝 2 に切られる 出土遺物：土師器皿 T 種 (4・5)・土師器皿 R 種 (6・7)・常滑片口鉢 I 類 (8・9)・同 II 類 (10)・常滑甕 (11・12)・磨耗陶片 (13)・青白磁梅瓶 (14)・竜泉窯青磁稜花碗 (15) 特記事項：充填土の大半が失われていたが、明茶褐色繊維質の柔弱な土が下層に残っており、周辺の事例とあわ

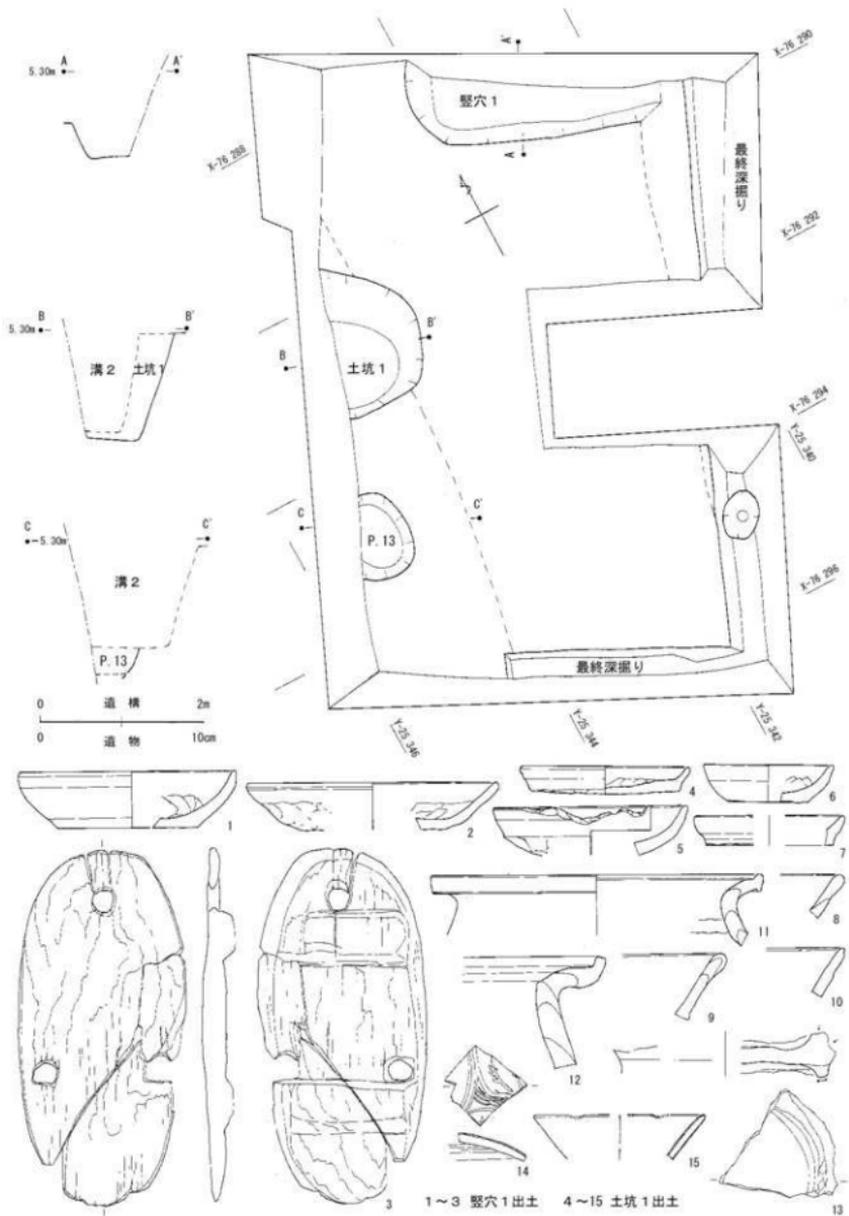


図7 下層遺構群全圖 整穴1・土坑1出土遺物

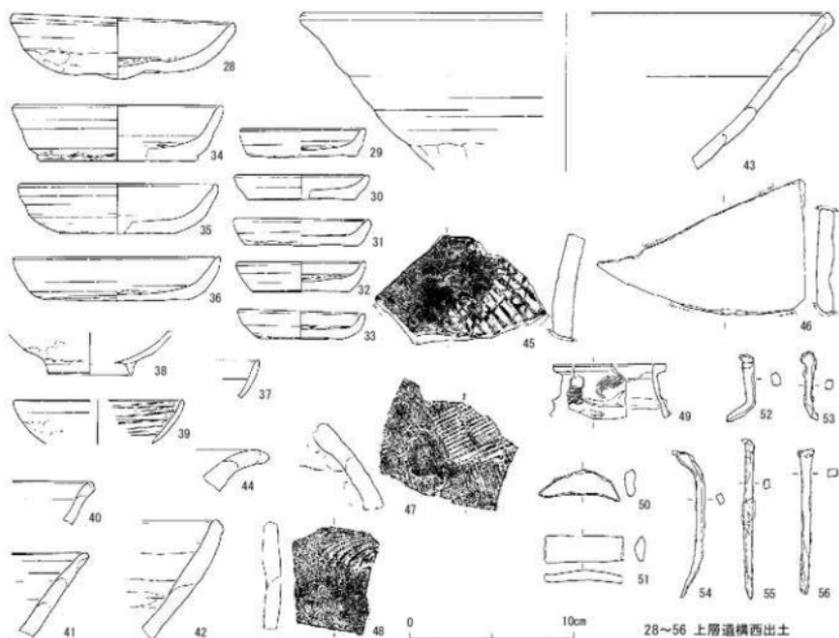
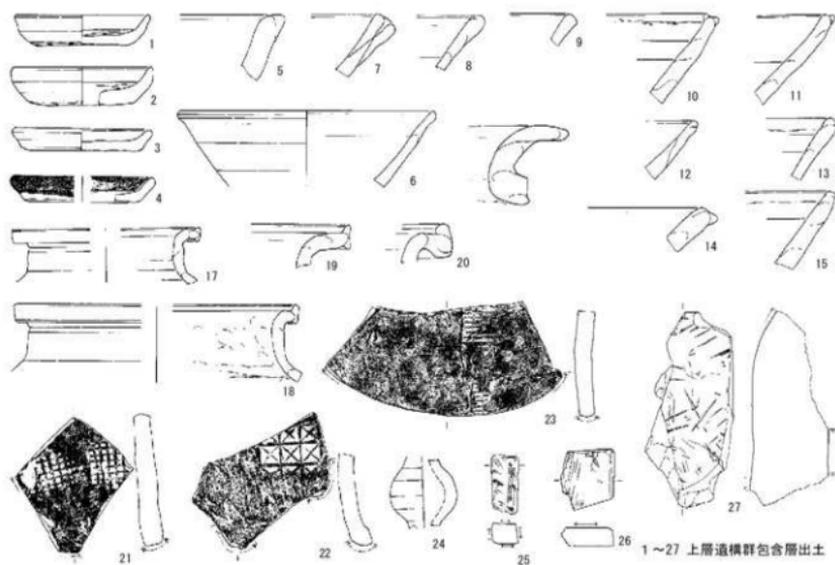


圖8 上層遺構群包含層·上層遺構面出土遺物

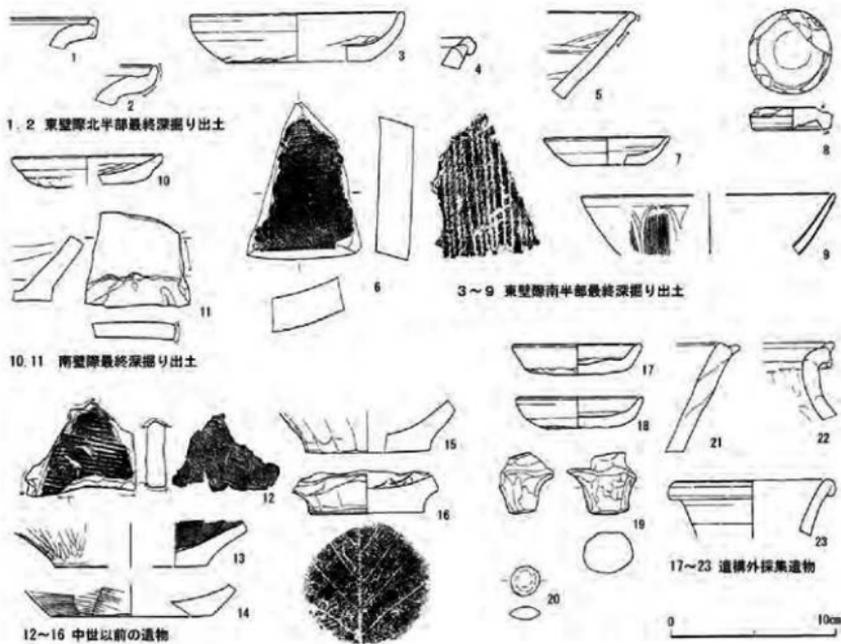


図9 最終深掘り出土遺物、中世以前の遺物、遺構外採集遺物

せて考えると（馬淵 1998）、便槽の可能性もある。

3. 採集遺物

東壁際北半部最終深掘り（図 9）

出土遺物：常滑甕(1)・磨耗陶片(2) 特記事項：2は常滑甕口縁部転用。年代はともに13世紀前半におさまる。

東壁際南半部最終深掘り（図 9）

出土遺物：土師器皿 R 種(3) 常滑片口鉢 II 類(4)・磨耗陶片(5)・平瓦(6)・東遠系山皿(7)・同安窯系青磁碗(8)・竜泉窯青磁櫛描蓮弁文碗(9) 特記事項：5は常滑片口鉢 II 類転用。全体に13世紀前半の様相を呈する。

南壁際最終深掘り（図 9）

出土遺物：土師器皿 T 種(10)・磨耗陶片(11) 特記事項：10は13世紀前半までに属する。

中世以前の遺物（図 9）

須恵器甕(12)・壺型土器(13~16) 特記事項：古代の土器はほかにも何点か出土している。古墳時代後期から律令時代にかけて、かなりの人が住んでいたであろう。

遺構外出土遺物（図 9）

土師器皿 T 種(17)・土師器皿 R 種(18)・瓦器火鉢(19)・土製品(20)・常滑片口鉢 II 類(21)・常滑甕(22)・瀬戸四耳壺(23) 特記事項：全体に13世紀第2四半期~同第3四半期の様相を呈し、これまでにみえてきた遺構出土遺物の年代観から逸脱していない。

4. 铸造関係の遺物

出土点数：鑪の羽口破片 16 点・鉾滓 22 点他碎片 総重量：2178 g 特記事項：図示できるものはなかったが、遺構・層位を問わずまんべんなく出土している。特に多いのは溝 2 下層で、鉾滓のほかに鉄皿の可能性のある金属塊・薄い棒状の鉄片・板状の鉄片複数も出土している。面積比でいえば数量的には明らかに多い。この点については第四章であらためて触れる。

（松原・馬淵=補綴）

出土物観察表(1)

陣岡番号	出土遺構・層位	種別	備考
図4-1	調査区南壁 種小型	土師器直下 種小型	口径9.2cm 器高1.15cm 手ね後口縁部内底部ナデ 胎土は赤褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒・海綿骨芯を含む粉質土
	図2覆土	常葉菜青磁 鉢蓋平文網	口径4.8cm ロウロ成形成 素地は淡灰色、黒色微砂粒を含む 輪は淡緑色半透明、細かな気泡を含む 内底面は漆黒文の押印で表面に多少使用によるキズがある 外底部は積み付きより内側置胎 皿目
図5-1	土師器直下 種小型	土師器直下 種小型	口径10.25cm 器高1.65cm 手ね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰赤褐色、海綿骨芯・砂粒を含む珪粉質土
2	図1上層	土師器直下 種大型	口径12.4cm 手ね後口縁部内底部ナデ 胎土は赤褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒・海綿骨芯を含む珪粉質土
3	図1上層	土師器直下 種小型	口径(7.8)cm 底径(5.3)cm 器高1.6cm 右回転ロウロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は赤褐色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む珪粉質土
4	図1上層	土師器直下 種小型	口径(8.0)cm 底径(5.4)cm 器高2.5cm 右回転ロウロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は赤褐色、微砂粒・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む珪粉質土 口縁部の一部に油保存着
5	図1上層	土師器直下 種大型	口径(13.2)cm 底径(9.2)cm 器高3.3cm 回転ロウロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は赤褐色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む 珪粉質土
6	図1上層	土師器直下 種大型	口径(13.0)cm 底径(9.9)cm 器高3.6cm 回転ロウロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は赤褐色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・気孔を含む粗土
7	図1上層	瓦器火鉢	口縁部片 輪組み成形 胎土は灰褐色～灰褐色、白色粒・赤色粒・気孔・多量の微砂粒を含む砂質土
8	図1上層	瓦器火鉢	口縁部片 輪組み成形 胎土は灰褐色～灰褐色、白色粒・気孔・多量の微砂粒を含む砂質土
9	図1上層	伊勢系火鉢	口縁部片 輪組み成形 胎土は灰褐色、白色粒・金雲母・多量の砂粒を含む珪質土 器表は淡黄褐色
10	図1上層	羽 羽口	胎土は淡褐色～褐色、白色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・気孔・多量の砂粒を含む粗土
11	図1上層	南部系山茶碗	口縁部片 ロウロ成形成 胎土は白色粒・気孔を含む粗い灰色土
12	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 輪組み成形 胎土は多量の長石粒・石英粒を含む灰黒色土 器表は赤褐色
13	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 輪組み成形 胎土は石粒・石英粒を含む灰色土
14	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 輪組み成形 胎土は白色粒・砂粒・気孔を含む淡赤灰色土 二次焼成あり
15	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 輪組み成形 胎土は白色粒・砂粒・籾を含む黄灰色土 器表は明褐色
16	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 輪組み成形 胎土は長石粒・砂粒を含む暗灰色土 器表は茶褐色
17	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 輪組み成形 胎土は長石粒・石英粒を少し含む暗灰色土 器表は暗赤褐色
18	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 輪組み成形 胎土は砂粒・石英粒を含む鈍い褐色土 器表は暗赤褐色
19	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口径8.83cm 胎土は灰色、微砂粒を含む
20	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 器表は暗赤褐色 胎土は白色粒子・黒色粒を含む暗灰色
21	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 器表は暗赤褐色 胎土は白色粒子・黒色粒を含む粘性的な暗灰色土
22	図1上層	常滑片口鉢 皿型	口縁部片 器表は暗赤褐色 胎土は長石粒・石英粒を含む暗灰色土
23	図1上層	磨耗陶片	縦10.6cm 横13.2cm 厚5.1cm 常滑製部使用 胎土は長石粒・石英粒・泥岩粒を含む灰色土 斜縁と胎形を組み合わせた明きめあり 周辺の一切が使用により軽微に磨耗
24	図1上層	磨耗陶片	縦5.5cm 横4.5cm 厚50.9cm 常滑片口鉢皿口縁部使用 胎土は長石粒・石英粒・砂粒を含む黄灰色土 口縁の部分のみを磨いて磨耗
25	図1上層	磨耗陶片	縦4.7cm 横3.8cm 厚5.1cm 常滑片口鉢皿口縁部使用 胎土は長石粒・石英粒・黒色粒・砂粒・気孔を含む明灰色土 周辺の一切が使用により磨耗
26	図1上層	磨耗陶片	縦2.7cm 横4.5cm 厚5.1cm 常滑製口縁部使用 胎土は長石粒・石英粒・黒色粒・砂粒・籾を含む灰色土 口縁部が磨耗
27	図1上層	白磁 口は び皿	口縁部片 ロウロ成形成 胎土は淡灰色、微砂粒を含む緻密 輪は緑色を帯びた灰色、半透明
28	図1上層	同安系青磁 鉢蓋	口径(11.4)cm 底径(5.9)cm 器高2.4cm ロウロ成形成 素地は黒色粒を含む明灰色、粗めの珪粉質土 輪は淡緑色、半透明 粗めの貫入あり 内底部に磨損面花文 外底部磨耗
29	図1上層	常葉菜青磁 鉢蓋平文網	口径4.8cm ロウロ成形成 素地は淡灰色、微砂 輪は淡緑色半透明、細かな気泡を含む 内側に磨損面あり
30	図1上層	同安系青磁 鉢蓋	口径4.8cm ロウロ成形成 素地は明灰色、珪粉質土 輪は淡緑灰色、透明 粗めの貫入あり 内側に磨損面あり
31	図1上層	磨耗石片	溝長13.6cm 幅5.3cm 最大厚1.3cm
32	図1上層	砥石 中砥	溝長(14.8)cm 幅3.5cm 最大厚(1.3)cm 淡緑灰色 砥面(面) 上野産
33	図1上層	砥石 中砥	溝長(13.8)cm 幅3.2cm 厚1.2cm 黄灰白色 砥面(面) 大島産
34	図1上層	磨耗陶片	縦7.8cm 横4.7cm 厚5.2cm 瓦器口縁部片使用 胎土は淡褐色～灰色、白色粒・砂粒を含む 断面の一切が磨耗
35	図1下層	磨耗陶片	縦3.5cm 横4.9cm 厚5.2cm 常滑片口鉢皿口縁部片使用 胎土は灰色、白色粒・褐色粒を含む 器表は茶褐色 断面の一切が磨耗 口縁部の両端は打ち欠いてある
36	図1下層	常葉菜青磁 鉢蓋	口径4.8cm ロウロ成形成 素地は淡灰色、微砂 輪は淡緑色半透明、貫入あり
37	図2上層	土師器直下 種小型	口径(8.35)cm 器高1.3cm 手ね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む
38	図2上層	土師器直下 種大型	口径(13.6)cm 手ね後口縁部内底部ナデ 胎土は褐色、海綿骨芯・微砂粒を含む
39	図2上層	土師器直下 種小型	口径7.4cm 底径5.3cm 器高1.6cm 右回転ロウロ 底面糸切り、薄く板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色、砂粒・白色粒子・泥岩粒を含む珪粉質土
40	図2上層	土師器直下 種小型	口径8.1cm 底径6.0cm 器高1.85cm 右回転ロウロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は褐色、多量の砂粒・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
41	図2上層	土師器直下 種小型	口径(8.2)cm 底径(6.0)cm 器高2.6cm 回転ロウロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む珪粉質土 口縁部に油保存着
42	図2上層	瓦器火鉢	口縁部片 輪組み成形 胎土は淡褐色～灰褐色、白色粒・赤色粒・多量の微砂粒を含む砂質土

出土遺物観察表(2)

陣岡番号	出土遺物・部位	種別	備考
43	講2上期	瓦器・鉢	口縁部片 輪埴み成形 胎土は淡灰色、多量の白色粒・海綿骨芯・砂粒・気孔を含む砂質土
44	講2上期	常滑片口鉢Ⅰ型	口縁部片 胎土は灰色、白色粒・黒色粒・砂粒・気孔含む
45	講2上期	常滑片口鉢Ⅱ型	口縁部片 輪埴み成形 胎土は灰色、多量の大きめの石英粒・砂粒・気孔を含む緻密土 器表は茶色
46	講2上期	常滑 壺	口縁部片 輪埴み成形 胎土は灰色、長石粒・気孔を僅かに含む緻密土 表面に凹凸目残る
47	講2上期	常滑 壺	口縁部片 輪埴み成形 胎土は淡灰褐色、長石粒・気孔含む
48	講2上期	磨耗陶片	縦4.0cm 横3.5cm 厚5.1cm 常楽樂器使用 明ききあり 胎土は灰色、長石粒を僅かに含む緻密土 一断面が使用によりやや磨耗
49	講2上期	磨耗陶片	縦6.1cm 横4.1cm 厚5.5cm 常滑片口鉢Ⅱ型の底部に近い部分使用 胎土は灰色から灰褐色、大小長石粒多く含む 断面の一切面が使用により磨耗
50	講2上期	磨耗陶片	縦7.9cm 横6.0cm 厚3.24cm 常滑製の底部へ腹部使用 胎土は灰色、大小長石粒・石英粒・黒色粒多く含む 断面の二辺の一部が使用によりやや磨耗
51	講2上期	白磁 口はげⅡ型	口縁部片 ロウロ成形 胎土は淡灰色、微砂粒を含む緻密 軸は青色を帯びた灰色、半透明で気孔あり
52	講2上期	常楽須青磁 折縁鉢	口縁部片 素地は灰白色、微砂粒含む 軸は緑掛かった水色、半透明で厚く磨かる 大き目の貫入あり
53	講2上期	常楽須青磁 屈膝華文碗	口縁部片 口径(17.8)cm 素地は灰色、キメ細かい 軸は水色、半透明 大き目の貫入あり
54	講2上期	常楽須青磁 屈膝華文碗	口縁部片 素地は灰白色、微砂粒含む 軸は青緑色、半透明、気孔含む
55	講2上期	長官元寶	初編1009年 北宋 権書
56	講2上期	底石 中灰	残存長(10.0)cm 幅3.0cm 厚2.0cm 淡緑灰色 砥面4面
57	講2上期	使用痕のある石	長14.0cm 幅9.6cm 厚5.0cm 淡緑灰色 砥面4面
60-1	講2下期	土師器灰緑小形	口径(7.0)cm 底径(4.8)cm 器高1.85cm 右回転口クロ 底面未切り、薄く板状圧痕あり 内底部ナブ 胎土は淡褐色、砂粒・赤色粒・石英粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む砂質土
2	講2下期	土師器灰緑小形	口径(7.5)cm 底径(5.0)cm 器高1.7cm 右回転口クロ 底面未切り、板状圧痕あり 内底部ナブ 胎土は淡赤褐色、砂粒・赤色粒・石英粒・海綿骨芯・白色粒を含む砂質土
3	講2下期	土師器灰緑小形	口径(8.9)cm 底径(7.1)cm 器高1.65cm 右回転口クロ 底面未切り、板状圧痕あり 内底部ナブ 胎土は淡黄褐色、微砂粒・白色粒・海綿骨芯を含む
4	講2下期	酒罎	胴部片 胎土は灰色、白色粒・金雲母・多量の砂粒を含む砂質土 器表は淡黄灰色
5	講2下期	南部軽山茶碗	口縁部片 胎土は明灰色、砂粒・白色粒含む
6	講2下期	常滑片口鉢Ⅰ型	口縁部片 胎土は淡灰色、大小白色粒含む 器表は茶色
7	講2下期	常滑片口鉢Ⅰ型	口縁部片 胎土は明灰色、砂粒・長石粒・石英粒・黒色粒・気孔含む砂質土
8	講2下期	常滑片口鉢Ⅰ型	口縁部片 胎土は明灰色、砂粒・長石粒・石英粒・黒色粒を含む砂質土
9	講2下期	常滑片口鉢Ⅰ型	口縁部片 胎土は灰褐色、砂粒・長石粒含む
10	講2下期	常滑片口鉢Ⅰ型	底面片 胎土は灰色、大小の長石粒・石英粒・砂粒を多く含む、黒灰色の大きい粒残る 内面使用により磨耗
11	講2下期	常滑片口鉢Ⅰ型	口縁部片 胎土は灰褐色、砂粒・長石粒含む
12	講2下期	常滑片口鉢Ⅱ型	口縁部片 胎土は暗灰色、砂粒・白色粒・気孔を含む緻密 器表は紫褐色
13	講2下期	常滑片口鉢Ⅱ型	口縁部片 胎土は灰褐色、砂粒・長石粒・石英粒多く含む、気孔・灰黒色粒混る 器表は茶色
14	講2下期	常滑片口鉢Ⅱ型	口縁へ底面片 器高6.3cm 胎土は暗褐色、石英粒・多量の砂粒・赤色粒・灰黒色粒を含む砂質土 器表は緑へ茶色
15	講2下期	常滑 壺	口縁部片 胎土は灰色、白色粒少し含む緻密土
16	講2下期	常滑 壺	底面片 胎土は淡灰色、白色微粒・灰黒色粒・気孔少し含む緻密土 器表は茶色
17	講2下期	常滑 壺	口縁部片 胎土は明灰褐色、赤色粒・白色粒・黒色粒少し含む 器表は茶へ灰褐色
18	講2下期	常滑 壺	口縁部片 胎土は灰色、長石粒・石英粒・多量の黒色粒含む、気孔混じる 器表は茶へ灰褐色
19	講2下期	常滑 壺	口縁部へ胴部片 胎土は褐色の混じり灰色、長石粒・石英粒・砂粒含む、気孔混じる 器表は茶色
20	講2下期	常滑 壺	口縁部片 胎土は暗灰色、泥岩粒・石英粒・砂粒含む、大き目の気孔散見 器表は茶へ暗灰色
21	講2下期	磨耗陶片	常滑片口鉢Ⅱ型底部使用 縦4.5cm 横3.9cm 厚4.09cm 胎土は灰色、砂粒・黒色粒・白色粒を含む口縁部以下の側面が欠け磨耗し、薄削面をなす
22	講2下期	磨耗陶片	常楽樂器使用 縦5.1cm 横7.8cm 厚4.1cm 胎土は灰色、大小の長石・石英粒含む 断面の2辺が欠け磨耗する
23	講2下期	磨耗陶片	常楽樂器使用 縦5.1cm 横6.5cm 厚4.1cm 胎土は灰色、大小の長石・石英粒・黒色粒を含む 断面の全体が欠け磨耗し、丸みを帯びる 平面の片面も使用のため磨耗している
24	講2下期	磨耗陶片	常滑片口鉢Ⅱ型底部使用 縦5.4cm 横3.8cm 厚4.1cm 胎土は灰色へ灰褐色、白色粒・黒色粒・砂粒を含む 断面の一切とその両端の角が磨耗し、側面外側が欠け磨耗し、滑らかな面を呈す
25	講2下期	瀬戸 仏華	口縁部片 口径2.7cm ロウロ成形 胎土は不勻褐色を帯びた淡灰色 砥面
26	講2下期	瀬戸 鉢	口縁部片-胴部片 口径(18.4)cm ロウロ成形 胎土は灰色 灰緑へタ塗り 口縁はやや丸の残った玉縁状口縁の下の下に4条の浅線が混る 側面半面へタ塗り
27	講2下期	平瓦	遺存長(8.2)cm 遺存幅(6.1)cm 厚2.2cm 胎土は淡灰褐色、赤色粒・砂粒・炭粉粒を含む 凸面は溝目 凹面は粗目 凹面は粗目
28	講2下期	平瓦	遺存長(5.6)cm 遺存幅(9.5)cm 厚2.0cm 胎土は灰色へ灰褐色、白色粒を含む 凸面は溝目 凹面は粗目 凹面は粗目 凹面は粗目
29	講2下期	白磁 谷子	身部分 口径6.2cm 胴部最大径6.09cm ロウロ成形 素地は黄味を帯びた白色 釉薬は微かに青灰色を帯びた透明釉、細かな貫入あり
30	講2下期	青磁 酒盃	器の縁部分 素地は淡褐色で暗緑 軸は水色、半透明で厚く磨かる 貫入多く入る
31	講2下期	常楽須青磁 屈膝華文碗	底面片 底径(3.8)cm 素地は灰白色、黒色微粒を含む 軸は淡緑灰色、半透明 大き目の貫入あり 量付きのみ観察

出土遺物観察表(3)

押戻番号	出土遺物・部位	種別	備考
32	溝2下層	奈良京青磁 縁部断面文様	底径(5.0)cm 素地は淡灰色、黒色微粒子含む 軸は水色、半透明 裏面にのみ露胎
33	溝2下層	磁石 付土	遺存長(5.2)cm 幅(3.6)cm 厚(0.7)cm 淡灰褐色 砥面2面
34	溝2下層	磁石 中砥	遺存長(7.0)cm 幅(2.1)cm 厚(1.9)cm 淡黄灰色 砥面2面
35	溝2下層	磁石 中砥	遺存長(6.7)cm 幅(3.8)cm 厚(3.4)cm 淡灰褐色 砥面4面 深い溝状の傷多数
36	溝2最下層	磨粒陶片	奈良東院部使用 縦(8.1)cm 横(4.5)cm 厚(1.0)cm 胎土は暗灰色、肌理細かく、長石粒含む 叩き目(格子)あり 断面の一部がやや磨耗
37	溝2最下層	奈良京青磁 断面文様	口縁部片 素地は灰色、堅磁 軸は淡黄灰色、半透明、気泡含む 内側に曲花文
38	溝2中央 確認坑	土師器瓦類 小型	口径(7.6)cm 底径(6.0)cm 器高2.0cm 回転口状 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨を含む珪砂質土
39	溝2中央 確認坑	常滑片口縁 I類	口縁部片 胎土は灰色、砂粒・白色粒を含む珪砂質土
40	溝2西院部 確認坑	瓦鈿火鉢	底面片 輪様み成形 胎土は灰褐色、白色粒・赤色粒・海綿骨等・砂粒を含む珪砂質土 胴部下位はハケ目状工具及び磨ナデ
41	溝2西院部 確認坑	常滑片口縁 I類	口縁部片 胎土は淡灰色、砂粒・白色粒・黒色粒を含む珪砂質土
42	溝2西院部 確認坑	磨粒陶片	常滑片口縁I類底部使用 縦(5.3)cm 横(2.9)cm 厚(1.5)cm 胎土は灰色、白色粒・黒色粒・気孔を含む断面の一部が磨耗
43	溝2西院部 確認坑	磨粒陶片	押出葉形断面片 縦(3.4)cm 横(2.4)cm 厚(0.6)cm 胎土は黒灰色、堅磁、白色微粒子含む 外側に格子状の叩き目 断面の1辺がやや磨耗
44	溝2西院部 確認坑	磁石 仕上 砥	遺存長(3.9)cm 幅(4.1)cm 厚(0.8)cm 淡灰色 砥面1面
図7-1	壱穴1	土師器瓦類 大型	口径(13.2)cm 底径(8.7)cm 器高3.5cm 右回転口状 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡褐色、砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む珪砂質土
2	壱穴1	土師器瓦類 種大型	口径(15.0)cm 器高(12.9)cm 半徑ね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色、少量の白色粒子・微砂粒を含むやや精土
3	壱穴1	遺存下底	長(21.8)cm 幅(10.3)cm 厚(1.5)cm 遺存高(1.7)cm 前後とも、溝の部分は磨り減っている
4	土灰1	土師器瓦類 種小型	口径(10.2)cm 器高(1.7)cm 半徑ね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨等を強かに含む精土
5	土灰1	土師器瓦類 種大型	口径(12.0)cm 器高(2.5)cm 半徑ね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む珪砂質土
6	土灰1	土師器瓦類 小型	口径(7.9)cm 底径(4.9)cm 器高2.3cm 右回転口状 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨等・白色粒子を含む珪砂質土
7	土灰1	土師器瓦類 小型	口径(9.0)cm 底径(7.9)cm 器高(1.3)cm 回転口状 底面糸切り 胎土は淡褐色、微砂粒・赤色粒子を含む珪砂質土
8	土灰1	常滑片口縁 I類	口縁部片 胎土は灰色、白色粒を少し含む
9	土灰1	常滑片口縁 I類	口縁部片 胎土は灰色、長石粒・石英粒・黒色粒・気孔を含む 隅状あり
10	土灰1	常滑片口縁 II類	口縁部片 胎土は灰褐色、白色粒・砂粒を含む 器表は茶色 内側に隅状あり
11	土灰1	常滑 蓋	口縁部片 胎土は暗褐色、白色粒・砂粒・黒色粒を含むやや粗い 器表は茶色 内側に隅状あり
12	土灰1	常滑 壺	口縁部片 胎土は灰色、石英粒・砂粒・黒色粒を含む 器表は茶色 外側に緑灰色の自然釉が厚く滑らかな
13	土灰1	磨粒陶片	常滑片口縁I類底部使用 縦(7.4)cm 横(6.9)cm 厚(1.6)cm 胎土は灰色～灰褐色、石英粒・大きな繊維・砂粒を含む 断面の一部が磨耗
14	土灰1	青白磁 梅 縁部断面	断面片 素地は淡灰色、堅磁 軸は淡黄灰色、透明、貫入あり
15	土灰1	奈良京青磁 縁部断面	口縁部片 素地は淡灰色、堅磁 軸は淡黄灰色、透明、貫入あり
図8-1	I面包含層	土師器瓦類 小型	口径(8.2)cm 底径(5.9)cm 器高(1.9)cm 右回転口状 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、多数の砂粒・赤色粒子・白色粒を含む珪砂質土
2	I面包含層	土師器瓦類 小型	口径(8.4)cm 底径(6.6)cm 器高(2.3)cm 回転口状 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨等・泥岩粒を含む珪砂質土
3	I面包含層	土師器瓦類 小型	口径(8.2)cm 底径(6.7)cm 器高(1.4)cm 右回転口状 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨等を含む珪砂質土
4	I面包含層	土師器瓦類 小型	口径(8.6)cm 底径(6.4)cm 器高(1.6)cm 回転口状 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨等を含む珪砂質土 口縁部は内外ともに1cm前後の幅で漆喰付着
5	I面包含層	瓦鈿火鉢	口縁部片 輪様み成形 胎土は淡褐色、白色粒・赤色粒・砂粒を含む珪砂質土 胎土は灰色
6	I面包含層	南部赤土 茶碗	口径(15.7)cm ロウ成形成形 胎土は暗灰色、白色粒を含む
7	I面包含層	常滑片口縁 I類	口縁部片 胎土は灰色、砂粒・白色粒・黒色粒を含む
8	I面包含層	常滑片口縁 I類	口縁部片 胎土は灰色、砂粒・白色粒を含む
9	I面包含層	常滑片口縁 I類	口縁部片 胎土は灰色、砂粒・白色粒・大きな石英粒を含む
10	I面包含層	常滑片口縁 II類	口縁部片 胎土は淡赤灰色、白色粒・石英粒を含む
11	I面包含層	常滑片口縁 II類	口縁部片 胎土は灰褐色、白色粒・黒色粒を含む 内側に厚めに自然釉滑らかな
12	I面包含層	常滑片口縁 II類	口縁部片 胎土は淡黄褐色、白色粒・砂粒を含む 器表は茶色 内側に隅状あり
13	I面包含層	常滑片口縁 I類	口縁部片 胎土は明灰色、白色粒・砂粒を含む 口縁から内側に5cm程度まで自然釉
14	I面包含層	常滑片口縁 II類	口縁部片 胎土は灰褐色、白色粒・砂粒・長石・石英粒を含む

出土遺物観察表(4)

押収番号	出土遺物・部位	種別	備考
15	I面包含層	常滑片口鉢 Ⅱ型	口縁部片 胎土は灰褐色、白色粒・硝・砂粒を含む 内側に降灰
16	I面包含層	惣鉢 壺	口縁部片 胎土は灰色、白色粒・硝を含む 内側に降灰
17	I面包含層	常滑 壺	口縁から胴部片 口径11.4cm 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒・砂粒を含む
18	I面包含層	常滑 壺	口縁から胴部片 口径17.1cm 輪積み成形 胎土は灰色・灰褐色、白色粒・棕色粒を含む 器表は褐色
19	I面包含層	常滑 壺	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒少しを含む 器表は淡灰褐色から暗褐色
20	I面包含層	常滑 壺	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、6mm前後の丸い黄白色フロックを含む 器表は灰褐色
21	I面包含層	磨耗陶片	縦8.3cm 横7.2cm 厚51.3cm 信楽変形部片使用 胎土は淡黄褐色で堅緻、白色粒・暗灰色粒少し含む 叩き目(格子)あり 断面の1辺が使用により磨耗
22	I面包含層	磨耗陶片	縦9.3cm 横5.3cm 厚51.1cm 常滑変形部片使用 胎土は灰色、白色粒を含む 叩き目(の中に斜め格子)あり 断面の2辺が使用により磨耗
23	I面包含層	磨耗陶片	縦14.8cm 横6.4cm 厚51.1cm 常滑変形部片使用 胎土は暗灰色、白色粒を含む 叩き目(格子)あり 断面の1辺が使用により磨耗
24	I面包含層	瀬戸 広巻	胴部片 胴部最大径4.1cm 残存高さ4.4cm 胎土は灰色～淡灰褐色 緻密 外側は褐色粒が厚めに施
25	I面包含層	砥石 中砥	残存長13.7cm 幅1.7cm 厚1.45cm 淡緑灰色 砥面4面
26	I面包含層	砥石 仕上	残存長13.6cm 幅3.3cm 厚1.1cm 明灰色 砥面1面 切り出し痕あり
27	I面包含層	砥石 中砥	残存長12.0cm 残存幅5.9cm 厚4.9cm 灰褐色 砥面3面 天草産
28	I面	土師器藍丁 種大型	口径13.4cm 器高3.8cm 手ツクね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒・ 海綿骨芯を含む砂質土
29	I面	土師器藍丁 小型	口径7.4cm 器高7.7cm 器高1.8cm 回転クワロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は 淡褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・硝を含む砂質土
30	I面	土師器藍丁 小型	口径(8.0)cm 底径(6.7)cm 器高1.55cm 右回転クワロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は赤褐色、砂 粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
31	I面	土師器藍丁 種小型	口径8.0cm 器高1.7cm 手ツクね後口縁部内底部ナデ 胎土は赤褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・頁岩 粒を含む砂質土
32	I面	土師器藍丁種 小型	口径7.7cm 底径7.6cm 器高1.85cm 回転クワロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡褐色、砂粒・赤色 粒子・海綿骨芯を含む砂質土
33	I面	土師器藍丁種 小型	口径7.6cm 底径5.3cm 器高1.7cm 右回転クワロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色 ・砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
34	I面	土師器藍丁種 大型	口径(12.8)cm 底径(9.5)cm 器高3.5cm 回転クワロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡褐色、砂粒・ 赤色粒子・白色粒子を含む砂質土
35	I面	土師器藍丁種 大型	口径(11.9)cm 底径(7.3)cm 器高3.15cm 右回転クワロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土 は淡黄褐色、砂粒・赤色粒子・白色粒・海綿骨芯を含む砂質土
36	I面	土師器藍丁種 大型	口径(12.4)cm 底径(9.5)cm 器高2.75cm 右回転クワロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は赤褐色、砂 粒・赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む弱砂質土
37	I面	白色系土師 器壺	口縁部片 手ツクね後口縁部ナデ 胎土は白色精質土
38	I面	瀬戸内流 土師器壺	底部片 底径0.1cm 手ツクね成形後高台部張り付け 胎土は黄灰白色 胎土は灰白色
39	I面	瓦器 壺	口縁～体部片 口径10.4)cm 手ツクね成形後口縁部ナデ 内側個個横位の確文 胎土は灰白色 器表 は灰褐色
40	I面	常滑片口鉢 Ⅰ型	口縁部片 胎土は灰色、砂粒・白色粒・灰黒色粒を含む
41	I面	常滑片口鉢 Ⅰ型	口径13.25cm 底径7.6cm 器高3.25cm 右回転クワロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色 粒子・砂粒を含む砂質土
42	I面	常滑片口鉢 Ⅱ型	口縁～体部片 胎土は灰色、緻密、白色粒・硝を含む 器表は淡灰褐色
43	I面	常滑片口鉢 Ⅰ型	口縁～体部片 口径33.4)cm 胎土は灰色、白色粒・大さ目の石英粒を含む
44	I面	高家 壺	口縁部片 胎土は明灰褐色 緻密、気孔を含む
45	I面	磨耗陶片	縦6.3cm 横10.5cm 厚51.3cm 信楽変形部片使用 胎土は暗灰色、白色粒・灰黒色粒を含む 叩き目(格 子)あり 断面の1辺が使用により磨耗
46	I面	常滑 壺	胴部片 胎土は灰色、白色粒・赤褐色・石英粒・大い硝を含む 器表は茶色 叩き目(格子)あり
47	I面	常滑 壺	胴部片 胎土は灰色、白色粒・赤褐色を含む 器表は茶色 叩き目(格子)あり
48	I面	青白磁 香 炉	口縁部片 口径6.7cm クワロ成形 素地は黒色微粒子を含む白色土で堅緻 釉薬は白色透明釉 植物 灰か土器用土質のり付け文が施され、その一部は磨損がある
50	I面	不明金属製 品	長5.0cm 幅1.5cm 厚0.6cm 重量8g 鉄製 二日月型を呈す
51	I面	不明金属製 品	長(4.9)cm 幅1.7cm 厚0.6cm 重量18g 陶製 二日月型を呈す
52	I面	鉄釘	長4.8cm 幅0.6cm 厚0.8cm 重量4g
53	I面	鉄釘	長4.4cm 幅0.8cm 厚0.6cm 重量3g
54	I面	鉄釘	残存長9.6)cm 幅0.6)cm 厚0.4)cm 重量9g
55	I面	鉄釘	残存長9.8)cm 幅0.4)cm 厚0.55)cm 重量9g
56	I面	鉄釘	残存長8.0)cm 幅0.6)cm 厚0.3)cm 重量9g
57	北側東室部 最終於深部	常滑 壺	口縁部片 輪積み成形 胎土は淡灰褐色、黒色粒・石英粒・砂粒を含む 器表は明茶色
58	北側東室部 最終於深部	磨耗陶片	縦4.4cm 横3.0cm 厚51.2cm 常滑変形部片使用 胎土は暗灰色、白色粒・灰黒色粒を含む 叩き目(格 子)あり 表面は緑灰色の自然結晶がみられる 断面の2辺が使用により磨耗
59	南側東室部 最終於深部	土師器藍丁種 大型	口径(13.0)cm 底径(8.0)cm 器高3.0cm 回転クワロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は 淡褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
60	南側東室部 最終於深部	常滑片口鉢 Ⅱ型	口縁部片 胎土は黄灰色、白色粒・硝を含む
61	南側東室部 最終於深部	磨耗陶片	縦7.0cm 横4.8cm 厚50.8)cm 常滑変形部片使用 胎土は暗灰色、白色粒・灰黒色粒を含む 器表は 茶色 口縁部外側が使用により磨耗

出土遺物観察表(5)

押印番号	出土遺物・ 層位	種別	備考
6	南側東壁部 最終深掘	平瓦	遺存長さ63cm 遺存幅7.0cm 厚2.0cm 胎土は灰色、白色粒・砂粒・気孔を含む 凸面は溝目 凹面は和目後継ナデ 未掘寺1層
7	南側東壁部 最終深掘	東蓮系山笠 最終深掘	口径7.6cm 底径4.6cm 器高1.7cm ロクロ成形 胎土は暗灰色、微砂質で堅い。内側に自然輪が5-
8	南側東壁部 最終深掘	竜泉京青磁 碗	底部片 底径4.4cm 素地は明灰褐色、黒灰色の大小の粒含み、堅緻 輪は鉄緑灰色、透明 削り出し高台、登付きの部分は使用のため平坦・滑らか磨耗 内底面には使用痕(傷)あり
9	南側東壁部 最終深掘	竜泉京青磁 楕圓浅弁文 碗	口縁部片 口径(15.6)cm 素地は灰白色、黒色微粒子含みきめ細かい 輪は水色、半透明、大き目の具入あり 内側は二次的に被熱し黒っぽくずらく
10	南側南壁部 最終深掘	土師器直丁 種小型	口径9.1cm 手捏ね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒・砂粒、海綿骨芯を含む 砂質土
11	南側南壁部 最終深掘	磨耗陶片	縦6.3cm 横5.7cm 厚さ1.7cm 常滑焼底部片使用 胎土は灰色、白色粒・灰黒色粒含む 器表は明茶褐色 断面の一切が使用により磨耗
12	中世以前	須恵器 壺	底部片 胎土は明灰色、白色粒・灰黒色粒少し含み堅緻 縦5.1cm 横6.8cm 厚さ1.2cm 2辺が使用により磨耗
13	中世以前	土型土器	底部片 胎土は暗褐色、雲母・長石・角閃石・海綿骨芯含みややや粗い 内側はハケ目工具痕 外側は縦方向削り後磨き 弥生後期の古墳前期
14	中世以前	土型土器	底部片 底径(10.0)cm 胎土は淡灰褐色、雲母・砂粒、海綿骨芯含みやや粗い 内側はナデ 外側はヘラ削り
15	中世以前	土型土器	底部片 底径(7.7)cm 胎土は灰褐色、雲母・砂粒・赤色粒・石英粒含みやや粗い 内側はナデ 外側はヘラ削り
16	中世以前	土型土器	底部片 底径(7.0)cm 胎土は灰褐色、雲母・角閃石・長石粒・赤色粒・砂粒含み、粗い 外底部本葉痕 外側面はヘラ削り 内底面に不規則凸痕
17	遺構外	土師器直丁 種小型	口径(8.3)cm 器高(1.3)cm 手捏ね後口縁部内底部ナデ 胎土は赤褐色、赤色粒子・白色粒・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
18	遺構外	土師器直尺種 小型	口径7.4cm 底径4.9cm 器高1.9cm 右同軸ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色、砂粒・白色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
19	遺構外	瓦割火鉢	腰部片 幅3.0cm 厚さ2.4cm 残存高(3.7)cm 胎土は灰褐色、白色粒・赤色粒・砂粒を含む
20	遺構外	土製品	底径1.8cm 厚さ0.75cm 胎土は褐色
21	遺構外	常滑片口鉢 甘皿	口縁部片 輪縁み成形 胎土は暗灰褐色、長石・石英粒・砂粒、継含む 器表は茶褐色
22	遺構外	常滑 壺	口縁部片 輪縁み成形 胎土は暗灰色、長石・石英粒・砂粒・気孔含む
23	遺構外	瀬戸 四耳	口縁部片 口径(9.0)cm 胎土は明灰色、堅く締まった精良土 輪はハケ削りで緑灰色を呈す

第四章 まとめ

1. 遺構の変遷

あらためて本地点の変遷について、整理しておきたい。

古墳時代後期～律令時代

この時代の遺物は少なからず出土しており、一帯に当時かなり盛んな人の営為があったことを示す。調査地点北側を通る県道鎌倉葉山線か、あるいはその約80m南を通過する道のいずれかが律令時代前期の古東海道であった可能性が高く、そのことを反映しているであろう。当地点から直線距離で南にわずか200mに位置する地点53（材木座町屋遺跡 材木座一丁目910番地点、森ほか2001）でも、律令時代の掘立柱建物群が検出されている。本地点において遺構に関しては、掘削深度に規制があることもあって、確認していない。しかし、第三章第1節で触れたように、調査区北側3分の2ほどは基盤層がなく、北に向かって急傾斜で落ちていくことが溝2壁面などで確認された。これが何であるかは確かめられなかったが、層位的には古代であり、位置的からみても古街道の南辺にかかっているもおおしくない。これについては、今少し事例の増えるのを待ちたい。

平安時代後期

この時代の資料は、遺構・遺物とも今回得られなかった。

鎌倉時代

13世紀前半、おそらく第1四半期以前に、この地にくっつか丸い穴が掘られる（下層遺構群「土坑1」・「P.13」）。穴がどういう性格のものかは不明である。しかし、遺構群の中で穴が早くに掘られるという状況は、筆者がかつて調査した地点41（米町遺跡 大町二丁目2315番ほか地点、馬淵1995）に共通の現象といえる。そこではそれは便槽と推定される状況にあった。本地点がそうであるかどうかはわからないが、鎌倉時代前期から中期にかけて、この一帯で何かしらの人的営為が始まったことは間違いない。

出土遺物のうち、中国陶磁や渥美や常滑などに鎌倉初期までさかのぼる様相を持つものが少なからず含まれているので（図5-20・28・30・46、図6-18、図8-16・44など）、実際にはその頃からの人の往来があったとみていい。なお、『吾妻鏡』建暦三年（1213）五月二日条の和田合戦の記事に、「米町辻大町大路等之切処合戦」とあり、「米町辻」とはここから至近の「大町四ツ角」のことであろうから、戦いの場はおそらく当地点にも及んだであろう。

13世紀第2四半期頃からこの付近の様相は変わり、木組みの側溝を持つ道路が南北に通じる。道路は若宮大路に対し、17度ほど西にずれている。北はすぐに東西の大路（「大町大路」か）に接続すると考えられるが、南方にどう行くのかはわからない。道路の両脇がどういう性格のものか、調査区内で溝しか出ておらず、遺構からは不明である。しかしこの点については、出土遺物の面から次項で若干の考察を加える。

2. 出土遺物の傾向について

第三章末尾で触れたように、本地点では他の地域に比して鋳造関係の遺物が多い。この点に簡単に触れておきたい。層位・遺構を問わず全体に出土しているが、溝2下層にとりわけ多い。ここか

らは鉱滓のほかに鉄皿の可能性のある金属塊・薄い棒状の鉄片・板状の鉄片複数も出土している。溝2は道路側溝である。このことは、道路がここに出現して以降、金属の職人がこの付近で活動していたことを示すものに他ならない。場の性格の一端を示す材料として記憶しておきたい。

注目すべきは、摩耗した陶片（「摩耗陶片」）の多いことで、この点は近在の調査でも確認できる傾向である。磨耗陶片が何に使われたかはいろいろ議論があり（馬淵1993など）、また場所による偏在性の精査もおこなわれていないが、これもまた場の性格を考える上で示唆となろう。

3. 県道鎌倉葉山線について

調査地点のすぐ北を通るこの道が、かつての大町大路であったかどうかについては議論がある（高柳1959・田代1998・馬淵ほか2007第一章など）。しかし、ともかくもこれが遅くとも鎌倉時代には、鎌倉南城を東西に横断する道路として存在していたことは考古学・文献史料を問わず様々な事例により明らかである。当時の「大路」であったことは間違いない。この道路の幅について今回の調査で、間接的ながらもいくばくか示唆が得られたので、整理しておきたい。

調査区北端から現況の歩道までは1.5m、道路まで3m余りに過ぎない。しかし、調査区内に大路の存在を窺わせるような要素はない。すなわち、道路ばかりか、東西に走行する溝のようなものも見つかっていない。この規模の道路に側溝の伴わないことは考えられないので、このことは東西の大路がもっと北側か、あるいは逆に南側を通っていることを意味している。

本地点から200mあまり東の米町遺跡（地点44・45—大町二丁目2312番10・同4地点）で、近年、鎌倉時代後期～末期の泥岩版築遺構が発見された（斎木ほか2000）。調査者はこれを道路遺構として、「「車大路」あるいは「古い東海道」である」と結論づけている（斎木ほか2000, 20頁）。またその続きと思われる版築面が東隣りの調査でも見つかっており（地点47—大町二丁目2320番1地点、斎木ほか2005）、同じ調査者は、それを「大町大路」と推測した上で、「東海道」であろうと発表した（2001年6月2日『朝日新聞』朝刊「湘南版」・同年6月27日『毎日新聞』朝刊）。この点について、以前に表明した疑問（馬淵ほか2002）をあらためて述べておきたい。

鎌倉時代の道路が発見されただけで、それより500年も前の古東海道が発見されたことになる理由は不明だが、何よりこれを「大町大路」とする前提自体が確実とはいえないのではないか。というのも、『善宝寺寺地図』に描かれた若宮大路下馬四ツ角の位置からみて、現在の県道は中世期にここを通っていた道からあまり動いていないように見えるし、先述のとおり、現況の県道歩道から1.5mの位置にある本地点の調査でも、古街路の側溝は発見されていない。ところが、地点47等で検出された版築面の南辺および側溝とおぼしい溝は、現在の県道鎌倉葉山線から26mほど（報告書地図上で馬淵概測）南にある。したがってそれらが「大町大路」であるとすると、本地点にいたるまでのどこかで北に曲がって現在の道に接続しなければならない。そうでなければ、地点47付近においては最低でも30mを超える幅員を有していることになる。若宮大路が33mであることからみて、それは考えにくいのではないか。ちなみに、若宮大路に次ぐ規格の街路でいえば、現在までに判明している横大路・二階堂大路・小町大路で、幅が約20m強である（馬淵2003・同2008・馬淵ほか2010）。いずれにしても、県道葉山鎌倉線が何であったか、という点とともに、一帯で何か所か検出されている版築面についても、再検討の要があらう。

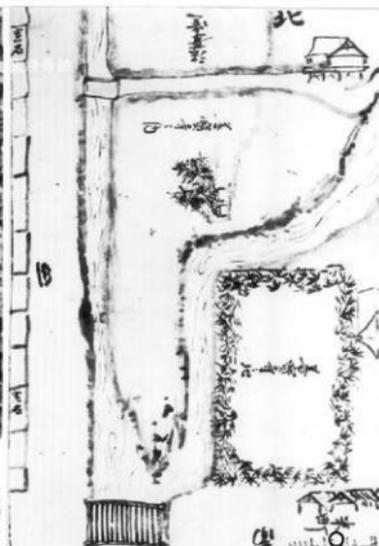
（馬淵）

引用・参考文献（本書全体に共通）

- 赤星直忠 1959 「鎌倉市史 考古編」吉川弘文館
- 石井進ほか 1984 「神奈川県の名」『日本歴史地名大系 14』平凡社
- 大上周三 2009 「神奈川県街と官衙関連遺跡について」『神奈川考古』第 45 号 神奈川考古同人会
- 菊川英政 1997 「古代鎌倉の様相」『考古論叢 神奈川』第六集 神奈川県考古学会
- 斎木秀雄ほか 2005 『米町遺跡発掘調査報告書—第 10 地点—』有限会社 鎌倉遺跡調査会
- 斎木秀雄ほか 2000 『米町遺跡—第 6 地点、第 7 地点発掘調査報告書—』鎌倉市米町遺跡発掘調査団
- 高柳光寿 1959 『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
- 竹内理三ほか 1981 『神奈川県史 通史編』神奈川県史編集室
- 田代郁夫 1998 「大町大路と小町大路—中世都市の中の「町」と「路」—」『湘南考古学同好会々報』73 湘南考古学同好会
- 藤木久志 1993 「中世鎌倉の祇園会と民衆」『神奈川地域史研究』神奈川地域史研究会
- 松尾剛次 1993 『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館
- 馬淵和雄 1993 「すり鉢のあいかた—すりこぎに替わるもの—」『青山考古』第 11 号 青山考古学会
- 馬淵和雄 1994 「武士の都 鎌倉」『中世の風景を読む 2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社
- 馬淵和雄 1995 「米町遺跡 (No.131) 大町二丁目 2315 番ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1998 「中世都市鎌倉の便所遺構について」『トイレ遺構の総合的研究—発掘された古代・中世トイレ遺構の研究—』奈良国立文化財研究所
- 馬淵和雄 2003 「北条小町邸跡 雪ノ下一丁目 401 番 5 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 2008 「大倉幕府周辺遺跡群 (No.49) の発掘調査—雪ノ下字天神前 562 番 30 地点—」『第 19 回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 2002 『杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本 912 番 1 ほか地点発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 2004 「米町遺跡 (No.245) 大町二丁目 2324 番 1 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 2007 「若宮大路周辺遺跡群 小町二丁目 402 番 9 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
- 森孝子ほか 2001 『材木座町屋遺跡発掘調査報告書 鎌倉市材木座 1 丁目 910 番』材木座町屋遺跡発掘調査団
- 湯浅治久 1994 「東国の日蓮宗」『中世の風景を読む 2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社



1. 調査地点鳥瞰（丸印が調査地点）



2. 善寶寺 寺地図（丸印が調査地点付近に相当）



3. 調査地点近景（東から下馬四ツ角を望む）



4. 県道鎌倉・葉山線と調査地点（西から）



1. 上層遺構群全景 (南から)



2. 上層遺構群全景 (西から)



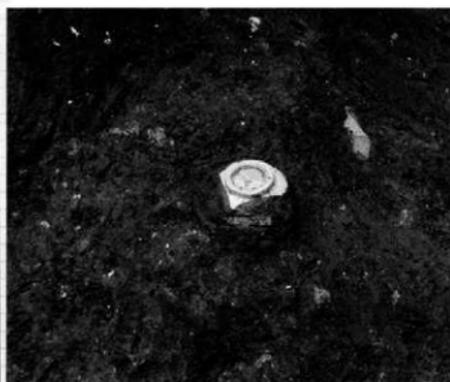
1. 溝1 北半部 (南から)



2. 溝1 北半部 (北から)



3. 溝1 南半部 (南から)



4. 青磁碗出土状況



1. 溝2 木枠部材 (西から)

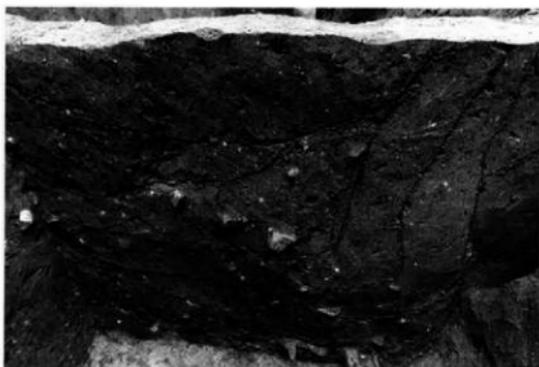
2. 溝2 木枠部材 (南から)



1. 溝2 木枠部材 (西から) 接続部拡大



4. 溝2 南側上層断面 (南から)





1. 竖穴1 (南から)



2. 土坑1 (南から)



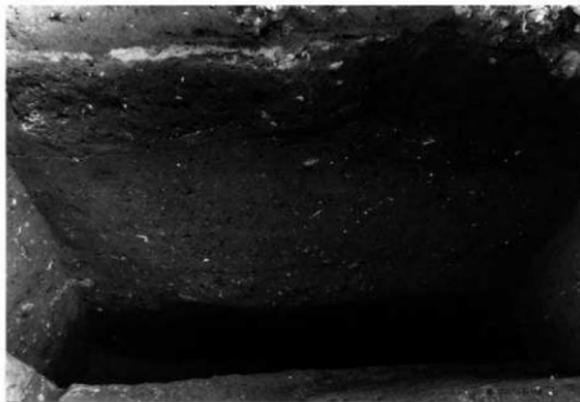
3. 土坑1土層断面 (南から)



4. 土坑1 (西から)



5. 土坑1・P13 (西から)



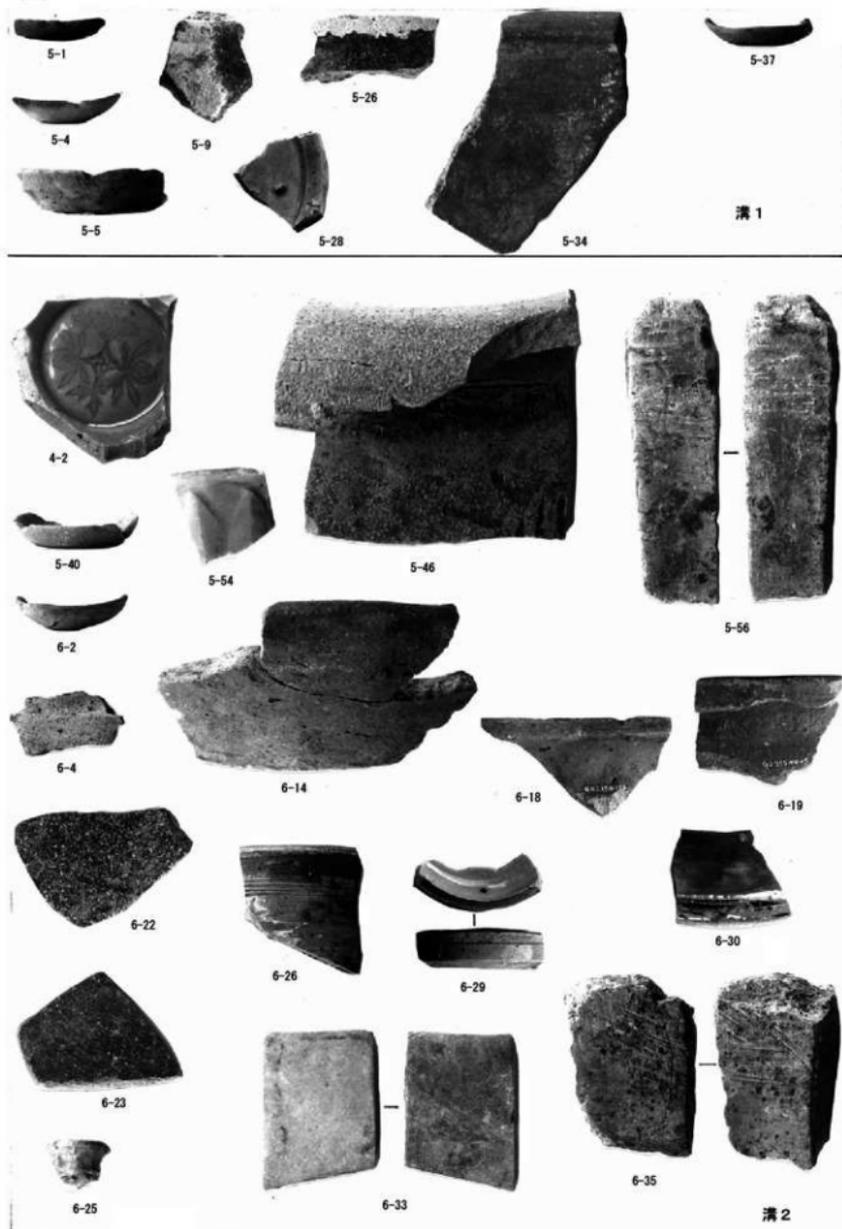
1. 東壁 北半部深掘り土層断面

2. 南壁 溝2部分土層断面



3. 南壁 道路部分土層断面

图版 7





溝 2



竪穴 1

土坑 1



1面 包含層

1面



南側東壁
最終深掘

遺構外

佐助ヶ谷遺跡 (No.203)

—佐助一丁目496番4地点—

例言

1. 本報は、佐助ヶ谷遺跡（No. 203）内の鎌倉市佐助一丁目496番4における個人専用住宅の新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。調査面積は44.00㎡。
2. 発掘調査は、平成17年10月3日から10月27日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査体制は次の通りである。
調査担当者 熊谷満
調査員 伊藤博邦
作業員 渡辺輝彦、金丸義一、田島道夫
4. 本報作成にあたっての資料整理参加者、および分担は次の通りである。
整理参加者 熊谷満、降矢順子、加藤千尋
遺物洗浄：加藤 遺物分類：降矢 図版作成・写真撮影・原稿執筆：熊谷
5. 本報の凡例は次の通りである。
・図版縮尺 遺構図：1/60
・遺構図版 水糸高は海拔標高値を示す。
6. 本報記載の「土丹」は在地産のシルト質凝灰岩を示す。
7. 現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。
（順不同、敬称略）
齋木秀雄（有限会社鎌倉遺跡調査会）、社団法人鎌倉市シルバー人材センター
8. 本調査に関わる出土遺物、図面、写真などの資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第1章 遺跡の立地と環境	232
第2章 調査の概要	234
第3章 検出された遺構と遺物	236
第4章 まとめ	238

挿図目次

図1 調査地点周辺図	232
図2 調査区配置図	234
図3 堆積土層	235
図4 第1面	236
図5 第2A・B面	237

写真図版目次

図版1	1. I区第1面全景（東から）	239
	2. I区第2面全景（東から）	
	3. I区深掘りトレンチ完掘状況（東から）	
	4. I区調査風景（東から）	
	5. I区調査区北壁（第1面まで）	
	6. I区調査区北壁（第2面まで）	
	7. I区深掘りトレンチ北壁	
	8. II区第1面全景（北から）	
図版2	1. II区第2面獣骨出土状況（東から）	240
	2. II区第2A面全景（北から）	
	3. II区第2A面全景（南東から）	
	4. II区第2B面獣骨出土状況（東から）	
	5. II区第2B面全景（北から）	
	6. II区第2B面2号河川（南から）	
	7. II区調査区東壁	
	8. II区調査区北壁	

第1章 遺跡の立地と環境

本調査地点は鎌倉市佐助一丁目496番4に所在する、佐助ヶ谷遺跡 (No. 203) の一地点である。佐助はもと佐介谷・佐介ヶ谷・三介谷とも呼ばれた。地名の由来に関しては伝えが多く、上総・千葉・常陸の三介の屋敷が谷内にあつて三介ヶ谷になったともいい、佐介氏の祖、北条時盛 (1197～1277) が当地に邸宅を構えていたことによるともいう。また、当地に鎮座する佐助稲荷神社の社伝では、当社の神霊が翁の姿に現れて、佐殿源頼朝に旗揚げを勧めて助けたためと伝える。『吾妻鏡』にも表れる古地名であるが、現行の「佐助」は昭和四十年 (1965) 二月一日および昭和四十三年一月一日の住居表示以降の地名である。国清寺、蓮華寺、松谷寺、松谷文庫や安達泰盛の「松谷別庄」などもこの地にあつたとされる。

佐助ヶ谷は東南に開口する大きな谷で、左右には多くの小支谷を有する。谷戸のほぼ中央には、銭洗弁財天社の銭洗の井と佐助稲荷社の境内を水源とする佐助川が流れる。明治十二年 (1879) の『郡村誌』は、「少許ニシテ相合シテ下流佐助川トナル、幅四尺、深平均五寸」といい、また、扇ガ谷村の項では「字佐介ガ山ノ谷間ニ発源シ、南流シテ大町村ニ入ル、長三町三十六間三尺、幅四尺ヨリ一間二尺ニ至ル、深四五寸ヨリ七八寸ヲ過ギズ、水勢緩ニシテ清シ、舟筏通ゼズ」と当時の川の様子を伝え、川筋に沿った古道をはじめ「山間各所ニ古路多シ」とも記している。

佐助ヶ谷遺跡で過去に実施された調査は、主に佐助川流域におけるものが多い。本調査地点の北西約100mに位置する地点3では、13世紀中葉から16世紀代に至る9期の遺構群が検出されており、多くの建物跡や井戸、溝のほか、門跡や池跡、基壇遺構といった、寺院あるいは屋敷地の一面を思わせる遺構群が検出されていることも注目される。また、本調査地点の南方約90mに位置する地点5では、

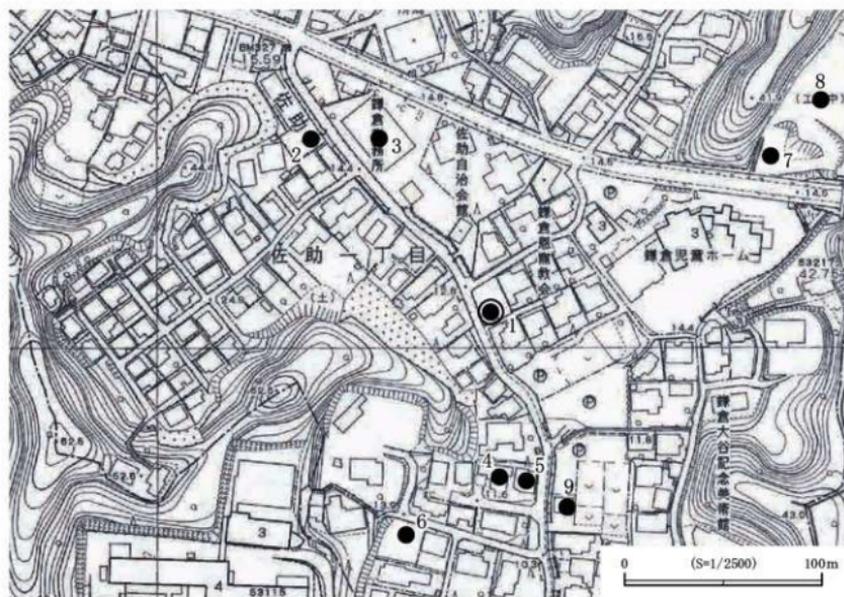


図1 調査地点周辺図

調査深度の制限があったものの、14世紀前半から15世紀前半に至る2枚の遺構面を検出している。地点5で特筆すべきは調査区東側において検出された落ち込みで、中世期の佐助川西岸であろうと推測されている。その他佐助ヶ谷遺跡内で行われた調査結果を概観して、概ね13世紀中葉頃からこの地における開発が活発になってくるということが言えるだろう。『吾妻鏡』寛元四年（1246）6月27日条に「入道大納言家渡御入道越後守時盛佐介第。」とあり、これが佐助（佐介）の文献上の初見であるが、13世紀中葉には北条時盛の佐助邸があったことが知れ、当地がすでに開発されていたことが文献の上からも窺うことができる。

<引用・参考文献>

白井永二編『鎌倉事典』1992 東京堂出版

三浦勝男編『鎌倉の地名由来辞典』2005 東京堂出版

齋木秀雄『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』1993佐助ヶ谷遺跡発掘調査団

齋木秀雄・降矢順子『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第1分冊）』2002鎌倉市教育委員会

<調査地周辺地点一覧>（図1）

1. 本調査地点

2. 佐助一丁目496番5地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25（第2分冊）』2009鎌倉市教育委員会

3. 佐助一丁目566番1外『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』1993佐助ヶ谷遺跡発掘調査団

4. 佐助一丁目476番1地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20（第1分冊）』2004鎌倉市教育委員会

5. 佐助一丁目476番1地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第1分冊）』2002鎌倉市教育委員会

6. 佐助一丁目450番5外・450番29外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25（第1分冊）』2009鎌倉市教育委員会

7. 佐助一丁目620番地点『佐助ヶ谷遺跡』1989佐助ヶ谷遺跡発掘調査団

8. 佐助一丁目615番1他『佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書』2007有限会社鎌倉遺跡調査会

9. 平成18年確認調査地点

第2章 調査の概要

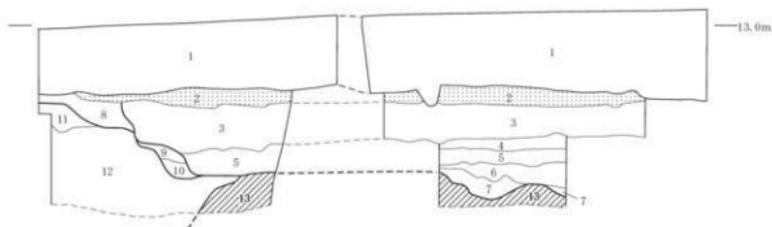
1. 調査の経過と方法

本調査は佐助一丁目496番4地点における、個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。現地調査期間は平成17年10月3日から10月26日までの1ヶ月弱で、調査面積は44.00㎡。現地表の標高は約13.2mを測る。掘削に係る残土を場内に溜め置きする都合から調査区を東西に二分割し、便宜上東側をⅠ区、西側をⅡ区と呼称し、二度に分けて調査を行った。調査はまずⅠ区から始められ、重機により表土を除去した後は、すべて人力による作業となった。調査の結果2枚の遺構面が検出され、各面において遺構を掘削後、測量・写真撮影などの記録保存を行いⅠ区作業を終了した。その後にⅠ区を一旦埋め戻し、Ⅱ区の調査を開始した。10月26日にⅡ区の調査を終了し、器材等撤収してすべての調査を終了した。以下に主な工程を示す。

- 10月3日 Ⅰ区表土掘削、器材等搬入
- 10月7日 Ⅰ区1面調査終了
- 10月14日 Ⅰ区2面および深掘りトレンチ調査終了
- 10月17日 Ⅰ区埋め戻し、Ⅱ区表土掘削
- 10月19日 Ⅱ区1面調査終了



図2 調査区配置図



1. 表土 華大～人頭大の土丹塊を密に含む。底面にコンクリートプレートが部分的に敷かれる。
2. 土丹地層層 暗灰色土に華大の土丹小塊を多く含む。締まりあり。
3. 暗褐色粘質土 華大ほどの土丹小塊をやや多く含む。締まりなし。
4. 青黒色粘質土 土丹粒をやや多く含む。人頭大の土丹塊を少量含む。締まり弱く、粘性強い。
5. 黒褐色粘質土 土丹粒を微量含む。締まりあり。
6. 青黒色粘質土 土丹粒・小砂粒を少量含む。締まりあり。
7. 青灰色砂質土 小砂粒を主体とする。華大の土丹・安山岩を含む。
8. 暗褐色土 土丹粒を微量含む。砂少量混入。
9. 暗灰色粘質土 腐鉄を少量含む。土丹粒をわずかに含む。粘性やや強く、締まりやや弱い。
10. 青黒色砂質土 6層に近似。
11. 暗褐色粘質土 土丹粒・華大の小土丹塊をやや多く含む。粗粒砂を少量含む。
12. 暗褐色粘質土 華大～60cm四方ほどの大型土丹を多量含む。締まり弱い。
13. 青灰色粘質土 青灰色土丹と青灰色粘質土の混交土。締まり強い。中世基盤層。

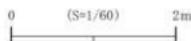


図3 堆積土層

10月26日 II区2面および深掘りトレンチ調査終了、器材等撤収

測量に際しては、日本測地系（座標系AREA9）の国土座標軸を用いてグリッドを設定した。このため本報で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級水準点BM327（標高15.589m）を基に移設した。

2. 堆積土層

本調査では、2枚の遺構面について調査を行い、さらに部分的なトレンチによって基盤層を確認した。厚さ約100cmの表土層を除去すると、標高約12.3mで土丹地層層が検出され、これを第1面とした。比較的良好な地業であったが、現代の削平により上面が削り取られ、面はやや荒れた状態であった。10～20cmの厚みをもつ第1面土丹地層層を除去すると以下の堆積層はすべて河川の覆土であり、これを第2面として調査を行い、以下は部分的なトレンチによって河床を確認した。河床面は青灰色シルト質凝灰岩を主体とし、黒褐色粘質土の混入する締まりの強い堆積層となっていた。この堆積層中から遺物は出土せず、中世基盤層と捉えた。

第3章 検出された遺構と遺物

本調査では2枚の遺構面が検出された。第2面では2時期の遺構が検出されたため、新しい時期のものを第2A面、先行する時期のものを第2B面として説明を加える。また出土遺物に関しては、掘り込みを伴わない状況で出土した獣骨のほかは水磨したかわらけ細片が少量出土したのみであったため、図示し得なかった。

第1面

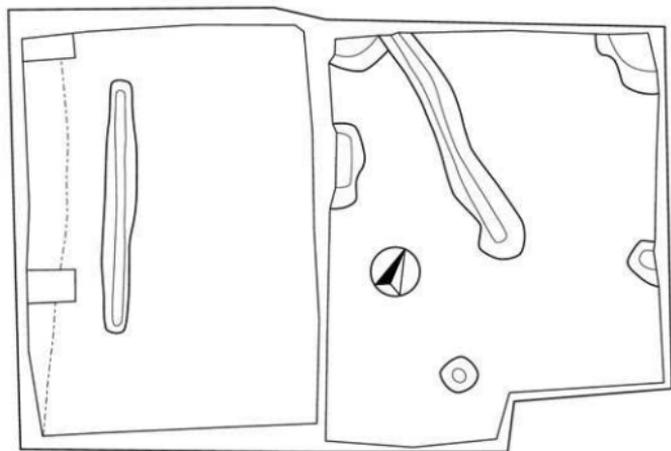
表土下約100cmの深さで土丹地業面が検出され、これを第1面とした。標高約12.3mを測る。面直上まで表土層であり、上面はやや荒れた状況であったことから、本面は現代の削平を受けているものと思われる。検出された土坑等はすべて現代攪乱であり、中世遺構は検出されなかった。Ⅱ区西端部は土丹地業層ではなく、砂の少量混入する暗褐色土層となっていたが、トレンチによって堆積土を観察したところ、地業層の下層が露出しているものであることが判った。

第2A面

第1面地業層の直下層上面である。標高約12.1mを測る。調査区のほぼ全面が河川遺構覆土となっており、調査の結果河川には2時期の重複が確認された。湧水のためすべての範囲を底面まで掘削することができず、調査区北壁付近にトレンチを設定し底面を確認した。また、このトレンチ土層断面で、Ⅱ区中央付近より西へかけて基盤層を切り込む落ち込みも確認された。

1号河川

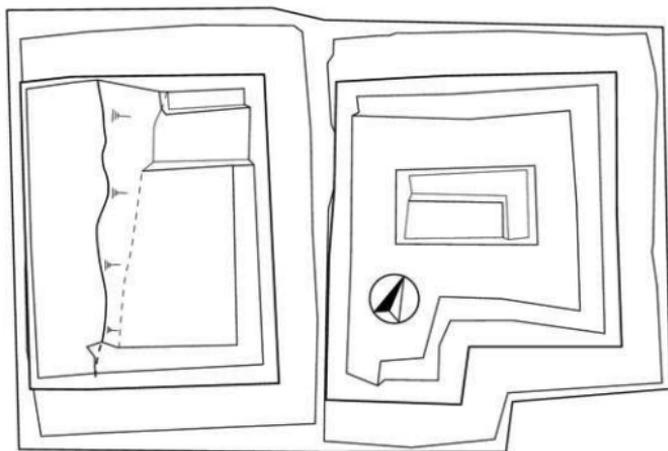
Ⅱ区中央付近で西岸が検出された。以東はすべて本址の覆土となり、東岸は調査区外になるものと思



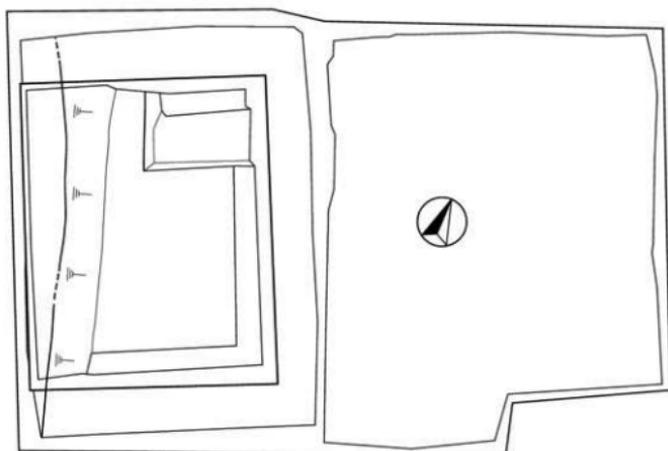
▲第1面

0 (S=1/60) 2m

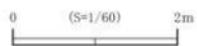
図4 第1面



▲第2A面



▲第2B面



われる。底面直上層が砂礫層となっており河川堆積の様相を呈していたことから、河川跡であろうと判断した。トレンチ北壁では深さ1.2m、底面標高約11.2mで河床が検出される。河床面は全体的に東・南へ向かって降っていく状況が確認されていることから、河川の中心は調査区より東にあり、流下方位は南に向かうものであることが推測される。規模は検出範囲内で幅6.3m以上を測る。

第2 A面

前述の通り、第2 A面と同一面で1号河川に先行する時期の河川跡が検出され、これを第2 B面とした。また、深掘りトレンチ土層断面で検出された落ち込み遺構についてもここで説明を加えることとする。2号河川

1号河川と重複し、これに先行する時期のものとなる。1号河川西岸のすぐ外側に立ち上がりが見出されたほか、1号河川に切り込まれて失っている。壁面の立ち上がりは1号河川より緩く立ち上がり、上端は調査区外西まで延びる。確認面からの深さは約1.0mを測る。

落ち込み遺構

Ⅱ区トレンチ断面で確認された。Ⅱ区中央付近より西へかけて、基盤層を切り込んで落ち込む。立ち上がり上端は1号河川によって失われている。土層断面から見る規模は幅210cm以上、深さ140cm以上を測る。規模の大きさや、壁面の立ち上がり状況から、本址も河川跡となる可能性がある。

第4章 まとめ

本章では、周辺調査地点との関連から検出された河川跡について説明を加えておきたい。地点名については図1の地点名表記を使用することとする。

本調査地点で検出された河川跡の延長と思われる遺構は、地点5や、確認調査のみであるが地点9でも検出されており、佐助川の旧河道であろうと推測されている。地点5では河川西岸が検出され、地点9では河川東岸が検出されており、両地点はほぼ向かい合わせに近い位置関係にあることから、これを基に推定される河川幅は約24mを測る。ただし、本調査地点で検出された1・2号河川や落ち込み遺構といった河川跡と思われる遺構から、2時期ないし3時期にわたる流路の変遷が推測され、先に掲げた河川幅はこうした時期差を無視した西岸・東岸間の最大幅であるので、一時期にはこれより幅の狭いものであった可能性も考えられる。本調査地点と地点5で検出された河川西岸を直線的に結ぶとその方位はN-11°-Wを指すが、これも同時期のものとは限らないので参考程度に留められたい。また、地点9の100mほど南で現在の佐助川は東へと向きを変えており、中世においてもこのように向きを変えていたことは御成町625番2地点の調査（註1）で確認されている。地点5・9はこの屈曲部に近いこともあり、他の部分より幅が広がっている可能性もある。明治十二年（1879）の『郡村誌』では川の規模を幅四尺～一間二尺（約120～240cm）、深さ四五寸～七八寸（約12～24cm）とし、「水勢緩ニシテ清シ、舟筏通ゼズ」と小川であった様子を伝えているが、本調査では1号河川で幅6.3m以上を測る規模が確認されており、中世にはもう少し規模の大きなものであった様子である。河川跡という性格上、出土遺物も水磨した細片がほとんどであり、詳しい年代を比定することができなかったのは残念であるが、今後周辺の調査に期待したい。

註1 御成町625番2地点『今小路西遺跡（社会福祉センター用地）』1993今小路西遺跡発掘調査団



1. I区第1面全景 (東から)



2. I区第2面全景 (東から)



3. I区深掘りトレンチ完掘状況 (東から)



4. I区調査風景 (東から)



5. I区調査区北壁 (第1面まで)



6. I区調査区北壁 (第2面まで)



7. I区深掘りトレンチ北壁



8. II区第1面全景 (北から)



1. II区第2面獣骨出土状況全景（東から）



2. II区第2A面全景（北から）



3. II区第2A面全景（南東から）



4. II区第2B面獣骨出土状況（東から）



5. II区第2B面全景（北から）



6. II区第2B面2号河川（南から）



7. II調査区東壁



8. II調査区北壁

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成22年度調査報告							
巻次	27 (第1分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	原 廣志/原 廣志/馬淵和雄・松原康子/馬淵和雄・松原康子・根本志保/熊谷 満							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
せきぜんいせき 積善遺跡	神奈川県鎌倉市 十二所字二ツ橋 4番3	14204	440	35° 31' 88"	139° 57' 604"	20040423 ～ 20040520	34.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
とうしようじあと 東勝寺跡	神奈川県鎌倉市 小町三丁目 538番8	14204	246	35° 32' 133"	139° 55' 91"	20040730 ～ 20040903	42.84	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
とうしようじあと 東勝寺跡	神奈川県鎌倉市 小町三丁目 538番3	14204	246	35° 32' 141"	139° 55' 929"	*20040826 20040818 ～ 20041025	64.50	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
じょうみょうじきゅうげいだいせいせき 浄妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺三丁目 122番1・2 122番1外	14204	408	35° 32' 176"	139° 57' 141"	*20040818 20040809 ～ 20041022	49.49	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目 1001番4	14204	200	35° 31' 521"	139° 55' 141"	20050203 ～ 20050228 20050528	46.50	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
さすけがやついでせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助一丁目 496番4	14204	203	35° 31' 928"	139° 54' 377"	*20051004 20051003 ～ 20051027	44.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)

*令和6年1月12日報告書本文の内容に訂正(鎌倉市教育委員会)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
せきぜんいせき 積善遺跡	都市	中世	礎石建物、溝、土 壇、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、 国家陶器、瓦質製品、石 製品、金属製品、木製品 等	
とうしようじあと 東勝寺跡	社寺	中世	礎石建物、据立柱建 物跡、土壇、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、 国家陶器、瓦質製品、石 製品、金属製品	
とうしようじあと 東勝寺跡	社寺	中世	礎石建物、土壇、柱 穴	かわらけ、貿易陶磁器、 国家陶器、木製品 等	
じょうみょうじきゅうげいだいせいせき 浄妙寺旧境内遺跡	社寺	中世	礎石建物、据立柱建 物跡	かわらけ、貿易陶磁器、 国家陶器、木製品 等	
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	都市	中世	道路状遺構、塼穴建 物	かわらけ、貿易陶磁器、 国家陶器、木製品 等	
さすけがやついでせき 佐助ヶ谷遺跡	都市	中世	据立柱建物跡、土 坑、ピット、かわら け盛り、土丹列、道 路状遺構 等	船載青磁、染付、瀬戸・ 美濃、常滑、かわらけ 等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27

平成22年度発掘調査報告

(第1分冊)

発行日 平成23年3月31日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 文一堂印刷株式会社